
狡猾なゴン

浦波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狡猾なゴン

【著者名】

Nコード

N7542S

【作者名】

浦波

【あらすじ】

最低非道な北郷が今度はハンター×ハンターの世界に転生した。まさかのゴンに転生という不運に見舞われた北郷は自分だけでも幸せになるために懸命にもがく。

注意書き 2011・5・1修正

この小説はアンチ小説です。

原作キャラを真っ向から否定する文章が多くあります。

この小説の主人公は前作の「ネギ?スプリングフィールド」から転生した主人公です。

この主人公は最低です。

原作を崩壊させたり、あえて遵守したりなど矛盾した行動があります。

この小説は作者の妄想です。
基本的にご都合主義です。

たまに下ネタがあります。

これらの事が一つでも気にくわないという方や、原作をとても大事に思っている。

という方は見ない事をお勧めします。

2011年4・30日修正

原作と違う設定やおかしい設定などがあります。
この小説の独自設定となつておりますのでご了承下さい。

1 最低な現実

現実は甘く無かつた。

いきなりこれから始まるのはどうかと思うが、これが偽り無い今の気持なため、こうなつた。
何故甘くないかと思つた経緯を説明しよう。

俺の名前は北郷一刀。

これで何回目の注意だが分からぬが、「真・恋姫十無双」の北郷一刀とは同姓同名の全くの別人だ。

見た目も性格も全く違う。

この名前のせいで学校ではバカにされたことさえあつた。親に何故この名前にした? と聞いた事もあつた程だ。
まあ、良い。

俺の苦い青春時代は思い出したくも無い。

高校受験に失敗し、中卒二ートという世間で言えばクズ生活を満喫していたら突然、俺の二ート生活は終わりを告げた。
朝、起きれば俺は憎しみさえ抱いてる恋姫の世界にいた。
神だか悪魔だかは知らないが、何かが俺を漂流させていた。
そして代わりにある力を与えた。

それはあらゆる物をコピー出来るというチート。

しかし、制限として生物はコピー出来ない。それ以外は結構自由だつたけど。

大きさや個数に制限は無いし、見たり触つたりしただけでコピー出来る。

この能力を使って俺は中国を支配し、更に領土を拡大して、かのモ

ンゴル帝国のような超大国を建国した後に、寿命で死んだ。

それで終わるかと思ったが、今度は「ネギマー」の世界にネギ・スプリングフィールドとして転生した。

前回と同じように「パー能力を貰い、魔法を「パーしまくつて無双して原作を崩壊させて終わりを迎えた。

そしてまた田を覚ましたら違う世界にいた。

何故違う世界と分かつたかと言つと、自分の体が縮んでいたからだ。流石に三回田では慣れた。

「また転生か…。」

と甲高い、変声前の声が出た。

しかし今回は見たことの無く、とても長閑な風景が広がっていた。もしや今度こそ二次創作では無い平和な世界か？ と年甲斐もなく（精神年齢100歳以上）はしゃいだ。

しかしそれは長く続かなかつた。

喉が乾いたので水を飲もうと、綺麗な清流のような川を覗き込み、その水面を見た瞬間、現実逃避したくなつた。

ツンツンとした現実ではあり得ない髪型、真ん丸としたデカイ目。あ、ハンター×ハンターのゴンだ。

そして冒頭に戻る。

何でよりもよってハンター×ハンター？

この世界つて現実の三国志の世界みたいに人の命が紙より軽い世界じゃん。

ジャンプにしては珍しい程に人がよく死ぬ世界。

主要キャラでも死ぬというある意味リアルなマンガ。見るのは好きだったが、実際に自分が登場人物、オマケに主役とか

マジ最悪。

「ネギま！」の世界ならまだ現実世界に行けば平和を謳歌出来たけど、この世界じゃ平和なんて言葉は存在しない。

唯一平和っぽいこのクジラ島？ でもキツネグマという巨獸がいる。俺に原作ゴンみたいな動物に愛される能力なんて無いだろ？ から食われる可能性が非常に高い。

これでは逃げ場が無い。と絶望した。

しばらく経ち、このままつづくまつていっても何も始まらないので、恒例になつた能力チェックといくか。

そこらにあつた石を取り、「コピーしてみた。

結果は成功、寸分違わず同じ石が出来た。

そして、ただ見ただけでのコピーも出来た事から前回と変わらないらしい。

試しに魔法も使ってみようとしたが、やはり出来なかつた。

出来れば苦労しないが、現実は厳しい。

三回目の世界移動も現実的とは言わないが、それは仕方がない。受け入れなくては前に進まないからな。

今年齢は見た目から多分2～3歳。

運動能力はこの年齢にしては高いと思う、走つてみたら小学一年生ぐらいの早さは出た。

しかし、勿論念能力も使えない。

この事から、現在の俺はちょっと運動能力が常人より高いだけのガキだ。

それもこの世界ではこの程度の運動能力は少し珍しい程度だろつ。何せ素手で地面を碎いたり、何十cmもジャンプ出来たり、小学生が殺し屋をしている世界だ。

生後間もない赤ん坊が歩くぐらい簡単に出来そう。…。

いかん、いかん。絶望しても始まらない。

幸い？ な事に俺はゴン＝フリークスだ。

あの超人ゴンだ。今から鍛えればかなりのモノになる筈だ。
まずはテンプレとして念能力を身に付けなくては。

近くに念能力者はいないからゆっくりと我流で精孔を開くしかない。
瞑想や座禅などで精孔を開くイメージを構築しなくてはならない。
幸い時間だけはタツプリある。

何せ子供だ。

この島には学校は無く、通信スクールだから問題無い。

それにある程度の知識はもう付いているからはつきり言つて勉強などいらない。

しかし所詮養われている身だから言われたらやるしか無い。
これが孤児の悲しさだ。

前の世界と同じだが、親が口クな遺産？ を残して無いからな。
どっちとも自分の事しか考えていない奴ばっかりだ。

まあ、でもまだジンの方がマシか？

捨てた事を自覚しているから下手に会いに来ないし、トラブルを持ち込む訳でも無い。

一般的にはジンの名前は広まつていなかったからそんなに目立たないし、
自分の情報は隠しているから息子の俺の事もバレていない。
唯一ムカつくのは、俺に残したのはあんまり意味が無いROMカードとゲーム内でしか意味の無い指輪、そして自消機能付きテープ。
ふざけてんのか？ と思える物ばかりだ。せめて金とか役に立つ物

を残しとけよ。

まあ、良いか。

この世界ではおかしい程に簡単に金が手に入る。
それに俺の能力を使えば金なんか簡単に増やせるし、食い物にも困
らない。

とりあえず今は念の修行だ。

これが出来ないとこの世界で生き抜くレベルがスゲエ上がる。
そうなつたら一般人として生きていくしかない。
それも悪く無いがな。

2 念修行

ようやく精孔が開き、纏を会得した。

原作ではウイングがゴンはゆっくり起こしても一週間ぐらこで起こせるという記述があつたが、実際は半年もかかつた。やつぱり3歳では原作並みとは言えないか…。

それに、精孔を開いても何回か失敗して纏が出来ず、全身疲労になって一週間ぐらいマトモに動けなくもなつたりした。そのたびにミトさんが必死に看病してくれた。そのせいで初めは病弱な子供と勘違いされて、しばらく家から出してもらえなかつた。

まあ、普通3歳の子供を一人で外には出さないと思つがな。

纏をようやくマスターして元気に走り回り、何とか病弱な子供という認識は解けた。

初めはこの纏も魔法みたいにコピー出来て楽になるかと思ひきや、現実はやはり甘く無かつた。

まだ凝が出来ないからオーラを見る事が出来ないし、自分のオーラを触るという事は出来ないからコピー出来ない。

オーラは触るというよりも感覚の問題だから触れない。よほど強いオーラなら触れるだろうが、まだ弱々しい俺のオーラは触れないからコピー出来ない。

とつあえず、今は真面目に修行するしかないらしい。

原作みたいに世間知らずにはなりたく無いので情報収集や勉強を始めた。

何せこの世界では微妙に今までいた世界とは違つからその差異を知らないてはならない。

しかし何で飛行船技術が発達したのに飛行機が開発されなかつたのだろう？

航続距離や居住性は飛行船が高いのは分かるが、早さは明らかに飛行機の方が上だ。

急いでいる人には便利だと思うのだが？

まあ、良いか。

別にどうしても飛行機が必要な訳では無いし。
飛行船でも事足りる。

それにしてもこの世界は電子技術が高いんだな。

郵便などもメールが主流だし、老人もみんな使つていてる事からかなり昔からパソコンがあつたのだろう。

そつち方面は進んでるんだな。

困った事はこの家には余分なパソコンが無い。

パソコンはあるのだが、店やミートさんが使つててるから俺が勝手に使う事は出来ない。

流石にガキの身分で「パソコン買つて。」なんて言えないしな。
ていうか3歳ではゲームすら買つてくれないだろう。

この家を見る限り金持ちとは言い難い。

多分普通か少し下のレベルだろう。

まあ、こんな島では金持ちになるなど難しいからな。

金は「ピー出来るが、3歳のガキが大金持つていたら不自然過ぎる。
キルアみたいに金持ちの子なら持つても不自然は無いが、俺は
この島では何処に住んでいるのかを知られてるから買い物は不可
能だ。

だから電腦ページも見る事が出来ない。

仕方ないからじばりくは書物から知識を得るしかない。

ネカフュも無い島だが、本屋ぐらいはある。

本屋に行き、片つ端からコピーして知識を得る。

本当ならゲームショップに行つてジョイステーションとかをコピーして家でやりたいが、ミトさんにバレると万引きしたのかと思われるだろうから店頭でやるしかない。

いと悲しきは養われの身分。何かこんな身分ばかり。

前回の世界ならほどんど放置されていたから自由にやれたが、この世界ではきちんと保護されているから動きにくい。

普通の家庭ならありがたいんだけど、俺にはキツイ。

精々許される自由は暗くなるまでは外で遊べるぐらいか…。

早く基本の纏、絶、練、発の4大行をマスターしなくては。
凝さえ覚えれば後は簡単なのだから。

ていうかそれを覚えない怖くて森にも入れない。

3 第一段階クリア

4大行の修行を行い一年。

4歳になり、ようやく4大行をマスターした。
練や凝を覚えるのにかなり苦労したが、努力とゴンの才能で何とか
マスター出来た。

凝さえ出来ればこっちのモノだ。
しかし纏をコピーして常時展開させると肉体年齢が取りにくくなる
から今はしない。

流石に4歳の体でストップはしたくない。

水見式で自分の系統を見てみたら、コップが消えた事から特質系と
分かつた。

最初はゴンの体だから強化系になると思っていたが、やはり中身が
俺だからかなり変化したな。

まあ、俺はゴンとは似ても似つかないからな。

ミトさんにも「ゴンは子供らしくない性格ね。」と言われた。

やはり4歳で論理的に喋つて我が仮言わないからかな?

だつて我が仮行つたつて叶わないんだから言つだけ無駄じやん?

「パソコン買つて。」とか「一人暮らししたい。」なんて言つだけ
無駄に終わる。

だから極力我が仮は言わず、言つ通りにする。

養われている身分だから好き勝手やると追い出されかねない。

幾ら親権を持つっていても所詮他人。

ていうかこの世界に俺の本当の家族や親戚はないから情など持て
ない。

まあ、今までの人生のせいで情など完全に無くなってしまったがな。

基本の4大行をマスターしたんだからこれからは硬、周、流、堅、陰、円など4大行の応用と発の開発だ。

大体は俺のコピー能力でやれるが、自分で出来ていた方が良い。自力を付けなくてはいざという時に自分を守れないからな。

幸い、原作が始まるのはゴンが11歳の時だから後7年ある。

一人で師匠も無く、やることになるから原作よりもかなり時間がかかるだろうが、何とかなるだろう。

それと問題なのは発だ。どんな能力にするかが悩む。

出来るなら使える能力を複数使いたいが、複数を覚えるとヒソカが言つたように「メモリの無駄使い」になる。

しかしこの問題は俺なら解決出来る。

何故なら俺は生物でなければどんな物でもコピー出来る。

それは念でも変わらない。

既に纏や練などで実証済みだ。

だから一度でも見れば十分なのだ。

制約に「一度使えばこの能力は消去される。」と条件付けすればメモリの空きが出来るし、一度しか使えないという厳しい制約を付ければ能力も飛躍的に上がる。

それに、もし万が一能力を盗まれても俺以外には一度しか使えないから問題無い。

一石三鳥だ。

まだどんな能力にするか具体的には決めていないが、構想はある。

先ずは自分を治す能力だ。

もしも大怪我や大病を患い、命の危機に瀕する事になれば大問題だから癒しの力が必要だ。

あの「大天使の息吹」のような完璧な治癒能力。

更に除念能力も付けて念による攻撃も癒す。

制約に一度しか使えないのと、自分にしか使えないというのを合わせれば多少無理は効く。

自分以外を治す必要も無いからな。

次に避難先の確保だ。

ノヴの四次元マンションみたいな世界から隔離した空間に逃げ込む。これならどんな奴からでも逃げられるし、例えキメラアントが世界制霸を成し遂げた後でも逃げ込める。

空間に屋敷のようなデカイ家を建てて、念で作つた使用人を用意すれば住める。

食料や水などはコピーすれば良いから死ぬまで籠城出来る。

制約に一度しか使えない、自分しか入れないとすればイケるだろう。

それと攻撃用の能力だ。

念じるだけで相手を縛り、強制的に絶の状態にして全てを操る。

例えば俺が質問すればどんなに抗おうが素直に真実を答えてしまう。

それほどなんに抵抗しようがピクリとも動けなくなる拘束力。

そして人数制限は無く、対象がダメージを受けても自分に跳ね返つて来ない。

こんな能力が欲しい。

制約は一度しか使えない、有効半径は50m（対象は任意）、見たことの無い人間は不可、生物以外には無効。

最後に普段使う能力だ。

上記の能力を隠すために通常の場合使用する能力も必要だ。

しかし、実質無限のオーラを持っているようなものだから、強化系のようになにただオーラを込めて殴れば必殺技になる。

だからほとんどいらないが、聞かれたりした場合のために作つとく。対象の肉体を操作し、筋力を増大させたり減退もさせる。筋力の他にも血液、神経、心臓、脳など肉体を操作する能力。制約は有効半径は10m以内で、対象に口答で言わなくてはならない。

制約に「一度限りしか使えない。」を使用出来ないから多少制約が弱いが、オーラでカバーする。

二次創作によれば、膨大なオーラ量を誇ればそれなりの無理は効くという設定が多いしな。

それにこの能力なら自分にも他人にも使えるから応用力が高い。

以上4つの能力を獲得するのが最終的な目標だ。

原作開始までの7年で全て会得出来るのが望ましい。

まあ、全部出来なくても最初の3つが出来れば問題無い。

最後はあくまでオマケだ。

それに、最悪発が無くとも念が使えれば大抵は問題無い。

マンガのキャラみたいに正面から堂々となんてバカはせず、全力で一気に奇襲して片をつけられれば良い。

もしくは演技をして敵に侮らせてから騙し討ちすれば良い。

別に主人公になるつもりは無いから勝てればどうだつて良い。

例えば、ネテロが王に特攻仕掛けたけど、何で特攻にしたんだろう？あの爆弾を10発ぐらい王のいる宮殿に投下するなり、念能力で移動させて起爆させれば手っ取り早く王を殺せただろうに。

後始末はかなり面倒になるが、確実に対象を始末出来て尚且つ被害は最小限に済むだろう。

王さえ死ねば女王がいないのだから何れキメラアントは滅ぶか隠れる。

それを早期にやればカイトが死ぬことは無かつたし、かなりの数を救えた。

騒ぐ奴らを黙らせる方法なんて幾らでもある。それをしないのはやはりマンガだからだろうな。それをやるとストーリーにならないからな。

多分一部にはウケるだろうが。

4 何ともベタな別れ

更に一年が経ち、6歳となつた。

応用系の修行は順調で大分使えるようになった。

流や堅などは中々難しいが、周や硬などはコピーを使えば簡単だ。でもコピーを使えばどんな念でも長時間持続や威力を高めることは可能だが、それでは基礎能力が鍛えられない。

やはり自分自身も強くならなくては意味が無い。特にこの世界では。初めからこの世界で産まれ育つた奴らは当たり前なのだろうが、彼ら三度も転生や漂流をした俺でもこの世界は滅茶苦茶だと分かる。何で普通の池に足が生えた魚？　がいるんだよ。あいつらどんな進化の過程を歩んだんだよ。

何で人間が簡単に岩やコンクリートを碎けるんだよ。話かけてみたら普通の漁師だったしよ。

確かに魔法世界に行つた時も理解不能な事は多々あったが、ここまででは無い。一応理解出来るまでの理論はあった。
しかしこの世界は理解不能なことばかりだ。

何よりも一番理解不能なのは自分自身だ。

念を使えるんだから常人よりも遙かに強いのは分かるが、念を解いた状態でも少し鍛えただけで大人を簡単に凌駕する身体能力を得られた。

簡単なランニングから始まり、腕立て腹筋背筋、崖登り、岩碎き、1トン近くある岩を持ちながらスクワットなど、今までの世界なら出来る訳が無い事も容易く出来た。

ゴンの体ハイスペック過ぎ。

どんな遺伝子だよ。多分売ればかなりの値段がつきそうだ。

とりあえず基本や応用は一通り終わり、今は他系統の修行や発の開発に力を注いでいる。

放出系や変化系など遠い系統だが、使えばかなり便利になる。放出系なら使えるようになればコピーでかなりの威力を出せるようになるし、変化系も応用力が高いから使い勝手が良い。

後は発さえ出来ればほぼ最強だ。
一撃死さえ回避出来れば何とでもなるし、敵の姿さえ見れば操作出来る。無理なら逃げれば良いし。

しかしこの島では最近窮屈になってきた。

行動は制限されるし、収入はミトさんからのお小遣いか簡単なバイトぐらいだ。

まだ幼稚園児の年齢のせいか、金を貯められるバイトには就けない。まあ、既に金は全部「ピー」出来るから収入はいらないが、自由に使える金が欲しいからゴミみたいに叩かれる時給でもバイトをやるしかない。

かつてアジアを支配し、魔法界や現実世界を裏から操っていたこの俺が、時給200ジョニーというふざけた時給でレジやウェイターを頑張るとは…。

前の世界の俺の狂信者達が知つたら攻めて来そうだな。

そろそろ金や経験を積むためにクジラ島を出る必要がある。

この島には飛行場が無いから出るには船しかない。

6歳のガキに船賃は高過ぎるが、問題無い。

たまに入港してくるショタロンの女漁師達を口説いて連れていく
貰える約束を取り付けた。

このために持てる経験を生かして口説き、抱いてやつたからな。
少し覚えた肉体操作で快楽中枢を弄つてやつたからイチコロだ。何
せ麻薬並みの快感が得られるからな。

俺のお願いに簡単に頷いてくれた。

さて、最後に最大の障害が残つてゐる。

我等がビッグマザー、ミトさんとの交渉だ。まあ、何を言われよう
とも行くがな。

ここは敬愛（笑）する我が父、ジン風に強引に行くか。

「ミトさん、お願いがあるんだ。」

「お願い？ ゴンがお願いなんて珍しいわね？ 何？」

俺のお願い発言に少し嬉しそうだ。

まあ、この歳の癖にほとんどお願いなんて言つたこと無いからな、
数少ないお願いはバイトがしたい。と帰宅制限を緩めて欲しい。と
いう微妙なものしか無い。

「俺、しばらくクジラ島を出る事にするよ。」

俺の発言にミトさんは凍りつく。

「…な、何言つてこるのよゴンつ！？」

アナタまだ6歳じゃない！ そんなの許さないわ！！」

当然ミトさんは猛反対。まあ、一般常識から言つても妥当だが。

「うん、そう言つのは分かつていた。でも俺決めたから。」

その一言でミトさんは気付く。

この子は何を言つても聞かない。

普段は大人しくて言つることもよく聞く子供だけど、決めたら最後、
必ず実行する。

そういうところがジンによく似ていた。

「でも島を出るには船でいくしか無いけど、船賃はあるの？ バイトを頑張っているみたいだけど、それだけで足りる額は稼げたの？ それでも諦め切れないのか追撃してくる。

「確かに船賃は高いけど問題無いよ。知り合いの漁師さんに乗せて貰えるよう約束を取つたから。」

「……っ！ だとしても生活費はどうするの…？ 生きていくにはお金が必要なのよ…？」

「それこそ今まで貯めたバイト代やお小遣いを使うよ。それに、向こうに行けばここよりは多少良いバイトも見つかるだろうし。」

どんなに攻めても返されてしまい、ミトさんは多少怯んだ。

現実世界ではあり得ないが、この世界では子供でもある程度働ける場所がある。この世界は自由度が高いからな。

それに俺は金を使う必要も無いし、使う場所も無いから基本的に貯めっぱなし。

だから預金通帳にはそれなりの額が明記されている。

だから俺の言葉に多少は説得力が出るのだ。

時給200ジローで5時間労働し、それを大体毎日行き、一年頑張った。

更にそこに月々500ジローのお小遣いを足せばそれなりになる。ちなみにバイトした店は飲食店だったが、子供が頑張ってウエイターやレジ打ちする姿がウケたのか、リピーターが結構出来て儲かつていた。

だつたらその分俺の時給を上げろや、せめてあと100ジローでも上げてくれれば儲けはかなり違つたのに。

「……どれぐらいで戻るの？」

説得が無意味だと分かったのか詳細を聞いてくる。

やつぱつこの子はマイシの子供ね、とでも言わんばかりの諦めた表情だ。

まあ、別にハンターになりに行くとは言っていないし、何れ戻ると宣言してくるから原作よりは穏やかだな。

「10歳になつたら戻るよ。」

その一言で和やかになりかけたムードが壊された。

「10歳……つまり4年も戻らないといつ事!? どうして? !」

「外の世界をゆっくり見たいんだ。

何時までもクジラ島にいるんじゃない、自分で目で世界をゆっくり見たいんだ。」

まあ、嘘は言つていない。

本當はある程度金を稼ぐには時間がかかるし、自由に修行したいからこんな長期間になつた。それに自由も欲しいしね。

俺は曇りの無い目（演技）でミトさんを見続ける。

2歳の頃からおよそ子供らしく無かつたから、いつかいつこいつ日が来るだろ? とは思つていた。

しかしそれはジンと同じ11歳ぐらいだと思つていた。

まさか僅か6歳で出ていく事にならうとは…。

家事などもほとんど自分で出来、5歳で既に働き出した。

これらの行動から、この子はジンのような滅茶苦茶な事はしない常識人に成長するだろ? と思っていたが、根っここの部分はやはり親子か…。

ミトさんは諦め「好きにしなさい」と呟き、血室に引きこもつた。

ふー…。

ようやく終わったか。中々手こずつたが何とかなつたな。

一応とは言え、許可は取れたんだ。

後はお言葉通りに好むさせて頂きます。

出発の日、予定通り漁船に乗せて貰い、クジラ島を出ようとしたら「ゴンつ！！」という声が聞こえた。

振り返って見たらやはりミトさんがいた。

ああ、恒例のお見送りという奴ですね。やはりこれは鉄板なんですね。

出発を中断して船を一旦降り、ミトさんと向かって会う。

「ミトさん。行ってきます。」

笑顔で言つ。いかにも少年誌っぽい別れ方だ。

ミトさんは俺を抱きしめ、泣きながら「体に気を付けてね？」と言つ。

そして少しの間マッタリとした後に、船に乗り出発を指示する。段々遠ざかっていくミトさんに手を振り、別れを告げる。

そしてミトさんも振り返してお別れとなる。

いかにも連載の一話用みたいな展開だな。

まあ、この後は少年誌とは言えない展開になるがな。

とりあえず今は船員代わりに要求されたご奉仕といえますか。どうせ陸地に着くまで暇だし、新記録を達成でもするか、あえて何をかは言わないと。

5 初めての自由

ようやく陸地に到着した。
これで解放される。

陸地に着いたのでこのジャンキー共はいらないから全員殺して船ごと沈めた。

今頃は魚の栄養になつて何れ人間が食つだらう。もしかして俺に回つて来るかもな。

さてと、先ず一番大切なのはホテルを確保しなくてはな。

金は「コピー出来るが、紙幣を「コピー」すると…まで「コピー」するから一度に多くは使えない。

だから綺麗な金が必要なのだ。

そして、ある程度は実戦経験もつけたいからここはテンプレ通りに

天空闘技場を目指す。

貯めてた金を使い、天空闘技場までの飛行船に乗る。

俺の一年間の稼ぎが一気に吹っ飛んでいく様を見ると何か泣きそう。あの屈辱にまみれながら稼いだ金が、飛行船の片道キップだけでいつも容易く無くなつていく。

後は100階に上がる迄の旅費にしよう。多分それぐらいは保つだろう。

今は飛行船で初めての自由と久しぶりの一人を満喫しながら寝よう。

でも節約のために二等客室にしたから三段ベッドで寝る事になり、上段と下段の奴らのイビキで眠れん。

あまりの五月蠅さにいつそ息の根止めてやろうかとも思ったが、ハンターライセンスも無しに殺人を起こすと裁判で勝てるとは思えな

いから今は我慢だ。

漁船の時は日撃者がいても直ぐに逃げられるが、空の上では逃げられない。

イビキに慣れるか徹夜をするしかないな。

初日がこれかよ…。

クソ五月蠅いイビキのせいで一時間しか眠れなかつたが、ようやく天空闘技場に到着した。

地上251階、高さ991m、世界第4位を誇る高さ。何を考えてこんなにバカ高い建物を建設したんだろう。何か大地震が来たら倒れそうなんだけど。耐震構造は大丈夫なんだろうか？

受付に行きたいが、とんでもない行列が出来てているから俺も並ぶしかないのか。

基本的に並ぶのが嫌いな俺には苦痛だ。

30分してようやく俺の番が来た。

「天空闘技場へようこそ。こちらに必要事項をお書き込み下さい。受付嬢の言葉に従い、記入する。

早めに上がりたいから格闘技経験の欄には4年と記入。

間違つては無いな、その頃に「俺」が目覚めて修行を始めたから。しかし、よくこんなガキを受け入れるな。年齢制限ぐらい設けとけよ。

記入が終わり提出する。

「…はい、それでは中へどうぞ。」

入口に向かう。

よく考えればあの受付の人は大変だな。

一日に何千人と来る頭が悪そうな奴らを相手にするんだから。こんな所に来る奴らがマトモな訳が無いからな。

俺もその一人だが。

会場では、 4×4 の16個のリングで殴り合ひなどをやつてこる。やつぱり一番ランクが低い階だから観客はあんまりいないな。ほとんどが出番を待つ出場者達だ。

空いていたイスに座り、他の奴らの試合を見ながらぼ~っと出番を待つ。

しばらく待つていたら番号を呼ばれたので行った。

リングには6歳の俺と筋肉ムキムキのいかにも「脳みそまで筋肉です」というコイツが俺の対戦相手らしい。

俺達がリングに上ると、明らかな身長差に田立つたらしく、観客が俺達のリングに注目する。

「おいおい坊や、間違つて無いかい？」
ママはここにはいなさいぜ？！

など後は似たような罵声を浴びさせられる。

まあ当たり前だろう。自分達が人生かけてやつてきている？　のにガキがいたらムカつきもする。

「ここを舐めてんのか？」

対戦相手の筋肉野郎も、ただでさえ浮き出ている血管が更に浮き出している。

血管が切れるのでは？と多少心配したが、別にコイツが死んでも問題無いかと思い、無視する。

筋肉の血管が更に浮き出た。コイツ単純。

「ここ」一階のリングでは入場者のレベルを判断します。
制限時間3分以内に自らの力を發揮してください。」「

事務的な口調で説明する審判。

多分今日だけで今のセリフを何百回も言つているのだらう。」苦労な事だ。

「それでは、始め！！」

審判のGOサインが出た瞬間、筋肉は突進してきた。
そこで俺は原作のようにただ思いつきり押した。

ドン！…… というテカイ音が鳴り響き、筋肉は観客席に吹っ飛んだ。

日々の筋力トレーニングのせいか原作のように吹っ飛んだ。
俺が手を見ながら少しボ～としていたら「50階への入館を許可します」という審判の声が聞こえた。

「100階へは無理？」という俺の質問にただ首を横に振られ、さっさと降りろと田で言われた。

やつぱりいきなり100階は無理か、原作から見るに、初めての挑戦者は多分50階までが最大なんだろうな。
いきなり100階に行ければホテルを確保せずに済むのに。

仕方なく諦め、リングを降りてエレベーターに向かつ。
案内役が来て説明を始めた。

「こちらへどうぞ。

このビルでは200階までは10階単位でクラス訳されています。
つまり50階クラスの選手が一勝すれば60階クラスに上がり、逆に敗者は40階クラスに下がるシステムです。」

エレベーターの中で長い説明を聞き、「一度終わった辺りでエレベーターが50階に着き、「50階でーす」という言葉が出たので降りた。

原作ならここで会話もあるのだが、俺は一人だから黙つて歩き、

報酬の受付に向かつた。

「いらっしゃいませ、ゴン様ですね。チケットをお願いします。」
チケットを受付に渡して直ぐに「はい！ こちらが先程のファイト
マネーです。」と封筒を出された。

封筒を受け取り、中を見るとやはり中身は152ジュー。

缶ジューース一本分だ。この世界の缶ジューース高いよな。

とりあえず近くにあつた自販機でジューースを買い、飲みながら控え室に向かつた。

控え室は部活のロッカールームみたいな感じだ。

しかしこのロッカーに服や貴重品を置いていく奴はいるのか？
見たところカギがついていないから簡単に盗られるだらう。
案の定、ロッカーは見たところ全部カラだ。

何の意味があるんだろう？ 雰囲気作り？

とりあえず僅かに空いていたベンチに座り自分の番を待つ。

しばらくジューースを飲みながら「ペー」で出した小説を読んでいたら
呼ばれたので、指定された闘技場に向かつた。
戦闘は早く終わつた。

始めの合図と同時に手刀を対戦相手の首に食らわせて一発KOだ。
そして受付に行き、また報酬を得る。封筒の中身は6万ジューで
そこそこだ。

今日はもう俺の試合は無いらしいのでさっそく天空闘技場を出て宿
探しだ。

出来るなら今日手に入れた6万ジニーだけで泊まれる宿を探すが、
やはり6万では難しいのか中々無い。

しばらく探し、街から少し離れるが6万ジニー一ピッタリの宿があ

つたのでそこに泊まつた。

記帳の際に店主から「家出か?」と言われたが、天空闘技場に出て
いると言つたら直ぐ納得してくれた。

普通それだけで納得するか? 見た目5、6歳のガキが一人で治安
の良いとは言えない街の安ホテルに泊まる事を簡単に許可しても良
いのかよ。

まあ、良いか。

こっちも好都合だしな。

元の世界なら今頃警察に引き渡されて養護施設入りか強制送還だな。

この世界では初めて自分で泊まつたホテルは薄暗く、隣の部屋の（
恐らく娼婦と）やつてている音が聞こえて来るという正に安ホテル。
金が無いって大変だよな…。

改めて実感した（ゴン、6歳（精神年齢100以上））であった。

6 準主人公との出会い（前書き）

この小説は念の制約など、様々な所で独自解釈をしているので、「これおかしくない？」と思われるかも知れませんがご了承下さい。

6 準主人公との出会い

闘技場参加から3日が経ち、5戦してようやく100階に到達した。

初日は隣の騒音のおかげで最悪な目覚めの朝を迎えたが、翌日は階が上がった事で報酬も上がり、そこそこのランクに泊まれたからグッスリと眠れた。

そして今日、90階を勝ったので100階レベルに上がり、個室を「与えられた。

これで宿泊費を気にする必要は無くなった。

防音もしっかりしているので悪夢の夜を過ごす事も無い。

ようやく快適な生活を手に入れられた。

これからしばらくは150階～190階をウロウロして金を稼ぐ、後々大量の金が必要になるからな。

この階になると毎日試合がある訳でも無いので暇な時間が増える。その時間を使い発の開発に費やす。

ちなみに一つ目の能力、相手を強制的に操作する能力を会得出来た。

能力名『理不尽な支配』

半径50m以内にいる任意の生物を操作出来る。

操作される対象は任意で強制的に拘束され、更に絶の状態にさせられ一切念能力は使用不可になる。

操作対象が如何なるダメージを受けても術者に帰つて来ない。

制約

この能力は一度使用すると消去される。

無生物の操作は不可能。（術者が生物と断定すれば有効）

これでとりあえずは安心だ。俺が一撃で仕留められ無い限りな。

既にコピーしたから消去されてメモリに空きが出来たから次の避難のための能力を開発中だ。

それと肉体や念の鍛錬も継続中だ。クジラ島の時と違いバイト時間が無く、時間制限も無いから幾らでも鍛錬に費やせる。

それに残念ながら俺は主人公というタイプでは無いので主人公補正が受けられるか分からぬ。

だから有事に備えて自分も鍛えなくてはならない。

何せこの世界では俺のチートを凌駕する化物がうよういるからな。気配察知や敏捷性、瞬発力、持久力、逃走能力などを上げないと能力を使う前に簡単に殺されかねない。

しばらく経ち、120階をクリアした辺りで待合室でモニターを見ていたら、原作キャラを発見した。

白髪とは言わぬが、薄い色素の髪、生意気そうな目、大体俺と同じ背格好。

キルアだと分かつた。

現在150階に挑戦しているが、やはりまだ6歳という事もあり苦戦している。

いや、たかが6歳の念も使えないガキの分際で150階まで行くのはとんでもない事だな。

もしも将来、キルアが敵キャラになるのなら今すぐ仕留める方が良いが、上手く導けば原作のように味方になってくれる可能性が高い。当初の予定ではキルアは救済せずに無視しようと思っていたが、何れ敵になりかねないから縁を作つておくか？

それに、以前の世界では原作破壊をしまくったせいで未来予知が難しくなつて苦労した覚えもある。

だからこの世界ではある程度原作に沿つようとする。でも原作みた
いな危険は犯さないが。

原作のゴンはヒーロー症候群なのか、それともヒソカ並みにイカれ
ているのか、やたら危険を犯したがった。

俺は他のオリ主みたいに活躍したい訳では無いので安全第一でいく。
壊して構わなそうなフラグは折るし、友情もいらないが、恩は売る
と後々役に立つからハンター試験でレオリオ、クラピカを助けるぐ
らいはするか。

クラピカの復讐はどうでも良いが、レオリオの夢は叶えて欲しい。
何かに利用出来そうだし。

更にしばらく経ち、俺は150階クラスに勝ち、振り込まれた報酬
額を見て廊下で少しニヤついていた。

マトモに働いたなら稼ぐのに一生かかりそうな額がいとも簡単に手
に入るとは、ある意味ここはこの世界の唯一良い所だ。

「よ、よお…。」

誰かに話しかけられたから振り返って見るとそこにはキルアがいた。
若干顔がひきつっている所を見ると、俺が通帳を見ながらニヤついて
いた顔に引いたのだろう。失礼な。

「ん…確か140階のキルア、だよな？」

ほとんど同じ階層にいるなら名前を知っていてもおかしくないだろ
う。

「あ、ああ。良く知っているな。」

キルアは少し驚いたようだ。

「そりやね。

同じ歳ぐらいで同じクラスにいる奴の名前なら覚えるぞ。」

キルアは「ふーん。」と言うだけ。

まあ大体検討がついていただろうからな。

「それで？ 何の用だ？」

俺の質問にキルアは答えた。

「ああ、俺もアンタと同じで同じ年ぐらいの奴が同じクラスにいたから気になつたんでも話しかけてみたんだよ。」

「ふーん。

まあ、確かにお互い気になる存在だな。何せこんな所に普通、ガキがいる訳無いもんな。」

「ああ、それにアンタはここまでストレートに勝つて来ているしな。俺は150階まで来るのが2ヶ月もかかったのに。」

普通、たかだか2ヶ月で来れるものでは無いのだがな。

一年かかっても未だに100階にさえ行けない奴らも珍しく無い。

「まあ、運が良かつたのさ。

それに、これから停滞する予定だし。」

俺の答えを不思議に思ったのかキルアは聞いてきた。

「運つて、アンタこのクラスまで一撃で決めているじやん。それなのに停滞するつて、何か目的もあるの？」

「まあ、ね。」

勿体ぶつたよついに言ひとキルアは不機嫌そうに聞いてくる。

「何だよ、教えろよ。」

敬語で言えとは言わないが、もう少し言い方を考えよう。

「人に尋ねる時はもう少し言い方を考えようね。

…それにただ俺が答えるだけではフェアじゃ無いな。

うーん……では俺の質問に答えたたら話してやっても良い。」

そつ言つて廊下にあつたベンチに座る。

キルアは同じ年ぐらいの奴に話し方の注意をされて多少ムカついた

が、気になるのでベンチに座った。

「で、何が聞きたいの？」

キルアが聞いてきたので

「何で天空闘技場に参加してんの？」

と質問した。まあ知つてゐるけど。

「ああ、親父にさ、急に連れて来られて無一文で放り出されても、
「200階まで行つて帰つてこい。」って言われたから。」

普通に考へるとそれつて捨てられたのと同じだよな？

だつてここは200階まで行くつて普通かなり難しいぜ？

まあ、コイツ普通じゃ無いけど。

「スゲエなお前の親父…。」

本当に呆れたので素直に驚く。

「それで、次はコッチの質問に答えてよ。

何で停滞するの？

まあ、話しても問題無いか、と思ひ正直に話す。

「俺がここに来たのは金儲けのためだ。

だから今からは150階～190階までを勝つたり負けたりする。
何で200階から報酬が出ないんだろう？

念で戦うんだからファイトマネーぐらこ出せよ。

「何で200階に上がらないの？」

どうやらキルアは知らないようだ。まあ200階に行けば帰るんだ
から知る必要が無いか。

「200階からは原則ファイトマネーが出ないんだ。
何か名誉のみを求めるんだとさ。くだらない。」

名譽で生活出来るのかよ。

名譽つてのはゆとりがある者が有り難がりモノであつて、ゆとりが
無い者には無意味なんだよ。

「ふーん。そなだ。

「ねえ、君何歳？」

「6歳。」

「へー。やっぱタメなんだ？

話し方からもしかして年上かと思つた。「まあ肉体年齢はな。

精神年齢ならお前の親父より上だよ。ゼノじいちゃんには勝てるか

分からぬいけど。

「まあ、よく言われるな。

よく大人から「お前と話しているとたまにお前は同年代か年上と間違えそうになる。」って。「

本当に会話しているとたまに昔の話題を出されたり、「～の時代は良かつたよなあ？」とか言われる。

残念ながらこの世界では俺は一桁しか生きていなかから昔など知らない。

三國志の時代で良ければ沢山あるが、この世界に中国は存在しないので無意味だ。

「あ～…。

まあそりゃううね。俺も話している途中でお前は実は童顔なだけな大人なんじやないかとさえ思つたし。」

ハハハ…。と誤魔化し笑いをするキルア。

そりやあそりゃうう。

何せ口調こそ変わつていなが中身は立派な爺さんだ。
だから話し方がどうしても年寄り臭くなつたりする。
今更直すのは不可能だ。まあ直そうとも思わないが。

「にしても…。お前つて強いよな？

この年にしてはかなり強い方だと思う俺でさえ150階にたどり着くだけで2ヶ月もかかるて、更に最近は中々上がれず悩んでるのに。

「まあ、ね。

そこそこ強い分類に入ると思うし。」

でもこの世界なら俺ぐらいの年で俺より強い人間は結構いると思う。
環境さえ揃つていれば念は早く覚えられそうだし、最高の指導者や仲間がいれば俺よりも強くなる事は可能な筈だ。
流星街に住んでいる住人なら十分あり得そう。

「おお、自信満々だねえ。

「あ、良いか。それじゃあ俺そろそろ行くわ、じゃあなゴン。」
ベンチから立ち上がり後ろ手を振りながらキルアは去っていった。
にしても最後でようやく名前で言つたな。

まあ別にアンタやお前でも良いんだけどさ、立場を分かれるのは
早目が良いからな。

一度きりの付き合いなら別に良いけど、今後そういうの付き合いこ
なるんだ。だつたら立場を分かせた方が良い。

そう思いながら俺もベンチから立ち上がり、自分の部屋に向かった。
これから部屋で発の開発だ。

逃避のための発なら別に部屋の中でも出来るしな。

ちなみにアーティスはたまに手紙を出していいる。

手紙には現在住み込みのバイトをしていると書いた。

流石に天空闘技場で殴り合つて稼いでいますとは書けないからな。
証拠として金で雇つた店主役と店の前で撮つた写真も送つた。

これで信じるだろう。

7 キルアとの対戦

しばらく経ち、150階～190階までを勝つたり負けたりして前後している間に逃避の能力が完成した。

能力名　『現実シェルター』

任意の場所に異空間へのゲートを作る。

異空間内は北海道ぐらいの広さを持ち、グリードアイランドの島のように村や山、川、海などがある。

念で作った人も住んでおり、複雑な会話や動作なども可能。

出口は任意に設定でき、一度行った場所や直接会った事のある人の場所なら自由に行ける。

制約

この能力は一度使用すると消去される。
自分以外の生物は入れない。

ゲートをくぐる際に現実世界（外界）の物を持ち込む事は不可能。
(ただし自らが所持しているか手にしている物なら可)

核シェルターではなく、現実から逃げ込むシェルターだ。

厳しい制約を決めてようやく完成した。

最初はただ異空間に家を作ろうかと思ったが、長時間隠れるなら他人がいないと俺の精神衛生上不味いかと思い、念で作った人間などを作つた。

まあ、グリードアイランドをまんまパクつたんだけどね。

そのせいで制約を予定よりも強くするしかなかつたけど、俺には関係無い。

何故ならこの能力を他人にバラす事は無いし、コピーのおかげでゲートをくぐる時は何も持てないけど、くぐつた後は幾らでも出せる。

だからこの制約は無いも同じだ。

さて、次は癒しの能力だ。

幾重にも纏や堅が張れても万が一の怪我や病気が怖いから必要だ。ちなみに実験として、何重にも纏を張った状態で高い崖から飛び降りてみたけど何とも無かった。

衝撃は精々一階の窓から飛び降りた程度。つまり何とも無い。でも普段は纏を張らない。やっぱり肉体年齢を取らないと色々面倒だからな。

この世界は変な所が現実的だから年齢制限がかかる事もある。この年では娼婦を買うことも出来ない。

前の世界では姿を変えたりして幾らでも出来たが、この背格好ではマトモに出来ないし、ショタぐらいにしか相手にされない。だから18ぐらいになるまでは緊急時以外は纏を張らない。原作が始まつたらしばらくは張る予定だけど…。

流石にハンター試験などは怖いからな。

調整しながら順調に金を貯めていた俺だが、ここで面倒なことが发生了。

何と、今回の対戦相手はキルアだ。

一時期下がっていたが、最近また上がってきたキルアとクジのせいでかち当たる事になってしまった。

別に不戦敗にして戦う必要も無かつたのだが、今後の事を考えて戦う事にした。

一方キルアはヤル気らしい。

やはり自分よりも多分格上の同い年の強さが知りたかったのだろう。ちなみにキルアとはあれ以来、たまに廊下や待合室で会うと話すぐ

らいの関係にはなった。

まあ精々知り合い程度の仲だ。

周りは自分よりも最低10コは上だからな、同じ年の奴は俺しかいないから自然に仲良くなる。

それでも戦った事は無かったからキルアは俺の力は知らない。

試合では調整しながら戦っているから実力が読みにくいからな。

一回その事でダメ出し食らった。軽く流したけど。

『さあ、いよいよ注目の一戦、「ゴン対キルア戦」が幕を開けます！！
ゴン選手は存知の通り150階まではストレートに勝ち進んで来ましたが、ここからは成績は一進一退を続け、中々このクラスを脱出来ていません。

一方、キルア選手は最近勝ち進んで来ており、乗りに乗っています
！！

一時期は100階クラスから落ちるのかとさえ思われましたが、不屈の精神で勝ち進み、今回もこの170階の「ゴン選手に勝ち、勢いを更に伸ばしたい所です！！』

アナウンサーが叫んでいる。

あの女、毎回あんなに叫んでいるけど、声がよく持つな。もしかしてアレも何かの念能力か？
あり得そうだな。

200階クラスになるとアナウンサーや審判などもたまに念能力者の時があった。
だからアイツが念能力を持つていても不思議は無い。

さて、長い前口上は終わったのでリングに上がる。
キルアは既にスタンバっていた。
少し笑いながら俺を見る。

『さあ、皆さん、ギャンブルスイッチの準備はよろしいですか——！？

……それではスイッチオーナー——！』

投票結果はキルアが優勢。

『投票の結果、倍率ではキルア選手が優勢です！やはり今勢いに乗っているからでしょうか——？』

別に良いけどね。倍率なんて。

『それでは3分3ラウンド、P & KO制、始め——！』

スタートの合図と同時にキルアが凄い勢いで走つて来た。どうやら一発で決める気らしい。

まあ、今までの試合ではそれほど早く動いていなかつたから、自分が早く動けると思ったのだろう。

しかしまあ、ダメージを食らう必要も無いので普通に避ける。

「ちつ！」と少し悔しそうなキルア。

一発で決める予定だったのかな？

それからもう歳にしては驚異的な早さで蹴りやパンチを繰り出す。しかし俺はそれらを全て紙一重で避ける。

俺も普通じゃないけど、キルアの攻撃スピードや重さはまるで一流格闘家並だった。

たまに肉体操作をして突き刺して来るのがから尚怖い。

念能力が無かつたら殺されていたな。と今までの自分の努力に感謝する。

しばらく避け続けていたらキルアは攻撃を止めて下がった。

「お前、やる気あるのかよ！？」

キルアが若干怒りながら言つ。

「勿論あるぞ。」

としか俺は答えない。

そして俺は普通に歩きながら間合いを詰める。のんびりと、まるで散歩でもするばかりに歩いて来る俺を警戒しながらキルアは構えていた。

そしてキルアが攻撃を仕掛けた途端、俺はカウンターのように後ろに周り、首が折れないように手刀を叩き込んだ。

その結果、キルアは昏倒して試合は終わった。

倍率が高かつた俺が勝った事で観客席では罵声が上がつたりしていた。

ちなみに俺は毎回代理人を雇い、勝つ日の試合には自分にかなりの額を賭けている。

今回は倍率がそこそこ高かつたからそれなりの儲けだ。

キルアは担架で運ばれ医務室送りだ。

現実を知つただろう。自分よりも強い同じ年がいるという現実を。

そして俺は会場を後にし、代理人から払い戻しを受け取り、大満足で自室に戻った。

キルアサイド

今日の対戦相手はゴンか。

たまにアイツの試合を見ているから分かるけど、アイツは実力を隠している。

まあ、本人が金儲けのために150～190階に留まると宣言してんだから当たり前なんだけどさ。

でも俺でもアイツの実力はどの程度かがよく分からぬから対応に困るんだよなあ。

たまに会つて会話ぐらいはするけど、今まで戦った事が無いから分からないし、どんぐらい強いの？とか聞いても流されるのがオチ

だし。

まあ、でももしかしたら今回の試合は調整してわざと負けるかも知れないし、それに今まで見てきた試合では、早さらなら俺に分があるかも知れない。

そういう希望を持ち、会場入りした。

観客席は満員で俺とゴンの戦う所を今が今かと待ってるみたいだな。まあ、同じ6歳同士の試合だ。イベント制は高いだろうな。

そう思つていたらゴンも会場に入ってきた。

ゴンは何時も通りに冷静で、回りの野次に全く興味も無むけひつだ。その雰囲気は明らかに俺と同じ6歳児のものとは思えない。何か歴戦の戦士のような落ち着き方だ。何処と無く親父やジイちゃんに似ているな。

でも今日はそのゴンに勝つて150階クラス脱出の弾みにしてやるー。

審判の合図と同時に俺は走り出した。

唯一のアドバンテージだと思つスピーディに賭けて一気に決めてやるつもりだった。

しかし俺の渾身の一撃は紙一重でかわされた。

やっぱりスピードもゴンが上だったのか？

いや、今更後には引けない！ とラッシュをかけて様々なフェイントを混ぜながらゴンに攻撃を仕掛けるが、全てゴンは紙一重で避けれる。

同じ子供を相手にしているとは思えない。まるで兄貴を相手にしているみたいだ。

攻撃を一旦止めて後ろに引き、「お前、やる気あんのかよー？」と怒鳴つたが、ゴンは全く氣にする様子も無く、「勿論あるさ。」と

しか返して来ない。

その余裕な様子が氣に入らなくて更に怒鳴つてやるつかと思つたらゴンが歩きながらこっちに来る。

まるで氣負う様子も無くのんびりと歩いて来る。何かの構えか？ とも警戒したが、どんなによく見てもただ歩いているだけ。

理解不能なため、ただ歩いているゴンを警戒しながらも見ているしか無かつた。

そしてお互いの間合にここまで接近した事で、俺は一気に勝負を狙うために肉体操作をした指でゴンの首を狙い、放つた。しかしそれはゴンにアッサリと避けられ、そして気付いた時には俺は医務室にいた。

どうやら俺はゴンに首に手刀を決められて氣絶したらしく、明らかな差を感じた。

同年代でここまで圧倒的に倒されたのは初めてだ、いや、同年代に負けた事なんて今まで無かつた。

物心ついた時から地獄みたいな拷問や修行を受けてきて、家族以外には負けた事なんて無かつたのに、同じ年の奴に大敗した。もしかしてゴンも俺と同じような育ち方をしたのか？

アイツとはたまに話はするけど、アイツ自身の事はほとんど聞いた事が無い。だからゴンの人生はあまり分からない。

分かる事と言えば、ゴンの母はあるで親父やジイちゃんみたいに搖らぎが無い。

かと言つて兄貴みたいに何考へてんのか分からぬよつた母では無い。

ゴンはたまに笑うしな。

ウーーーーン…………。

ゴンの事はよく分からぬけど、とりあえず今度からもし対戦相手に当たつても戦うのはよそう。勝てないし。
後は、まあ、その時考えるか。

8 休憩

一年経ち、俺は7歳となつた。

といふかまだ7歳なんだよな。

7歳で一人暮らしして、大金を稼ぐために闘技場で戦うつて何処の主人公だよ？ ていう設定だな。まあ、この世界では主人公みたいな奴がうじゅうじゅういるからな。俺ぐらいは珍しく無いか…。

ようやく癒しの能力を会得した。

やはり癒しは強化系の面が強いから特質系の俺には難しかった。

能力名『都合の良い祝福』

ありとあらゆる怪我や病気を癒す。

念で受けたダメージや呪いにも有効。

任意での発動が可能。（使用後1月以内に仮死状態になつた場合に

は自動で発動。）

制約

この能力は一度使用すると消去される。

対象が生きていないと発動しない。

自分以外の者には使えない。

それと予定には無かつたが、思いついたのでもう一つ会得した。

能力名『完全なる隠匿』

この能力を発動すると姿や気配、その他何もかもを認識されなくなる。

生物は勿論、無生物にも認識されない。
円など念能力を使用しても認識出来ない。

この能力の発動状態で攻撃された対象は、攻撃された事は認識出来るが、攻撃対象を認識出来ない。

制約

この能力は一度解除すると消去される。

姿形が消えるだけで、攻撃を受ければダメージはそのまま受ける。

メレオロンのパクリだ。

代わりに俺は息を止める必要は無いから半永久的に持続可能だが。
これで奥の手は全部完成した。

後は通常使う念能力の習得だ。

原作のゴンはじょんけんを利用して強化、放出、変化をバランス良く使っていたが、俺は対極の特質系だから出来ない。

それに、俺にはコピー能力があるから強化系に関しては極めたも当然だ。

何故なら硬で拳を強化しながら、更にコピーして威力を高められるとし、硬をしながら堅さえ可能だ。

だから直接の攻撃力、防御力なら負けない。

まあ、通常の戦闘では能力がバレないように普通に戦う必要があるから体も鍛えなくてはいけない。

最強オリ主にはなれない悲しさ…。

まあ、それ以前に俺はオリ主じゃなくて主人公だけど。

キルアはあの後会つたが、関係はあんまり変わつていない。

試合については少し話したけど、お互い深くまで踏み込まなかつたから精々キルアの「お前強いんだなー。」で終わつた。

「どうやつたらそんなに強くなれたんだ?」と聞かれたので「2歳から鍛えているからな。」と返したら苦笑いされた。

やはり流石のキルアでも2歳では鍛えていなかつたのか?

その後は別に前と同じだな。

廊下で会えば軽く挨拶して、待合室で会えば出番まで話して、たまにかち合つ事になればお互に相談して、どちらかがわざと負けるかギブアップする。

キルアは俺との差を感じたせいかやりたがらないからな。
まあ、賢い選択だな。

戦えば必ず負けるけど、相談すればたまに勝てる。オマケに無傷で。キルアがこの年齢にしては頭が良い子で良かつたよ。
もしもゴンみたいにワガママな性格だったら面倒だつた。
もしそうだつたら早く200階まで上げて、天空闘技場から追い出され、トラウマを残すぐらいの洗礼を与えるしか無かつた。
でも下手をすると家族から睨まれるから最悪、ゾルディック家を敵に回す事になる。

そうなつたら流石の俺でもヤバい。
一生、異空間に引きこもるしかない。

ようやく安定した日々を送れるよつになつたから買い物でもするか。
先ずはハンター必須のケータイ、電腦コード、ホームコードを買おづ。

まだハンターじゃないから別に依頼とかは無いけど、とりあえずケータイとホームコードを買つとく。

ちなみにミトさんには教えていない。

ミトさんとのやり取りは手紙で十分だ。

そしてこの世界の Wikipedia、電腦ページを見るための電腦コードとして、自分専用回線と登録ナンバー「コード」を買った。

全部ネットで出来るから便利で良いね。

ハンターライセンスを取れば無料で見れるようになるけど、それまで結構時間がかかるから自分で買うしかない。

こつからは実戦経験を積みたいから旅に出たいが、200階クラスと違つて、150階クラスでは最低でも週に一回は試合があるから長旅は出来ない。

なんせ試合に出ないとランクが下がつて、何れは登録を抹消される。でもまだ金を貯めたいからここを離れられない。

難儀なことだ。

200階クラスに上がれば念能力者と戦えるが、ファイトマネーが出ないからヤル気が起きない。

別にフロアマスターになつたからと言つて賞金が出る訳でも無いしな。

バトルオリンピアなんてハナから興味が無い。

でもたまに念能力を持つた奴が来たりするからたま～～に経験を積める。

幸いにもヒソカみたいな化物は来ていなかから良い経験レベルで終わっている。

もしもヒソカが来たら逃げよう。

アイツとかち合つたら絶対面倒事が起ころ。

もし万が一戦うつて事になれば、直ぐに『理不尽な支配』を使って

動きを封じて殺す。

俺は別に原作を楽しむ気はない、ただ壊しきると不都合だからある程度守るだけで、俺にとって不都合になるのなら徹底的に破壊する。

ヒソカを原作前に殺すのも良いけど、そうすると原作が変わり過ぎて面倒になるから少なくともハンター試験が終わる迄は殺さない。天空闘技場編はどうしようかな…。

別に会いに行く理由は無いし、キルアと行動を共にする事も無いだろうから行かなくて良いか。

リングの上で殺すのも良いが、ヒソカを殺したら旅団関係に影響を及ぼす可能性が微かでもあるから手は出せない。

まあ、その後なら別だが。

9 実戦開始 改正2011・5・5（前書き）

都合の良い解釈が多くありますが、アシテ下さる。

更に一年経ち、8歳になった俺はようやく通常用の能力を会得した。

能力名 「理不尽な拘束」

半径10メートル以内の任意の対象を操作する。

対象の頭に触れれば記憶を読む事が出来る。

個々の部位に限定して命令すればより効き目は増す。

対象に直接触れていれば強制的に絶の状態に出来る。

制約

対象の念能力の操作は不可能。

対象に聞こえるように口頭で言わなくてはならない。（対象に触れているなら不用）

制約が弱いから微妙だけど、そこそこ応用力はある。

この能力なら秘匿能力を使わなくても大抵の敵になら対処出来る。

それに、この能力では自分も操作出来るからより細かく命令すれば痛覚神経を遮断したり、筋力や瞬発力、持久力、気配察知能力など自分を強化も出来るし、敵を逆に弱らせる事も出来る。

対象を限定していないから無生物にも可能だ。

物質名が分からないと命令出来ないと命令出来ないけど、そこはコピーフィールド能力で得た知識を活用する。

これで理不尽な支配が例えバレても説明が出来る。

基本的にバレたら殺す方針だが、もしも殺すと後々厄介になる奴らに見られたら不味いのでダミーを作る。

ハンター試験でヒソカと戦う事にでもなつたりすれば不味いからな。ヒソカはハンター試験編が終われば死んでも良いけど、試験編の時に死なれると原作が分からなくなるから殺せない。

アイツマジ面倒くさい。

それと秘匿用の能力をもう一つ増やした。

能力名『物真似念人』

自分そつくりの念人を作れる。

数はオーラが続く限り何人でも出せるが、より少ない数に絞れば複雑な命令が可能になり、思考や念能力の使用が可能になる。姿は基本自分と同じだが、他人に化ける事も可能。

対象の顔や名前、性格、記憶、血液など対象の情報をより詳しく知っているならその対象のように振る舞う事も可能（しかし自分が知っている事以上の真似は不可能）

この能力の発動時に術者がダメージを受けると念人にダメージが移動する。（術者が致死量を超えたダメージを受けると念人は消える）

この能力の発動時に念人と本体の位置を入れ替える事が可能。

念人が術者に逆らう事は無い。

制約

この能力は一度使用すると消去される。
術者の能力以上の事は不可能。

念人の使用出来る能力は『理不尽な拘束』のみ。

これで危ない状況になつたらコイツに任せれば良いし、グリードア
イランの「一坪の海岸線」の入手条件もクリア出来る。
ゲートの中で念人を一人作つて俺がゲートから出ても念人は有効らしい。

怪我をしても痛みや傷は念人の方にいった。

良いニュースが届いた。

キルアが原作通り200階に到達したので家に帰りました。
一応知り合いとして「おめでとう。」と言つとした。

本音は「早く帰れ。」だけ。

キルアも「サンキュー。」と軽く返すだけ。

まあ、別に友達でも無かつたからな。

例えるなら同じクラスだったけど友達では無い。という感じ。
たからアッサリと別れてキルアはパドキア共和国に帰つていつた。
出来れば一度と会いたく無いけど、ハンター試験で会うんだよなあ
。

ハンター試験を受けないならほとんどのフラグを折れるけど、ハン
ターライセンスは欲しい。

あれあるとマジ特権階級になれるからな。

そこらの貴族なんて田じや無い程の特権を得られるから是非欲しい。
それに、試験内容は原作のしか分からないから結局は287期の試
験を受けるしか無い。

だから必然的に原作組とバッヂリ会う事になる。

更に、原作通りの展開にすれば何が起きるのかが高確率で分かるか
ら出来るだけ原作を守る。

あんまり展開に関係無ければ弄るけど。

以上の事から、ハンター試験までは原作を守り、その後から変えて
いくしか無い。

とつあえず今はやつと得た本当の自由を満喫しよう。

既に欲しかった金額は手に入れたから、これからは実戦経験を積むために200階クラスに上がる事にした。

ストレートに勝ち、200階に行く、そして登録受付に行く。エレベーターが着き、受付に向かうと原作の奴らと違うが案の定、新人狙いの奴等が俺を見ている。

「200階クラスへようこそ、」こちらに登録の署名をお願い致します。」

と受付の女は言い書類を出してくる。

俺は普通に署名して登録をする。

「早速、参戦の申し込みもなさいますか？」

「はい。」

「ではこちらの申し込み用紙にも記入下さい。」

もう一枚書類を出されて記入しようとしたら、新人狙いの奴等が集まつて来たので「何か用？」と聞いた。

「別に、ただ俺たちも申し込みしたいから並んでるだけ。」と答えたので「だったらお先にどうぞ。」と譲つてやる。

しかし男は「いや、君が先で良いよ。別に急いでいないし。」とあくまで俺を先に書かせようとする。

「オイシラが初戦でも良いか、と思つたので書類にチェックを入れ、提出する際に敢えて「いつでもOKです。」と宣言した。

そうしたら待つている奴等がバカにするように含み笑いしている。まあ、見た目は10歳にも満たないガキが意氣がつて居る様子にしか見えないからな。

受付からルームキーを受け取り、部屋に向かった。

そう言えばなぜこんなに電子技術が進んでいるのに、ルームキーは鍵なんだろう？

カードキーにした方が何かと楽で良いと思うんだが？

単に原作が結構古い作品だつたからか？

鍵を開けて部屋に入ると、シャンデリアが天井からぶら下がり、デカイベッドがある広い部屋が目に入る。しかし部屋に鎮座するテレビもデカイが、やはりブラウン管テレビだから幅もデカイ。

何故かこういう所は昔だよな。

と思っていたらテレビが点き、明日に試合がある事を告げる。やつぱりアイツ等いきなりか。

まあ、アイツ等にして見れば、世間知らずなクソガキに現実を教えてやる。という感じなのだろう。

纏を張つていたから念を使える事は分かっている筈だが、あの態度では「所詮ガキ」としか見ていないだろう。

まあ、別に良いけど。

その後はモーニングコールを頼んでデカイベッドでゆっくりと寝た。

翌日、モーニングコールで起き、ルームサービスで食事を取つた後に指定された時間に指定された会場に向かつた。

会場は満員で地響きが鳴る程ウザい。

子供が戦う所がそんなに見たいのかよ。なんかグランディエーターになつた気分だな。

『さあいよいよ試合が始まろうとしています！！

本日のメインイベントであるゴン選手対 選手戦！！

選手は現在3勝1敗とまずまずの成績。

一方ゴン選手は150階までをストレートに勝ち進みましたが、そこからは大ブレーク！！

苦節2年もの歳月を重ね、ようやくこの200階クラスにまでい上がつてきました！！

その小さな体で2年もの年月を頑張つて来たことを思つと、実況で

ある私も同情を禁じ得ません！！

しかし、この天空闘技場は実力社会の縮図！！

果たしてこの200階クラスでゴン選手に祝福があるのか…』

随分長い説明だつたな。

まあ、2年かけて8歳のガキがここまで上がつて来たんだ、十分サクセスストーリーみたいで話題性が高いな。

しかし対面には試合相手の新人狙いがニヤニヤしながら立つている。欠片も自分が負ける事を考えていないな。

多分俺に念の洗礼では無いが、200階クラスの洗礼を『える気だろう。

まあ、精々頑張ってくれよ？ 実験台さん。

「始め…！」

審判の合図と共に相手は俺との距離を詰めて来た。
多分その僅かに凝で集めたオーラを纏つた右ストレートで決める氣でもいるのだろう。

しかし、わざわざ俺の射程距離に来てくれるなんて良い奴だな。
だからその期待に応えてやらねば。

「動くな」

と言い、『理不尽な拘束』を発動した。

後少しで俺を殴れる、と思っていたら突然体が動けなくなつたんだ、驚いて自分の体を見ようとするが、首が動かせないため目しか動かない。

「なんだ!? これは?！」

と混乱する相手。

別に説明する必要が無いから黙つて自分の能力の考察をする。

体は命令に従うが、口や目など細かい部位は俺の命令に逆らえるのか？

そう思ったので「目を開じる」と命じたら命令通り閉じた。

相手は更にパニクつて騒ぐが無視。

どうやら細かい命令を出せばちゃんと効くらしい。

それに凝で見る限り、相手の纏は解けていないし、凝で集めた所も

変化は無いので、やはり念能力は操れない事が分かった。

ついでに触つたら絶になるのかも試したかつたが、大勢に見られて
いるし、テレビにも写っているのでこれ以上はバラすと不味いから
ここに終わらせる。

「窒息しろ。」と命じた。

そうした途端に相手は悶え苦しみ出した。

しかし、動くなと命じてるので手は俺を殴ろうとした体制のまま、
目を閉じながら小刻みに震え、「あ…。、があ！　はーあ…。」な
ど小さく叫ぶ。

しかし、そんなにも必死に喘いでいるのに、観客には分からないの
で止まつている相手に罵声を上げる。

多分子供が相手だから手加減しているんだと受け取っているのだろう。

おかげで審判も「どうした！？　闘うんだ！」と言つだけ。

男の必死の呼びかけには俺以外は気付かず、そして勿論俺はあえて
助けてやるつもりは無いので、相手が死ぬのを待つ。

そしてとうとう何の反応も見せなくなり、死んだと分かつたので能
力を解いて自由にしてやつた。

その途端、男は倒れ込み、動かなかつた。

審判は不審に思い、男に近付いたら意識が無い事に気が付き、急いで
試合終了の合図を出した。

そしてドクターを呼び、「勝者！　ゴン選手！！！」と宣言した。

観客はいきなりの勝負決定に何が起きたのか分からぬので戸惑っているが、そんなの俺の知つたこっちゃ無いので会場を後にする。

新人狩り闘士サイド

念が使えない奴らは分からなかつたが、俺達にはハッキリと分かつた。

○○が早速決めにかかつた時に、アイツは能力を発動して○○の動きを封じた。

恐らく操作系能力者なのだろうが、恐ろしい能力なのは分かる。念こそ封じられてなかつたとは言え、完璧に体の動きは封じられていた。

○○が途中から少し震えて何か苦しんでいた所を見るに、気管を絞められて窒息させられたんだ。

オマケに苦しむ○○を、何も感じさせない目でただただあのガキは見ていた。

更に『○○選手は原因不明の発作を起こし、亡くなりました。』との発表さえあつた。

アイツ……殺しやがつた。

何の感情の起伏も見せずに殺した。

「おい！ どうするんだよ！？」

隣に座っていた奴が俺に問い合わせる。

コイツも俺と同様、新人を狩るつもりで「ゴン」と闘う登録を済ませていた。

勿論コイツも念能力者なのでゴンがやつた事が分かる。

そのせいか顔色は最悪だ。

そしてコイツが俺に聞きたい内容も分かる。
答えは決まっているが。

「決まつてんだろ。戦わない。」

俺の逃げる発言に何も言わずに頷く。

当たり前だ。

このままでは5日後にはコイツが戦い、更に5日後には俺がゴンと戦う事になっている。

あんな場面を見せ付けられれば戦う気など失せる。
だからゴン戦は不戦敗とする。

流石に逃げる迄はしないが、絶対にゴンとは戦わない。

新人は他にも来る。

ソイツを狙えれば良い。

後日、宣言通りゴン戦には会場に姿を現さず、ゴンの不戦勝となつた。

能力一覧

普段使う能力

能力名　『理不尽な拘束』

半径10メートル以内の任意の対象を操作する。

対象の頭に触れれば記憶を読む事が出来る。

個々の部位に限定して命令すればより効き目は増す。

対象に直接触れていれば強制的に絶の状態に出来る。

制約

対象の念能力の操作は不可能。

対象が人間なら聞こえるように口頭で言わなくてはならない。（対象に触れているなら不用）

秘匿用能力

能力名　『理不尽な支配』

半径50m以内にいる任意の生物を操作出来る。

操作される対象は任意で強制的に拘束され、更に絶の状態にさせられ一切念能力は使用不可になる。

操作対象が如何なるダメージを受けても術者に返つて来ない。

制約

この能力は一度使用すると消去される。

無生物の操作は不可能。（術者が生物と認識すれば有効）

能力名　『都合の良い祝福』

ありとあらゆる怪我や病気を癒す。

念で受けたダメージや呪いにも有効。

任意での発動が可能。（使用後1月以内に仮死状態になつた場合に
は自動で発動。）

制約

この能力は一度使用すると消去される。
生きている者ではないと発動しない。
自分以外には使えない。

能力名　『現実シェルター』

任意の場所に異空間へのゲートを作る。

異空間内は北海道ぐらいの広さを持ち、グリードアイランドの島の
ように村や山、川、海などがある。念で作った人も住んでおり、複
雑な会話や動作なども可能。

出口は任意に設定でき、一度行った場所や直接会った事のある人の
場所なら自由に行ける。

制約

この能力は一度使用すると消去される。
自分以外の生物は入れない。

ゲートをぐぐる際に現実世界（外界）の物を持ち込む事は出来ない。
(自分が持しているか直接触っている物なら可)

能力名　『完全なる隠匿』

この能力を発動すると姿や気配、その他何もかもを認識されなくな
る。

生物は勿論無生物にも認識されない。

円など念能力を使用しても認識出来ない。

この状態で攻撃された対象は攻撃された事は認識出来るが攻撃対象を認識出来ない。

制約

この能力は一度解除すると消去される。

姿形が消えるだけで攻撃を受ければダメージはそのまま受けれる。

能力名 『物真似念人』

自分そつくりの念人を作れる。

数はオーラが続く限り何人でも出せるがより少ない数に絞れば複雑な命令が可能になり、思考や念能力の使用が可能になる。

姿は基本自分と同じだが、他人に化ける事も可能。対象の顔や名前、性格、記憶、血液など対象の情報をより詳しく知っているならその対象のように振る舞い真似る事も可能（しかし自分が知っている事以上の真似は不可能）

この能力の発動時に術者がダメージを受けると念人にダメージが移動する。（術者が致死量を超えたダメージを受けると念人は消える）

この能力の発動時任意に念人と本体の位置を入れ替える事が可能。
念人が術者に逆らう事は無い。

制約

この能力は一度使用すると消去される。
術者の能力以上の事は不可能。

念人の使用出来る能力は『理不尽な拘束』のみ。

初期から所有している能力

能力名　『コピー』（特に名称は無い）
直接見た物、触れた物をコピー出来る。
個数や大きさに制限は無い。

この能力を使用しても術者は疲労しない。

制約

生物をコピーする事は出来ない。（術者が生物と認識しないなら
可能）
ちなみに念能力は主人公が生き物と認識していないのでコピー可能。

あのショーがお気に召したのか、新人狙いの奴等はみんな会場には姿を現さず、不戦勝を勝ち取った。

何もせずに2勝したからこれで3勝0敗。

それ以降はあまり試合は無くなつたな。

新人狙いは完全に俺を避けているし、他にも俺の能力に恐れをなしたのか、対戦要求は少なくなつた。

しかし、たまに腕に自信がある奴等は勝負を仕掛けてくる。そういうつた奴等も実戦経験と実験台とした相手をした。

やはりあの戦い以降、俺の能力を見極めるためか、200階闘士達が試合を見に来るようになつた。

だから能力は使わず、基本的な念と肉体攻撃しか用いない。それでも良い経験にはなつた。

硬の状態で殴るとどう壊れるかや、わざと殴られて纏がどれほど頑丈か、念の高速移動をしてどこまで素早く動けるかなど様々な実験をした。

勿論能力についての実験もしている。

長い準備期間を得られるから一般人より念能力者の賞金首など、様々な人種に試した。

そのおかげで能力にも大分慣れてきたし、ある程度の実戦も経験出来た。

しかし、所詮はまだ8歳のガキでしかない俺では高額賞金首ハントなどが出来ない。

ハンターライセンスでも持つていれば箔がつくんだが、まだ持つて

いないうちちょっと強いガキでしかない俺に任してはくれない。

天空闘技場の200階クラス闘士だと言つても、そこまで有名では無いし、何よりもまだ10歳にもなっていない俺ではマフィアですら雇ってくれない。

だから必然的に情報網は貧弱で、偶々偶然見つけた賞金首を狩つて名前と金を稼ぐ。

キルアはかなり小さい頃から殺し屋として活躍していたが、あれはゾルディック家という箔があつたからこそ認められていた。

一方、俺の親父はハンターの間ではそろそく有名だが、世間での知名度はゼロに等しいから箔が全く無い。

オマケにハンターライセンスを持つていなければハンター専用サイトも使えないのにどん詰まりだ。

更に、残念ながら俺にコンピュータの才能は無いので、ハッキングなどは不可能だから完全に利用出来ない。

コンピュータ関連の雑誌は粗方コピーしたからハッキング 자체は出来るが、ハンター専用サイトに侵入する技術も度胸も無い。ハッカーハンターにでも襲われたら厄介だしな。

結局は天空闘技場ぐらいしか念能力と闘う所は無い。グリードアイランドも探してみたが、やはり見つからない。

というか原作では簡単に念能力者に会えたけど、現実的にはそんなにいないんだよなあ。

街歩いていてもいる訳無いし、たまにいたとしてもスポーツ選手か格闘家、芸術家、政治家など無意識に使っているだけで戦う価値がない。

念が使えるという事は、ある程度有名だから殺すと面倒になるので戦えない。

他の転生オリ主みたいに初めから実戦経験を持つていれば良かった

んだけど、俺はほとんど戦つた事が無い。

恋姫の時の商会創業時は自分で動いていたが、直ぐに自分で動くのを止めて駒達を動かしていたし。

ネギまの時はたまに戦う時もあつたが、ほとんどが魔法で一撃で殺していた。

だから直接的に戦うのはこれが実質初めてだ。

何せ今までいちいち相手に近付く必要すら無かつたからな。

魔法が使えれば何の心配も無いけど、念では直接的に戦うしか無いんだよなあ。

能力に頼り過ぎると、相手に対策立てられたら勝てなくなるし…。

だから鍛錬は未だに欠かせない。

11 フラグ折り準備

9歳になり、200階クラスで10勝を上げてフロアマスターにまで後一歩にまでなったので、天空闘技場から出ていった。

フロアマスタークラスにはそれなりの念能力がいて、かなり良い経験になつたが、フロアマスターに勝つとそのフロアを得る代わりにバトルオリンピアへの出場資格を得る事になつてしまつ。それではかなり有名な選手になつてしまい、動き難くなる可能性が高いのでフロアマスターに参戦してはワザと負けるを繰り返し、4回負けて自分から登録を抹消した。

これで大した評判にはならないだろう。

フロアマスターになれなかつた闘士なんて幾らでもいるからな。一年もすれば人々は俺の存在など忘れ去る筈だ。

さてと、クジラ島に帰るまで後一年、原作が始まるまで後二年。本当ならクジラ島に戻らずに原作に突入したいが、一応保護者であるミトさんを安心させないと後々面倒になりそうだ。

まあ、ハンター試験を受ける時にまた別れるんだしな。

原作を守るためにクジラ島からドーレ港に向かう、何故かガレオン船風の癖に計機類を積んでいるあの船に乗らなくてはならない。別にクラピカとレオリオに会いたい訳では無いが、アイツ等は主人公組のメンバーだからないと原作が変わることも知れない。つーか、アイツ等ゴンがいなかつたら本試験会場にすら到達出来なかつただろう。

だからムカつくが、ヒソカから守つてやつたり、色々教えてやらな

くてはいけない。

とりあえず今は実戦経験を得るのが大事だな。

原作ではゴンは有り余る才能で乗りきっていたが、明らかに経験不足が目立っていた。

まあ、俺は少年誌のセオリーを無視して何でもするから「ゴンみたい」な危ない目に陥る可能性は大きいだろうが、それでも実戦経験は偉大だ。とりあえず今は金が稼げて、実戦経験を積めるブラックリストハンターモードとして情報を得ながらたまに狩る。

後は原作に縁のある土地を先に見ておこう。

試験会場のあるザバン市やヨークシン、NGC、東ゴルドー共和国、そしてパドキア共和国。

特にキメラアントの女王が流れ着くNGCにだ。

ここにゲートを作れれば女王が兵隊を揃える前に殺れる。

王が産まれる前に女王が死ねばキメラアントの問題は早く方々が着く。あれを防ぎさえすれば俺に対する直接的な脅威は無くなる。

意外とこの漫画は主人公の死亡フラグは防げるものばかりだからな。

まあ、ハンターライセンスさえ取得出来れば後は楽だ。

天空闘技場には行かないし、グリードアイランドはちょっとやりたいからヨークシンには行き、キメラアント編は直ぐに方をつけるから終わる。

それが終われば後は有り余る金で遊んで暮らそう。

この世界は以前の世界みたいに隠れて住む必要は無いから、堂々と自堕落な一生を終える。ジンに会つ氣も興味も無いからこれ以上話が進む訳が無いしな。

キルアを救済？　する氣も無いからほつたらかしこにするつもりだし。

ハツキリ言つて、どうでも良いしな。

荷物になるのがオチだ。

それに念ぐらい教えとけよ。

弟はもう使えるのだから兄貴にも教えてやつても良いこと思つんだけどなあ？

それが教育方針なら別に何も言わないがな。
家庭に首突つ込む気はこれっぽっちも無い。

弟に念の針まで刺して守らうとするその愛は重くてとても分かりにくい。

あれではキルアが家を嫌うのは明白だ。

他の兄弟と同じように育てていれば家出などせずに、立派な後継ぎになってくれただろうにこねえ。

懐かしき故郷に帰つてきた。

大体の原作の場所を見回り、土地勘などをつけて来た。

他にも数人だが賞金首を捕まえて引き渡したり、ヨークシンにて凝を使っての掘り出し物発掘など、結構楽しめた。

残念ながら実戦経験はあまり詰めなかつたが、まあ仕方ないだろう。まだ見習いハンターの情報網では大した相手は見つからないし、ヒソカみみたいなバトルジヤンキーでも無いのだから確実に勝てる相手にのみを狙つているからな。

やはり生来の病的な臆病さのせいで勝てるか分からぬ相手と戦うなどあり得ない。

勝てそうに無い相手なら逃げるかゲートに引きこもる。
勝てそうな状況が来たらゲートから出て一気に決めに行くがな。
人間、気を抜く時は必ず訪れる。

飯を食う時、糞をする時、女を抱いている時など必ずある筈だ。
相手がゴーゴー13でもない限りはな。

もしも本当にいたら逃げられない。一生異空間で暮らすしか無い。
まあ、念のために探したけどいなかつたから多分いらない筈だ。とい
うかいないでくれ。

久しぶりに帰つてきたクジラ島は全く変わつていなかつた。
まあこんな田舎が4年そこらで変わる筈が無いか…。

船が港に入港したので下船した。

「お、ゴンじやねえか！ 久しぶりだなあ！」

顔見知りな漁師が話しかけて来た。

ちなみにコイツと知り合ったのは刑務所並みに安い賃金のバイトをしていた時だ。

一生懸命レジ打ちやウェイターをやっていた俺を気に入ったのか、何時も店に来て酒を飲んでいた上客だった。

「久しぶりオジサン。変わつて無いね。」

本当は「話しかけんなオッサン。」と言いたいが、こんな狭い島ではイメージはとても重要なので仕方なく相手をしてやる。

「おう！ 当たり前よ！」

「…にしても大きくなつたなゴン！ 今何歳だ？」

「10歳だよ。」

「そりかそりか！ お前が旅に出てもう4年にもなるんだな。

あの時は驚いたぜ？ たつた6つのガキが一人旅をするなんてな！」

そりやそうだな。

普通、6歳どころか11歳でも一人旅なんて許さないと思うがな。何で原作では簡単に見送つたんだろう？

もしかしてこの世界では10歳を越えると大人扱いなのか？

だとしたらとんでもない低年齢化だな。正に世も末だ。

別にサプライをする意味は無いからな。

漁師と別れ、ミトさんの家に向かつ。

ちなみにミトさんには一月程前に「そろそろ帰る」と手紙を出しておいたからちゃんと伝わっている筈だ。

別にサプライをする意味は無いからな。

ゲートを使い、ミトさん家の近くまで一気に来る。

普通に歩くと2日ぐらいかかるからな。いちいち歩いてられない。

家に近付き、改めてその家を見る。

相変わらず変な家だよなあ。何で木を切り落とさずに家を建てたんだろう？

「こいら辺の家はみんなそうなのだろうか？」

と見回しても見える半径に家は無い。

「近所付き合いなんて皆無だろうな。

そう思いながら玄関を開けて「ただいまー。」と入る。
するといきなり抱きつかれた。

「お帰りなさいー！ ゴンー！」

ミトさんからの熱烈な歓迎を受けたようだ。

「ただいま、ミトさん。」と空氣を読んで抱き返しへ。正に漫画
みたいな光景だな。

しばらく歓迎の儀式のようなものを受け、ようやく家で一休み出来
た。

「それにしてもゴン。大きくなつたわねえ。

毎年手紙と一緒に写真も送つてきてくれていたから大きくなつた事
は分かつていただけど、やっぱり実際見ると改めて成長したのが分か
るわね。

ミトさんが何が面白いのかニコニコしながら俺を見てくる。
その送つていた写真是俺が金で雇つたエキストラとの写真だとも知
らずに。

「まあ、そうだろうね。

何せ最後に会つたのは6歳の時だつたからな。4年も経つたんだか
ら成長していないと俺が困る。」

「そう、4年だ。

原作と違い、クジラ島を離れて自由奔放に育つたせいか、現在の身
長は多分原作のキルアより少し高い。

やっぱり良い物食つていたからな。

この島で暮らしていなら一生喰う機会が無いだろう物達を。
「そうね。もう4年にもなるのね。」とミトさんは遠い目をする。
面倒くさい回想タイムにでも入ったのか？

普通なら旅先で何があつたのかなどを話すのだろうが、「疲れる」
と言つて早々に自室に引きこもつた。

今から偽情報を整理しなくてはならないからな。
多分明日から聞かれるだろうから、今まで手紙で働いていると嘘を
ついた職業を纏めて、それっぽい話を作らなければならない。
これからここに永住するなら嘘はつかない方が良いが、生憎来年に
はハンター試験を受けるためにオサラバする。

その後はほとんど帰らない予定だから嘘をついても問題無い。

ちなみにミトさんは俺にも原作同様「嘘をついてはいけない。」と
教えてくれたが、俺は「嘘は人間関係を円滑にしてくれるもの」と
反論した。

だって何でもかんでも正直に世の中なんて生き辛くて仕方ない。
もしそうなれば必ず各地で戦争が起きてヤバい世の中になるに違
ない。

だから必要ならば嘘は使つべき。と5歳の時に言つたら家から追い
出された。

ミトさんからして見れば、ただ口クに世の中も知らない子供が屁理
屈をこねているだけと思い、少し罰を与えれば謝つて来るだろうと
思つたのだろう。

しかし俺は本気で言つていたので撤回する気は無く、一月近く野宿
やバイク先で寝泊まりするなどして対抗した。

そしてようやくミトさんから折れて「分かったわ、ある程度嘘は必

要ね。」と認めて来た。

ここで俺が折れると今後嘘をつき難くなるから負ける訳にはいかなかつた。

それに、別にミトさん家から追い出されても問題無かつたしな。
それどころか自由に行動出来るようになるのでむしろ帰りたく無かつた。

とにかく、このおかげで嘘をついたからといって騒がれる事は無くなつた。

だからといって別に嘘をつきまくつた訳では無い。

ただ、「嘘は絶対いけないもの。」といつミトさんの考えを無くした

かつただけだ。

こうすれば小さい嘘であればいちいち追求はしなくなる。

この戦いが起こる前はいちいち聞かれたり面倒だつたからな。

昔は面倒だからミトさん殺そうか。とも思つたが、殺すと後々面倒
だし、この年では保護者がいた方が何かと便利だから我慢した。

とにかく今は情報を整理して嘘に真実味を持たせる。

完全に嘘で固めるとバレるが、ある程度真実を含ませれば自然と真
実味が生まれる。

それに、この生活もハンター試験迄の辛抱だ。
ハンター試験が終わつたら来る意味無いしね。

ジンの残した箱には無意味な物しか無かつたし、せめて何か役に立
つ物くらい残しておけよ。

口クに育てもしなかつた癖に、罪悪感を感じないのか?
だったら自分の手で始末すれば良かつたのに。
それも一種の愛情だしな。

13 四の想い

クジラ島に来て一年経ち、原作の年齢の11歳になった。

この一年は今まで一番ノンビリとした一年だった。

以前では収入のためにバイトをしたり、修行をしたりなど色々大変な事が多かつたが、今では天空闘技場や賞金首を捕まえて貯めた貯金があるから働くなくて良いし、修行についてはこの島で出来る事は限られているから、出来る範囲の修行をやり、出来ない過激なものなどは異空間でやる。

基礎を怠るとツェズゲラみたいに思わぬ所でしつけ返しをくらいかねないからな。もう念能力はほとんど完結したけど、今でも鍛える。まだ成長期の11歳だしな。

287期のハンター試験申し込みが始まったからミトさんに参加を告げる。

「ねえ、ミトさん。」

「何? ゴン。」

洗濯物を畳んでいたミトさんに話しかける。

「俺、今年のハンター試験受けるわ。」

その一言で時間が止まった。正確にはミトさんだけだが。

「……な、何言っているのよゴン! ? アナタまだ11歳でしょ! ? 早すぎるわよ! ! ?」

正に正論。全くもってその通りだ。

出来るならまだハンター試験を受けたく無いのだが、この年しか試験内容は分からぬし、確実にライセンスが欲しいから今年受けるしかない。

「うん、確かにまだ11歳だけど、決めたんだ。

結構前から決めていたんだ。11歳になつたら受験するつて。何故かは分からぬが今年なら受かると分かるんだ。だから絶対受験する。」

流石に漫画で内容を知つてゐるから。なんて言えないからな。だから真実に一部嘘を混ぜる。

後は前と同じ、決めたらことを行へ。といつ設定を使う。

「…………つー」

俺の目を見ながらミートさんを考えているのはやっぱリジンと一緒になのね。かな？

まあ、やると決めたらやる。ところのま前に見せたから説得は無意味と分かるだろ？

ていうか別に納得して貰つ必要は無い。多分保護者の認証なんて絶対必要では無いのだろ？

キルアが受験出来ていたのがその証拠だ。キルアは親の承認を受けるのはほぼ不可能だから、代わりに誰かを保護者の代わりにしたのか、それとも保護者の承認など別にいらないのか。

「…………。勝手にしなさい。」

しばらく黙り、そう言つて部屋を出でていった。

別に出ていくのは良いんだけどさ、洗濯物も一緒に持つていけよ。俺がやんの？

「…………さんサイド」

「ゴンは昔から変わつていていた。」

引き取った当初はただの子供だったけど、2歳ぐらいから急に性格が変わった。

まあ、ただ成長して個が確立しただけだと思つけど。それからゴンは一人で遊びすよつになつた。そこへんをだだ走つたり、重い石などを持つなど様々な事をしていた。

初めはただ遊んでいるだけだと思っていたが、たまにキズだらけになつて帰つてきたことから考えるに、修行をしていたのだろう。何故そんなにキズだらけになるような修行が必要なのかと聞いた事があつた。

その時ゴンはまだ3歳だったのに、各個たる目で私を見て「必要だから」と答えた。

何のために必要なのかも聞いたが、ゴンは答えてくれなかつた。

でもそのジンによく似た決意した目を見ると、止める事は出来なかつた。

性格はまるで違うが、やはりゴンはジンの息子なのだと嫌でも認めさせられたのだった。

5歳になるゴンは突然「アルバイトをしたい。」と言つて來た。

5歳で働き口なんかあるの?と聞いたら港街の飯場で雇つて貰えた。と言つた。

仕事内容は簡単なウェイターやレジ打ちだから問題無いことゴンは答えたが、ゴンはまだ5歳なのだ。

確かに他国では5歳からでも働く子供もいるらしいが、そういうた子供は働くしかない環境にいるから働くのだ。普通に暮らしている子供は働いたりしない。

しかしながらゴンはジンのよつな「自分の意見は曲げない。」とも言つよつ眼差しで見てきた。

その日をしている時は何を言つても無駄だと分かっているので、社会を知るための勉強という名目で許可した。

ちなみにバイト代は年齢を考慮して時給200ジョニーのようだ。確かに子供の内に大金を持つのはあまり良くないしね。

てつきり一月程度で辞めると思ったが、ゴンは辞めず。1年間も働き続けた。

私も何度も足を運んだ事があるけど、まだ年のせいでも低い身長に悪戦苦闘していたけど、頑張っているその姿からお店はそこそこ繁盛していた。

そして「ゴンは6歳になると突然今度は「一人旅をする。」と宣言してきた。

今までとは違い、流石に6歳で一人旅はさせられない。と思い散々反対したが、ゴンの決意は変わらず、それどころか既に島から出る手筈が整えており、このまま勝手に行ってしまうだろう。そう理解し、仕方なく許可した。

その後は半年、年一回ととても少なかつたが、無事の知らせとして現在勤めている仕事場で取った写真や現地のポストカード等と一緒に手紙を送つて来てくれた。

手紙の内容や帰宅後に聞いた話によると、大体は住み込みで働きながら各地をバックパッカーのように旅していたようだ。

「とても良い経験になった。」と、帰宅後にゴンは10歳が言つようなセリフでは無い事を笑顔で話した。

約束通り4年でゴンは帰つて来てくれたので、これでゴンも落ち着

いてくれるだろ？。と思つて、矢先に今朝、ゴンがハンター試験を受験する事を告げられた。

ハンター試験は死ぬ危険が高い事で有名な試験だ。

まだ11歳では早すぎる。と止めたが、やはりゴンは既に受験する事を決めていたようだ。

ゴンは昔から行動派ではあるものの、堅実だからハンター試験のようなりスクが高い事はしないと思つていたけど、やっぱりジンの子だからか、ハンターを目指した。

私としては「ゴンにはハンターみたいな危険な職業には就かず、堅実で安全な職業に就いて欲しい。

ジンみたいな自分勝手に生きる人間にはなつて欲しく無かつたんだから…。

でも、ゴンの人生なのだから…。どう生きるかは私が決めて良い事では無い。

ゴンは頭の良い子だから、多分ハンターになつても立派にやつてくれるでしょうね…。もしかしたら私よりも頭が良いかも知れないしね。

だから、ゴンの生き方を認めてあげましょう。

息子を信じるのは母親として当たり前のだから…。

14 風の船つてマジ地獄

その後、一応ミトさんにハンター試験応募カードに署名を貰い、無事応募申請が完了した。

その後、ハンター試験会場案内が届いたが、「ハンター試験はザバン市で行います。」など大雑把な場所と試験開始日時しか書いていない。

マジで大雑把な情報しか書いてないし。

これじゃあナビゲーターがいないと本試験会場にたどり着くにはかなりの情報網が無い限り無理だな。

そういうえばキルアとか他の奴等はどうやって本試験会場にたどり着いたんだろう?ナビゲーターを見つけたのか?それとも情報を手に入れたのか?

いよいよ出発の日。

原作よりかは少ないが、数人が見送りに来てくれた。餞別はくれなかつたけど。

ミトさんとも別に原作みたいな感動秘話なんか話さずに、普通に「怪我には気を付けるのよ?」程度の言葉を交わした後に手を振り別れを告げた。

勿論原作みたいに船尾でデカイ声を上げて「立派なハンターになる。」的な宣言はせずに普通に乗って出航した。

にしてもこの船、見た目はガレオン船の癖にブリッジを見る限り工ジン船なんだよな。

でも煙突が無いからどうやって排気してるんだ?もしかして原子炉

でも積んでる?だとしたらとんでもない客船だな…。

しばらく経つと原作通りに嵐がやってきた。

旅には船ではなくもっぱら飛行船で移動していたから俺は嵐にあまり強くない。それに周りはゲロだらけで精神衛生的にも良くないのでゲートに逃げ込み嵐をやり過ごす。

数時間後、嵐が止んだらしいのでゲートから出てゲロだらけの客室を抜けて甲板に上がる。

やつぱり潮風は気持ち良い。飛行船は楽で良いけどたまには船も良いな。嵐が無ければ。

「どーした小僧?今頃船酔いか?」

酒瓶片手に船長が話しかけてきた。

「別に、ただやつと嵐を抜けて一時的に安定したからゲロ臭い客室を抜けて新鮮な空気を吸いたかっただけさ。」

「一時的に…とはどういう事だ?」

俺の答えが気になつたのか質問してくる船長。

「さつき気象情報を調べたら後2時間半~3時間後辺りでさつきの倍近い嵐とぶつかるつて分かつたから。」

これは本当、さつきパソコンで付近の海域の気象情報を調べたら警報が発令されていた。ちなみに絶対に近付かないでくださいって出していたよ。それに敢えて突っ込んでいくんだから正氣とは思えない。

「じゃあ何でまだこの船にいるんだ?このままではヤバいって分かっているのに?」

船長の疑問は最もだ。もしこれがハンター試験じゃ無かつたら速攻ゲートに逃げる。

「見るからに経験豊富な船長が敢えて危ない海域に突っ込んで行く事から、多分これもハンター試験の一部何だと思つたから。恐らく

ここで船を降りると今期のハンター試験は失格と見なされるだろう。じやなきやただ単に天気も読めない程未熟な船長という事なら自分の不幸を呪うや。

俺の答えに船長はいきなり大笑いを始めた。腹を抱えながら大爆笑している。

「はー、はー、あー久しぶりに大笑いさせて貰つたぜ！確かにその通り、こんな天気も読めないような船長の船に乗つたら不幸以外の何物でも無いな！」

小僧の読み通り、俺は試験官として雇われた経験豊富な船長さ。知つての通りハンター資格を取りたい奴等はごまんといる。そんな奴らをいちいち試験するような時間も人的余裕も試験官には無い。だから俺みたいな雇われ試験官がお前達をふるいにかけるって事だ。

俺の読みが当たつた事か、それとも皮肉が面白かったのかまだ少し笑い気味に船長が有難いご高説を言つている。全部知つているからほんと聞き流しているけどね。

「それで？俺は合格何でしようか？試験官殿？」

やつと笑いが収まつたのか船長は普通の顔になつた。

「ああ、お前なら合格だ！久々に笑わせて貰つたしな。

それでお前さん名前は？」

「ゴンだ。」

「そうかゴン、ではお前は何でハンターになりたいんだ？」
やつぱりその質問聞くんだ。

「ハンター、ていうかライセンスが欲しいんだよね。

別にハンターしなくても自由に生きれば良いしな。

「ほう、何故ライセンスが必要なんだ？」

「俺こんな見た目じやん？まあ、年相応なんだけどさ、こんな年じや口クな仕事も無くてさ。働くにはある程度箱が必要になるんだけどさ、こんな年だからこれといった功績も無いからさ、口クに稼げもしない訳。

だからハンター ライセンスを持つていればプロハンターという箔がつくから有利になるんだよ。

それにライセンスを持つていればいちいち面倒な出入国書類やビザを取る必要も無くなるし、公共施設もほとんど無料になるとこう素晴らしいお徳付き。

だからどうしてもライセンスが欲しいからこの試験を受けたつてこと。」

本当にただ資格が欲しいだけなんだよな。理由が就職に便利というある意味現実路線。非現実的世界に生きるハンターとは対極だな。

「成る程な、その年にしては珍しい程に現実的な考えだが、まあそれも良いか。

よし、分かった。これでお前は正式に合格だ。

お前結構面白いから審査会場最寄りの港まで連れてつたやるよ。」「ありがとよ。」

原作よりも早いけど合格宣言を貰つた。

その後、船長から「船の動かし方を教えてやろうか?」と聞かれたけど「嵐まで風に当たつている。」と断つた。別に船の動かし方はいらないしな。

移動は飛行船を使った方が楽で良いし、最悪ゲートを使って移動すれば良いんだから。

船長のこれから地獄に行くけどお前らどうする?宣言でうずくまつていた客達は一斉に救命ボートに乗つて逃げていった。

といふかこの近くに島は無人島ぐらいしか無いからアイツ等大丈夫なのか?それとも失格しても生き残る試練を『えるのか?だったらどんだけ鬼畜だよ…。』

「結局客で残つたのはこの3人が。名を聞こう。」

また言うのかよ…。まあ、原作組への自己紹介と割り切るか。

「オレはレオリオという者だ。」

「俺はゴン。」

「私の名はクラピカ。」

自己紹介が終わる。

ちなみに俺の服装は原作みたいな短パンではなく、ジーパンで上はジャケットという一般的な服装にクラピカみたいなバックを持つているというスタイルだ。

ちなみにバックにはパソコンなどの他に折り畳み式の釣竿も入っている。

釣竿つて結構汎用性高いしな。

「お前ら何故ハンターになりたいんだ?」

流石にこれをまた言つのは面倒なので言わない。船長も俺では無く、二人を見ているしな。

「?おい、えらそーに聞くもんじやねーゼ、試験官でもあるまいし。」

「
いえ、めっちゃ 試験官です。

「良いいから答える。」

船長の命令にレオリオは若干キレ気味に「何だと?」と答える。

「話した方が良いと思うけど?」

という俺のささやかな忠告にも

「ヤダね。オレはイヤな事は決闘してでもやらね。」
と答える。

船長に睨み付けられたので黙つて引き下がる。

その後は船長の答えないのならお前らも船を降りな宣言を受けたので二人は渋々答える。

クラピカは敵討ちとレオリオは金が全てを話した。ちなみに俺もレオリオの意見には全面的に賛成だ。

金さえあれば大抵の物なら手に入る。ある程度の友情や愛だつて買える。まあ、深い関係になるには内面が必要だが。

そして決闘が始まる。

面倒くさいよね、決闘なんて。他人と意見が異なるなんてよくある
といつのに。

そんなの気にしてたら生きていけねえよ。

嵐の甲板の上で格好つけているのか二人は佇む。ていうかお前ら船員達の邪魔になつていいし。喧嘩したかつたら何でわざわざ甲板に
出るの？理解不能。

船員達が嵐を乗り切るたむに奮闘している横で「今すぐ訂正すれば
許してやるぞレオリオ。」「てめえの方が先だクラピカ。オレから
譲る気は全くねえ。」と言い合つ邪魔な奴ら。お前ら空氣読めよ。
「行くぞ！！」とクラピカがわざわざ宣言して鎖で繋がれた一本の
棒を構えながら走る。

「来やがれ！」とレオリオは折りたたみナイフを構える。

その時、バキッ！！というデカイ音がして帆を支える部分が折れて
船員に当たり吹っ飛ぶ。更に運悪く波のせいで船が傾き、船員が吹
つ飛んだ方向に船が傾く。

「カツツォ！！」と吹っ飛ばされた仲間を呼ぶ船員達。

このままでは激流渦巻く海に落ちてしまつと思つたレオリオとクラ
ピカは手すりに捕まりながら限界まで手を伸ばすが、残念ながら届
かない。

哀れ船員はこのまま海に沈んでしまうかと思われたが、ヒュンッと
いう鋭い音が鳴り、カツツォの足首に糸が巻き付き、勢い良く船に
引っ張られる。

そして船員は無事船に着陸して仲間の船員達が手当てのために近付

き、無事を確認した後、「ボウズ！！礼を言つ！！」と船員は釣竿で引っ張ってくれて仲間を助けてくれたゴンに礼を言つた。

俺は「良いつて事。」と軽く手を振り返す。

流石に原作みたいな無茶は俺には出来ない。ていうか例えクラピカとレオリオが10年来の親友だったとしても俺はしない。

だつてもし一人の内どちらかが手を滑らせたら終わるもん。もしも海が穏やかだつたなら考えるが、こんな荒れた海に飛び込むかも知れないリスクは犯せない。

だからただカツツオを釣竿で吊り上げたのだ。まあ、タイミングを図つていたから簡単に出来た。流石に突発的だつたなら無理だつたろうが。

さてと、レオリオとクラピカの険悪なムードを治すために一言。

「なんだ、考へている事は一緒じゃん。」

と今でも手すりに捕まっている一人に言ひ。

そして二人は互いの状況を見合つて笑い合つた。

軽く笑い合つた後にクラピカが

「非礼をわびよう。すまなかつたレオリオさん。」

と言つ。

そしたらレオリオも

「何だよ水くせえな、レオリオで良いよクラピカ。オレの方もさつきの言葉は全面的に撤回する。」

と返す。

「イシマジ単純。

「くくくくくははははーお前ら気に入つたぜー今日のオレ様はス

「ごく気分が良い！！

お前ら3人はオレ様が責任もつて審査会場最寄りの港まで連れてつてやらあ！！」

と楽しそうに船長は操舵室に戻つていった。

都合が良いように嵐が弱まっており、危険海域を通過したようだ。これがマンガのご都合主義か…。

さつきまでの嵐が嘘みたいに晴ってきた。確かにこんなに世界から庇護されているなら、ゴンが無茶をやっても何だかんだで助かっている訳だ。

スゲエな主人公補正。

試験会場最寄りのドーレ港に無事到着して、レオリオとクラピカは下船した。

俺は一応礼儀として「世話をなつたな船長。」と礼を言つとく。試験官でもあるから「コマすつ」といて損はない。

「うむ、達者でな。

それとお前はカツツオを助けてくれたらから最後のアドバイスをくれてやろう。」

船長が山を指指して「あの山の一本杉を目指せ。それが試験会場にたどり着く近道だ。」

とわざわざ教えてくれた。知つてることだね。

「分かつた。最後までありがとう。」

と言つて俺も下船する。嵐のトラウマから一度とこの船には乗りたくないと言つた。

クラピカとレオリオはザバン市行きのバス乗り場にいた。コイツらをここで見捨てればまず間違いなく今年のハンター試験は受けられないだろうが、それでは原作が大いに狂うので助けてやる。

「おー一人さん。バスを待つっていても無意味だよ。」

俺の言葉に二人は振り返り「何で無意味なんだよ?」とレオリオが聞いてきた。

「ハンター試験の試験会場にそんな簡単に行ける訳無いだろ?

さつきの船も試験だつたように、これも試験。ルーキーは大概これで脱落する仕組みなの。」

俺の言葉に納得したのかクラピカは頷く。

「成る程、確かにそんな簡単に試験会場がある街に行ける筈は無い

な。」

一方、レオリオは胡散臭げに俺を見下ろし「本當かよ?」と呟つ。「だつたらこのままバスに乗れば? その前に周りの音をよく聞いた方が良いけど。」

と言つて後ろでザバン市行きのバスは目的地に到達していない。と噂している奴らを見る。

それでレオリオも納得したのか「成る程な。確かにバスではザバン市にはいけないらしいな。

じゃあどうするんだゴン?」

馴れ馴れしく聞いてくるレオリオ。 ていうかお前と何時名前を呼び合つ関係になつたんだ? 船でも口クに話もしなかつたのに。

「電車で行く。流石に公共交通機関にまでは手は及んでいない筈だ。特急とかは危なそだから鈍行やタクシーで確実に行く。」

俺ではキリコを見分ける何て不可能だし、いちいち山を登るのは面倒だから電車で行く。

本当なら飛行船や特急など直行便を使いたいが細工されかねないからな。

「それで? お一人さんはどうする?」

俺と一緒に行くか? と聞く。

「では私もゴンと一緒に行こう。」とクラピカ。

「しょうがねえな。俺も一緒に行つてやるよ。」とレオリオ。なんかムカつくけどまあ良いか。

その後、各駅停車の電車やタクシーを使って深夜によつやく到着した。やっぱり鈍行では時間がかかるな。
ホテルで一泊した後、試験会場に向かう事にした。

ちなみにクラピカとレオリオは節約のために同室、俺は「」免なので個室を取った

翌朝、そこそこの都市のザバン市を三人で歩く。

「さてと、じゃあ試験会場を探すか。」

レオリオは張り切ったように言つ。

「そうだな、来るだけで一日かかつたが、まだ試験会場を見つけなくては無意味だからな。」

クラピカも張り切つている。コイツら事前に情報を集めなかつたのか？

今から試験会場を探していたら時間的に無理なのだが…。

「お前らマジか？今から試験会場を探してたらタイムオーバーになるに決まっているだろ？」

俺の呆れたような言葉が気にくわなかつたのかレオリオがキレ氣味に「探さなきや分からねえだろうが！？それとも何か？！オレ達はここまで来て失格つてことか！？」

往来のど真ん中でテカイ声を上げるなよ。通行人がこつち見ているじゃねえか。

「声が大きいレオリオ！静かにしろ！」

しかし私もレオリオの意見には賛成だ。確かに試験日時は今日だが、まだ時間はある。だから不可能では無い筈だ。

注意にはなつていない大きい声で言うクラピカ。コイツ頭は良いけど肝心な事は抜けているからな。

「ハンター試験は試験が始まる前に試験会場を突き止めるか、ハンタ－試験公認のナビゲーターに認めて貰うかしないとたゞり着くだけでも不可能なんだよ。」

と常識を教えてやる。

レオリオはクラピカを「マジ？」という感じに見る。クラピカは知

らなかつたらしく悔しそうに黙つてゐるだけ。

「まあ、でも今回は大丈夫だ。試験会場は俺が知つてゐる。事前に調べておいたからな。」

その一言で一人は明るくなる。

「なんだ心配せんなよ！ てっきりもうダメなのかと心配しちまつたじゃねえか！」

とレオリオが安心したかのように俺の背中を叩きながら言つ。纏をしているから別に痛く無いけど。

ちなみにこれからは日常でも纏をする。危ないかも知れないし、ライセンスが取れれば子供の背格好でも不便しないしな。

「ありがとうゴン。君には助けられてばかりだな。」

クラピカは普通に礼を言つ。自分が如何に危ない状況だったのかを知り、少し緊張気味だがな。

その後、事前に行つた事のある試験会場に向かつた。

自分だけならゲートで簡単に行けるのだが、コイツらが一緒にいるから俺も歩かざるを得ない。まあ、大した距離でも無いから良いけど。

「ここだ。」

そう言つて俺は定食屋を見る。

しかし一人は隣のビルを見る。まあ、普通そつちを見るよな。

「ここに世界各地の……。」

「ハンター志望者の猛者が集まる訳だな。」

緊張しながら言つ一人。

しかしそこに「そつちじやなくてこつちだ。」と俺が突つ込みながら定食屋を指す。

少し沈黙が流れた後に「どう見てもただの定食屋だぜ……。」とレオ

リオの声が虚しく聞こえる。

「確かに定食屋だが、ここが試験会場だ。まあ、ついて来いよ。」

といつてドアを開ける。

「いらっしゃい！」 店主が野菜炒めだか何かを炒めている。どう見ても定食屋だな。

「ご注文はー？」

「ステーキ定食。」

店主がびくっと反応して、「焼き方は？」と聞いたので「弱火でじっくり。」と答えた。

「あいよー。」と答えたきり店主は顔を背け、娘がバイトが「お客様さん、奥の部屋どうぞ。」と案内する。

部屋に入ると何時焼いたのか、席の鉄板には良い焼き具合のステーキが乗っている。何時からスタンバっていたんだ？

そして誰かがスイッチを入れたのか、エレベーターが稼働して地下に降りていく。この店は元からこうなのか？それとも試験のためにこんなエレベーターを作ったのか？疑問だ。

「それじゃ、食おうぜ。」

と俺は席に座り食べ始める。

一人も席に座る。

「にしても本当にここが試験会場だつたんだな？」

レオリオが肉を食いながら俺に聞く。

「そりやね。ちゃんと調べたからね。」

それよりも何も調べて来なかつたお前らを俺は信じられないよ。」
と食いながら二人を見る。

二人は「はははは…。」と軽く苦笑いをするだけ。

ステーキも粗方食い終わり、食休みをしているとチン、とB100
という凄まじい階数表示が点いた。

「ウイイ……ンと扉が開き、外に出ると薄暗い地下道に人がギッシリといた。何でもつと縦に広がって間に余裕を持とうとはしないんだ？」
「ここを越えてはいけません。という線もあるのか？」

「一体何人いるんだ？」

レオリオの疑問に「君達で405人目だよ。」と答えが帰ってきた。
声を追うと、パイプみたいなのに腰かけている中年のオヤジがいた。
新人潰しのトンパか…。

「よつ。おれはトンパ。よろしく。」

手を差し出して来たが俺は回避してクラピカにさせた。もしかしたら毒でも仕込まれていたらヤバいしな。

「新顔だね君達。」

「分かるのか？」クラピカの質問に「まーねーなにしろオレ10歳からもう35回もテストを受けてるから。
まあ、試験のベテランってわけだよ。わからないことは何でも教えてあげるよー！」

如何にも良い人風に言うトンパ。という45歳でまだ試験を受ける
つて考えは凄いな。

レオリオが「いばれることじやねーよな？」と聞いてくる。

「いや、そうでも無いよ？目的はちゃんと果たしているんだろうか
ら。」

新人潰しという使命をな。

分からぬレオリオは「そつか～？」と疑問気だ。

その後はクラピカが他の受験者の情報を聞き出している。情報の大
切さを嫌つて程に知つたばかりだからな。

「ぎゃああ～～～っ！！！」

悲鳴が地下道に鳴り響いた。

「アーラ不思議、腕が消えちゃった。

タネもいかけも「ございません。」

ヒソカが笑顔で語る。奇術に種が無い訳無いがな。

腕が無くなつた奴は自分の腕が無くなつた事で叫んでいる。

「氣を付けようね？人にぶつかつたらかやまらなくちや。」

そんなことは気にせずヒソカはのたうちまわつてゐる奴に注意する。言つてゐる事は道徳的だがやつてゐる事は非道徳的だ。

「他にもヤバい奴はいつぱいいるからな。オレがいろいろ教えてやるから安心しな！」

キメポーズのように宣言するトンパ。出来れば今の内に始末しておきたいが、一応原作に深く関わつてゐるので今は放置する。

「おつとそだ。」

と言つてポッケから市販されてゐるジュースを取り出し俺等に渡す。「お近づきのしるしだ飲みなよ。お互ひの健闘を祈つてカンパイだ。

」
そう言つてトンパが飲もうとした缶を俺は取り上げ、「ありがとよ」と言つて飲む。

「な、何をするんだ！？」

とトンパが驚いていたので

「いやあ済まないな。突然アンタが持つっていたジュースが飲みたくなつたんだ。代わりに俺のをやるよ。まだ開けてすらいない。」

と下剤入りのジュースをトンパに渡してトンパが持つていたジュースを飲む。やはりこちらは普通のジュースのようだ。

しかしトンパは自分が持つてゐるジュースを飲もうとしない。

「どうしたんだ？せつかくの乾杯では無いか？」

そう聞いてもトンパは飲まず「いやあ、いいよ…。オレ喉乾いていないし。」と必死に断る。

その様子を勿論見ていたレオリオとクラピカはジュースを飲まずに床に捨てる。

その様子を見たトンパは「はははは…。」

と笑うしか無かつた。あまりに不自然だつたからな。
キルアみたいに薬が効かない体質ならそのまま飲んで疑いを晴らす
事も出来たが、普通の人間には無理だ。

あの後トンパはいづらい雰囲気になつたのでさつさと退散していく
た。

「原作と違つて、中身が古くなつていた。」なんて言い訳も出来ないしな。自分では飲まなかつた事で何らかを仕掛けていた事は明白だ。

たヒゲがいた。

では、これよりハンタリ試験を開始いたします。

と宣言した後、パイプから飛び降りた。

「おおくとハハ」、と正に執事のあへに手招きする

あり、運が悪かつたり実力が乏しかつたりするとケガをしたり死ん
だりします。

先程のように受験生同士の争いで再起不能になる場合も多々ござります。

それでも構わない。という方のみついで来てください。

それって契約書で言う「死んでも当社は一切の責任は負いかねます。」と同じか？まあ、この状況で「じゃあ俺止める。」なんて言えないとと思うのだが…。

返答が無かつたのでヒゲは

「承知いたしました。

第一次試験404名。全員参加ですね。」

と確認するように断言する。

それを聞いてレオリオは

「当たり前の話だが誰一人かえらねーな。ちょっとだけ期待したんだがな。」

と残念そうに言つ。これで帰るような奴はわざわざ本試験会場まで来ないとと思うのだが。

「おかしいな。」

クラピカが違和感を感じたのか言つ。

ザ、ザ、ザと周りがどんどん早足になり、とうとう走り出した。

「おいおい何だ？ やけにみんな急いでねーか？」

レオリオは不思議そうに言つ。

「やはり進むペースが段々早くなつていて。」

クラピカも疑問が確信になつた。

「前の方が走り出したな。」

分かつているが、一応俺も言つとく。

そして全員が走り出した。ペースは普通のマラソンよりは早いな。
多分オリンピッククラスのペースだ。

まあ、その普通ならあり得ないペースでも全員が普通に付いて來ているのはスゲエな。

「申し遅れましたが、私一次試験担当官のサトシと申します。

これより皆様を二次試験会場へ案内いたします。」

と歩きとは思えないスピードですすみながらサトシは言つ。

「一次…？ ってことは一次は？」

ハゲがヒゲに聞く。

「もう始まっているのでござります。

二次試験会場まで私について来る」と、これが一次試験でございま
す。

場所や到着時刻はお答えできません。ただ私について来ていただきます。」

「なるほどな…。」

「さしつけめ持久力試験つてとこか。」

望むところだぜ、どこまでもついて行つてやる。」

レオリオは自信ありげに言う。普通のフルマラソンぐらいなら走れるから自信があるのだろう。

まさか100km以上走るなんて考へていないのである。

「多分心理テストも兼ねているな、何時まで走れば良いか分からな
いからかなりキツいな。」

俺の言葉にレオリオは「心配性だなゴンは。」と何かり出るのかは
分からぬが、自信満々のレオリオ。ある意味こいつが羨ましい。

ガーネットという音を鳴らしながら、走っている俺等を颯爽と追い
抜くキルア。

おお成長したなあ。当たり前だけど。

「おいガキ！汚ねーぞ！そりゃ反則じゃねーかオイ！！」
エキサイトするレオリオ。根は真面目なんだよなコイツ。
「何で？」

不思議そうに聞くキルア。

「何でつておま…。こりや持久力のテストなんだぞ！？」

あくまでズルいと言い張るレオリオ。

「真面目かオマエ。第一試験官は「走つてついて来い。」なんて言
つていいだろ？」

俺が冷静に言い返すとクラピカも「テストは原則として持ち込み自由なのだ。」と言つ。

レオリオは尚も言い返したそだが、俺等の意見に納得したのか黙

る。

キルアがようやく俺に気付いたのかこっちを見てきて

「あれ、ゴン？」

と聞いてくる。

「おう。久しぶりキルア。」

と挨拶し返す。

「おお、やつぱり！久しぶりだな。何年振りだ？」

「3年振りになるな。」

「確かに最後にあったのは8歳の時だからそんなに経つのか。と懐かしそうに言うキルア。

「何だ？お前ら知り合いか？」

レオリオが聞いてきたので

「ああ、久しぶりに再開したんだよ。」

と答える。

レオリオは「へー。」と言うだけ。

「それにしても。」

とキルアはクラピカとレオリオを見る。

「珍しいな、ゴンが仲間を持つなんて。」

キルアが不思議そうに俺に聞く。

まあ、確かに天空闘技場の時はキルア以外とは誰とも会話すら無かつたもんな。

「まあ、色々あつてな…。」

と濁らす。ただ単に説明するのが面倒なだけであつたが。

「ふーん…。」

キルアは別に聞かない。そこまで気になつた訳でも無いしな。

およそ5時間が経過し、60kmぐらいを走った。このために持久力を鍛えていたから何とも無い。

我ながら化物になつたな。と思つ11歳であった。

レオリオはもう大分遅れ気味だ。

本当なら置いていきたいが、コイツに失格になられると面倒なので一応

「レオリオ、大丈夫か？」

と聞くと何が大丈夫なのかサムズアップする。

しかし

「カバン持どうか？」

と聞くと

「頼む。」

とすぐ差し出して来た。やはり限界が近いらしい。

カバンを受け取り列に戻る。後は自分で出来るだろう。

「意外だな。ゴンはてっきり見捨てると思っていたのに。」

とキルアは不思議そうに聞いてくる。まあ、コイツに与えたゴンの印象は自分本位の他人の事など気遣わないタイプだからな。

「恩は売つとして損は無いし、一応ここまで一緒に来た仲間だからな。」

その言葉にキルアが驚いたような表情を見せる。多分俺の事を自分と同じタイプの人間だと思っていたからだろう。

まあ、最悪レオリオが失格になつたらカバンは俺の物になるからその時は有効的に使わせて貰おう。アイツ医者志望だから薬とか色々持つてそうだし。

そう考えていたら後ろから

「絶対ハンターになつたるんじや————！」
「そつたらア————！」

とデカイ声が響いた。どうやら立ち直つたらしい。

5時間以上走つてゐるレオリオも十分超人の範囲なのだがな。どうやって鍛えたんだろ？

更にしばらく走り、100kmぐらいになつた所で第2の閑門が現れた。

先が見えない程に長く、老人には普通に登るのさえキツイ程に急な階段が続いていた。

にしてもこの施設は何のために作られたんだろう？

核シェルター？にしては巨大過ぎるし、こんな長い階段はいらない。階段の風化具合から見て作られて1、2年では無さそうだから今回のために特別に作られた訳では無い。だつたら何のために定食屋の真下にこんなとてつもない巨大な通路を建造したんだろう？逃げるためにしてはこの長——い階段はいらないだろうし、こんな100kmにも渡つて避難経路を築く必要も無い。

意味分かんない。

そんなことを考えていたらいつの間にか先頭にいた。

「もう先頭か。」

俺のつぶやきに

「うん、だつてペース遅いんだもん。

こんなんじゃ逆に疲れちゃうよな——？」

ととんでもない事を言つキルア。このペースが遅いって、お前はどんな鍛え方をして来たんだよ。

「結構ハンター試験も楽勝かもな。つまんね——の。」
と本当につまらなそうなキルア。

「そりが? どんな試験だつて難しいのよりは簡単な方が楽で良いよ。」

ハンター試験なんて面倒なのばつかだからな。頭がイカれているとしか思えない。

「えへへ、それじゃ面白く無いじやん。『コンツマジ』でオレと同い年とは思えない性格だよなあ。」

当たり前だ、貴様の何倍生きていると思つていいんだ。

でも俺の考え方は一六の頃には確立していたから俺がおかしいのか?

まあ、良いや。

「所でキルアは何でこの試験受けたんだ? 別にハンター志望でも無いだろう?」

「ああ、別にハンターになりたかった訳じゃ無いよ。」

ハンター試験が物凄い難関だつて言われているから面白そうだと思つただけ。でも拍子抜けな感じ。」

この試験を受けている奴らの大半は人生をかけているというのに、何という冒涜的な発言。

ちなみに俺も人生かかつています。今回の試験に不合格だと来年受かるか分からないから絶対今年受かるしかないのだ。

「ゴンは何で受けたんの? もしかしてハンター志望?」

「うーん、微妙だな。別にハンターを志望している訳では無いけど、ライセンスはどうしても欲しいからね。」

本当の希望は二ートだが、二ートをするためには金がかかるから稼ぐにはハンターが手っ取り早い。

「何でそんなにライセンスが欲しいの? 確かに特典はいっぱいあるけど、ゴンぐらいの強さがあればそんなに必要無いだろ?」

キルアは俺を少なくとも自分よりは強い奴と分かつてているので聞いてきた。

「まあ、確かに特典も捨て難いけど、一番欲しいのは信用さ。」

「信用？」

「そう、俺がいくら強かろうが、まだ所詮11のガキ。こんなガキでは信用度はゼロだから試してさえ貰えない。でもライセンスを取り、プロに認められればプロハンターとしての信用を得られる。後は腕前を見せて更に信用を勝ち取れる。だからどうしてもライセンスが必要なのさ。」

本当にそななんだよね。マフィアの用心棒にしても、警備員にしてもこんな成りでは話さえ聞いてくれない。

だから単独でたまたま見つけられた賞金首を捕まえるぐらいしか出来なかつた。

大体の高給で経験を得られそうな仕事はプロハンターじゃないと雇つて貰えない。

だから何回も自分よりも遙か格下の癖に、ライセンスを持っているからと雇われていく奴らに笑われたりもした。

あの悔しさは無いわ。

だから何としてでも合格する。

そのためには確実に合格するために原作をなるべく準拠して原作通りに合格する。俺はゴンなんだ。大抵のトラブルは問題無い筈だ。

「ふーん、やつぱりゴンつて変わつているよな。」

とキルアが笑いながら改めて変人認定をしてくれた。

「そんなに変わつているか？ある意味一番大切なモノだと思うけど

「信用」つて。」

そう言つとキルアは「確かにな…。」とつぶやいた。その顔は真剣そのものだった。

何か暗い雰囲気になつていると前方に光が見えて來た。

「出口か…。」

その俺の言葉にキルアも「ああ、明るいな…。」とだけ返してきた。
何でこんな雰囲気？

出口にたどり着き、ようやく外気に触れた。

しかし田の前に広がる風景は湿原のせいか風はヌメツとしてあまり
気持ち良いとは言えない。

他の受験者も続々と到着して来たのか、田の前の湿原に釘付けにな
る。そりやそうだらう。

何せトンネルを抜けられれば終わると思っていたのに、見た感じま
だ続くと解れば絶望したくなる。
しかし試験官は無視して。

「ヌメーレ湿原、通称“詐欺師の壠”（ねぐら）。

二次試験会場へはここを通つて行かねばなりません。この湿原にし
かいない珍奇な動物達、その多くが人間をも欺いて食糧にしようと
する狡猾で貪欲な生き物です。

十分注意してついて来て下さい。騙されると死にますよ？」
といふとんでもない警告をかましてくれた。

そして出口のシャッターが閉じて後少しで出口に到達出来た受験生
の希望を絶つた。

「この湿原の生き物はありとあらゆる方法で獲物を捕食しようとし
ます。標的を騙して食い物にする生物達の生態系…。詐欺師の壠と
呼ばれるゆえんです。

騙される事の無いよう注意深く、しっかりと私の後をついて来て下
さい。」

補足情報ありがと。つまりお前について行けないと死ぬって事か。
酷えな。

しかしレオリオはまたもや何でそんなに自信があるのか「おかしなこと言うぜ、騙されるのが分かつて騙される訳ねーだろ。」とつぶやいた。

そしてその直後、

「ウソだ！！そいつはウソをついている！..」

という声が響いた。

出口の脇から傷だらけで何かを引きずっている男が出てきて

「そいつは二セ者だ！！試験官じゃない、オレが本当の試験官だ！..」

とサトツを指指しながら叫ぶ。

その叫びに周りの受験生達も混乱氣味になる。

「これを見ろ！..」

と引きずっていた物を見せる。

それは顔はサトツに似ているが体はサルの死体のような物だった。

「こじつはヌメーレ湿原に生息する人面猿だ！..」

人面猿は新鮮な人肉を好む。しかし手足は非常に力が弱い。そこで自ら人に扮し、言葉巧みに人間を湿原に連れ込み他の生き物と連携して獲物を生け捕りにするんだ！..

そいつはハンター試験に集まつた受験生を一網打尽にする気だぞ！..

！」

とサトツを見ながら叫ぶ。

中々の演説だな。でも矛盾が多いぜ。

先ず何時サトツと変わったかだ。この湿原に足を踏み入れた時は俺達も一緒にいたから変わる機会は無かつたし、初めから変わつていたのなら説明出来るが、その場合はあの猿が100km以上の道と階段を走破したという事になるのだが、あの猿の細い手足では無理だし、そもそもそんな能力があるのなら騙さずに実力で人間を捕食すれば良い。

通常のコンティショニングなら簡単に分かるが、受験生達は長い長いマ

ラソンと階段登りを終えた後だから冷静な思考はまず不可能。だからそこを突いたのならナイスな考え方だ。

上手くいけば受験生の半数を騙せたかも知れない。

しかし物事はそんなに上手くいかない。

突如トランプが飛来して来て弾劾している男の顔に三枚突き刺さり、男は絶命した。

更にトランプはサトツにも飛来していて、サトツには四枚も飛來したが、サトツは危なげも無く見事に全部受け止めた。

「くつく。なるほど、なるほど。」

と44番のヒソカはトランプを操りながら笑う。

そして今まで死んでいたと思われた引きずられていた猿が突然飛び跳ねながら逃走を図つたが、ヒソカが再びトランプを投げ、見事猿に命中させた。

「これで決定。そつちが本物だね。」

とヒソカはサトツを見ながら語る。

「試験官というのは審査委員会から依頼されたハンターが無償で任務につくもの。

我々が目指すハンターの端くれともあらう者があの程度の攻撃を防げないわが無いからね。」

ヒソカの説明にサトツもトランプを捨てながら

「ほめ言葉として受け取つておきましょう。

しかし、次からはいかなる理由でも私への攻撃は試験官への反逆とみなして即失格とします。よろしいですね。」

ヒソカを見ながらサトツは宣告する。

それにヒソカは「はいはい。」と適当に返事を返す。

バサ、バサという音が上から聞こえて来て、多くの鳥が猿の死体に

群がり始めた。

ガツ、ガツと死体を次々啄み、みるみる内に死体の肉は無くなつていぐ。まあ、死体処理が楽だからエコとも言えるな。

「あれが敗者の姿です。

私をニセ者扱いして受験生を混乱させ、何人か連れ去らうとしたんでしょうな。こうした命がけの騙し合ひが日夜行われている訳です。何人かは騙されかけて私を疑つたんじゃありませんか？」

そのサトツの言葉にレオリオとハゲが反応している。
レオリオはまだしも、忍者のお前が騙されるなよ。

「それではまいりましょうか。一次試験会場へ。」

その言葉でまたマラソンが始まつた。

こつからが面倒くさいんだよなあ。主にお荷物達（レオリオ、クラピカ）のせいで。キルアみたいに自分でクリアしてくれれば楽なんだけど、アイツ等面倒くさいんだよな。

走り始めて霧が段々出てきた。

確かにこの後に受験生達が罠にかかりまくつて大量に死ぬんだよなあ。

「ゴン、もつと前に行こつ。」

とキルアが警告して来た。

あの荷物達もお前のように体力があればなあ、俺もヒソカと対面せずには済むのに。

「そうだな。

ヒソカの雰囲気が明らかに変わつた。どうやらじこりでかなり殺る氣らしいな。

その俺の言葉にキルアが関心したような顔をして

「やつぱりゴンには分かつたんだな。にしてもこれが分かるつて事はゴンつてもしかして俺やヒソカと同類？」
と聞いてきたので

「さあね。少なくとも俺は快楽殺人者じゃ無いよ。」

とヒソカと同類は否定した。流石にあんなキチガイと一緒にされては迷惑だ。

その意味が分かつたのかキルアは顔をしかめて
「俺だつてあんなジヤンキーじゃねーよ。」

とヒソカと同類はやはり否定。

どこかにヒソカをリスペクトする奴は存在するのだろうか?
いたとしたらそいつは正氣を失っているがな。

その事をキルアにも話したらキルアも

「そいつ人間じゃねーよ。」

と言い、少しの間和んでいた。

しかしそんか時間は長く続かず、後ろの方からレオリオの
「つてえ————！」

という声が響いた。

本当は助けたくは無いが、原作通り確實にライセンスを取るために
我慢して

「キルア、ちょっとこれ頼む。」

とレオリオの荷物を渡した。

キルアは「？」という顔をしながらも受け取った。

「なんか荷物がヤバいらしいんで取りに行くわ。」と言つ。

荷物とは何かを理解したのか

「こんな霧じやあ一度はぐれたら一度と合流出来ないぜ？」

とキルアは止める。

その言葉は大変ありがたいが、ここはやるしか無いんだわ。

「大丈夫、大丈夫。先に二次試験会場行つてくれ。」

と言い残しレオリオの方向に走る。

後ろから「ゴンつー！」とキルアが呼ぶ声が聞こえる。しかし無視だ。

というかキルアには一次試験会場にいつて貰わなくては困る。

原作で、ゴンはヒソカに連れていかれたレオリオの香水の匂いを追つたが、俺にはそんな芸当は不可能だ。

だからレオリオの荷物に発信器を仕込んでキルアに渡した。キルアがちゃんと荷物を持つていつてくれたなら大丈夫だ。

それに最悪ゲートを使えば一次試験会場に直行すれば良い。

『現実シェルター』は場所だけではなく、一度あつた人間の位置にゲートを開ける。

だからキルアが荷物を捨てていきやがつたら俺だけゲートに入つてキルアの位置に直行する。

少し離れた位置に開けばバレないだろう。

さて、では大変不本意だが、ヒソカと出会うか。

おお、おお、やつてるね。

ゲートで移動して少し遠目で見ているけど、今は受験生達がヒソカを囲んで処刑しようとしている様子だ。

あ、皆死んだ。弱え。ていうか例えアイツ等が念使いであつてもヒソカなら圧倒しそう。あいつの負けた場面を見たこと無いからな。

そして三人だけが生き残った。

レオリオ、クラピカ、格闘家のチエリー。

三人はヒソカが近付いて来たらバラバラの方角に一斉に逃げた。

確かにあれなら微かに生き残れる可能性がある。でもあれでは一次試験会場には行けそうに無いから結局は迷つて死ぬと思うけど。

そう思つていたらレオリオが帰ってきた。

なんかカツコイイセリフを言つてるけど、それって強い奴が言わないとカツコ良く無いよ？

しかしレオリオはこん棒を振り上げながらヒソカに接近する。しか

しあえなくかわされヒソカが止めを刺すのが、それとも氣絶させるだけなのか？分からぬが、一応原作を遵守して釣竿を出し、思いつきり振り上げてヒソカ目掛けて降り下ろした。

攻撃ではなく、行動を止めさせるのが目的なので周は使わず、普通にオモリやウキをヒソカの顔面にクリティカルヒットさせた。

ヒットした瞬間、ドコッ！…というテカイ音がなったが、ヒソカは何でも無いようにこいつを見てきた。

原作と違つて多少傷がデカくて深そうだけど。

「やるね、ボウヤ。

釣竿？面白い武器だね。ちょっと見せてよ。」

気軽にヒソカが話しかけて来たが、レオリオはチャンスと思つたのか「てめえの相手はオレだ！！

とわざわざ宣言しながら棒で攻撃を仕掛けた。

しかしあえなくヒソカからアッパーを食らいダウンした。マジでレオリオ使えねえ。

「どうして何もしないんだい？君は彼を助けに来たんじゃないのかい？」

ただアッパーを食らう様子を見ていただけの俺に疑問を抱いたのだろう。

「別に殺す気は無さそうだったからね。アンタが本気だったら今頃レオリオの頭は砕けていただろうし。」

ちなみに今の俺は纏をしているが、まだ念を覚えたての頃の弱い纏を張つている。

もしも強い纏を張つているとここで殺り合ひ可能性がある。だから今は「青い果実」を装い、見逃して貰う。

俺の願いが叶つたのか、ヒソカは「ふーーん。」と言いながら俺を見るだけ。多分観察しているんだろう。

今摘むべきか、もつ少し様子を見るべきか。

しばらくヒソカは俺を見て

「うん、君も合格。良いハンターになりなよ。」

と合格判定を貰った。表には出さないさが、心の中ではホツとする。ピピピとヒソカのポツケから電子音が鳴る。

ヒソカは携帯のような物を出し、少し会話をした後

「お互い持つべきは仲間だね。」

と笑顔で言い放つ。

そして「一人で戻れるかい?」と聞いてきたので「ああ。」と返す。

「いい口だ。」と言い残し、ヒソカは霧の中に消えた。

「ふうーー。上手くいったか。」

と思わず地面に座った。

もしヒソカと戦う事になつたら『理不尽な支配』を発動して速攻ヒソカを殺すしか無かつた。

しかしそうすれば原作は大きく変わり、何か不測な事態が起きてしまいかねないのでやりたく無かつた。

そしてそれが果たせたので座り込んだ。

「ゴンッ!!」

とクラピカが駆け寄つて来た。もしもレオリオを助けに來たんだつたら遅すぎだよ。

俺が来なかつたらレオリオはとつぐに鳥のエサになつていただろう。

「大丈夫か?! ゴン!!」

俺が座り込んでいるからケガでもしたのかと心配しているらしい。まさかホツとして座り込んだだけだ。など言えないから普通に立ち上がつて「大丈夫だ。」と言つた。

「本当に大丈夫か？」

と未だにクラピカは心配しているが、それよりも大事な事があるの
で発信器の電波を受信する受信器を出した。

レーダー画面を見ると移動しているのでまだ走っていると分かった。
「さてと、一次試験会場に行くぞ。」

とクラピカに言つ。

「しかし試験官を完全に見失ったから場所が分からんが？」

「問題無い、発信器を仕込んだレオリオの荷物をキルアに持たせた
から位置は分かる。」

と言つてクラピカにもレーダー画面を見せた。

「なる程、これなら追跡可能だな。」

とクラピカは試験が続行出来るからか嬉しそうだ。

テメエのためにわざわざ発信器を仕掛けたんだからなあ。このお荷
物が。

レーダーに従つて一次試験会場に向かつ俺とクラピカ。

「ゴン。」

クラピカが真剣な顔をして言つて来た。何だ？

「ありがとう。君には感謝のしつぱなしだな。」

それに、こんな事を言うのは失礼だが、私は君は戻つて来ないだろ
うと思っていた。確かに私やレオリオを本試験会場に連れて来てく
れたりしたが、流石に今回は助けに来てはくれないだろうと諦めて
いたが、君は助けに来てくれ、更に私にまだ試験を受けるチャンス
をてくれた。

「ゴンには本当に感謝している。ありがとう。」

全部自分のためにやつた事だけど、勝手に感謝してくれるなら受け
取つておこう。

「まあ、まだ短い付き合いでしかないが、ここまで一緒にやつてき
る」

たからな。」

と肯定しとく。

ここで「別に、全部自分のためだからな。」とか本音を言つてもツンデレとしか受け取つて貰えない空氣だから敢えて乗つておく。そのせいいかクラピカも「そうか…。」と笑つている。とても和やかな雰囲氣だ。

なあに、嘘はバレなきや嘘では無い。
嘘を信じ込めばみんな幸せになれるぞ。

18 一次試験（前書き）

この小説はなんだかんだ言って原作準拠がメインです。
たまにズレますが。

「どうやら間に合つたようだな。」

とクラピカが安心したように言つ。テメエは開始時間が分からぬから制限時間を気にしないが、俺は制限時間に間に合つたかギリギリだつたからかなり焦つた。

もう少しでコイツを置いていつてゲートで跳ぼうか迷つたぐらいだ。

その後はレオリオの看病はクラピカに任せ、俺はキルアの元に行つた。何か変態からの視線を感じたけどガン無視だ。

「ようキルア。」

ガルル、グルルとウザい音が鳴り響くドアを見ていたキルアに話しかける。

「おお、ゴン！よく間に合つたな？」

「まあな、お前がちゃんとレオリオのカバンを持っていてくれたからな。」

カバンを受け取りながら言つ。

キルアは「？」という顔をしていたので、発信器を外して見せてやつた。そしたらキルアも納得したようだ

「なる程、発信器か。だからわざわざオレにカバンを持たせたのか。」

「まあな、じやなきやわざわざ戻つたりしないし。」

キルアは「やっぱりゴンだな…。」と苦笑された。

レオリオにカバンを渡した後、

「にしても、ウゼエな。」

とガオオオ！やガグゲゴーなど擬音が鳴り響く体育館みたいな施設

を見る。

「ああ、変なうなり声はするけど全然出てくれる気配は無いし。まあ、正午まで待つしかないんだろうな。」

時計が12時になり、ピーーー…ンと小さく鳴ると扉が開いた。施設の中には人間とは思えないデカイ男と随分ファンキーな格好をした女がいた。

てつくり中には何かとんでもない化け物でもいるのか?と思ついたら"テカイ音は腹の虫の音かよ。"と受験生達は呆然としている。

「どお？おなかは大分空いてきた？」

メンチとブハラが確認しあう。

「そんな訳で一次試験は料理よ！！

い。
「 美食ハンター のあたし達、一人を満足させる食事を用意してちょうだ

「料理！？」と受験生達は驚く。マトモな料理経験者なんてほとんどいないだろ？。

「先ずはオレの指定する料理を作つてもらご。」

つまりあたし達二人が“おいしい”と言えば晴れて一次試験合格！！

とかなり過酷な条件を突きつけて来やがった。美食ハンターが簡単

レオリオなんて「くそオ、料理なんて作つたことねーザ。」と悩む、

周りも似たような反応だが。

「オレのメニューは、豚の丸焼き！－

オレの大好物。」

いきなり料理か分からぬモノを出されて今までの緊張感が一気に無くなり、受験生が若干シラケ気味。

「森林公园に生息する豚なら種類は自由。

それじゃ…一次試験スタート！－！」

ブハラの号令の元、一気に受験生達が森の中に入っていく。

俺達も豚を探していると、突然目の前には鼻が不自然にデカイ巨大な豚が目の前に現れた。俺達を見つけた途端に雄叫びを鳴らしながら突進してくる豚。

『理不尽な拘束』で拘束しても良いけど、別に使う必要も無いのでジャンプして突進をかわし、額を殴る。

そしてその後は血抜きや内蔵処理をした後に油で焼こうかと思つていたら、レオリオやクラピカは何もせずに焼く準備を始めていた。え？ 何も処理しないの？ それって美味しいのか？ と疑問を感じたが、遅れると不味いので俺も何もせずに焼き、焼き上がったのをそのままブハラに献上した。

美味しいのか心配だったが、ブハラは俺のを食べて「美味しい。」と言つていたし、明らかにまだ生焼けの豚を食べても「これも最高。」と言うだけ。もしかして何かの能力で胃腸を強化、あるいは操作しているのか？

じゃなきゃあの量は食えない。ブハラの後ろに積み上げられていく骨は既にブハラよりも高く積み上げられている。

ゲップをした後、

「あ～～食つた食つた。モーお腹いっぱい。」
と言つた。

その瞬間「オオオーン……」という中華楽器の「カイ鐘」をメンチが鳴らし
「終————了オ————！」

と宣言する。

しかし受験生が気になつたのは明らかにブハラの体積以上に積み上げられた骨の山だ。クラピカは啞然としているし。

「あんたねー。結局食べた豚全部おいしかつたって言うの？
審査になんないじゃないねよ。」

とメンチが抗議する。

確かに明らかにほとんどの豚は処理されていなかつた。むしろちゃんと処理していく時間切れになり、悔しそうにしている後ろの奴らは悲惨だ。

見た目はこんがり焼けていてとても美味そうだ。むしろ俺が食いたい。

しかしブハラは

「まーーいいじゃん。それなりに人数は絞れたし、細かい味を審査するテストじゃないしさー。」

と返すだけ。

「甘いわねーアンタ。美食ハンターたる者、自分の味覚には正直に生きなきやダメよ。
ま、仕方ないわね、豚の丸焼き料理審査！！70名が通過！…」
とメンチが宣言した。

さあここからが面倒だ。

「あたしはブハラと違つてカラ党よ……審査もキビシクいくわよー。」

「お前の審査はハバネロよりも辛いんだよ。ブハラの審査はブドウ糖果糖の原液みたいにクソ甘かつた癖に、お前はハバネロつて落差ありすぎ。」

「一次試験後半、あたしのメニューはスシよ！…」
とメンチが宣言した後の受験生の顔は「？」一色だ。
何せこの世界では日本はほとんど名前すら知られていない小国だ。
知っている奴は日本出身者が、秘境好きの奴ら。
または俺みたいな日本からの転生者だ。

案の定周りがざわつき出してきた。

「ふふん。大分困っているわね。ま、知らないのもムリ無いわ。小さな島国の民族料理だからね。

ヒントをあげるわ！…中を見て「ごらんなかさー……」…」で料理を作るのよ！…」

メンチが施設内に案内してキッキンスタジオみたいな所を見せ付けた。

「最低限必要な道具と材料は揃えてあるし、スシに不可欠な「ゴハン」はこちらで用意してあげたわ。

そして最大のヒント！…スシはスシでもニギリズシしか認めないわよ！…

それじゃスタートよ！…あたしが満腹になつた時点で試験は終了！…その間に何コでも作つてきてもいいわよ！…」

そして試験は開始した。

しかしどんな料理か分からぬため、大半はまだ動けてすらない。

「ゴン作り方分かるか？」

とキルアが聞いて来た。

確かにスシが何かは知つてゐるが、作ったことは無いし、回転寿司みたいにただシャリを握つてネタを乗せるだけなら出来るが、ハンゾーはそれで失格だつたからまず合格は無理だつ。

「いや、検討もつかない。」
と言つとく。

「そりだよなあ。」

とキルアが困ったように寿司包丁を持つ。

ていうか素人にこんな本格的な包丁を渡されてもどう使えば良いか分からぬから無意味だろ? ヒントのつもりなのだろうが、逆に受験生達は混乱している。

しかしその均衡は突然崩れた。

「魚ア! ?お前ここには森ん中だぜ! ?」と「声がデカイ! ! !」といふ音が鳴り響いた瞬間、全員が食材は何か分かつたらしく、一斉にキッチンを出て森に向かう。

しかし俺はただ見ているだけ。

だつて無意味だもん。どんなモノを作ろうが合格しないんだつたら魚を取る意味無いからとりあえず自分の昼飯を作る事にした。残念ながらこのキッチンにはガスコンロが無いから焼く事は出来ない。まあ、炙り寿司を作る事は無いだろうしな。

「ちょっと、アンタは行かないの?」

俺以外は全員漁に出かけたのに、全く動かない俺が気になつたのだろう。

「だつて魚が正解とは限らないし、ただその場を混乱させるために言つたかも知れない。

だから俺は俺なりに作るよ。」「と適当に言つ。

ハンゾーが明らかに反応した事から魚が食材と確定しているが、それをあえて無視する。

その答えにメンチは「ふーん…そり。」と皿つだけ。別にそこまで気にはならなかつたんだろう。

その後、俺は皆とは違う方向の森に行き、円で周囲1kmを調べ、

監視がない事を確認してからメシが食えそうな開けた場所を見つけ。テーブルとイスをコピーする。

そしてテーブルにはチャーハンやラーメンをコピーしてランチタイムにする。

周りは森だが、ijiだけはちょっとした中華屋だ。気に入った店のメニューは全部コピーしているから食つに困る事は無い。難点なのは出すことは出来るが、消す事は出来ないので「ミミは基本ポイ捨てだ。

まあ、一応埋めて帰るから何時か自然に戻るだろ？

そして昼休憩は終わり、食器や食卓を粉々にした後埋めて会場に戻ると、皆スシ？作りに悪戦苦闘していた。

みんな魚と米を使った何かを一生懸命作っている。まあ、見たことさえ無い料理を作ればあんな感じになるか。

「どうだ！！これがスシだろ！！」

というハンゾーの自信満々な声が聞こえた。ああ、あのシーンか。しかしメンチは食べた後にやり直しを宣告した。その決定に不服なのかハンゾーは

「メシを一口サイズの長方形に握つてその上にワサビと魚の切り身を乗せるだけのお手軽料理だろーが！！」

こんなもん誰が作ったって味に大差ねーーべー！？」

とわざわざ細かい作り方を暴露しながら抗議した。

なんでそんな細かく言うんだよ。ただメンチの言うままに何度も作り直していれば一人だけ合格という奇跡を得られたかも知れないのに。

ちなみに俺はジャポンに行つた事があるので寿司は知つてゐるし見たことあるのでコピーで出せば合格出来ただろう。

しかしここで合格して一人だけで次の試験になつたら何が試験になるか分からぬからやらない。ただメンチとハンゾーのキレ合いを見ている。

その後はメンチの明らかに試験とは関係無い不合格判定を貰いすぐす」受験生達が下がっていく。

そして遂にメンチはアガリを飲み。

「悪い、お腹一杯になつちつた。」

と試験終了を告げた。

その後、メンチは審査委員会に合格者ゼロを告げるために電話した。「だからーー仕方ないでしょ、そくなつちやつたんだからさーーイヤよーー結果は結果ーーやり直さないわよーー」

などなど審査委員会との電話でわざわざ大声で叫ぶメンチ。ブハラが諫言するがメンチの意見は変わらず、逆にハンゾーがバラした事を糾弾する。

そして改めて

「二次試験後半の料理審査、合格者は〇ーーよ。」

と宣言した。

受験生達はまさか本当に終わりなのか?とザワつき出す。

ドゴオオオン!!!というデカイ音が鳴り響いた。見ればトーナーがキッチンを破壊していた。

「納得いかねエな。とてもハイですかと帰る気にはならねエな。オレが目指しているのはコックでもグルメでもねエーーハンターだ!!しかもブラックリストハンター志望だぜ!! 美食ハンター」ときに合否を決められたくねーな!!!」

ブラッククリストハンター志望にしては聞いた事が無いな。

昔は俺もブラッククリストハンターみたいなのをやっていたから、アマチュアブラッククリストハンターは情報を手に入れるために結構知つているけど、アイツの名前を聞いた事が無い。もしかしてまだアマチュアですら無いとか？

トードーの猛抗議にメンチは「それは残念だったわね。」で終わらせる。

勿論トードーはまた怒り「何イ！？」と睨む。

「今年のテストでは試験官運が無かつたってことよ。また来年がんばれば——？」

そのメンチの一言にトードーはブチ切れでメンチに殴りかかつたが、ブハラにすくい上げられるように平手打ちを食らい会場のガラスをぶち破つて外に吹っ飛ばされる。

ありやあ普通なら首の骨が折れて死んでるぜ。何せ頭から着地して受身を全く取っていない。

その後はメンチが美食ハンターのありがたい心得を一通り言った後に上から突然飛行船がやつて来てスピーカー越しに会話する。

どうやって聞いていたんだ？ 集音マイクか能力？ それともただの身体能力か？

ネテロが何故かわざわざ飛行船から飛び降りて来てメンチの審査規定のズレを指摘する。それにメンチも罪悪感はあったのか素直に認め、試験管と試験無効を要求する。

しかしネテロは新たな試験を命令。

そしてそのために現在飛行船に乗っている。しかしこの世界の飛行船は船内が広いな。

でも何故か受験生の部屋は用意されていなく、仕方なく全員廊下で座るか立っている。

そしてようやく田的に到達した。

降りた先にはグランジキャニオンよりも深い裂け目があった。

「安心して、下は深い河よ。流れが早いから落ちたら数十km先の海までノンストップだけビ。」

それのどこが安心なんだ？普通何十kmも河を下つたら死ぬぞ？

「それじゃお先に。」

そう残してメンチは裂け田に飛び込んだ。まるでプールの飛び込みみたいにあっさりと。

受験生達が騒ぐ、まあ見た田はただの投身自殺にしか見えないからな。

「マフタツ山に生息するクモワシ。その卵を取りにいったのじやよ。」

「そうネテロが安心させるために言つ。全然安心しないけど。何せ次は自分達がやるんだからな。」

ネテロは尙もクモワシの生態について講釈してくれているけど、受験生のほとんどは聞いていない。今はそんなことはどうでも良い。大切な事は

「よつと。この卵でゆで卵を作るのよ。」

とクモワシの卵を持ちながら笑顔で言つメンチを半数の受験生達には悪魔の笑みに見えただろう。現にトーデーはドン引きだ。

しかしそつは思わない連中もいる。

「あーー良かった。こういう簡単なのを待っていたんだよね。キルアが笑顔で言つ。これ簡単か？」

「走るのやつ民族料理よりよっぽど早くてわかりやすいぜ。」

レオリオが自信満々に言い放つ。確かにわかりやすいがこの場合、失敗すれば待つのは確實に死だ。

「よつしや行くぜーー！」

レオリオの言葉が契機になり、次々受験生達が飛び込んで行く。しかしもう半数は飛び込まない。

出来るなら俺もしたくないが、しなきゃ不合格になるので仕方なく飛び込んだ。

あの何とも言えない気持ち良いのか悪いのか不安な浮遊感。経験者なら分かるだろう。

それを感じながら落下し、何か太い糸が見えてきたのでそれを掴み、落下を防ぐ。そして卵を奪い後は岸壁をよじ登るだけだ。

しかしロッククライミングの経験は無いので凝で強化した指を岩に指しながら慎重に登る。

その様子を見ていたレオリオから「スゲエなお前。」と驚かれたが、樂々と岩肌を登るお前の方がスゲエよ。お前医者志望の癖にロッククライミングの経験もあるのか？

岸壁を登りきり、用意してあつたデカイ鍋?の中に卵を入れる。そして出来上がったので試食会だ。

「こつちが市販の卵でこつちがクモワシの卵。まあ、比べてみて。」とメンチから市販の卵を受け取り、最早どれが自分の卵か分からないので適当にすくい、殻を剥いて食べた。

「う…美味いっつーー」や「濃厚でいて舌の上でとろける様な深い味は市販の卵とは遙かに段違いだーー」などクモワシ絶賛「ホールが鳴り響く。

でもここまで苦労してまでこの卵を食べたいか?と俺は思うのだが。それよりは何時でも安全に手に入つて安い市販の方が良いんだけど。

まあ、俺は「ペー出来るから」のクモワシの卵も無限に出せるナビ
ね。

こつして一次試験は終了した。
合格者42名という異常さで。
ていうか42人も飛び降りたのか。マジで人間とは思えない化け物
集団だな。

二次試験が終わり、俺達は協会の飛行船に乗り、三次試験会場へと向かう。

しかし一次試験や一次試験で生き残っている奴らは何で回収されるんだろう？ダイブ出来ずにリタイヤした奴らはただあの山に置いていかれだし…。

別の飛行船が来るのかな？来年の試験にはいたし。

飛行船が飛び、空が完全に暗くなつた頃、ネテロ会長から始業式の校長先生の話みたいなありがたいお話があるらしい。

「残つた42名の諸君にあらためて挨拶しどうかの。」

ワシが今回のハンター試験審査委員会代表責任者のネテロである。本来ならば最終試験で登場する予定であつたが、いつたんこうして現場に来てみると。」

ネテロが周りを見る。

名も知らぬモブ達が変な空氣を出す。無意味な事を…。

「何とも言えぬ緊張感が伝わってきていいもんじや、せつかくだからこのまま同行させてもらう事にする。」

ネテロが笑顔で言う。この爺さんがある意味一番異常で一番常識的だからな。

「次の目的地へは明日の朝8時到着予定です。これから連絡するまで各自自由に時間をお使いください。」

マーメン？だつたかが言う。それにしては受験生には個室、あるいは相部屋などは用意されていないのかよ。こんなにデカイ飛行船の癖に。

「ゴン！！飛行船の中、探検しようぜーー！」

キルアが年相応なセリフを言つ。『うこう所が微妙にガキなんだよな』コイツ。

「ああ、良いぜ。」

と返す。別に探検などはしたくないが、どこか使える個室やシャワーを探す。無かつたらゲートに入つて『現実シェルター』内でやるけど。

「うわ、すげーー！」

とキルアは飛行船から見える夜景を見ながら言つ。本当、お前つて時々年相応の反応するよな。

ちなみに俺はただ黙つて見ているだけ、別に夜景なんて基本飛行船で移動しているから見飽きた。

しかし俺の反応が気にくわなかつたのかキルアが俺を見て「ゴンって本当に俺と同い年とは思えないよな。」

と言われる。まあ、心は最早植物の域に近いからな。

「別にただ夜景は何度も見てているから今更そんなに反応しないだけだ。」

当たり障りの無い返事をしかえす。

話す事も無いし、一応原作っぽい話でもするか。

「なあキルア。」

「うん？何？」

「キルアの家つてゾルディック家？」

俺の質問に驚いたのか若干目を見開くキルア。

「知つてたのか？」

「まあ、前にあつた時に少し気になつたから調べてみたのさ。まだ10歳にもなつていらないガキを天空闘技場に放り込んだのはどういふ家庭なねかな?と思つてな。」

キルアは「あー成る程。」

と言つ。

「まあその通り、俺はゾルディック家のの人間さ。

何かオレって兄弟の中でもスゲー期待されてるらしくてやー。でもオレやなんだよね、人にレールしかれる人生つてやつ?」

別に良いけどな。楽で。

それがあんまりにも気に入らなかつたら仕方ないけどさ。ていうか素質を認めているんなら念を教えとけよ。

身体能力は凄まじいけどさ、念能力者が相手の場合ではどんでもない実力差が無いと殺されるのがオチだぜ?

「「自分の将来は自分で決める」つて言つたら親兄弟キレまくりですかーー。」

母親なんてオレがいかに人殺しとしての素質があるかとか涙ながらに力説するんだぜ?」

だろうな。お前の母親にはまだ会つた事は無いが、マンガやアニメを見ている限りとんでもないヒステリーを起こしそうだ。

「結局ケンカになつて母親と兄貴の脇腹刺して家あん出てやつた!今頃きつと血眼さーー!」

笑顔で語るキルア。でもお前も「兄貴に見つかつているけどね。

「ハンターの資格取つたらまずうちの家族取つ捕まえるんだ。きっと良い値で売れると思うんだよねー。」

何か悦に入りながら語るキルア。確かに良い値で売れるだろうが、

それはつまりお前の親父と爺ちゃん、兄貴などを相手にするという

事だけだ。

「まず無理だうつな。ネテロでも厳しいかも知れない。

オマケに

「その時は「ンも手伝ってくれよ。」

と親殺しの片棒を担がせようとしたやがる。確かに勝てる可能性は無くは無いが、一発で決める必要があるし、最悪クルーマウンテンを水爆で蒸発させるとかしか無い。

そんな風な会話をしているとネテロが来た。

あの爺気配がまるで無いけど、無理矢理強化した気配察知のおかげで何処にいるか分かる。

カツッ！…と突然気配をぶつけられたからキルアはその方向を見て、俺は反対の方を見る。

「何だい爺さん。」

案の定既に移動し終えたネテロがただ歩いて来た。

「ほつほつほ。中々やるのう。」

と俺を見ながら言つ。普通に纏をしているから念能力者と分かつている筈だ。

仲間外れにされたからかちよつと睨むつけながら「素早いね。年の割には。」

とこうキルア。

「今のが？ちよこつと歩いただけじゃよ。」

と何故かネテロもそれに乗る。ガキをからかうなよ。
おかげキルアが若干キレ気味だ。

「何か用？じいさん最終試験まで別にやること無いんだろ？」
「そう邪魔にしなさんな。退屈なんで遊び相手を探してたんじや。」

どうかなお一人さん。ハンター試験の感想は?」

「まあ、強いて言つならちよつと面倒だな。」

お荷物のせいだ。

「オレは拍子抜けしたね。もつと手応えのある難関かと思つていたらから。

次の課題はもつと楽しませてくれるんだひ?」

キルアの質問に

「さあ、どうかのーー?」

と適当に答えるネテロ。自分で振つといてそれかよ。

「行こーぜ。」

とキルアが何故か俺の肩を組み、去ろうとする。俺達そんなに仲良かつたか?

「まあ、待ちんさい。」

と某ゴム人間みたいに腕を伸ばして引き留めるネテロ。マジでお前人間か?

「おぬしらワシとゲームをせんかね?」

キルアは「はあ?」といつ感じで止まる。

「もしそのゲームでワシに勝てたらハンター資格をやろひ。」

自信満々に言い放つネテロ。確かに前からボールを奪えばハンタ一試験は受けずに済むが、本当にくれる保証も無いのでヤル気は無い。

い。

広い場所に連れて行かれ、上着を脱いで何か若者みたいなファッショニになつたネテロはどこから出したのかボールを持つている。「この船が次の目的地に着くまでの間にこの球を奪えば勝ちじや。そつちはどんな攻撃も自由!ワシの方は手を出さん。」

随分俺等に優位なゲームに思えるが、まだまだハンデが足りない。

出来るなら更に両手両足を縛り、念の使用不可にして欲しい。それ

なら確実に取れそうだし。

しかしキルアはナメられていると受け取ったのか

「ただ取るだけで良いんだね？じゃオレから行くよ。」

と無表情で言づ。

「御自由に。」

とネテロはまた煽る。そのせいできルアの目は鋭さを増す。

キルアが動き出し、肢曲を使いネテロを攪乱しに行つた。

しかしあえなくネテロに避けられ、その後の攻防も全て避けられる。それにムカついたのかキルアはネテロの右足を破壊しにいったが、ネテロは凝で防御してるので全くノーダメージ。あれ反則だろ。

「いつてえ~~~~~！」

とキルアは足を押さえながらピヨンピヨン跳ねる。そりゃあ凝でガードした足を纏を覆わずに思いつきり蹴つたんだ。むしろよく骨折しなかつたなと関心すらする。

「鉄みたいだぜあのジーサンの足！」

とキルアが戻ってきた。キルアはタッチするように手を上げたが

「いや、俺はやらない。」

と断る。

その答えが不満なのか

「え~~~~、何でだよ？確かにあのじいさん普通じゃないけど、ゴンならボールを取れるかも知れないじゃん？」

とキルアは俺の参戦を勧める。

「いや、俺はただ見てる事にするよ。キルアはまた頑張つて来いよ。」

と追い返す。

キルアは「ちえ。」とふて腐れたようにまたネテロの方に行く。

どうやら俺を戦力として期待していたらしい。確かに『理不尽な拘束』でもただの物体であるボールなら容易く操作出来るが、簡単にやらせてくれるとは思えないし。まあ、一発勝負にかければもしかすると勝てるかも。

でも勝つても

「ワシそんなこといつたかのう？」

とか言われたら証人がいないこの状況ではこちらの意見は通用しない。

何せあつちはハンター協会会長でこつちはただの受験生。信用度が桁違いだ。

二時間程経った頃、キルアはまだ頑張っていた。

汗だくになり、必死にボールに追いすがるがことじとくかわされ無意味だ。段々飽きてきたから部屋でも探すかな?と思つていたら

「やーめた。ギブ!!

オレの負け。」

とキルアが諦めた。原作では午前2時ぐらいまで粘つっていたが、まだ午後11時ぐらいだ。

やはり一人でずっとやっていたから直ぐに諦めがついたか。

「行こーぜゴン。」

と俺に近付いてきた。汗だくだからあんまり近寄つて欲しく無い。

「お前はシャワーでも浴びてもう寝た方が良いだろ?。明日は試験があるからな。」

シャワーがあるか分からないがな。

「えー、まだ早くない?」

キルアは文句を言うが俺は扉を指差して早く行け。と合図する。

それに観念したのかキルアは大人しく出ていった。目がスゲエ怖か

つたけど。

ありやあ下手に話しかけると殺されかねない。何て迷惑な存在だ。

キルアが去り、俺も行こうとした

「お主はやつていかんのか？」

とボールをドリブルするネテロに止められた。

「勝てない戦いは避ける主義なんで。まあ勝てる自信がついたらお願ひしますわ。出来れば俺は念有りで、アナタは念無しで。」

「そりゃハンデつけすぎじゃ。」

とネテロに笑われながら立ち去ろうとしてふと止まる。

「そういえば部屋は空いていないんですか？出来れば廊下で雑魚寝は勘弁して欲しいので。」

一応聞いとく。

「ふーむ、確かに部屋はいくつあるが、お主だけを特別扱いはできんしのう。」

確かにその通りだな。俺だけが部屋を『えられるのはアンフニア。

しかし、もしワシからボールを取れたら固室をあてがつてやらんでもない。」

ネテロは面白そうに提案していく。

「それつてさつきと同じ条件ですか？」

「うむ、ワシから攻撃せんし、そつちはどんな攻撃も自由。

その代わりに今度は両手足を使うのがう。」

やっぱり両手足は使うのか。まあ、流石に左手と右足だけで念能力者とやりあうのは難しいからな。

「それって勿論そちらは念による攻撃も無じでしょうね？」

「勿論念での攻撃もしない、身体強化はするが、攻撃には使用しな

い。」

ふーん、なら良いか。ダミー用の能力は知られても支障無いし。

「じゃあやろうか。」

そう返事をした瞬間、流による高速オーラ移動を用いて瞬間移動の
よみに速く動いてボールを取りに行く。

「おうっと、あぶないあぶない。」

別に危なげもなく避けやがった。明らかにさつきの数十倍早い。

「あら、簡単に避けられちゃいましたね。結構自信あつたんスけど。

」

本当はただの様子見だが。

「その年にしては中々の流じゃな。誰に師事したんじや？」

余裕綽々で聞くネテロ。それでもスキは一切無いのがムカつく。

「残念ながら全て我流です。良い師匠と巡り会えなかつたモノで。心源流の道場にいつたとしても中々念を教えてくれないだろ？から自分でやるしか無いのだ。

「ふむ、成る…」

その言葉を言い終える前にまた突っ込む。今回は多少フェイントを織り混ぜて複雑に取りに行く。

しかしネテロは巧みにボールを操作して取らせてはくれない。

しかし今はボールが用當てでは無い。

ボールを追う振りをして手を伸ばし、ネテロがボールを遠ざけた瞬間にネテロの腕を掴み『理不尽な拘束』を発動させてネテロを強制的に絶の状態にする。

ネテロは驚いたのかほんの一瞬だが動きが鈍る。そのスキを見て更に「動くな」と命令する。

それでネテロの動きが完全に止まつたのでネテロの腕を掴みながら宙に浮いていたボールを取つた。

ネテロの腕を離して『理不尽な拘束』を解除する。

そしてネテロの絶は解け、動けるようになつた。

「俺の勝ちですね。」

ボールをドリブルしながら言つ。

「つむ、確かにお主の勝ちじゃ。

にしても操作系能力者じゃつたとはな。」

悔しそうに言うネテロ。不意をついた偶然性の高い勝利だったからな。

「おそらくお主の能力は対象に触れる事で強制的に絶にして命令を下す能力じゃな。」

本当は別に口答で言う必要も無いんだけどな。触つてこる間なら念じるだけで操作出来る。

「さあ、どうでしょうね。

では個室の手配をお願いしますね。」

と笑顔でネテロに言つ。

ネテロも「仕方ない、ワシも年じやのつ。」などブツブツ言つていたが、電話で部屋の手配をちやんとしていた。

その後、試験官用の豪華な個室に入り、やつきを思い出す。やはり実力差がある場合はこの能力は難しいな。

一発で決められれば良いが、決め損ねたら諸刃の剣になる。

まあ、この能力は『理不尽な支配』を誤魔化すために作った能力だしな。

『理不尽な拘束』だけが俺の能力と勘違いすれば簡単にかかるだろうし、最悪誰かの能力をコピーすれば良い。

出来るならネテロの百式観音をコピーしたいが、それにはキメラアントルートに行くしか無いが、そろそろリスクが高過ぎてリターンに合わない。

まあ、別にそこまで欲しい訳では無いしな。

もしネテ口とマジで戦う事になつても「ペーで堅を作りまくれば百式觀音も防護は可能の筈だ。

メルエムに防げたんだ、俺に防げない訳は無い。

20 ちょっと原作修正

当初の予定通り翌朝午前8時に第三次試験会場に到着した。飛行船から降りてみれば何も無い円形の建物の屋上が広がっている。「（）」はトリックタワーと呼ばれる塔のてっぺんです。ここが第三次試験のスタート地点になります。

さて、試験内容ですが、試験官からの伝言です。「生きて下まで降りていくこと、制限時間は72時間」以上です。」

それだけ言ってマーメンは飛行船に戻り、飛行船はそのまま離陸した。

『それではスタート！！

頑張つて下さいね。』

その拡声器の音を残して飛行船は飛び去った。説明少な。

受験生達はどうやって下まで行くのか考えている。

階段もなにも無いから塔の内部には入れないし、梯子も何も無いから塔の側面をたどつて降りる事も出来ない。

「側面は窓一つ無いただの壁か。」

「（）から降りるのは自殺行為だな。」など悩んでいると。

「普通の人間ならな。」

とイカツいガテン系の男が自信満々に笑う。そして何を思ったか塔の端に来て足を塔の側面の僅かな隙間に差し込み、それをとつかかりにして降り始めた。

「このくらいのとつかかりがあれば一流のロッククライマーなら難なくクリア出来るぜ。」

その言葉通りにスイスイ降りて行く。

「うわすげ～。」

キルアが驚いたように言つ。

確かに一流なんだな。こんな小さい溝に体重を預けられるなんて普通は不可能だ。もしこれが普通の試験だつたならアイツが一番で合格出来ただろ？

しかし、

「ん？ 何か来る？」

キルアが見ている方を見るとゲ、ゲ、という音を鳴らしながら何かが来る。

そしてそれがロッククライマーに近付き「うわああああああああああ！」という断末魔が聞こえた。

ロッククライマーに近付いたのは全長3メートル近くはあるうかという怪鳥だ。オマケにデカイ顔を持ち、その顔は若干人間みたい。という何とも気持ち悪い生き物だった。

ロッククライマーは塔から引き外され、四肢を引きちぎられながら食われていった。

「外壁を伝うのは無理みてーだな。」

キルアは先程のショッキングな映像を見ても動搖することなく言つ。

「ああ、確かにあの化け物がいる限り無理だろ？」

そして隠し扉を探し始めた。

まあ、最悪あの怪鳥を操作すれば一気に下まで行けなくはないが、それでは能力を全員に見せ付けるという愚行を起さなくてはならないのでパスだが。

円で周囲を調べていると確かに幾つか隠し扉がある事が分かる。しかし俺が探しているのは原作の多数決の道だ。少なくとも俺が合格するまでは原作をなるべく守る必要がある。

だから一人で進むやり易そうな道を無視して5つ集まつた扉を探す。

「あ

キルアが何か見つけたのか見てみると、受験生が隠し扉に入つていて所だった。

「へー、こういう仕掛けになつてているのか。」

キルアがさつき開いた隠し扉に近付き、触つて確かめるが、扉は微動だにしない。

「どうやら使えるのは一回きりらしいな。」

俺の言葉に「ちえ。」と悔しそうに言うキルア。まあ、その気になればロックを壊して入れなくも無いだろうけどね。

またしばらく探すと、原作通りの密集した隠し扉を発見した。

「どうする? ゴン。」

キルアが指示をあおいでくる。何が完全に俺がリーダーだな。まあ、楽で良いけど。

「扉は5つあるし、とりあえずレオリオとクラピカも呼ぶか。もしかしたら下は同じルートになつてているのかも知れないし。まあ、確実にそうなのだが。」

「大丈夫なのか? あの二人で。」

キルアは若干不安そう。まあ、コイツから見れば一人は弱い存在だからな。

「知らない奴らよりはやり易いだろう。」

その意見に「まあ、それもそうか。」とキルアも賛成した。さあてお荷物達を呼ぼう。

まだ隠し扉を見つけられていない一人に声をかける。

「レオリオ、クラピカ隠し扉を見つけたぞ。」

ちなみにキルアは周囲の警戒をしている。聞かれないために。

「5つの隠し扉を見つけたんだが、恐らく罠か、もしくは同じル

トをたどって下に行くのだろうから一緒に行こうぜ。」
と誘う。

「なる程、確かに5つも密集しているのは不自然だ。その場合は罷
か同じルートの可能性が高いな。」

クラピカが賛成する。

「確かに一緒に行った方がやり易いな。短いとは言えそれなりの付
き合いでしな。」

レオリオが俺とクラピカを見て言う。

「しかし、そうなると一つ扉が余るな。もしも5人で行くルートな
ら全員揃わないと進めない可能性がある。」

クラピカがナイスな推理をする。お前マジで頭は良いよな。

「最後の一人は俺が連れてくる。だからお前達は扉の前で待つてい
てくれ。」

そういうて二人から離れた。二人は「誰だ?」と疑問を持つている
が、言われたので仕方なくキルアの誘導に従つて扉まで行く。

俺はもう一人に話しかけた。

「やあトンパさん」

「う、お前か…。」

やはり最初の出会いのせいか警戒されているな。

「そんな警戒しないでよ。実は隠し扉を見つけてさ、一個余っつい
るんだわ。一緒に行かない?」

笑顔で誘う。

「…何で俺を誘ったんだ?」

トンパが警戒を解かず聞いてきた。

「別に、ただトンパさん以外とは話した事が無いから。

それに、大体アンタの狙いは分かるし。」

笑顔を解いて無表情で言う。

トンパひ少しビビりながら「へ、へえ、俺の狙いねえ。」と流す。

「アンタ意外と有名人なんだぜ？新人漬しのトンパさんよお。」

その言葉にトンパも演技を止めて素に戻る。

「へ、やっぱり知つてやがったのか。

それで？何でそれを知つてながら俺を誘うんだ？知つての通り俺は新人を漬すのを生き甲斐にしてるんだぜ？」

トンパが最もな事を言つ。

「さつきも言つたけど、知つている人間はアンタぐらいしかいないし。それに、新人漬しに捧げたと言つてもそのキャリアはバカには出来ない。こんなもんかな？」

「コイツのキャリアなど宛にはしていいが、一応頭良いし、原作を守るためにコイツを誘つしかない。

「ふーん。じゃあもし俺がお前らの邪魔をしたとしたらビビつするんだ？」

トンパは嘲笑いながら言つ。何かコイツ調子乗つて無い？

「そんときやあ、まあ、何故か事故が起きたかもな。もしルールで殺してはいけない。というルールがあつた時は、何故かアンタの右腕か左腕のどつちかが無くなつたりするかもね。」

目は笑わず、口元だけを笑わせる笑い方をしながらトンパに宣告する。トンパはビビつて後ずさる。

「じゃあ、行こうか？」

聞いているのではなく、命令する。

トンパもそれは十分に分かつたのか黙つて付いてくる。

「よお、遅かつたな？」キルアが聞いてくる。

「ああ、ちょっと話し合つていてな。」

トンパを見て言う。トンパはビクツー！としたが。

「おいおい、最後の一人つてコイツかよ？コイツで大丈夫なのか？」

レオリオは胡散臭そうな目でトンパを見る。

「大丈夫、大丈夫。それにトンパはただの人数合わせのためだからな。」

その言葉にレオリオも「まあ、そうだな。」と、とりあえず納得する。目は警戒したままだが。

「それじゃ、行こうか。先ずはトンパさん行ってよ。」笑顔で宣告する。

「え、何で俺が一番？」

「だつて、皆一緒に行つたらもしかして来てくれないかも知れないじゃん？だから先に行つてよ。」

笑顔で命令する。

それが効いたのかトンパは黙つて自分に一番近い扉に入つていった。

「よし、じゃあ俺等も行くか。」

キルアの合図で各々のタイミングで扉に入つていき、最後に俺が扉に入った。

中には全員揃つていた。何故かレオリオだけは着地に失敗していたようだつたが。

「やはり同じルートなのだな。」

クラピカが壁にあるメッセージを読んでいる。その手前には腕時計が5つ置いてある。

『ようこそ多數決の道へ。ここは全てを多數決で決める難コースだ。互いの協力が絶対必要条件となり、たつた一人のわがままは決して通らない。』

それでは諸君らの健闘を祈る。』

その放送が終わつた後に全員が腕時計をつける。

そしたら扉が開いた。

「成る程、5人揃つてタイマーをはめるとドアがあく仕組みか。」

クラピカが分かりきつたことをわざわざ言つてくれた。

そして最初の設問が現れた。

このドアを開けるか否か。

開けないに多数決がいつたらその時点で終わりなのか？

「もうここから多数決か。こんなもん答えは決まってんのにな。」レオリオは当たり前のようと言つ。原作ではトンパがワザと×を押すのだが、さつきの脅しが効いたのか、全会一致で だつた。

その後の設問の右に進むか、左に進むかは4対1で右になった。レオリオは不服そうだったが、クラピカの行動学の抗議と自分一人だけという事で折れた。

右に曲がり進んで行くと周囲の壁と繋がつていらない独立した四角いリングのようなものが見えた。ああ第2閂門か。

対岸にはフードのような布をすっぽり被つた人間が立つていた。

「テスト生が来たぜ。手錠を外してくれ。」

『了解。』という会話の後にそいつの手錠が外れて「やれやれ、ようやく解放されたぜ。」とフードを脱いだそこには傷だらけのスキンヘッドの白人がいた。

「我々は審査委員会に雇われた「試練官」である……」お前達は我々5人と戦わなければならぬ！

勝負は一対一で行い、各自一度だけしか戦えない！！順番は自由に決めて結構！！お前達は多数決。すなわち3勝以上すればここを通過する事が出来る。ルールは極めて単純明快、戦い方は自由！！引き分けはなし！！片方が負けを認めた場合において残された片方を

勝利者とする！！

それではこの勝負を受けるか否か！！採決されよ！！
受けるなら、受けぬなら×を押されよ！！」

「何イ～～～、また採決かよ！？」

いちいち時間のムダだぜ。どうせ合格するためにはこの勝負受けなきやならねーんだ。全員を押すに決まつてんだろ？

誰かが足並み乱さなきゃだがな。

レオリオはトンパを見る。この三次試験ではトンパはまだ何もしていないが、やはり信用度は無いらしい。

「ヘイヘイ、わかつてますよ。」

と言つてトンパは押す。

そして採決結果が電光掲示板に出た。結果は満場一致。

「どうだ満場一致だぜ！！」レオリオはわざわざ言つ。別に4対1でも良いんだけどな。

「よからい！」

「こちらの一一番手はオレだ！！さあ、そちらも選ばれよ～～！」

スキンヘッドが叫ぶ。そして同時にトンパが前に出て

「オレが行こう！戦い方が自由つてことは裏を返せば何でもアリ！何を仕掛けてくるかわからんつてことだ。オレが毒味役として相手の出方をうかがおう。

それにお前さん達は今一つオレを信用しきれていないだろ？そんなオレに2勝2敗の場面で登場するような大将役なんざ任せられるかな？決まりだな？」

空氣的には決まつたが、俺はそれを許さない。

「待て、やつぱりお前はダメだ。キルア頼むわ。」

キルアに戦ってくれと頼む。

「俺？…まあ、別に良いけど。」

いきなりの指名に戸惑うが承諾するキルア。

「いや！何で俺じゃねえんだよ？…さつき言った通り、オレが毒味役になるから！」

自分の計画が狂わされたためか焦り出す。

「ざけんな。どうせお前直ぐにギブアップする気だろ？ テメエが毒味役なんて殊勝な事をするわけねえだろ？ 新人漬しのトンパさんよお。」

俺の言葉にレオリオが反応する。

「何？ 新人漬しだと！？」

「そうだよ。コイツが30年以上も試験を受けていて未だに合格しないのはハナから合格する気なんて無えからだよ。

「コイツ結構有名人なんだぜ？ ハンター試験においてはな。」

その言葉にトンパは「あーあ、バラされちゃった。」と言つ。

「テメエ、マジで新人漬しなのかよ！？」

レオリオはトンパの胸ぐらを掴みながら聞く。

「そうさ、そこガキが言うように、俺はハナからハンターになんかなる氣は無いのさ。オレがハンター試験に求めているのはほどよい刺激。

オレにしてみればここら辺が潮時なんだ。第三次試験からは人数が少なくなる反面、危険は大きくなる。

もうムリはしねエ…。つまり、オレはもういつでも負けたって構わないんだよ。」

トンパは自分の生き方を言い放つ。まあ、確かに悪くは無いな。自分の安全を確保しながら他人の夢や野心が破れる瞬間の顔は何とも言えないからな。

「つーことでキルア頼むわ。なるべく早くくな。時間が勿体無いし。」

「おう、分かった。なるべく早く終わらせるよ。」

キルアは笑顔で言つ。

「戦う者のみ渡られよ！！」

スキンヘッドの言葉と同時にリングまでの細い通路が出てきた。下は何も見えない程高いがキルアは平然と渡る。

「おいゴン、キルアで大丈夫なのか？何か相手はスゲエ強そうなんだけど。」

レオリオは不安そうに聞いてくる。まあ、見た目はただのガキだからな。

「大丈夫、多分あのオッサンは元軍人か何かでそこそこ強いだろうね。」

俺の言葉に更に不安になったのか「じゃあ尚更ヤバくねエか！？」と言つてきた。

「まあ、黙つて見ようよ。」

その俺の言葉にレオリオもただ見ることしか出来ないので黙つた。

「さて、勝負の方法を決めようか。オレはデスマッチを提案する……一方が負けを認めるかまたは死ぬまで戦う！……」

もの凄い緊張感が漂うがキルアは至つて平然として

「うん、それで良いよ。」

と気軽に言つ。

「その覚悟見事！それでは、勝負！！」

とスキンヘッドが突つ込んで行つたが、勝負は決まった。

スキンヘッドは突つ込もうとした体制のまま止まつた。いつの間にかキルアはスキンヘッドの後ろにいて、その手にはまだ動いている心臓を持つていた。

ジワ、とスキンヘッドの心臓があつた場所から血がニジンでくる。

「か……返……。」

スキンヘッドが手を伸ばして返せと言いかけるとキルアはニヤツッと笑い握り潰した。

それを見たスキンヘッドは倒れ、多少ピクピク動いた後に動かなく

なつた。

「さて、これでオレの勝ちだよね？」

キルアが試練官達に聞くと「ええ、アナタの勝ちよ。」と返して来た。

それを聞いたキルアは「あつそ。」とだけ言って通路から戻てくる。

「あいつ…。一体何者なんだ？」

レオリオは緊張気味に言う。クラピカも同様のようだ。

「キルアは暗殺一家のヒートなんだよ。何かかなりの才能があるらしいよ。」

俺が軽く解説したら「マジかよ！？」とレオリオはビックリする。

まあ、普通殺し屋なんか会わないしな。

その間にキルアが戻つて來た。

「キルア、ナイスタイム。」

と試合の短さを褒めながら手を出す。

「へへーん。だろ？」「

と嬉しそうに言いながら俺にハイタッチするキルアは年相応にしか見えない。

その様子にレオリオやクラピカは戸惑つ、あまりにも落差が激しうるからな。さつき迄は冷酷な殺し屋、今では友達どじゅれあう子供にしか見えない。

21 かなり早く終わったな

スキンヘッドの死体を片付け、第2試合が行われる。

次の相手は見た目はヒョロヒョロとしたガリ勉かオタク系の男だ。
「さて、次は誰が行く？」

キルアが全員を見る。お前の後だからか皆若干行きづらそう。

「次はレオリオが行つてきてくれ。」

俺のお願いに

「オレか！？」

と反応する。まあ、殺し合いを見た後はヤダよな。

「ああ、アイツはどう見ても肉体派じゃねーから大丈夫だ。
それともレオリオは肉体派との試合の方が良いか？」

と聞くと

「い、いや、俺も肉体派じゃねーからアイツとやるよ！」
と慌ててレオリオはリングに向かつた。レオリオは常人よりは強い
がその程度しかない。

この世界は常人よりも強い奴なんてザラにいるからな。

連續爆弾魔のセドカンと対峙するレオリオ。

「さて、ごらんのようにぼくは体力にあまり自信がない。単純な殴
り合いやとんだり走つたりは苦手なんだけどな。」

セドカンはレオリオに話しかける。

「安心しろ。俺も得意じやねー。だからと言つて考えるのもあんま
り得意じやねーが。」

レオリオは言つ。確かにお前単純だもんな。

「やつぱり？」

そんな一人のために簡単なゲームを考えてみたよ。
と言つてセドカンは一本のロウソクを取り出した。

「同時にロウソクに火をともし、先に火が消えた方が負け。どつ？」

セドカンがレオリオに聞く。そんなに単純か？普通のロウソクでやりあつても決着に軽く数時間はかかる長期勝負だぜ？ていうかもしも「嫌だ。」とか言われたら回避出来るのか？

しかしレオリオは

「成る程、確かに単純だな。分かつた、その勝負受け入れよう。」

了承した。やっぱアイツ単純。

「OK、それじゃ」

と言つてセドカンは今まで丈を誤魔化すように持つていた持ち方を変えてロウソクの長さが分かるように持つた。現れたロウソクは長いのと短いロウソクで、短い方は長いロウソクの半分程度しか無い。

それを見てレオリオは啞然とした。

「どつちのロウソクが良いか決めてくれ。長いロウソクなら を、短い方なら ×を押すこと。多数決で決めてもらおう。」

セドカンはそう言つて少し笑つた。

「不自由な2択か…」

俺の言葉にクラピカも「そうだな…。」と返す。

クラピカはどちらに罠が仕掛けられているのか迷つていいようだが、大体ああいうのを持ちかける奴は自分の勝利を確信している。

だから少し冷静に考えればタネは分かる。

「ゆっくり決めもらつて良いよ。多数決とはいってもここでは相談も自由だし。

ボク達の方はたっぷり時間があるからね。」

セドカンはロウソクを目の前に置いて余裕綽々と座り込む。まあ、お前達は俺らを一時間足止めさせるだけで刑期が一年ずつ短くなる

からな。

でもお前の刑期は149年の筈だから72時間分の72年刑期が短くなつてもお前が出られるのは50年以上先だぜ？意味あんのか？

「相談は自由と言つたが、お前に對して質問も良いのか？」

俺の質問に

「別に構わないけど。」

セドカンは肯定する。これでやり易くなつた。

「じゃあ聞くけどさ、この勝負はその一本のロウソクを使つんだよなあ？」

「ああ、そうだけど？」

セドカンが不思議そうに言つ。何を当たり前な。という顔だな。

「どうことはこの勝負はお互い2択という事だよな？勿論お前も。

」
この一言にセドカンは氣付いたようだ。明らかに慌て出した。

「大体こうじう勝負の場合では田の前のロウソクは一本共罷で、対戦相手には油を染み込ませたロウソクを渡し、自分は隠してある普通のロウソクを使う。

それならまず負ける事は無い。だからまさかお前はそんな事をしないよなあ？と聞きたかったんだが、そうでは無いのなら良かつたよ。

「俺の言葉にセドカンはかなり動搖している。何せタネを全て言われたんだから。

更に

「そりそり無いとは思うけど念のためにロウソクから離れていくれ。公平制を保つために。

まさかダメなんて言わないよなあ？」

俺の追求にロウソクを見ながら何か考えていたが、何も思い付かな

かつたのかセドカンは後ろに下がった。

残念、もしも床に置かずに自分で持つていたらシャツフルして俺達を搅乱出来たのに、床に置いていたから今更交換は出来ない。

そしてさつきのお前の態度を見る限り、両方共仕掛けが施されている。大方相手に罠を渡した後に自分は普通のロウソクとすり替えるつもりだったんだろうが、この状況では不可能。

全員がお前のイカサマが無いか注目しているんだからな。

「レオリオ、長い方にしどけ。そうすれば自動的に勝てる。」

念のためにセドカンに更なる揺さぶりをかける。どちらも罠なら長い方が有利に決まっている。

そしてセドカンは見事にハマってくれたのか、「ううっ」と反応してくれた。

そこまでやればレオリオもバカでは無いので「成る程。」と分かったようだ。

一方ハメられた事が分かったのかセドカンは「ヤバい！」という顔をした。

その後、満場一致で押し、レオリオが長いロウソクを手に入れた。

そしてルール通りお互い同時に点火して直ぐにお互いのロウソクは勢い良く燃え出した。

レオリオのロウソクも火が強いせいである内にロウソクは短くなっていくが、セドカンのは既に小さくなっていて持つことさえ困難だ。

そして一分後には持てなくなつて「熱つ！..」と言つて床に落としまい、火が消えてしまった。

一方レオリオのロウソクはまだギリギリ持っていたので火は消えて

いない。

これによつてレオリオの勝利が決まり、2勝目を上げたのだった。

「よし、これで2勝だぜ！！後はクラピカかゴンが勝てば終わりだ
！！」

レオリオは嬉しそうに言つ。確かに後一勝だからな。樂に思える。
でもこれからが面倒くさいんだよな。

クラピカ対マジタニ戦は飛ばす。

別にこれと書いて口出しあないし。

マジタニが幻影旅団を語つてクモの刺青を見せるそしてクラピカぶ
ちぎれ、マジタニをノックアウトする。まあ、こんな感じだ。

ていうか何でアイツが試練官に選ばれたんだろう？数合わせ？それ
とも抽選？

まあ良いか。

「所でさ、そいつ死んだのか確かめさせて欲しいんだけど。さつき
のじやあ死んだのかが微妙だつたから確かめさせてくれ、何せもし
ソイツが死んで無かつたらまだ勝負は終わつて無いからな。」

あつちが生死を確かめる前にこちらから確認させて欲しいと頼む。

「だったら私が確かめるわ。」

レルートが近付くが、

「ストップ！！もしお前だけに確かめさせてソイツにそのまま氣絶
している。何て指示されたら面倒だから俺も一緒に確認する。」
そう言って俺も通路を渡る。

俺の言葉が正論だからかレルートも止められないし、試験官も止めない。

そしてお互に倒れているマジターに近付き、俺がマジターを仰向けにした後に脈を確かめる。

脈が触れた事から生きている事が確認出来る。氣は失っているらしいが。

「どうやら氣絶しているだけのようね？」

レルートが笑いながら呟つ。

そしてお互に通路を渡つて戻る。

「それでクラピカ、一応聞くけど、トドメ刺す氣はある？」

そう聞くと

「いや、悪いが私はもう何もする氣はない。

あの時既に戦意を失つていた相手を私は殴つてしまつた。これ以上敗者にムチ打つような真似は『ゴメンだ。』

その言葉にレオリオは激昂して

「ざけんなよ！…じゃあどうする気だ…！」

と叫ぶ。

レオリオの質問に

「彼に任せる。彼が用覚めれば血ずと答へば出るはず。さつせんかひつたが、私から何かする気はない！」

はっきりと断言した。レオリオはその言葉にまたぶちギレバハ。

「だつたらセクラピカ。悪いんだけど負けを宣言してくれ。
多分アイツはあのまま氣絶したフリを続けるつもりだらう、やつは
レオリオの大聲で起きたと思つけど未だに用覚めた様子が無い。ど
うやら状況を察知して時間を稼ぐ事にしたらしく。
だからこの勝負はさつさと終わりにして俺が決めるよ。」

別に負けても一敗するだけだから問題無い。

俺の提案にクラピカも

「確かに…それなら早く終わるな。私も彼はこのまま目覚めないと思つし、まだここはスタート地点からほどんど進んでいないから時間は惜しい。」

そして立ち上がり通路を進んでリングに渡る。

「私の負けだ。」

とだけ言つてまた通路を渡つて帰つて来た。

お前のせいで面倒な事になつていてのに何故そんなに格好付ける？

まだ寝たフリをしているマジタニに向かつて

「おい、オッサン。邪魔、いい加減起きる。もし起きないなら突き落とすよ？」

そう言いながら通路を渡る。俺が渡りきりになつたらマジタニは飛び起きて走りながら戻つていつた。

「よし、では今度こそ俺の番だ。」

向ひつ側を見る。

「じゃあ次は私「いや、俺が行く。」

レルートが行こうとしたらジョネスが自分が行くと言つ出した。

「何を言つているの？次は私の番でしょう？」

既に決まつていた順番なのかモメ出した。

「アイツ等の話を聞いている限り、次の奴は戦つ氣すら無い。だからその前にあのガキを俺が殺す。

何か文句あるか？」

ジョネスはレルートを睨み付けながら言つ。

レルートは非力で頭で勝負するタイプだから正攻法ではジョネスに

勝てる筈は無い。

「つ分かつたわよ。」

そう言って下がった。

そしてジョネスが前に出て試験官に「オレが出る。」と言つと試験官も特に問題は無いのか、素直にジョネスの拘束を解いた。

そして拘束を外したジョネスはフードを取つて顔を見せた。
その顔を見たレオリオは

「ゴン、オレ達の負けで良い。アイツとは戦うな！！」

俺にギブアップを求めて来た。

確かにアイツは経歴は凄いけど、所詮は素人の異常者。捕まつてい
る時点でアウトだ。ていうか何でザバン市から出なかつたんだろ
う？

ザバン市で犯行を重ねれば何時か捕まるのは明白、ただ肉が掴みた
かったのだったら移動してれば良かつたのに。この世界は全体的に
治安が良くないから逃げればまず捕まらない。

でも一応レオリオを安心させるために、ていつか黙らせるために

「大丈夫、大丈夫。」

と手を振つとく。

レオリオは尚何かを言ひたげだが、

「ゴンの言つた通り、アイツなら大丈夫だよ。
とキルアが止める。

そしてジョネスもリングに上がつた。

「それで？勝負方法は？」

俺の質問にジョネスは薄ら笑いを浮かべながら

「勝負？勘違いするな。

これから行われるのは一方的な惨殺さ。試験も恩赦もオレには興味が無い。肉をつかみたい…。それだけだ。

お前はただ泣き叫んていれば良い。」

自信満々だな。念能力も持っていないのに。

まあ、念無しである指の力は驚嘆に値するけどね。石壁を掘んで粉にしていたし。

「じゃあ死んだ方が負けで良いね?」

「ああ、良いだろう。お前が…」

バンッ!!

という音が鳴り響き、そこには頭が半分吹っ飛んだジョネスがいた。そしてジョネスはそのまま倒れ込んだ。

「武器使っちゃダメなんて決めなかつたから使つたんだよ。何か文句ある?」

銃を持ちながら試練官達に聞く。

「…いや、特に問題無い。君達の勝ちだ。

どうぞお通りを。」

セドカンが言い、試練官達も壁に下がる。と言つても三人しかいないが。

「あつそ。んじゃあ行こうぜ?」

戻つて皆に言つ。

キルアは「ナイスタイム。」とさつき俺がやつたように手を出す。

それに「だろ?」と軽く言つてタツチする。

レオリオは「お前つてエゲツねえな。」と呆れ氣味。怖がらないのがスゲエな。

「だつて早く終わらせたかつたし、別に禁止されて無かつたからな。それにおかげで早く突破出来たじやん。まだ60時間以上あるし。」と返す。

「それもそうか。」

と明るく返すレオリオ。スゲエな。

トンパなんてあからさまに俺を怖がっているぜ？これが普通だろ？

クラピカも丸腰の相手に武器を使った事に不満があるらしいが、別に恐怖感を感じない。キルアはまだしも「コイツらも十分異常だな。

その後は様々な罠をくぐり抜けでようやく最後の扉にたどり着いた。ちなみにトンパはあれ以降、俺やキルアが怖くなつたのか、素直になつたから別にレオリオとの争いも無い。

そのおかげで残り時間は50時間もあるしな。

『それでは選んで下さい。道は二つ…。

5人で行けるが長く困難な道…。

3人しか行けないが短く簡単な道…。

ちなみに長く困難な道はどんなに早くても攻略に45時間かかります。短く簡単な道はおよそ3分でゴールに着きます。

長く困難な道なら。短く簡単な道なら×を押して下さい。
×の場合、壁に設置された手錠に一人がつながれた時点で扉が開きます。この一人は時間切れまでここを動けません…。』

女神なんだが悪魔なんだか分からない銅像がルールを説明してくれた。

「それで、どうするんだ？まだ50時間残っているから長い道にいつても多分いける。」

とレオリオは全員で行ける長い道を推した。

「そうだな。確かに3分で行けるのは魅力的だが、別に間に合つのならでも良いだろ？」

クラピカも追従する。

「まあ別にどっちでも良いし。どつかを選ぼうがオレがゴールを迎

えるのは変わらないし。」

キルアはどっちでも良いと言い。

「そうだな。時間があるんだから全員で行けた方が良いだろ。」
トンパは全員を強調する。まあ、もしも×になつたら真っ先に落とされるのは自分だ。オマケにただ落とされるだけではなく、殺される可能性が高い。俺に。

そして全員が俺を見る。

いつの間にか最終決定権は俺が握るよつになつた。まあ、大体円でトラップがどこにあるのかや、どっちに進んだ方が良いのかを調べていたから自然にこうなつた。

「まあ、俺もどっちでも良いんだけど。

もっと良い方法もあるぜ? 例えば...。全員でいて3分で『ゴール出来る方法とか。』

その言葉にレオリオが「何、そんな夢のような方法があるのか!？」と聞いてくる。

「ああ、それも成功確率も低く無い。
それで? どうする?」

と聞く。勿論満場一致で俺の案に乗る事になつた。

「それで、どうやるんだ? 『ゴン。』

キルアが聞いてくる。

「ああ、じゃあまず全員で を押してくれ。」

「? ていうことは全員で行くルートを選ぶってことか?」

キルアがまだ分からなそうに聞いてくる。

「ああ、というかそれをしないと始まらないから頼む。」
俺の頼みにとりあえず全員 のボタンを押した。

『5対0で を認証しました。』

その音声が流れた後に の扉が開いた。

「それで、これからどうすれば全員で簡単な道に行けるんだ? もう簡単な道はひらかねーぞ?」

レオリオは不思議そうに聞く。

「ああ、それはな。」

そう言つて周りに飾られている武器に近付き、頑丈そうなテカイ斧を持つた。

トンパがビクッとしたが、それはスルーして の通路に入った。そして直ぐに止まり、斧に周をして思いつき壁をえぐつた。いきなり音が鳴り響いて全員が「何だ!」と見に来たら×の通路に穴が空いていた。

「これで全員で簡単で早いルートに行ける。」

斧を捨てて皆に言つ。

全員が唖然とする。流石にこんな事は考え付かなかつたらしい。

「何とも凄い発想の転換だな。」

クラピカが関心したように言つ。

「道が無きや作れば良いだけだ。」

そう言つて俺は×のルートに入る。

その後はどんなにもない急な滑り台のコースだった。途中で急に曲がったりなど危うくコースアウトするかと思った程だ。

そしてようやくゴールに着き、立ち上ると扉が開き、出で見るとまだあんまり人がいない。

『405番 ゴン。三次試験通過第四号!!』

所要時間23時間15分!!

原作と違つてかなり早いな。

今この場にいるのはヒソカ、ギタラクル(イルミ)、ハンゾーそして俺か。

さて、後は待つだけだが、後2日は待たなきゃいけないんだよなあ。
面倒くさい。
早く来すぎたか？

22 卑怯つて言われてもねえ

2日程キルア達と喋つたり寝てたりしていたら
『タイムアップーーーー！』

第三次試験通過人数25名ーーー』

というウルサイ放送が流れた。

今までダラダラと座り込んでいた受験生達は立ち上がり、ようやく開いた出口に向かう。

そして出口から出ると3日ぶりの太陽光を浴びた。やっぱり太陽光は気持ち良いね。

待つていてる途中でゲートをくぐつてシェルターに逃げ込んでも良かつたんだけど、もしも他人に見られたら面倒くさいし、それに勝手に会場から出て失格処分になつても嫌だしね。

しばらく太陽のありがたさに触れていると、パイナップルのモノマネでもしてんのか?という髪型のオッサンが出てきた。

「諸君、タワー脱出おめでとう。残る試験は4次試験と最終試験のみ。4次試験はゼビル島にて行われる。

では早速だが。」

パイナップルがわざわざ指を鳴らしてカゴを押している男を呼んだ。別に呼ばなくても来ると思うが?といつか既に見えてるし。

「これからクジを引いてもらひ。」

パイナップルの言葉に受験生達が「クジ...?」これで一体何を決めるんだ?と聞く。

パイナップルはニヤニヤしながら

「狩る者と狩られる者。

この中には24枚のナンバーカード、すなわち今残っている諸君らの受験番号が入っている。

今から一枚ずつ引いてもらひ。

それではタワーを脱出した順番にクジを引いてもらおう。」

パイナップルの言葉にヒソカが前に出てクジを引く。そして次はギタラクル、ハンゾーと続き俺の番になる。

原作みたいにヒソカなんてやだから慎重にクジを引いた。そして少し離れた位置で見た番号は残念ながら44。

引く順番が違つても俺のターゲットは原作と変わらない。ところは全員原作通りの番号らしい。

そして皆次々クジを引いていく。その間に俺はナンバープレートを隠す。しかし皆はまだナンバープレートを狩る対象とは分からずから出している。一応記憶しどぐ。

「全員引き終わったね。

今諸君がそれぞれ何番のカードを引いたのかは全てこの機械に記憶されている。したがつてもうそのカードは各自自由に処分してもらって結構。それぞれのカードに示された番号の受験生がそれぞれのターゲットだ。

狙うのはターゲットのナンバープレート。自分のターゲットとなる受験生のナンバープレートは3点。自分自身のナンバープレートも3点。それ以外のナンバープレートは1点。最終試験に進むために必要な点数は6点。

ゼビル島での滞在期間中に6点分のナンバープレートを集めること。
以上だ。」

パイナップルの話が終わり、周りを見るともつほんどうが自分のナンバープレートを隠していた。もう遅いけどね。
にしてもキルアとヒソカは全く隠す気が無い。ヒソカはまだしもお

前はそんなに余裕か？とキルアに言いたくなつた。言わないけど。

何故か古臭い蒸気船に乗せられて現在ゼビル島に向かつてゐる。

『御乗船の皆様、第3次試験お疲れ様でした！！

当船はこれより一時間程の予定でゼビル島へ向かいます。ここに残つた24名の方々には来年の試験会場無条件招待券が与えられます。例え今年受からなくても氣を落とさずに来年また挑戦して下さいね。

』

案内役が明るくアナウンスするが、船上は疑心暗鬼の渦が巻いていた。誰が自分を狙つてゐるか分からぬ状態だからな。

『それではこれからの一時間は自由時間になります。みなさん船の旅をお楽しみ下さいね！』

最後まで笑顔を崩さなかつたのはプロだつたな。この空氣の中で。

意外とデカイ船の中で皆思い思いの場所で休憩する。警戒のためか大体皆一人でいるけど。

俺も一人で座つてゐると「よ。」とキルアが近付いて來た。お前は良いよな。ターゲットがザコだから。

そんな氣も知らずにキルアは俺の横に座る。俺等つてこんなにくつつく程仲良かつたっけ？と思うが、空氣を読んだじて黙る。

『ゴン、もしかして俺じやねえよな？』

あれ？原作と違うセリフだな。

『残念ながらな…。キルアなら手つ取り早かつたのにな。』

残念そうにキルアを見る。

「確かに『ゴン』が相手だとかなりキツイだらうからな。」

キルアは自分じゃ無かつたとホッとしていた。最後に戦つたのはかなり昔だが、未だにゴンに追い付けていない。と思っているのでもし自分がゴンのターゲットなら自分から差し出して6点分狩つた方がまだ良いからだ。

「そういうキルアは何番？ もしかして俺？」
無いとは思うが一応聞くとく。

「いや、俺のターゲットは『ゴン』じゃない、『コイツ』。」
と199番のカードを見せる。

「ああ、あの3兄弟の奴ね。」

別に言つても支障無いから言つとく。

「『ゴン』、もしかして全員の番号を覚えてるのか？」

キルアがビックリしたのか聞いてくる。

「まあ、大体な。2日間塔の中でヒマだつたから暇つぶしで覚えた。」

「本当はせつて覚えたんだがな。」

「ふーん、やつぱりスゲェな『ゴン』。

それで？『ゴン』は何番なんだ？」

キルアが思い出したくない事を思い出させてくれた。俺は黙つて自分が引いたターゲットをキルアに見せた。

それを見たキルアは「…げ、マジで？」と聞いてきた。

「ああ、残念ながら俺のターゲットはヒソカだ…。」

本当に残念だよ…。殺して良いなら問題無いが、今はまだ殺してはいけないキャラだから下手に勝つてはいけない。

だからと言つて俺に原作みたいな勝負を仕掛ける勇気は無い。

「それで、どうするんだ？ ヒソカを狙うのか？」

「まさか、適当に3人狩るよ。流石に相手がヒソカでは無理だ。」「やつぱ、ゴンでもヒソカは無理かあ。」

キルアは納得したよう言ひ。お前の中では俺はどんだけ強いんだよ。

そしてゼビル島に到着。

『それでは第3次試験の通過時間の早い人から順に下船していただきます！

一人が上陸してから一分後に次の人がスタートする方式をとります！

滞在期限はちょうど1週間……その間に6点分のプレートを集めて、またこの場所に戻ってきて下さい！

それでは、一番の方、スタート……！』

そのアナウンスに従つてヒソカが一番先に森に入る。木々が密集しているためか直ぐにその姿が消える。

そして四番目が来て俺も森に入る。そして少し入ったら絶をして気配を消して隠れる。

そしてスタート地点を見張るターゲットを尾行するために。

しばらくしてターゲットである吹き矢使いのゲレタがスタートしたら尾行する。

アイツのターゲットは俺だから先ずはアイツを潰す必要がある。

ゲレタは俺を探しているらしい。島を歩き回っている。

そろそろ良いか。と思い、辺りに誰もいないのを確認して一気にゲレタに接近して絶を解いて腕にオーラを集中してゲレタの首をはね

る。

「があ…。」

と僅かに気付いたらしいが、大した声を出す暇無く終わつた。そしてゲレタの荷物を漁り、ナンバープレートをゲットした。

ジャンプ系に閑わらズ、少年マンガはわざわざ姿を現して戦うケースが多いが、あんなの全く無意味だ。

敵に見つかっていない。というアドバンテージをわざわざ捨てるなんて信じられない。

勝てば正義なのだ。それは歴史が証明している。何十年後にはあれは間違いだった。などと言われるケースもあるが、そんなの無意味だ。

もう過去の事なのだから。

そしてその次はバー・ボンとポンズを狙う事にした。

バー・ボンは別にどうでも良いが、ポンズはレオリオのターゲットの筈だから先にプレートを奪つておく。

そうしないとレオリオが合格するにはあの洞窟イベントが必要になる。

流石に俺は5分以上息を止められる自信は無い。

だからバー・ボンを尾行しているか、バー・ボンを探しているポンズを狙う。

バー・ボンのプレートは別にいるけど、まあ、一 点分にはなるから貰つとくか。

本当ならゲートを使いたいが、試験中は試験官に尾行されているから見られると面倒なのでわざわざ円を使った。

流石にまだバー・ボンを見つけられてはいないらしい。まあ、まだ1日目だしな。

どうやら一休みしているらしくリラックスした状態になつたのを見計らつてまたもや絶で近寄り、そして今度はサイレンサーを装着したハンドガンで頭を撃ち抜いた。

パスッ。という小さい音が鳴り、ポンズの脳みそが飛び散った。確かにコイツは原作でもこんな死に方だつたな。

と思い出す。

そして荷物を漁つてプレートをゲットする。

バー・ボンも同じく円で位置を確認して殺した。

バー・ボンに触れようとしたら蛇が飛び出して来てビビつたが、『理不尽な拘束』で全部始末して悠々と探してプレートをゲットした。これで合格に必要なプレートは揃つたが、ポンズのプレートはレオリオにくれてやる必要があるからもう一点分探す必要がある。まあ、もうターゲットは決まっているが。

2日経ち、現在絶でキルアを尾行中。

俺の狙いはハンゾーのターゲットである197のプレートだ。

ハンゾーは不運にも自分のターゲットと一番違いのプレートを手に入れる。それで3人狩ることにしたらしいが。

そして俺の狙いはハンゾー同様、キルアが自分のターゲットでは無いプレートを投げた後に197番のプレートを手に入れれば良い。まあ、つまりハンゾーの反対に行けば良いだけだ。

しばらく尾行されていたがキルアはシビレを切らしたのかイモリに話しかけている。まあ、はつきり言つてバレバレだしな。キルアが「出てこいよ。」と問い合わせるがイモリは無視している。まさか自分の位置がバレていないとでも思つてているのか？そして遂にはキルアの方から近付いて来るとイモリは汗をダラダラ流して焦っている様子が手にとるように分かる。

しかしそんなイモリに救いの手が差し伸ばされた。

「兄ちゃん！！」

という大声が響いた。尾行中に大声出すなよ。

待ち焦がれていたイモリは歓喜をもつて歓迎する。しかし兄達は子供相手に何もしていなかつたイモリを殴る。

「バカかお前！？」

あんなガキまでオレ達がいなきや怖くて戦えねーのか！！」

アモリが弟を叱る。いや、ある意味正解だぜ？何せ相手が相手だからな。

兄達が来たという事で自信が出たのかイモリはキルアに近付き「なあボウズ、プレートをくれねーか？大人しくよこせば何もしない。」

と自信満々に言う。

しかしキルアの返答は「バーカ。」であつた。

それにムカついたのかイモリは本気でキルアの鳩尾に蹴りを入れる。吹っ飛んだキルアを見てイモリは何かを言つているが、何事も無かつたかのようにキルアは立ち上がり、パクったプレートを見て自分のターゲットと一番違うと分かった。

そしてアモリ3兄弟はキルアの様子から何かを感じ取つたのか、本

氣を出すべくお得意のフォーメーションを出す。しかしキルアはフォーメーションを完成させる前に動く。まあ、当たり前だが。わざわざ待つ意味が分からないし。

ていうか実戦でフォーメーションを作る暇なんか無いだろ？から無意味であるが。

キルアにアッサリとホールドアップされるアモリ。

それでウモリの方も觀念して素直にプレートを渡す。見事目的のプレートを手に入れられたキルアはいらないプレートを投げようとする。

俺の狙いは197番のプレートだから真っ先に追う必要がある。キルアの右手には197番のプレートが握られているからな。

ギューン！と飛んでいくプレートを追いかけ、よつやく追いつき、手を入れた。

そのプレートは狙った通り197番。

ちなみにハンゾーはやっぱり俺とは逆の198番を追つて行つた。

アイツのターゲットは俺の方なのに。

とにかくこれで点数分を手に入れたから後はコツクリとする。本当ならゲートに引きこもつていたいが、やはり監視がいるので念のために普通に休む。

食料もいちいち取りに行く必要があるな。

コニー能力なんて一番見られたらヤバいからな。

何なんだこのガキは？
それが俺の心境だった。

俺は405番ゴンの審査をするために命令されて監視していたが、この少年はイカれてやがる。

先ず試験が始まった当初はまあ、たまにいる念が使える受験生とか思わなかつた。

纏もそんなに強く無いし、今期にいる念能力者の中では一番弱いだろう。しかし念が使えるのだから残り一人と出会わなければ合格出来るだろ？

初めはその程度の印象でしか無かつた。

四番目という好成績でスタートした後は完璧な絶をして他の受験生を待ち構えていた。

まあ、王道な戦法だな。早い順位を生かして獲物の動向を探るのは当然だ。

初めはそう思つていた。

狙いを定めたのか405番は尾行を始めた。完璧な絶のため狙われている384番は全く気付きもしなかつた。

成る程、纏はお粗末だが絶にはかなりの自信があるらしいな。そう思つていたら405番が接近し始めた。

もう仕掛けるのか？と思い注意深く見てみると突然405番は走り出し、絶を解いた。

まさか殺る気か？そう思つていたら予想通り、何のためらいも無く384番の首を飛ばした。

まさか11歳の子供がいきなり殺すとは思わず、少し驚いた。

そして405番は384番の荷物を漁り、プレートをゲットした。しかしそのプレートは405番のターゲットでは無いから一点にしかならない。

しかし405番は残念がる様子もなく、また歩き出した。

その様子から3人狩るつもりなんだと分かった。まあ、アイツのターゲットは44番だからな。アレは俺でも無理だろ？
その選択は正しいな。

そして次に405番はその纏には不釣り合いな程大きな円をして操作を始めた。

その円に入らないように仕方なくかなり離れた位置からの監視をする。念のために150m程離れての監視は結構キツイ。

そしてターゲットが決まったのか405番はまた絶をした。

次は誰かと探つたら246番の女だった。

また殺るのか？と憂鬱になつていると案の定また246番に接近し出した。

どうやらさつきのように殺すらしい。出来るのなら止めたいが、試験中なので見てている事しか出来ない。

何せ405番は何らルール違反をしていないのだから。

しかし今度はかなり接近するらしいな。既に246番の背後に回っているというのに攻撃しない？流石に女は躊躇したのか？

そう思ついたら405番は何かを取り出した。それはサイレンサーが付いた拳銃。

まさか！そう思つた瞬間にパストと「う」小さな音が鳴り、246番の頭が弾けた。

脳みそが飛び出して悲惨な現場となつた。

しかし405番は全く気にせず、荷物を漁つてプレートをゲットしたらまた円を使って搜索始めた。

このようにあの405番はガキとは思えない程残酷な事をしている。このに、平然としている。まるで何とも思っていないよう。こんなイカれたガキを1週間も監視していくきやならないなんて何て地獄だ。もう絶対試験官なんて引き受けねエ。あのガキを見ているだけで神経がまいりそうだ。

こんなんだつたらあのハゲを監視する方がマシだ。
クジで勝つてこのガキを選んだのに…。

試験開始から6日経ち、そろそろレオリオとクラピカがスタート地点に戻っている頃だらうから俺も移動する。

スタート地点付近に着いたので田で一人を探す。原作みたいに木の上から捜すのは俺には無理だからな。

しばらく探していると一人を発見した。どうやら散会してポンズを探しに行く気らしい。ポンズなら脳みそが無い状態で結構近くに転がっているけどね。

「よつ、レオリオ、クラピカ。」

偶然出会ったかのように出てきて話しかける。

一瞬武器を構えたが、俺の姿を見て安心したのか武器を下ろす一人。そんなに信頼関係あつたっけ？

「何だゴンか。ビックリさせんなよ。」

レオリオはビビっていたのか一安心したようにホッとする。

「ゴンはもうプレートを集め終えたのか？」

クラピカが聞いてくる。やはり多少は警戒しているな。

「ああ、もう6点分集め終えた。」

実際は7点分を持っているけどな。

「くそオ、じゃオレだけかよ。」

レオリオは焦る。まあ、このままでは不合格確定だからな。

「何？レオリオはまだなの？」

「ああ、… そうだゴン。お前246番のポンズって女を見なかつた

か？」

「見たよ。」

俺の答えにレオリオは反応して

「何、見た？ 何処でだ gon！」

他の奴らに見つからないように小声で喋っていたのに、それを無視して大声で反応するレオリオ。

「声が大きい。

アイツならもう狩ったよ。ほら。

と246番のプレートを見せる。

そのプレートにクラピカが反応した。

「ということはgon。お前はターゲット以外を狩つて6点分を集めたのか？」

「ああ、俺のターゲットはヒソカだつたからな。

流石にアイツは無理だから無難に3人狩つたんだよ。」

俺のターゲットを聞いた二人は苦笑いをして「確かにそりゃあ無理だ。」と答えた。

「にしても俺のターゲットをgonが持つているなんて、何て不運なんだ。」

レオリオは残念がる。俺から奪うとは考えないのか？

「レオリオのターゲットってこの246番なのか？」

俺の質問に泣きそうな顔をして

「ああ、そうだよ…。でもgonが持つているから俺は…」
「…らしいな…。」

と絶望したかのように答える。

しかしそんなレオリオに救いの手を差し伸ばしてやろう。

「んじやあやるよ。」

と246番のプレートをレオリオに差し出す。

レオリオは差し出されたプレートを見て

「え、でもそれじゃあゴンの点数が足りなくなるじゃねえか？」

と聞く。

「ああ大丈夫だ。実は俺プレートは5枚持つていて、1枚余つていたんだ。

だから別にそれをあげても合格出来るし。」

その言葉にレオリオは納得したのか

「ありがとよゴン。この恩は忘れないぜ。」

と良い笑顔をしながら受け取った。

こうしてレオリオも6点分貯まり、後は時間が来るまで3人でダベつていた。

ボ――――ツ――!――!というデカイ汽笛の音が鳴り響き

『ただ今をもちまして第4次試験は終了となります。受験生のみなさん、すみやかにスタート地点へお戻り下さい。

これより一時間を帰還猶予時間とさせていただきます。それまでに戻られない方は全て不合格とみなしますので御注意下さい。

なお、スタート地点へ到着した後のプレートの移動は無効です。確認され次第失格となりますので御注意下さい。』

というデカイアナウンスが鳴り響いた。

そして、俺達3人はスタート地点に出てきて遠くに見える飛行船を待つ。

その間に次々他の受験生もやって来た。やはり原作通り合格者は9人か。

「よお、久しぶりゴン。」

キルアが話しかけて来た。まあ、1週間振りなら久しぶりか?

「おお、お互に無事合格らしいな。」

「まあな、プレートは2日目で集まつたから後はほとんど隠れてただけだしな。」

「確かにそうだな。俺もプレートは初日に揃つたから後はひたすら隠れているだけ。」

オマケに監視がついていたから気分悪かつたけどな。」

「ああ、アレ？ 確かにウザかつたよな。」

という何でもない話で盛り上がりつてると飛行船がようやく来た。

飛行船に乗り、しばらくキルアとダベつていたら

『えーー、これより会長が面談を行います。番号を呼ばれた方は2階の第1応接室までおこし下さい。』

受験番号44番の方、44番の方おこし下さい。』

といつアナウンスが響いた。

「面談？ もしかして最終試験は面接つてことか？」

とキルアは嫌そうに呟つ。

「いやあ、ここまで来て面接が最終試験は無いだろ？ 多分最終試験のために何かを聞くんだろう？」

本当に面接だつたらスゲェな。だったら俺合格無理か？ハンターになる気なんて無いし。

『405番の方、応接室におこし下さい。』

とうとう俺の番が来た。

先に行つたキルアから聞くと、やはり聞かれた事は原作と同じらしい。だったら俺も原作と同じ事を言えば良いか。

応接室に入ると、久しぶりに見た和室にネテロがいた。

「まあ、座りなされ。」

そう言われたので目の前の座布団に座った。

「先ず、何故ハンターになりたいのかね？」

ネテロの質問に

「別にハンターになりたいのではなく、ライセンスが欲しいんですよ。色々便利だし。」

別に細かい事を言う必要は無いから適当に答える。

「なるほど、ではお主以外の8人の中で一番注目しているのは？」

「44番ですね…。まあ、どうしても田につきますからね。」

「ふむ…。では最後の質問じゃ。8人の中で今、一番戦いたく無いのは？」

「99、403、404の3人かな。」

原作通りに答える。本当は44と301だけどね。

「うむ、ご苦労じゃつた。下がつて良いぞ。」

その言葉に部屋を出ていった。

今までの流れから言つと、多分原作通りのトーナメントを組まれると思つが、もしヒソカやイルミと戦う事になつたらどうしようつ？まあ、適当に負けていればキルアのおかげで合格出来るだらうがな。

4次試験から3日も経ち、ようやく最終試験会場に到着した。
着いた所は豪華なホテルで、外装はどこかイスラムチックだな。

会長から試験会場に案内され、現在はトーナメント発表が行われるらしい。

「最終試験は1対1のトーナメント形式で行つ。

その組み合わせは、二つじや。」

ネテロが対戦表を隠していた布を取る。

そこには原作通りの対戦表があつた。

良かった。これで合格は確実だ。

「さて、最終試験のクリア条件だが、いたつて明確。たつた一勝である！」

つまりこのトーナメントは勝つた者が次々抜けていき、敗けた者が上に登つていくシステム！

この表の頂点は不合格を意味する訳だ。もうお分かりかな？

ネテロの質問にハンゾーが答える。

「要するに不合格はたつた1人つてことか。」

「さよつ。

しかも誰にでも2回以上の勝つチャンスが『えられ』ている。何か質問は？』

「組み合わせが公平では無い理由は？」

ボドロが聞く。

自分があんまり良い位置にいないからか？

「うむ、当然の疑問じゃな。この取り組みは今まで行われた試験の成績を基に決められている。

簡単に言えば成績の良い者にチャンスが多く『えられ』ていると言つこと。」

原作ではキルアがゴンよりも低い評価に不満を持ち、更なる詳しい説明を求めたが、ここでは別にキルアは俺に勝てるとは思つていないので抗議しない。

「戦い方も単純明快。武器OK、反則無し、相手に『まいった』と言わせれば勝ち！

ただし、相手を死にいたらしめてしまった者は即失格！その時点で残りの者が合格。試験は終了じゃ。

よいな？」

そのルールかなり厳しいよな。

殺して良いのなら容易いが、殺すと失格になるのでは殺せないし、ここまで残つて「まいった」なんて言わせるのはかなり難しい。まあ、俺は操作すれば簡単だけど。

「それでは最終試験を開始する！！

第1試合、ハンゾー対ゴン！！」

呼ばれたので前に出る。

「私、立会人を勤めさせていただきますマスターです。よろしく。

メンインブラックみたいな格好をしたオッサンが挨拶する。

「よお久しぶり。4次試験の間、ずっとオレを尾けてたる。」
と律義に挨拶するハンゾー。お前マジで忍者には思えねえよ。

「お気づきでしたか。」

「当然よ。

4次試験では受験生1人1人に試験官が尾いていたんだろ？まあ、他の連中も気付いてたとは思うがな。」

わざわざ説明してくれるハンゾー。

レオリオはピックリした顔をしていて、それを見たクラピカは「あえて言うこともないと思つてたんだが。」と言つ。

ちなみに俺を監視していた試験官は遠巻きにいる。何か睨まれてんだけど。何かしたか？

「礼を言つておぐぜ！！オレのランクが上なのはアンタの審査が正確だつたからだ！」

と笑顔で言つハンゾー。

マスターは「…はあ。」と返すだけ。ウザいもんな。

「それはそうと聞きたいことがあるぜー。」

わざわざキメポーズみたいに指を指して言つ。

マスターはコイツマジ面倒くせえ。と言つよつて「何か?」と聞く。

「勝つ条件は『まいつた』と言わせるしか無いんだな?」

気絶してもカウントは取らないし、TKOも無し。」

「はい…。それだけです!」

ハンゾーの質問にマスターが答える。

ハンゾーはゴンを見て考えている。

こいつはちつと厄介かもな。でも『コイツなら勝てないと分かればギブアップするだろ?』。そつ軽く考えていた。

「それでは、始め!!」

そのコールと同時に流を使って素早く動き、ハンゾーの腕を掴む。そのあまりの速さにハンゾーは驚き、動きが鈍つたが、直ぐに反応して拘束を解こうとしたが、「動くな。」と『理不尽な拘束』を発動させたため、ハンゾーは一切動けなくなつた。

確かに身体能力ではハンゾーに遙か及ばないが、念も使えない奴が相手なら楽勝だ。

「なあ、ハンゾー。お前なら分かってくれるよな?お前はこれからどうするべきかを…。」

ハンゾーの目を見ながら言つ。本当ならこのまま強制的に言わせる事も可能だが、そこまで強制力は無いと周りに思わせるためにあえて言わせる。

しかしハンゾーは「へ、嫌だね。」と拒否する。

そこで俺は悲しそうな顔をして言つた。

「どうすれば分かってくれるだろ?」。指を一本ずつ折つていけ

ば分かつてくれるか？それとも引きちぎつた方が良いか？それとも片目ずつえぐつた方が良いか？どうする？両目を失い、両手の指と足の指を全て失つたら分かつてくれるか？

それでも言わないのなら俺はギブアップして次にかけるが、そうなつたらお前はもう日常生活すらままならなくなる。

「あ、どうする？」

ハンゾーの目を覗き込みながら聞く。

さっきまではまだ霸氣があつた目だが、俺が本氣でやる氣なのだと分かつたためか、今では恐怖一色に染まつている。

何せわざわざ死なないよう腕や足を引きちぎるのではなく、指を引きちぎると宣言したからな。

指なら止血しながらの切斷なら出血死は免れる。まあ、その代わりに今後は忍者どいか日常生きを送ることあり非常に困難になるのは目に見えている。

この雰囲気のせいか、周りはドン引きだ。唯一ヒソカは楽しそうに笑っているが。

しかし何も言わないハンゾーを見て俺はハンゾーを触りながら右手の小指を掴んだ。

その瞬間、誰が言つたか分からぬが、「マジでやる氣だ。」と聞こえた。

その言葉が聞こえたのか、ハンゾーは震える口を開き「…ま、まいつた…。オレの負けだ…。」と言つた。

俺はマスターを見る。

マスターは俺が何を求めているのか理解したのか手を上げて。

「そこまで、勝者、ゴン…！」

と宣言した。

勝利は確定したのでハンゾーから手を離し、『理不尽な拘束』を解く。

その瞬間にハンゾーは崩れ落ち、膝で立ちながらハアー、ハアーと荒く呼吸する。

そんなに恐かつたか？

まあ、言わなきゃマジで小指を引きちぎっていたけど。

そして俺は他の受験生の位置に下がる。周りは俺に話しかけ難くしていたが、キルアは

「ゴン、合格おめでとう。」

と言われた。まあ、コイツには普通な光景か？

「おう、サンキュー。お前も頑張れよ。」

と返した。

これから起じるイベントに興味無いので

「スマセーン、もう合格したんでしょうと散歩してきて良いですか？」

とネテ口に聞く。

「ふむ、確かにもうお主は合格したのだから別にここにいなくても

良いな。」

と許しを得たので扉を開けて一人廊下に出た。

この後起じるキルアの洗脳？は別に関わる氣無いし。

ていうかこれでライセンスゲットは確定なんだから原作に関わる意味が無い。だからスルーして今は合格の喜びを噛み締める。

どうせ合格後の講習は明日だ。
今日は部屋で寝てるか。

24 拭えない不安

最終試験翌日。

あの後は適当に散歩をした後に部屋で寝た。

ハンター試験のためにホテル全体を貸し切りにされているから部屋は自由に選べた。せっかくだから一番上等なロイヤルスイートで泊まつた。

おかげで田嶋めは絶好調だ。

今日は更に念願のライセンスを受け取るという最高の日だ。

朝食を食べ、まつたりとしていると試験官からそろそろ講習が始まるという連絡を貰つたので講習が行われる部屋に向かつた。

部屋の中にはまだ何人かはない。ネテ口など試験官もいないし。立つていても仕方ないので席に向かう。生憎自由席なのか各自まばらに座つている。

どこに座ろうか迷つたが、とりあえず知り合いがいるレオリオ、クラピカの近くに座つた。

「よ、合格おめでとう。」

と一人に言った。

しかし一人の顔は優れない。まあ、予想はつくが。

別に聞きたくは無いがこの後面倒が起きるのでその時聞くのは面倒なので今聞いてく。

「あれ？ そういうえばキルアがいねえな。もしかしてアイツが落ちた

？」

俺の言葉に分かりやすく反応する一人。

その様子を見て

「ふーん、アイツが不合格とはな…。もしかして誰か殺した?よく見るどあのボドロとか言つオッサンもいないし。」

と言ひ。

俺のこの言葉に遂にクラピカは口を開き

「…キルアは反則による失格となつた。ゴンの言つ通り、ボドロを殺してしまつたんだ…。」

残念そうに言つクラピカ。何かボドロの死よりキルアの不合格を悲しんでいるような。酷えな。

「あー…。やつぱり殺つちゃつたんだ。まあ、アイツの事だからボドロのオッサンが負けを認めないとムカついて殺しちゃつたのかな?」

結構ありそだよな。アイツなら殺るだらう。

「違つ!キルアはそんなことはしてねえ!無理矢理やらされたんだ!

レオリオがわざわざテカイ声で行つてくる。他の奴らも「つるせえなあ。」という感じにこっちを見る。

「レオリオ、先ずは落ち着け。

「それで?キルアは誰かに操られてボドロを殺したという事か?」
一応真剣そうに聞く。不真面目に「あつや。」とか言いたいけど、言つたらまた面倒だらうしな。

その後は原作のサトツに聞かされたようにクラピカが順序よく教えてくれた。途中でレオリオが何か言つて来たりなど面倒もあつたが、概ねの説明は終わつた。

説明が終わってこれから抗議すべきかを話し合っていた途中にネテ口達が来たので黙る。

「諸君、長い試験ご苦労じやつた。

さて、これから最後の講習を行い、それが終われば解散となる。」
ネテ口が簡単なスケジュールを言つていて途中でクラピカが手を上げた。

「何じやね?」

ネテ口が聞く。

クラピカは立ち上がり

「説明の途中に失礼、実はキルアの不合格は不当では無いかと思いましてので私は異議を唱えます。」

クラピカが宣言する。そして「俺も同感だ。」とレオリオも追従する。

二人は俺も見てくる。どうやら俺にも賛同して欲しいらしい。

「俺はまだ保留だ。実際に現場を見た訳じや無いからな。とりあえず今は様子見だ。」

その俺の意見を分かつたのか二人はネテ口を見る。

「キルアの様子は自称ギタラクルとの対戦中とその後において明らかに不自然だつた。対戦の際に何らかの暗示をかけられてあの様な行為にいたつたものと考えられる。

通常ならいかに強力な催眠術でも殺人を強いる事は不可能だ。しかしキルアにとつて殺しは日常の事で倫理的抑制が働くなどても不思議は無い。」

確かに悪くは無い意見だ。通常の催眠術では限界があるが、操作系能力を用いれば十分可能だ。

まあ、分かつていないのでどうが。

今度はレオリオが立ち上がり意見を言つ。

「問題なのはオレとボドロの対戦中に事が起きた点だ。状況を見れ

ばキルアがオレの合格を助けたようにも見える。

ならば不合格になるのはキルアではなくてオレの方だろ?」
よく自分を不合格にしろ何て言えるな。

お前は今年合格しないと多分もう無理だぞ? 何せ今回の試験でも何度も何度も俺が助けなかつたら一次試験で落ちていただろつし。

そしてクラピカが結論を出す。

「こずれにせよキルアは当時自らの意思で行動出来ない状況にあつた。

よつて彼の失格は妥当では無い。」

「全て推測にすぎんのオ。証拠は何も無い。明らかな殺人を指示するような言動があつた訳でも無い。それ以前にまず催眠をかけた根拠が乏しい。」

ネテロの反論にクラピカも「確かに…。」と息を吐く。
まあ、俺なら別に言わなくとも命令出来るが。

「レオリオとボドロの対戦直後に事が起きたところについては問題は無いと思つてある。

両氏の総合的な能力はある時点ではほぼ互角。経験の差でボドロを上位に置いたがの。

格闘能力のみを取ればむしろレオリオが有利とワシは見ておつた。
あえてキルアが手助けするような場面では無かつたじやろ?」
その言葉にレオリオも「ちつ。」と諦める。

さて、ここりで止めないと不毛な言い争いが起きるからお開きにするか。

「どうにもならないようだな。会長さんの言つ通り、全ては憶測に過ぎないようだ。

残念だがキルアの不合格は覆らないらしい。
その俺の言葉に一人も諦めたのか着席する。

「それでは講習を再開します。

皆さんにお渡ししたこのカードがハンターライセンスです。意外と地味だとお思いでしょうね。その通りです。カード自体は偽造防止のためにあらゆる最高技術が施されている以外は他のものと変わりありません。

ただし効力は絶大！！

まずこのカードで民間人が入国禁止の国の約90%と立ち入り禁止地域の75%まで入る事が可能になります。

公的施設の95%はダダで使用できます。銀行からの融資も一流企業並みに受けられます。売れば人生7回くらい遊んで過ごせますし、持っているだけで一生、何不自由無く暮らせます筈です。

それだけに紛失・盗難には気をつけて下さい。再発行はいたしません。

改めて確認すると凄まじい効力だな。

このカード一枚で今までどんなに頑張っても正規には入れなかつた国や地域に入れるし、国営ホテルなどならタダで泊まれる。売れば人生7回くらい遊んで暮らせるとかスゲエけど、それって誰基準なんだ？

一般人レベルでは、つてことか？

その後は教習所の運転の仕方のような誰も守らないだろ？。という規約を聞かされ、ようやく終わった。

さてと、これからは原作は利用出来るものは遵守するが、後は無視で良いや。

最悪キメラアントさえ片付ければ良いんだから。

次は原作通りにキルアの実家に行く。と言つても別にキルアを助けに行く訳では無い。

ゾルディック家に依頼をしに行くのだ。

依頼内容は幻影旅団殲滅。

別に関わる気は無いけど、今後出会つたら面倒だし、何よりもヒソカに「青い果実」判定を貰つたから早く始末しないと不味い。

自分で始末するのが確実だが、流石にあんな大人数を相手にするのはリスクが高すぎる。だからゾルディック家のゼノさんやシルバさんによ頼する。

金さえ渡せばちゃんと始末してくれる筈だから幻影旅団が相手でも大丈夫だろう。

そのために6～8歳まで天空闘技場で金を稼いでいたんだ。多分足りる筈だ。

流石にゾルディック家相手にコピーした金で支払う勇気は無いからな。

そして、レオリオとクラピカには「じゃ、お互^イ元氣で。」と言つてさつさとオサラバした。

「キルアを助けに行かないのか?」とか聞かれたけど、「家庭の事情に友達と言えど他人が踏み込んで良いものでは無い。」と断つた。アイツらと、特にクラピカにこの依頼の事を知られたら面倒になるからな。

もしもアイツが復讐のみを考えているのなら手伝つてやつて旅団を殲滅するのも良いが、アイツガムシロより甘いから無理だ。

だつて復讐よりも友情を大事にするなんて人間としては素晴らしいが、復讐者としては最低だ。

あんな奴と手を組んだら命がいくつあっても足りない。

飛行船に乗りククルーマウンテンがあるパドキア共和国を目指す。途中、無いとは思うが、イルミにレオリオとクラピカがキルアの居場所を聞いてこの飛行船に乗っているんじゃねえかと警戒したが、どうやら杞憂だったらしい。

まあ、あの一人は原作の「ゴンがいたからこそキルアと深い関係になれたんだ。この世界では俺だからキルアとは知り合い以上友達未満程度だ。

だから俺が積極的に動かない限りそこまでキルアに介入しようとはしない。それに「友達だろうが家庭の事情に口出しするべきではない。」という俺の言葉も効いたのか、二人はあの後普通に別れてお互い目標を目指す事にした。恐らくもう会う事は無いだろう。

何せレオリオは夢である医者になるために最低でも4年は大学に通う事になるし、クラピカは復讐と同胞の目を探すために雇われハンターになる。

この通り全く接点は無い。

これで原作とはオサラバだ。

グリードアイランドには行きたいからヨークシンには行くが、それは蜘蛛イベントが終わった後だ。

それに蜘蛛は皆殺しにするからイベント自体も起きないだろう。万が一にも殲滅に失敗しても俺との接点は無いからバレないだろうし、流石に蜘蛛もかなりのダメージを負う筈だからその時は自分で殲滅

する。

まあ、別にグリードアイランドはゲームクリアが目的じゃ無いし。ただゲームアイテムをコピーして現実世界に持ち帰れれば良いだけだ。ゲットしたらリープか正規のルートで脱出すれば良い。でもゲンスルーを狩れば大抵のアイテムはゲット出来るだろうし、クリアも可能かも知れないな。

まあ、どっちでも良いか。

もう原作なんて考える必要は無い。と言つても別に積極的に崩壊させる気も無いがな。

俺に関わりが無いのなら基本放置だ。

でも意外だったな‥。

クラピカから聞いた話ではキルアは原作同様イルミに「ゴンと友達になりたい。」と言つたらしい。

何で？

俺はゴンと違つて輝いていねえぞ？むしろお前よりも黒いぞ？

まあ、それは分かつているのかキルアも「ゴンと友達になつても普通の生活は無理かも知れないけど、それでもアイツと一緒にいると面白い。」

と言つたらしい。

俺はそこまでお前の好感度稼いだか？

確かに試験中は結構一緒にいたし、良く話も合つたけど所詮そこまでだぜ？

何か恐いんだけど‥。

もしかしてこの先何か想定外の出来事が起きたりしないよな?

25 利用出来るモノは利用しよう

飛行船で移動する事3日。

ようやくパドキア共和国に到着。それから先はククルーマウンテンがあるデンドラ地区まで鉄道で移動。

デンドラ地区についたら事前に予約しておいた山景巡りの定期バスに乗った。

『皆様、本日は号泣観光バスをご利用いただきまして誠にありがとうございます。

早速ですがデンドラ地区が生んだ暗殺一族の紹介をしていきましょう。』

ガイドの説明が聞こえてきた。いらぬけどパックに入っているから仕方がない。

バスの中には原作同様、普通の観光客に明らかに堅気では無い一人組がいた。アイツら念能力も無い癖にゾルディック家に挑戦するなんてある意味すげえな。

『え、皆様左手をご覧下さいませ。あちらが悪名高いゾルディック家の棲むククルーマウンテンです。

樹海に囲まれた標高3722mの死火山のどこかに彼らの屋敷があると言われていますが、誰も見た者はいません。

ゾルディック家は10人家族。曾祖父、祖父、祖母、父、母の下に5人の兄弟がいて全員殺し屋です。ではこれからもつ少しだけ山に近付いてみるとこにしましょう。』

ガイドの説明が鳴り響く。そういうえばキルアの婆さんは見たことないな。生きてんのか？

バスが到着した所は目の前にバカデカイ門があつた。

これが試しの扉か。

「え、ここが正門です、別名黄泉への扉と呼ばれております。入つたら最後、生きて戻れないとの理由です。

中に入るには守衛室横の小さな扉を使いますが。」

まあ、普通そつちが本当の扉だと思うよな。

「ここから先はゾルティック家の私有地となつておりますので見学出来ません。

ここから先の樹海はもちろん、ククルーマウンテンも全てゾルティック家の敷地という事です。」

とんでもない庭だよな…。

現実に見てみるとまだククルーマウンテンは遙か遠くに見えるだけ。ていうかそんなに広くする必要はあつたのか？

それとも先祖代々の土地だからか？

「は、誰も見たことの無い幻の暗殺一家、そんなのどうせハツタリだろ？」

ガイドの説明にデカイ男がバカにしたかのように言つ。

「奴等の顔写真にさえ1億近い懸賞金がかかっているって話だ。」

横の何か麵棒みたいな武器？を持つている男も答える。

「門を開けな。」

二人は歩き出し、守衛室に向かつ。そして何故か守衛室のドアを破壊して守衛の胸ぐらを掴んで引きずり出す。

「わわわ…。」と怯えた風に見せるゼブロ。

「門を開けな。」

ゼブロを吊り上げている大男が命令する。その自信はどこから生ま
れてくるのだろうか？

「いや、困りますよ。あたしがダンナ様にしかられるんですから。」「心配すんな。どうせあんたの御主人はオレ達に始末されるんだから。」

もう1人の男も自信満々に言つ。お前らに殺される程度なら誰も依頼しに来ないと思うのだが。

ゼプロからカギを奪い、大男はゼプロを投げ飛ばす。

「痛」と着地するセブン、とりあえず好感度を少しでも上げるために、「大丈夫ですか?」と近寄る。

「ああ、大丈夫だよ。」

あーあ、まだミケがエサ以外の肉を食べちゃうよ」「とゼブロがミケの方の心配をする。アイツのエサって何?人肉?

少し経ち、門が突然少し開いて中から頭蓋骨の上部が無くなつた骸骨が2体とデカイ腕が出てきた。その腕が骸骨を外に投げ捨てて扉に引っ込んでいった。

それを見ていた観光客は悲鳴を上げてパニックになつてゐる。まあ
そうだろうな。いきなり骸骨とともにデカイ腕を見せられた
ら普通はパニクる。

しかしゼブロはそんな様子を無視して

時間外の食事は今更結構上めらかでいいのにな
ミケ―――肥つても知らないよ―――！」

オマカシがイヤだも冗談で一あからいが

「え、皆様御覧いただけたでしょうか。一歩中に入ればあの通り無惨な姿をさらすことに…」「いいからそんなこと！－！早くバスを出

と説明しようとしたら密にクレームをつけられた。

乗客は直ぐにバスに次々乗り込み、俺以外は全員乗り込んだ所で「おい、君！！何してんだ早く乗つて！！」と乗車を急かす。しかし俺は「あー、行つて良いですよ。俺はここに残るんで。」と乗車を拒否。

俺の言葉に乗客達は目を見開くが、それよりも早く逃げたかったのか、直ぐに全員乗り込んでバスは出発した。

「良いのかい？ここにはバスは一日一本しか来ないんですけど。」ゼブロは心配したように言う。この人マジ良い人。

「ええ、良いんですよ。俺もゾルディック家に用事があるんです。まさか、君もアイツ等と同じ用なのかい？」

「いえいえ、俺はキルアに会いに来たんです。」

一応そう言つとくか。友達アピールをすれば好感度は上がるだろうし。

「キルア坊っちゃんに？」

ゼブロは分からぬように首をしかめる。

「ええ、実は俺、キルアの友達として。だから会いに来たんです。」

とりあえずこのまま外で話すのではなく、守衛室に入り込むと誘ってくれた。やはり友達発言は効いたらしい。

「キルア坊っちゃんの友達なのかい。嬉しいねえ、わざわざ訪ねてくれるなんて。

あたしや20年勤めているけど君が初めてだよ。友人としてここに来てくれたのはね。」

本当に嬉しそうに言つゼブロ。まあ、あの家族では友達なんていないだろうしな。何でキルアだけあんな性格なんだろう？

「雇われの身でこんなこと言つとバチが当たりそุดだけど、本当に

寂しい家だよ。だーれも訪ねてきやしない。あんな連中はひつきり

なしに来るんだけどね。」

とゴミバケツに入れられている骸骨を指差しながら言つ。扱い酷くない?

「まあ稀代の殺し屋一族だから仕方ないけど。因果な商売だよねえ」。

いや本当に嬉しいよ。ありがとう!」

と頭を下げて礼を言うゼブロ。いやあ友達発言をしただけでここまで好意的になつてくれるとはねえ。

「しかし君を庭内に入れる訳にはいかんです。さっき君も見たでしょ?でかい生き物の腕を。

あれはミケと言つてゾルティック家の番犬なんですがね。家族以外の命令は絶対聞かないしなつかない。

10年前に主から出された命令を忠実に守つてゐる。侵入者は全員噛み殺せ”。

あ、忠実じゃ無いやな食い殺してゐるから。

とにかく、ミケがいるから君を中には入れられないね。坊っちゃんの大事な友達を骸骨にするわけにやいかないからね。

笑いながら言うゼブロ。

「大丈夫ですよ。俺は試しの門の事を知つていますから。」
とミケに襲われない正しい入り方を知つてゐると言つ。

「え、本当かい?」

ゼブロは驚いた様子で聞いてくる。

「ええ、あのカギかかかっていないデカイ扉を開けて入ればミケには襲われないのでしょう?」
と言うとゼブロは

「ほひ、本当に知つてゐるんだね。でも君に開けられるのかい？」

そう聞いてきたので俺は守衛室を出て門の前に来て両手を扉に当てる。そして肉体の力だけでは無理だらつから念を使い、思いつきり押した。

するとギイゴオオオオというでかい音が鳴り、3の扉まで開いた。キルアと同レベルかよ…。あこつ念無しでよくここまで開けられるな。

そして手を離し下がる。すると自動的に扉は閉まった。

「これは驚いた。まさかキルア坊っちゃんと同じ3の扉まで開くくとはね。」
ゼブロが「今日は驚かされっぱなしにならねえ。」と言しながらまた驚いていた。

「扉は開けられるんですが、肝心の屋敷は何処にあるのか分からないで困っているんですよ。」

俺の言葉にゼブロは「うへへへん。」と悩んでくる。多分執事室に連絡を取りうか迷つているのだろう。

「じゃ、ちょっと待つて下さいね。」

そう言つてゼブロは守衛室に入り電話をかけた。

「あ、もしもし。こちらゼブロです。」

はい！ 実はですね…えへへ今ここにキルア坊っちゃんの友達という方が見えているんですが…。

はい…はい…はい…すいませんはい…はい…ええ、ええ。
分かります、すいません、はい…はい…失礼します。」

謝りまくりながら電話を切るゼブロ。

「いやへへ。やっぱりしかられちゃつたか。」

困つたようにこちらを見るゼブロ。

「屋敷に電話していただいたのですか？」

俺の質問に

「いや、ゾルディック家の執事にですがね。

屋敷への連絡は全て執事を通すんですよ。家族までは滅多に繋がらないんです。」

困ったように答えるゼブロ。つまり仕事の依頼でも執事を通すのか？トライ面倒だな。

「じゃあもう一度かけて貰えますか？今度は俺が出来ますんで。」

「ええ、良いんですけど。嫌な思いさせちゃいますよ？」

とゼブロはまた受話器を取り、内線番号を押す。

『はいゾルティック家執事室。』

とりあえず最初はキルアの友達のフリをするか、ゼブロがいるし。「もしもし、俺キルアの友達のゴンといいます。キルアはご在宅でしょうか？』

『キルア様に友達などおりません。』

と言われて切られた。

受話器を置き

「何ともまあ、取りつく島も無い感じに切られましたね。」

と苦笑いをしながらゼブロに向つ。

「ですから嫌な思いをさせますと言つたんですよ。」

とゼブロも困ったように呻く。

「うーん…。だったらもう一度かけて貰えますか？今度は別言い方にしますから。」

そう言つてゼブロに向つ。一度かけてくれと頼む。リダイヤルを押せば良いのだが一応聞いとく。

「ええ、良いですけど…。」

と互いに懸いながらも受話器を取り番号を押してくれた。

2 「ホールして

『はい、ゾルディック家執事室です。』

「ゴンニーチハセツキのゴンなんですが、今度は仕事の依頼のためにお電話させていただきました。」

今度は本題に入る。

『仕事の依頼ですか？』

流石に仕事の依頼と聞いたら切らないな。

「はい、依頼したいのでは是非ともゼノさんとシルバさんにお会いしたいのですが。」

『残念ながらゼノ様とシルバ様は現在お忙しく会える状態ではありません。』

キルアのシゴキのためにか？ どんだけ親バカだよ。

「では御用が終わるまで待たせてもらいます。ああ、心配なく、ハンターライセンスを使ってこの国に来ているので何時までも滞在出来ますので、ではゼノさんとシルバさんにそいつをお伝え下さい。」

そう言つてこっちから電話を切つた。

「ええっと…。ゴン君はキルア坊っちゃんに会いに来たのではなかったんですか？」

ゼブロの質問に「ええ、そうですが何か？」と答えたかつたがここは「いえ、第1の目的はキルアに会うためですよ？ 仕事の依頼は第2目的です。

仕事の依頼ならもしかして本邸に行けるかも知れないとから。キルアにはその時に偶然会います。』

と誤魔化す。

「成る程、確かにその手なら可能性は極めて低いですが、無いよりはマシでしょうね。』

とゼブロが乗つてくれた。

「という事でしばらく俺を泊めて貰えませんか？あの様子ではしばらく時間がかかるでしょう。」

と頼み込む。

別にゲートの中で過ごせば良いのだが、この家の敷地内で待つていい。という意味合いを持たせるために守衛小屋に泊めてもらう必要がある。そのためにキルアの友達だと名乗ったのだから。

「ええ、良いですよ。この敷地内に私達守衛の小屋がありますからそこで泊まっていて下さい。」

キルアの友達プラス、仕事の依頼のために。という理由がついたためか快諾してくれた。マジでこの人良い人。

その後、試しの門を開けてゾルティック家の敷地内に入つて直ぐにミケと遭遇。

「コイツマジで犬なんすか…？」

見た目怪獣だぜ？

原作でミケの目を見たゴンは恐いって言つていたけど、俺には何が恐いのか分からぬ。

だって犬の目つて基本黒だからあんまり違いが分かんないんだけど。「コイツがミケです。でも大丈夫です。試しの門から入つて来た人間は襲いません。」

とゼブロが言う。

確かに襲つては来ないけど、いるだけで何か威圧されるんですが…。

ゼブロの案内で使用人の家に到着。

結構デカイ家だけどここに住んでいるのはゼブロとシークアントの二人だけ。無駄じやね？

「交代の時間だよー。」

とゼブロが言う。そうすると扉が開き中から男が出てきた。

「おつと、客人とは珍しい。ゼブロに氣に入られるとは大したガキだな。

まあ、ゆっくりしていきな。この家じゃそうもいかねえだろうがな。

」

シークアントが守衛室に向かう。

交代なら電話で呼べば良いのでは? ていうか電線なんか無いからどうやつて電気を得ているんだ? 自家発電?

ゼブロが片方200kgのドアを軽々開け、玄関に入るとスリッパを勧められた。

「スリッパどうぞ。片方20kgあります。」

とありがたく教えてくれた。何も知らなかつたら履いて歩く瞬間口ケるよな。

「どうも。」

と言つて念を使つて身体強化をして履き、普通にあるく。ていうか何でここは日本式なんだろ? ここの世界は普通靴は脱がないのに。

リビングに入りお茶を淹れて貰つた。

「どうぞ。この湯飲みも20kgあるので氣を付けて。」

と渡された。基本この家にいる時は念は解けないな。

その後はキルアと初めてあつた天空闘技場の時の話やハンター試験の時の話などの話をゼブロにした後は夕食を食い、寝た。布団まで重かつたらどうしようかと思ったが、流石に布団は普通かと安心した。

多分キルアのお仕置き? は20日ぐらいかかるからな。それまでは

ゼノやシルバは仕事をしない可能性があるからな。

それまでは久しぶりに基礎鍛錬や肉体強化をやるか。
何とか肉体の力だけでの試しの門を開けられるようになりたいし。
広い敷地を有効活用させて貰うとするか。

26 まさかの契約（前書き）

主人公にとって初めての予想外の展開に直面します。

ゼノとシルバの返事を待つて2週間が経過した。

その間は念の基礎鍛錬と試しの門を自力で開けるための鍛錬に費やした。その結果、何とか念無しでも1の扉を開ける事に成功した。ちなみに念を込めれば5まで開くよにもなった。

これでようやく基礎能力は原作ゴンにも追いつけて来た。さあて、次は2の門だ。

と思っていたら使用人の小屋に「ゴトーがやって來た。

「ゼノ様とシルバ様がお会いしても良いとの事ですのでついて来て下さい。」

と言われた。

原作よりも若干早いけど、まあ良いか。と思いついて行く。

しばらく山道を歩き、罠を避けるためか途中で横道を通るなどをして執事室に到着した。

やはり本邸ではなく執事室で話すのか。まあ別に良いけど。

ゴトーが扉を開けて「どうぞ。」と言つてくる。やはり依頼人だから扱いは客人か。

中に入りまたゴトーの案内で歩き、大広間へ着いた。

そこには椅子に座っているゼノとシルバがいた。

執事はいなく、ゴトーも案内が終わったらシルバとゼノに礼をして部屋から出でていった。流石に依頼の時は執事は立ち合わないのか。

「それで、お主がワシ等に依頼をしたいと言つとるうらしいな。ゼノが座りながら俺を見ている。

「ええ、お一人に是非とも俺の依頼を聞いていただきたいのです。何しろかなり難しい内容なので。」

旅団殲滅なんて普通の殺し屋には不可能だからな。

「ほお、かなり難しい内容なのか?」

ゼノが聞いてくる。どうやら喋るのはゼノがするらしい。シルバは俺を見ているだけ。

「ええ、依頼内容は幻影旅団殲滅。つまり旅団員13名を皆殺しにしていただきたいのです。」

俺の依頼内容に一人は何かを考えているようだ。まあ、相手が相手だからな。一人でも厄介なのに13人とはな。

「成る程、確かに難しい依頼じゃな。」

「はい、報酬は500億ジエニー。前金として200億、依頼完了後に300億を支払います。更に現時点での全団員の能力もお教えします。いかがでしょう。引き受けただけますか?」

これで引き受けってくれなかつたらマジでヤバい。俺自身で殺るか旅団と合わない事を祈るしかない。

「破格の報酬額じゃが…。旅団の殲滅には割りに合わんな。やはり、まあ予想の範疇だ。」

「では更に100億プラスして600億ジエニーではいかがでしょうか?」

「ここら辺で頷いて貰わないとヤバいな。予算的に。」

「ふーむ。それでも難しいのう。」

「やはりまだ足りないか?」

「では幾らなら引き受けて下さいますか?そちらの要望をお聞かせ下さい。」

「ふむ、ではさつきの600億と全団員の能力プラス、キルを連れていつてくれんか？」

……はあ？

え、何この展開？何で俺が新たに荷物を背負わなきゃならないの？

「……いや、何でここにキルアが出て来るんですか？」

俺の質問に今度はシルバが話した。

「キルには経験が足りない。だからお前について行けば何らかでも経験を得られるだろ。」

ああ、原作通り可愛い子には旅をさせよ。か？ふざけんなよ。

「何で俺が念も覚えていないガキのお守りをしなくちゃいけねえんだよ。足手まといになるのがオチだ。」

最早面倒だから敬語は使わず言いたいように言つ。

「確かにキルはまだ念すら覚えて無い。だからお前がキルに念を教えて欲しい。」

シルバが真剣な顔をして言つ。

「何で俺？自分達で教えれば良いだろ？大事な大事な家族なんだろ？」

てめえは歪んではいるけど立派な親バカの癖に。

「お前はキルの友達なんだろ？」

そこを突きますか…。

「あれは使用人の小屋に泊めて貰うためについた嘘で、キルアは俺を友達だと思つているらしいが、残念ながら俺はアイツのことを何も思つちゃいねえよ。」

「

本音を言つてやったのにシルバは少し笑い

「それが、良いんだ。キルは何れは俺の跡を継ぐ。だからある程度外の世界を経験して強くなり、戻ってくる筈だ。」

だからキルの事を何とも思っていないお前みたいな奴にキルを鍛えて欲しいんだ。」

何その教育方針。俺は教育係かよ。

「それに、その条件でなければお前の依頼は受けない。

幻影旅団殲滅なんて依頼を受けるんだ、それぐらいして貰わないと割りに合わない。」

シルバが俺の痛い所を突いて来やがつた。確かに依頼は是が非でも受けて欲しい。

でもその代わりよつやく終わつた原作ルートがまた再びやつて来る。ゼノの方を見たがシルバに賛成しているのかただ見て来るばかり。

「……一つ聞く、キルアを鍛えるやり方は俺が自由に決めて良いんだな？」

「ああ、お前のシゴキでキルアが死んだとしても故意では無いのなら問題無い。」

つまりわざと不可能な課題を突き付けて殺せば俺も殺されるらしくな。

「本当に俺で良いのか？自分で言つのも何だが俺の戦闘スタイルは奇襲や騙し討ちで勝つか、勝てなきや逃げるタイプだ。

そんなスタイルをキルアも習得したら不味いのでは？」

俺の最後の警告にゼノが笑い

「それこそ望む所じや、お主のスタイルは正に暗殺者向き。むしろキルにはお主のようになつて欲しい。」

と言われた。

確かに俺は確実に勝てるという確信が無い限り逃げるタイプだから暗殺者に向いている。

「なら仕方ない。では代わりに報酬の支払い方法は依頼完了後に全額支払う方式に変更だ。

それと殺したら全員念のために首を落とした写真を俺の携帯に送ってくれ、奴等が死んだ。という確証が欲しいんでね。

後、アンタ等の他にもイルミと一緒に頼むよ。イルミは確か団長と親交があつたから邪魔されるといけないからアンタ等と一緒にこの仕事を依頼しとく。

「…ああ、問題無いじゃろ。」

とゼノが答えた事により、依頼は契約された。

そして全団員が8月30日にヨークシンに集合する事や、各団員の能力、特徴、知る限りの性格、性別などを書いた紙を渡した。

「ああ、それと、団員N.O.4のヒソカという奴は実は団員ではなく、団長と戦うためだけに旅団に入った奴だから、団員では無いが殺してくれ。

アイツを放置すると面倒になるからな。頼んだぞ。」とヒソカ殺害を念押しした。

こうして幻影旅団殲滅という依頼の代わりにキルアという新たな荷物を抱える事になった。

キルアは1週間後には開放するからこのまま執事室で待っているようだ。といふ事になつた。

マジでどうしよう。でもここでキルアを引き取らないと依頼は受けてくれなかつただろうからこうするしか無かつたのだ。

多分無いとは思うが、もし原作の修正力で旅団と鉢合わせでもしたらかなり面倒だし、一気に殲滅させるのはまず不可能だからゾルディック家に依頼したのだ。

キルアの子守なら最悪ウイングやビスケに任せれば勝手に成長する。

それにキルアの性格なら俺のやり方にいちいち口出しするなどの面倒は起こさないだろう。

だから断腸の思いでキルアを引き取った。また原作をある程度守る日々が来るな…。

俺だけなら大抵はゲートに逃げれば良いけど、制約のせいでのキルアはゲートを潜れない。だからキルアが死ぬ危険性が非常に高い。面倒がある程度俺もキルアを鍛える必要がある。もし見捨てたらあの家族が黙つているとは思えない。

とんだ爆弾を抱える事になつたな。

それに今まで面倒な移動はゲートでやつていたけど、これからしばらくな普通に歩いたりする必要がある。面倒くせえ。

とりあえず最初はキルアに念能力を覚えさせるために天空闘技場に行くべきか。ウイングに任せればあの才能で何とかなる筈だ。

でも天空闘技場に行くとヒソカがいる可能性が高いな。

俺がキルアに念を教えれば良いかも知れないが、どうやって教えたら良いか分からぬ。おれ自身独学でここまで来たんだ。誰かを教えるなんて出来ないし面倒だから極力やりたくない。だから教えるのが得意なウイングに任せたい。

ゴンの代わりにズシと切磋琢磨して欲しい。何ならそのままズシと頑張つて欲しい。

幸いあのクソオヤジに言われたのは「念を教えて欲しい。」だけで時間拘束はしていない。だから念をある程度覚えさせさえすれば良いんだ。

別にその後キルアが家に帰んなくとも俺に責任は無い。

27 金が無いって不安だよね（前書き）

ここからは概ね原作に沿います。

27
金が無いって不安だよね

1週間を執事室で過ごし、一応はVIP待遇を受けたのだが、気分はどん底だ。

何しろようやく荷物を下ろせたかと思えばまた新たな荷物を背負わされたのだ。気分が良い訳無い。

執事室にて優雅に朝食を食べていると「ゴーーーン！…」といつ一度と聞きたく無かつた声を聞いた。せめて朝食が終わってから来るよ。

「ノン！」

と俺を見て嬉しそうに詫うキルア。

よお、久しぶりギルア。

と軽く返す

久松義之

「にしてもまさか、ゴンが来てくれるなんてなあ。親父から、ゴンが待つ
ているなんて聞かされた時は耳を疑つたぜ？」

俺も信じられないよ。予定では既に俺はこの国にいない筈だつたからな。

「お前の親父と爺さんに一杯食わされてな。」

キルアを押し付けといて更に600億も取られたしな。子供を押しつけるなら金返せよ。と言つたら「タダじや殺れん。」とか返されたしな。

「はあ？」

とキルアは分からぬといつよつに疑問を浮かべている。

お前は600億で売られたんだよ。スゲえ価値だな。俺だったら600円でも欲しくねえよ。

「まあ、良いや。早速だけ出発しよーぜ。とにかくビリでも良から。ここにこるとお袋がうるせーからさ。じゃーなー！」

あ、そーだゴトーア。良いか？お袋に向く何を言われてもついてくんなんや！

キルアの念押しにてーは頭を下げて

「承知しました。いってらっしゃいませ。」と言つ。

キルアと一緒に行こうとしたら

「ゴン様。何卒、キルア様をよろしくお願ひ致します。」

と頭を下げてきた。

俺はそれに黙つてうなずいて返す。

本音はだつたらお前が教育しろよ。と言いたい。テメエら執事は全員念能力者なんだから可能だろ？

観光バスが来る時間にはまだ早いので仕方なく山を徒歩で下山してようやく街についた。

「それで。お前は親父に何て言われて解放されたんだ？」
と聞くと

「ああ、何かゴンに付いていつて強さを学べって言われた。後は絶対仲間を裏切るな。って誓わされたな。」
概ね現在通りか。

「それで？何でゴンはわざわざ俺ん家に来たの？まさか俺を向かいに来るタメじゃねえだろ？」

流石多少の付き合いがあるからか俺の性格をある程度分かっているな。

「ああ、わざわざお前の家に来たのは仕事を依頼するためだ。内容は教えないけど、その依頼条件として600億を支払うこととお前を連れていく事になつたんだよ。」

いくら金持ちの家でも600億は大金らしくキルアは目を広げて「600億！？…そりや随分難しい仕事を依頼したんだろうな。それで俺を連れていく事になつたって事は…。」

「そういう事、つまり俺は嫌々お前を同行させる事になつたって事だ。分かつたか？」

俺が何故自分を連れていく事にしたのかが良く理解出来たのかキルアは苦笑いして

「成る程、それなら納得だ。ゴンがわざわざ俺を連れていく理由がようやく分かったよ。」

と言つ。

酷え言われようだな。まあ、確かに俺らしいが。

「はつきり言つてお前は弱い。」

いきなりの俺の宣告にキルアは「ム！」と若干青筋を立てる。

「純粋な身体能力で勝負すれば大抵の人間には負けないだろうが、お前にあるモノが決定的に足りない。」

念能力を持たないと身体能力なんて無意味になるからな。

「何だよ？その足りないモノつて？」

キルアが不機嫌そうに言つ。まあ、こんな言い方されたら誰だってムカつくがな。

「例えばだ。お前、兄貴と対峙すると何か嫌々な感じがしないか？」
思い当たる節があるのかキルアは少し考えた後に「ああ、ある。」
と答えた。

そして俺は練をして害意を持つてキルアに念を飛ばした。

すると直ぐに反応してキルアは急いで後ろに飛び去った。

「感じたか？それがお前に足りないモノだ。」

キルアはしばらく俺を警戒しているかのように見ていたが、練を解いて普通の纏に戻つたので害意を感じないからか戻ってきた。

「…あれって何かの技なのか？」

今まで兄貴にしか感じなかつたあの感じを俺にも感じたんだ。ならば何らかの技と思うのは不思議は無い。

「ああ、そうだ。俺はあれに対抗出来るようにお前を鍛えてくれ。とお前の親父に頼まれたんだ。」

「あれに対抗出来る方法があるのか！？」

勢い良く聞いてくるキルア。

今まで成す術無かつた感覚に対抗出来るといつのが魅力的なのだろう。

「まあな。それよりもキルア。お前金は持つているか？」
いきなりの話題転換に顔をしかめ
「何だよ。いきなり。まあ、実はあんまり持つてない。」
「そうか、ついでに言つと俺もあんまり持つてない。お前の親父と爺さんにたんまり取られたからな。」「
憎々しそうにキルアを見る。

キルアはどう反応して良いのか分からないので愛想笑いを浮かべる。

「そこでだ、お前が欲しがつているこの力と金を手に入れられる手

つ取り早い所がある。」「

俺の提案にキルアは

「マジ? そんな良い所があるの?」

と笑顔で聞いてくる。こういう所はガキだよな。

「ああ、俺達が出会った場所。天空闘技場だ。」「

俺のセリフにキルアが首を傾げる。

「え、天空闘技場? 確かに金も稼げてある程度の修行になるけど、あそこでの感じはしたことが無いけど?」「

「とにかく行くぞ。後は行つてから説明してやる。」「

そう言って飛行船のキップを買いに行く。キルアは納得してはいな
いが、ゴンについて行くしか無いので言われた通り自腹で天空闘技
場行きのキップを買い、飛行船に乗った。

飛行船が天空闘技場の最寄りの空港に到着し、現在あのバカみたい
な行列に並んでいる。

「相変わらずこの行列はウゼエな。」「

俺のイラつきを無視してキルアが聞いてくる。

「そんな事より、いい加減教えてくれよゴン。」「

と急がす。別に教えても良いんだが、俺は教育する気は無いので。

「まだだ、とりあえず今は登録をするぞ。運が良ければ今日にも答
えが分かるぞ。」「

と意味深なセリフを言う。

聞いても無駄だと察したのかキルアはブー垂れた顔をして登録用紙
を記入する。

「格闘技歴10年つて書いとけよ。早く上に行きたいから。
と受付に聞こえない声で言う。

キルアもそれは賛成なのか「ああそうだな。」と直ぐに納得して記
入する。

そして俺も登録をして係員の案内で会場に入る。

中は以前見た光景と全く変わっていない。まるでタイムスリップしたかのようだ。

「なつかしいな～～。ちっとも変わってねーや。」

「ああ、確かに。異常な程変わっていないな。」

キルアと軽くお喋りしながら椅子に座る。

「そうそう、お前前に200階まで行って登録せずに帰ったよな？」
俺の質問に「ああ、別に200階に興味無かつたからな。」と軽く
答える。お前がそのまま200階に行っていれば多分洗礼を浴びて
覚えたか死んだのだろうがな。
それなら俺も楽だったのに。

「だつたら多分お前は150階以上に進めって言われるだろうが、
50階に進め。」

そうしないとズシに会えないからな。

「ええ～～～。何で？ 楽で良いじやん？」

当然の疑問としてキルアが聞いてくる。

「良いから50階にしどけ。ある程度時間が欲しいからな。
と返す。

「時間？」

とキルアが聞いてくるが丁度良く俺の番号が呼ばれたので行く。

「良いか？50階だぞ？もしも無視しやがつたらお前、分かるよな
あ？」

笑顔でキルアを見る。目は笑わないが。

キルアもハンター試験でその笑顔を見せる時はマジだと分かっているから「わ、分かったよ。」と素直に聞く。

対戦相手の首筋に手刀を当てて一発でダウンさせて終了させた。さつきまでは俺の事を罵倒していた声援は消えた。

「おや、キミは以前200階クラスの選手だったんだね。今の動きも素晴らしいかった。

「200階まで行きなさい。」

いきなり金が手に入らない200階を進められるのはな。

「いえ、150階をお願いします。肩慣らしをしたいので。」

そう言って200階から150階に下げて貰った。150階からなら1000万以上を貰えるからな。

キルアの方も終わつたらしい。

やはり180階に行けつて言っていたが、ちゃんと「あ、オレ50階でいいよ。ゆっくり行きたいから。」と50階にして貰った。そして「こっちにももう一人いた――！」という観客の声が聞こえたので見てみると、胴着姿のボウズ頭のガキが大男を殴り飛ばしていた。

「50階への入階を許可します。」
と審判に言われて「押忍！！」と返事を返していた。
どう見てもズシだ。どうやらワイングもいるようだな。
これで念の修行を頼める人が出来た。

その後、俺は150階なんだがワイングとの顔合わせのために50階で降りた。

そこで俺、キルア、ズシの三人が何となく集まり。

「押忍！」

と先ずはズシが挨拶してきた。この世界でこんな挨拶があるとはな

……。

「自分、ズシと言います！お2人は？」

「オレキルア。」

「俺は「ゴン。 ようじく。」

と軽く挨拶する。

確かにまだ弱いが纏を張っているな。まあ、まだ纏だけのようだが。

三人で歩きながら報酬を受け取りに行く。

「さつきの試合拝見しました。いや——すゞこつすね!」

ズシは感動したかのように言う。

「何言つてんだよ。お前だつてこの階まで一気に来たんだろ?」

キルアが笑顔で言う。確かにこのぐらこの年で一気に50階つてスゲエよな。

「ゴンさんなんて一気に150階なんて凄すぎです! 尊敬します!」
とキラキラした目で見てきた。本当にいるんだな、曇りの無い目をした奴つて。

「ちなみにお一人の流派は何すか? 自分は心源流拳法つす!...」
とわざわざ珍しく構えて言う。礼儀正しいけど、それはウザいだけだ。

「別に、無いよな...。」

とキルアが俺を見てくる。それには同意なので頷く。
「ええ!...」

誰の指導もなくあの強さなんすか...。ちょっとびり自分ショックつす。
やつぱり自分まだまだっす!...」
と自分で自分を鼓舞させる。

キルアはそれを「何だかなー」と呆れたように見る。

「ズシ! よくやつた。」

という声と拍手をしている音が後ろから聞こえた。

後ろを見ると寝癖が酷い髪型とシャツをズボンから中途半端に出し

ている男がいた。初期のウイングの格好つてヒテヒよな。

「師範代！」

とズシが返事をする。

「ちゃんと教えを守つていたね。」

ウイングが笑顔で言つ。

「押忍！光榮す。師範代、またシャツが。」

とズシに注意をされ

「あッ、ゴメン。ゴメン。」

と謝りながらシャツをズボンに入れる。何で毎回出てるんだろう？
ワザと？

「そちらは？」

とウイングが俺達の事を聞いてきたので

「あ、キルアさんとゴンさんす。」と紹介する。

「はじめまして、ウイングです。」

と挨拶してきたので何故かキルアは「オス！」と挨拶する。俺は「

どいつも。」で終わつたが。

「まさかズシ以外に子供が来ているなんて思わなかつたよ。
君達はなんでここに？」

とウイングに聞かれたのでキルアは俺に話すか？と田代で聞いてきた
ので首を横に振る。

「えーと…まあ、強くなるためなんだけど。オレ達全然金無くて
小遣い稼ぎも兼ねてんだけだ。」

キルアの説明に「俺達ここの経験者なんです。」と補足する。

「さうか…ここまで来るくらいだからそれなりの腕なんだうづけ
ど、くれぐれも相手と自分、相互の体を気遣うようにな。」

と言つ。若干俺を見て言つているのは氣のせいだろ？

か？

「いらっしゃいませ。キルア様、ゴン様、ズシ様ですね。チケットをお願いします。」

三人分のチケットを受付に渡す。

「はい！こちらが先程のファイトマネーです。」

と封筒三枚を出してきた。中身を見るとやつぱり152ジユニー。

「152ジユニー…。缶ジュース一本分ですね。」

ズシが微妙。という顔をしている。

「1階は買つても負けてもジューク一本分のギャラ。だけど次の階からは負けたらゼロ！」

50階なら勝てば5万は貰えるかな。」

キルアの説明に「結構貰えるつすね。」と喜ぶ。子供だねえ。

「100階なら100万くらいかな？」

その言葉にズシは目を見開く。

「150階を越えるとギャラも1000万を楽に越す。」

「いつ！」

と絶句するズシ。堅気で生活していたら先ず見る事は無い数値だからな。

「そういうやキルア、お前200階までは行つたじやん？その金はもう無いのか？」

分かっているが一応聞いとく。

「4年前だぜ？残つている訳ないじゃん。全部お菓子代に消えたつ

つーの。」

という衝撃の言葉を残した。

「確かに190階クラスで勝つと2億は貰える筈だけど、それがお菓子代にか？」

と聞くと「ああ、当たり前じゃん。」と返された。お前どんな菓子食つてんだ？

「そりいえばゴンさんはどれくらいまで行つたすか？」

ズシから聞かれて、正直に答えるべきか？と悩んだが、別に嘘つく必要は無いので

「俺は200階クラスで負けて止めた。」

嘘は言つていない。ワザと負けで登録を抹消されたんだ。

あれ？でもさつきの審判は以前200階まで行つているって言つたな。つまり一階から再挑戦すれば良いだけなのか？まあ良いや。

「ゴンさんも200階まで行つたすか！？お一人共凄いす！」

と言われた。

「それじゃ、俺は自室に行くから。一人とも頑張れよ。

あ、キルアは次の試合が終わったら俺の部屋に来いよ。」

そう言つて俺はエレベーターに乗つて自室に向かつた。

部屋はまあ、普通のシングルルームだ。

懐かしいっちゃ懐かしいな。でもテレビが無いから暇を潰せねえ。

仕方ないからテレビを出してベランダにアンテナを建てて受信した。

これで一応見れる。

この部屋を出るときは置いておけば良い。アパートとかで冷蔵庫やテレビを置いていくのと一緒にだ。

後はキルアが来るのを待つだけ。

ウイングやズシが泊まっている宿はそこらへんに聞き込みすれば直ぐに分かる。何せここでガキ連れなんてかなり目立つからな。

しばらくしてキルアが俺の部屋に来た。

「よお、結構かかったな。」

キルアに言つ。

「…ああ、ちよつと手こねずつちました。」

と悔しそうに言つ。

「ふーん…。もしかして相手はズシだったか？」

俺の質問にキルアは

「何で分かつたんだ？」

と不思議そうに聞く。

しかしそれを無視して

「ズシは強かつたか？」

と質問した。

はぐらかされたので多少ムッとしたが、気を取り直してキルアは答える。

「いや全然。素質はあるよ。あいつ強くなる。

でも今はまだオレから見ればスキだらけだしパンチもノロイ。殴りたい放題だったよ。

：なのに倒せなかつた。

悔しそうに言うキルア。

「それに、アイツが構えを変えた途端、兄貴や『コンと回じよつなイヤな感じかしたんだ。

何か…。分かんないけどヤバい感じ。やっぱりあれは技なんだな。」

キルアは断定系を使った。まあ、流石に三人も同じような感じがしたら断定出来るわな。

「思つたより早く遭遇できたな。」

と俺が呟つと

「何と?」

「念とれ。」

そう答えて俺は身支度を始める。

それを見たキルアは

「あれ、どつか出かけんのか?」

と聞いてきたので

「お前も一緒だ。ついてこい。」

と言つて部屋を出た。それを聞いてキルアはどうに行くのか分から
ないがどうあえず急いで付いていった。

天空闘技場近くの安ホテルにズシとウイングが泊まつていなか聞き込みをしてようやく見つけた。

従業員に金を掏ませて部屋を教えてもらい、ドアをノックする。

「はい、どなたですか?」

と返つて來たので

「先程お会いしたゴンです。お話したいことがあります。」

と丁寧に返す。これから頼み事をするんだから下手に出なぐてはな。
少ししてウイングがドアを開けてくれた。

「どうしたんですか?」

とウイングが聞いてくる。まあ、どの宿に泊まつているかを教えて
いないのに來たから警戒しているな。

「先ずは突然の訪問に答えてくれてありがとうございます。」

ちなみにこの部屋を突き止めたのは周囲に聞き込みをしたからです。
この界隈で子連れは珍しいから簡単に見つかりましたよ。」

自分の疑問に答えてくれたからその疑問は消えたが、また新たな疑

問が浮上しているな。何をしにきたのか。

「すみません、入つてもよろしいでしょうか？少し込み入つた話をしたいので。念について。」

俺は隣にいたキルアを見て呟つ。それでウイングは理解したのか素直に入ってくれた。

キルアと一緒にいると中にはズシもいた。ズシにも「よ、さつきぶり。」と挨拶する。ズシは「はい、さつきぶりですね。」と普通に返してきた。

「それで？お話とは何でしようか？」

とウイングが聞いてきたので单刀直入に言った。

「キルアに念を教えて欲しいんです。」

その答えは予想出来ていただろうが、いきなり言われるとは思わなかつたのかウイングは驚いた。

「なあゴン。さつきも聞いたけどネンって何だよ？」

キルアが聞いてきた。

「念とはな、簡単に言ひとお前の兄貴や俺、ズシが出したあのイヤな感じの事だ。」

それを聞いてキルアは「やつぱりあれは技なんだな。」と改めて納得した。

「どうしてキルア君に念を教えるんですか？」

ウイングが真剣な顔をして聞いてきた。

「実はコイツの親から念を教えてやつて欲しいって頼まれたんです
が、俺は念を我流で覚えたので指導方法が分からんんですよね。
だから経験豊富そうな念の使い手を探してここに来たんですね。そし
てアナタに出会つたのでは是非とも指導をお願いしたいのです。」
それを聞いたウイングは腕を組み、少し思案した後に

「何故私に指導を乞うのですか？」

ワインングが聞いてきた。まあ、まだ口クに話した事さえない奴に大事な修行を頼みに来たんだからな。

「それはズシが自分の流派は心源流拳法だ。と言い、そしてそのズシが貴方を師範代だと言つ事は貴方は心源流の師範代だと言つことになる。

つまり貴方はちゃんとした指導者だという事が分かったので貴方にお願ひさせていただきました。

どうか、どうかキルアの念の指導をお願い致します。」

と頭を下げる。

ワインングやキルアはいきなりゴンが頭を下げてきた事に驚いていた。ワインングはこの年頃の子供にしては礼儀正しくお願ひし、頭も下げてまでお願ひしてきた事に驚き、キルアはあのゴンが人に頭を下げるという光景に目を疑つた。同時に、自分のためにそこまでしてくれることなんて。とキルアは嬉しくなつた。

「ワインングさん、お願ひします。」

と慣れない敬語を使ってキルアも頭を下げてお願いする。

しばらく一人の子供が大人に頭を下げるという光景が続き

「…ふう。分かりました。キルア君の念の指導を引き受けます。」

と根負けしたようにワインングが言つ。

それを聞いてゴンとキルアは頭を上げて「ありがとうございますー。」と言つ。

よつやく受けたか。

まあ、ワインングの性格なら子供から頭を下げられて懇願すれば折れると思っていたから計算通りだ。まさかキルアも敬語で頭を下げる

とは思わなかつたが、それのおかげで決定打になつたな。

「いやーー良かつた。これでキルアは洗礼を受けずに済むな。」

「洗礼？」

とキルアが聞いてきたので

「200階クラスは全員が念の使い手なんだ。だから念を知らない新人は必ず手痛い洗礼を受ける。

これに生き残つた者は念能力者になれるけどな。」

まだ念について何も説明していないのでキルアはひたすら「？？？」の状態だ。

「詳しいですね。ゴン君。」

とウイングが言つてくる。

「まあ、俺も昔は200階クラスにいましたからね。4敗して失格になりましたけど。」

ウイングは「ほお～。」と納得するがキルアは

「そういえばゴンって200階クラスにいつたんだ？俺がいた時は200階クラスはギャラが出ないから150～190階クラスをウロウロしてたけど。」

「ああ、お前が天空闘技場を出た後に修行として200階クラスに上がつたんだよ。」

「ふーん。ゴンが八歳の頃、だけど4敗もしたのか…。つーことは200階つてスゲェのか？」

ウイングとズシは「八歳！？」とビックリしていた。

「結構焦つたんだぜ？このまま順当に行けばお前は1週間後には200階クラスに行つていただろから、もしもウイングさんが引き受けてくれなかつたら確実に洗礼を受けていたからな。まあ、もし断られたら無理矢理起こすつもりだつたけど。」

「無理矢理起こすつて何をだ？」

とキルアが聞いてきたので

「すいませんワイングさん。 キルアに念についての説明をお願い出来ますか？」

と頼んで丸投げした。

ワイングが花瓶に周をした花を投げて突き刺すなどして念とは何かをキルアに教えている。更に壁を破壊するという凄いのを見せてキルアに念の恐ろしさを教えている。でもその壁、ホテルの壁だから弁償ものだな。かなりかかりそう。

ある程度説明が終わつて精孔を開ける方法に移つた。

ワイングが無理矢理起こすかゆつくり起こすかを教えるとキルアは手つ取り早く無理矢理起こす方法が良いと言つ。確かに楽だけで失敗したら最低1週間は全身疲労で動けなくなるぜ。

ワイングはズシのようにゆっくり起こす方法を勧める。原作と違つて別に時間制限は無いしな。

「よく分かんないな。無理矢理であれより早く目覚める方が良いに決まつてんじやん。」

と尚もキルアは食い下がる。流石に半年もかかるのは嫌らしい。俺は頑張つたというのに。

「キルア、無理矢理起こす方法を取るなら俺が起こしてやろうか？」
と腕に凝でオーラを込める。

オーラは見えないがかなりの量を込めたから何かヤバい。とは分かつたらしく勢いよく反対側に下がつた。
それを見て凝を解く。

「あのなあキルア、無理矢理起こす方法を取るなら何もワイングさんに頼みに来ねえんだよ。

この方法だと成功しなければ全身疲労に陥つてしまふ動けない看

護生活を送る事になる。だから危険性の無いよう「ウイングせんに頼みに来たんだ。」

と説明するとキルアも一応理解したらしいが

「でも半年もかかるんだぜ？」

と反論してくる。

「それはズシは。だろ？

安心しろ。ムカつくがお前は才能の塊だ。多分オーラの感じを掴み取るのに1週間もかからねえだろう。纏もそれぐらいで習得するだろ？」「

その言葉にキルアは

「マジ！？1週間で出来るの！？」

と驚きながら聞いてきた。

俺はウイングを見て

「ですよね？」と聞く。

ウイングもキルアの才能は分かるのか「その可能性が高いですね」と答える。ズシは「自分は半年だったのに…。」といじける。

「だから安心な方法でやれ、大丈夫、もし200階にいく迄に間に合わなかつたら俺が無理矢理起こして習得させてやるよ。」

と笑顔でキルアに言う。キルアは青ざめているが。

ウイングから見られるが、念で「大丈夫、奮起させているだけで本当にしませんよ。」と書く。それを見てウイングは安心したかのように視線を戻す。

「そうそ、ちなみに俺も纏を習得するまで半年かかつたけど、お前は1週間でやれるよな？」

と笑顔で聞く。

キルアは「ゴンで半年つて、俺が1週間で出来る確率あんのかよ！？」と喚ぐが無視だ。

さて、これで大丈夫だ。コイツの才能なら多分3日かそこらで感覚を掴むだろう。

原作とは違つて俺が念の使い手だからウイングが積極的に動いてくれるとは限らないからこちらから積極的に動いた。

キルアは今は60階クラスだ。原作でも200階クラスにたどり着くには最低でも3日以上はかかりていたから念を覚えるために調整しても1週間で200階クラスに行けるだろう。

ちなみに悪いニュースだ。

やつぱりここにヒソカがいた。調べてみると200階クラスの闘士として登録されている。

原作と違つて俺はそこまで注目されていなかつたけど、一応「青い果実」判定は貰っているし、キルアが代わりにお気に入りになつているからキルアと戦いたがるかも…。

でもキルアの性格上受ける訳無いし、凝で調べたらやつぱりイルミの針が刺さっているから危険を感じるか条件が合致したら思考を少なりとも操れる筈だ。

あれ抜くか？

29 才能の差

あの後話し合いの結果、キルアは100階クラスに到達するまではワイング達の宿に泊めて貰つてそのまま纏を会得するために瞑想や禅をしている事に決まった。

試合がある日は（というか毎日）天空闘技場に行つて試合をして終わつたら帰るかワイングやズシと一緒に俺の部屋に来て瞑想している。おかげで家主の俺が何故かキルア達がいる時は部屋を出でていなくてはならない。

確かに効率を上げるために俺が試合中の時やいない時は部屋を使つても良いとは言つたが、毎日いて良いとは言つていない。しかしキルアには早く覚えて欲しいので仕方なく許可した。

おかげでキルアが100階に上がるまでの3日間を俺はほとんど外で過ごす羽目になった。200階クラスの部屋なら広いから俺もいることが出来るが、100階クラスの部屋はシングルだから狭い。キルアが瞑想している横でテレビを見ているとワイングさんから「邪魔です。」とか言われたしな。だからわざわざホテルの部屋を取つてそこで過ごしていた。

3日経ち、キルアが100階クラスに上がれた事で個室を獲得し、そつちで修行をする事になつたからようやく部屋を取り戻せた。ホテル代なんてたかが知れてるけど、やっぱり必要な無い金を使うのは気に入らない。

ちなみに俺も毎日では無いが試合をしている。

600億の穴埋めとして地道?に稼ぐ必要がある。だから150~190階をウロウロしている。

一応気を使って負ける時はちゃんと負けてる。ただ試合同時にギブアップしたり会場に来ない方が楽だが、あまりにヤル気が無いと登録をまた抹消されかねない。

だからわざわざ観客が喜ぶように接戦にしてたまに勝ちたまに負ける。一々面倒だが簡単に金が手に入るんだ。演技ぐらいする。それに前みたいに仲介人を挟んで勝つ時は自分に負ける時は相手に多額の金を賭けて払戻金でまた儲ける。これで倍以上にも儲けられる。ある意味ハ百長か？

やつぱりコイツ異常。

キルアが150階に到達した頃には纏を習得していた。

その異常な速さにはワイングも驚きのあまりか言葉を失うし、ズシは自分が半年かけたのを僅か1週間にも満たない時間で見事習得されたのでガックリしている。

ちなみに俺もガックリだ。俺も精孔を開くだけなら一月程度で覚えられたが、それを纏に持つていくのに半年かかった。聞いた話ではコイツは一発で会得したらしい。

「へへーーん。どうだゴン。俺の方が早く覚えられたな。」

と笑顔でサインするコイツの指を引きちぎりたくなったのは仕方ないだろう？

ムカついたから「キルアの纏を試してやる。」という名目でまだ弱々しい纏しか出来ないキルアに物凄い殺氣を込めたオーラを当ててやつた。

常人なら死ぬだろう量を当ててやつたら流石に死にはしなかつたが物凄いビビったのか部屋から逃げ出した。ちなみにズシは気絶してウイングからは殴られた。

11才の子供のお茶目な行動に殴るなよ。

30 残酷な宣言

キルアが遂に200階に到着した。

ちなみに俺と当たる事は無かつた。もし当たつていたらキルアを負かして儲けるつもりだった。

アイツは負け無しでここまで来たから自然に俺の方が倍率は高い。まあ、俺はこのクラスに来て以来負けたり勝つたりを繰り返しているだけだからな。

纏を完全に会得したキルアは現在練の習得をしている。

と言つてもあのふざけた才能のおかげかもうほとんど習得している。ズシや俺が何週間も使って覚えた練つたオーラを纏で留めるタイミングなども僅か1日足らずで覚えやがった。

あれ？確かにゴンってキルアと同じぐらい天性の才能があつた筈なのに、何でこんなに差が開くんだ？

もしかして精神が俺だから？

俺って才能をマイナスにでもする能力があるのか？それともただの足手まとい？

まあ、良いや。今更考えても仕方ない。練を覚えたのは4才の時だ。年のせいなんだ。きっとそいつだ。といつかそうであつてくれ……。

ちなみにキルアの才能をまさまさと見せられたズシと俺はあの後世の中の不条理さを愚痴りあつた。ズシも俺もある程度才能はあるんだが、キルアみたいな反則野郎はムカついてくるものだ。

エレベーターに乗り200階を目指す。

本当はこのままエレベーターを降りてヒソカと再開なんでしたくなかったが、アイツの性格上、無視するとあっちから会いに来る可能性があつたからこっちから会う事にした。

まあ、でもこの世界では俺がヒソカと会話したのは一次試験の時以来だからあんまり俺に興味は無いだろう。代わりにキルアに興味が行くだろうから。

エレベーターが200階に着き、登録のためにカウンターに向かおうとしたらやはり強烈な殺気が乗ったオーラが飛んで来た。キルアは一瞬ビビって下がりかけたが纏をしてオーラから身を守つた。

「随分なお出迎えだな。」

俺の言葉に肯定なのかキルアは「ああ。」と良いながら汗を拭い。

「そこにいる奴、出てこいよ。」

と言つ。やっぱり纏が出来るからか原作よりも冷静だな。

ヒョウ。と天空闘技場スタッフが出てきた。

「キルア様ですね。あちらに受付がございますので今日中に200階クラス参戦の登録を行なつて下さい。今夜の0時を過ぎますと登録不可能になりますのでご注意下さい。

ちなみに200階クラスには現在173名の選手が待機しております。また、このフロアからあらゆる武器の使用が認められますのでお持ちならどうぞ。」

長々と説明をしてくれた。

「この殺氣はアイツか？」

キルアが俺に聞いてきた。

「いや、多分違う。この殺氣、というかオーラは多分…。」

俺らの会話を無視してスタッフが補足情報を伝えてくる。

「また、このクラスから原則としてファイトマネーはなくなります。

名譽のみの戦いとなりますので納得された上でご参加下さい。」

このルールがあるから200階クラスに上がるメリットが少ないんだよなあ。無ければ200階クラスに上がつても良いんだけど。

スタッフの説明が終わるとアイツが出てきた。まるでホラー映画みたいだ。

「ヒソカ！？」

キルアが叫ぶ。まあ、いるなんて知らなかつたからな。

「お前、俺達を先回りしやがつたか？」

俺の質問に「くっくっく」と一笑いした後に答えた。

「その通り、電腦ネットで飛行機のチケットを手配しだろう？あれはちょっとした操作で誰が何処へ何時行くのかが簡単に検索できるんだ。後は私用船で先回りして空港で待ち後を尾けた。まあ、ここに来るのは予想外だつたけど。」

原作と違つて俺はヒソカに借りは無いからこゝに来る理由が分からぬしな。

「試験の時にキミは使えたけどキミは使えなかつたからそれを忠告するために待つていたけど…。その必要は無かつたようだね。

キミが教えたのかい？」

ヒソカは俺を見ながら聞く。

「いや、俺じゃなく別の奴にだ。俺は教えるのが苦手でね。」

「ふーん。にしても意外だつたね。君達がまだ一緒にいるなんて。ヒソカから見れば俺がなんでキルアと一緒にいる事が理解出来ないんだろう。俺だつて理解したくなえよ。」

「ちょっと事情があつて『イツを鍛える事になつた。

お前としては手間が省けてありがたいだろ？』

そう聞くとヒソカはまた一笑いして

「確かにそうだね。キミが育ってくれるなら熟れるのが早くなりそうだし、もつとおいしく育ちそうだ。」

満面の笑みでキルアを見るヒソカ。

キルアは「どういう事だ！？」と俺に詰め寄る。何せ自分を狙っている宣言をされたからな。

「つまり俺よりもお前の方がこの先成長したらおいしくなりそうだからお前をターゲットに決めたらしいぞ？」

そう伝えるとキルアはガックリとして虚ろな目をする。ヒソカのターゲットにされるなんて悪夢以外の何物でもない。御愁傷様。

「うーん、僕としては先に君を食べても良いんだけど…。君もまだまだ青い果実だからなあ。」

どうやら俺もまだターゲットに入っているらしい。

「ちなみに俺はここでお前と戦つつもりは無いぞ？ここに来たのはキルアに念を習得させるためと金稼ぎだ。

だからお前がどうしても戦いたいと言つたら即刻逃げる。代わりにキルアを置いていくけど。」

「オレを置いていくのかよ！？」

キルアは俺のいきなりの見捨てる発言にまた反応する。何かツッコミキャラになつたな。

「くつくつくつ。安心してよ。ここで君を摘む気は無い。

ここに来たのはそつちの彼の成長具合を見るためともう一つの果実を摘むためさ。そつちはもう熟成しているだろつからね。」

何かイツチャツてる目をしながら何処かを見ている。カストロの事か？

確かにアイツがもしも自分の念の性質を知つていて強化系の能力を選んでいたならかなり強くなつていただろう。そうすればもしかしたらヒソカを殺れたかも知れないな。

「それじゃ、彼の事ヨロシクね。」

そう言ってヒソカは去つていった。出来るならこれで一度と会ひつ事がありませんように。まあ、9月になれば死ぬだらうけど。ちゃんと依頼して請け負つたんだ。殺つてくれるだろ？。

今はとりあえずキルアの登録をしにいくか。

まだガツクリしているキルアに「おい、いい加減登録しに行くぞ。」と無理矢理立たせて歩かせる。ヒソカからの明確な宣言を聞いたせいで暗い。

しかしそんな暗さも長続きしない。というかさせてくれない。わざわざ待つっていたのか受付カウンターの近くには原作通り新人ハンターの3人がいた。

こちら、というよりキルアを見ている。

「…彼ら、使えるみたいだね…。」

車椅子に乗っているリールベルトが言う。それに「そうだね。」と片腕のサダソが答える。ギドはただ見ているだけ。

3人を無視して「おい行くぞ。」とキルアに言つ。

キルアも気にしてたようもなく「ああ。」と3人を素通りして受付カウンターに行き、現在説明を聞きながら登録をしている。

しかしキルアが説明を聞いている間も3人はキルアを見続けている。

「何か用？」

と俺が聞くと

「いいや、オレ達も申し込みをしたいから並んでいるだけさ。

そういう君こそ何でここにいるの？見たところ君は違うんだろう？。」
とサダソは返す。

「まあ、ね。俺は『トイツの保護者みたいなモノか？年は同じだけど。

「ゴンが俺の保護者かよ。」

キルアがそれに突っ込むので「何か違ったか？」と聞くと「……いや間違つてねえな。」と返す。

今の師匠を見つけたのは俺のおかげだからな。

「それで、登録は済んだのか？」

キルアに聞くと「ああ。」と返す。

「参戦申し込みは？」と聞くと「いや、まだしない。」とキルアは言う。

まあ、ウイングから「まだ2ヶ月は戦わないで下さい。」って言わ
れているからな。キルアはゴンと違つて無謀な事は極力しない性格
だ。少なくとも4大行を覚えるまでは戦わないつもりだろう。

キルアが登録しないと分かつたからか3人は帰つていった。まだ期
間に余裕があるからなのか別にプレッシャーも与えて来なかつたな。
まあキルアにプレッシャー何か無意味だし。

3.1 選択肢（前書き）

この話はほとんど原作と同じです。

3.1 選択ミス

キルアはウイニングの予想を遥かに超えるスピードで成長し、僅か1ヶ月で基本の纏、絶、練を会得した。

何なんこのバグキャラ。あり得ないんだけど。

俺が1年ぐらいかけたのにこいつは10分の1以下の期間で会得するなんてマジ不公平。神に祝福どころか抱擁すらしてもらっているんじゃね？

今日はヒソカ対カストロの戦いが行われる。バカ高いチケットはキルアに買わせて今は観客席で試合を待っている。

ちなみにキルアは原作のようにカストロの強さを確かめるために控え室に行つたが、カストロが消えたなど喧しく伝えてくる。

「どういうことが分かるか？『ゴン。』などうるさいから『試合を見てれば分かる。』とだけ答えた。

俺の中途半端な答えが気に食わなかつたらしいがこう言つたら俺は何も言わないので我慢して試合を待つてゐる。

しばらく経ち

『さあ―――よいよです！！』

ヒソカ選手 vs カストロ選手の大決戦！！』

アナウンスが始まリヒソカとカストロは中央に集まる。

「感謝するよヒソカ。お前の洗礼が無ければ私はここまで強くはなれなかつただろう。」

カストロが自信満々に言つ。確かに念を覚える前からかなり強かつたらしいからな。

「……くくくく。誰が強くなつたつて？」

ようやく熟した果実を刈り取れるからか機嫌が良さそうなヒソカ。
「言つておくがお前に敗れた後の9戦。一度として全力で戦つたことは無い。

全て、お前を倒すための準備運動に過ぎない！」
カストロがカツコイイこと言つてはいるけど、お前能力選択ミスつてる癖によく自信があるよな。

ていうかカストロは誰から念を習つたんだ？それとも偶々ヒソカの洗礼で精孔が開いて纏を会得して後は独学？
でもあいつ絶とか名前を知つていてから誰からか念の知識については聞いていた筈。そいつがちゃんと水見式をさせてれば選択ミスも無かつたのに…。

虎咬拳を極めてればもしかしたらヒソカに勝てたかも知れなかつたのに。

「始め！…」

審判の声と同時に「行くぞ！…」と宣言してヒソカに突つ込むカストロ。

カストロの右手の手刀を軽く避けたヒソカだったが、何故かヒソカはカストロの避けた筈の右手に殴られる。という不可思議な現象が起きた。観客は勿論キルアも驚いている。

「クリーンヒットオ！…」

審判がカストロの攻撃に加点する。

『まずはカストロ選手の先制打が炸裂――――――！』

というアナウンスに観客が歓声を上げる。

ヒソカも何故殴られたか分からぬ様子だ。

「本気で来いヒソカ。

2年前の私とは違う。次は容赦しないぞ。」

とわざわざ宣告するカストロ。

アホか？今ので決めるとは言わないが、何かしらの大ダメージをヒ

ソカに負わせる事が出来た筈。何せ完全に油断してたからな。

一発目で虎咬拳を使って首を落とすなり足を切り落とすなどすれば良かつたのに。

言つちや悪いが弱者であるお前が圧倒的強者であるヒソカに加減などしてはならない。一撃目で決めないと勝率はガクンッと落ちる。

『先手を取つたのはカストロ選手!!

素早い手刀の攻撃を避けられずヒソカ選手ポイントを奪われました。

』
アナウンスが更に観客を煽る。

「今は何なんだ『ン！？錯覚か…！？』

キルアが聞いてくる。

「いや…。錯覚じゃねえよ。確かにカストロが消えて現れた。」
ダブルつてきちんと具現化系能力者がやればかなりの威力を發揮するだろうな。

キルアは俺の説明が分からぬのか「？」とするだけ。

スウー…。ヒソカが立ち上がり

「本気を出すかどうかはボクが決める。」「

とあくまで宣言する。

カストロは「そうか。」とだけ咳き、「では早目に決断する事だ！」

！』とまたヒソカに攻撃を仕掛ける。

今度は左手で攻撃を仕掛けるがやはりヒソカは軽く避ける。しかしまたもや避けた筈の攻撃が時間差でやって来てヒソカを殴る。そして更に攻撃が続きヒソカがダウンする。

「クリーンヒット！！&ダウン！！」

とまた審判はカストロに加点する。

『なんとなんと開けてビックリ、カストロ選手の一方的な攻めが続きます！！

ポイントはこれで4-0-!

しかし、今…見たものは…。私の氣のせいでしょうか!?!?』
今のはハツキリとカストロが消えたように見えたからな。観客も動揺している。

「や…やれるか?」

審判がヒソカに試合続行か?と尋ねる。するとヒソカは不気味に笑いホコリをはらいながら立ち上がる。

「氣のせいかな?」

キミが消えたように見えたが…。

ヒソカの質問に『そーーです!! 消えたんです!! そう見えたんですけど!!』とアナウンスも追従する。

「いや…。それは表現が正しくないな。目の前にいてボクにケリをくれたはずのキミが一瞬にして背後にいた…。…が一番近い表現だと思うのだが。まだ何か違つ氣がする。違和感… そうだな。何か基本的な見落としをしている感じかな。」
ヒソカの推理にカストロは

「無断だね。ただ逃げているお前ではナゾを解けまい。

何にせよもう待たない。次は腕をいたたくぞ。まだもつたいぶるならそれを良かるう。

その程度の使い手だったと思つまでだ。」

とカストロは虎咬拳の構えを見せた。

観客達が虎咬拳の構えに興奮する。

「行くぞ!!」とカストロがヒソカに接近するとヒソカは何故か左腕を前に掲げる。

「あげるよ。」とヒソカは自信満々に言ひ。「ふん、余裕か、それとも腹のつもりか!?
どちらにしても腕は貰つた!!!」

とカストロはヒソカの左腕を切りに向かつたが、またもや突然消えてヒソカの後ろに現れ「こっちのな。」と言つて右腕を切断した。

宙に舞う右腕。観客は悲鳴を上げる。

「全てが自分の思い通りになると思つたら大間違いだ。」カストロがヒソカの耳元で囁く。

しかしヒソカはまだ余裕そうに「これも計算の内だね。」と言つ。

「ほざけ！」とカストロはムカついたのか少し大声でヒソカを殴り飛ばす。

ヒソカは下がり、落ちてくる自分の右腕をキャッチする。

「くつくつぐ、なるほど。キミの能力の正体は…。キミのダブル。だろ？」

右腕をお手玉のように投げてはキャッチしながらカストロに聞く。

「…流石だな。その通り。」とカストロは答える。

そしてその瞬間、カストロは一人に増えた。

「やつぱり、あれは錯覚じゃなかつたんだ！！カストロが攻撃を仕掛けた一瞬、あいつの体が2つに重なつてみえたのは…。」

キルアが言つ。よく分かつたな。

『これはどういうことでしようか！？なんとカストロ選手が一人に分裂！？』

消えたと思ったたら今度は増えた―――？まさか双子だったとか―――？』

アナウンスがボケをかましてくれた。

「ドッペルゲンガーとかいうやつかい？」

ヒソカが自分の右腕を左手で掴みながらかけない左腕をかく。リアル孫の手か？

「まさしく。」とカストロも肯定する。

「消えたはずのキミだが気配は変わらずボクのそばにあり…。むしろ消えるその直前…増えたような感じがしたから…。キミは消える前に増えているんだよね。」

「そこに気がつくとは大したものだ。」

私は念によつて分身を作り出す事に成功した。先刻はまず分身が攻撃をしけ、私は死角に潜む。お前が反応する瞬間に分身を消し、本体の私が攻撃する。

もちろん分身はただの幻影ではなく、消える前まではそこに実在するもう一人の私だ。それは分身の蹴激を受けて実感しだらう？つまりお前は一人の私を相手にしなくてはならない。これが念によつて完成した真の虎咬拳。

名付けて虎咬真拳！！

とりあえずネーミングセンスは無いらしいな。

「次は左腕をいただく。まだくだらぬ余裕を見せていいいか？」
カストロが虎咬拳の構えをして言う。

それにヒソカは右腕をサッカーボールのように入差し指で回転させながら

「うーんそうだなー。」

回転をやめて掴み

「ちょっとやる気出てきたかな…？」

右腕の皮膚に噛みつき、引きちぎった。

自分の腕を食つている様子を見た観客がざわつく。

ヒソカは一枚のハンカチを取り出し、右腕に巻いた。

「ボクの予知能力をお見せしようか。」

『おやおや！？ヒソカ選手がスカーフで右腕を覆い隠したぞ！…』
そしてそのハンカチを上に投げる。しかしハンカチから出てきたのはトランプだつた。

『おーっと、何と右腕が消えてトランプが宙に舞う……何をする気だ——!?』

トランプが床に散らばる。何故かみんな表面になつて。

「この中から一つ好きな数を選んで頭に思い浮かべて。」

と言いカストロを見る。「……カストロは無言で答える。

「良いかな?

思い浮かべたらその数に4を足してさらに4倍にする。そこから6を引き…2で割つた最初に思つた数を引くと…いくらになつたるかな?』

観客達も計算している。無断なのに。

「ボクにはその答えがあらかじめわかつてた。」

と言つてヒソカは右腕の切断面に腕を突つ込みトランプを引き抜く。

「答えは…1だろ?」とスペードのエースを見せる。

当たつた事で観客はまたざわつく。絶対1になる計算法なんだから当たり前だろ?

まあどうでも良いけど、バンジーガムは「jeeeee~」をせて貰つたし。

『い…異常…です!!

まさに悪魔の手品です!!自分の傷口にネタを仕込んでいました――!!

ポイントにもならない!!試合にも一切関係なし!!にもかかわらずです!!ヒソカの異常性にこに極まれり――!!』

アナウンスが叫んでいる間にヒソカはスペードのエースを「記念にあげる。」とカストロに投げた。一緒にバンジーガムもカストロに投げて。

しかしカストロはトランプを弾き

「下衆め…。一度とふざけたマネが出来ぬよつ左腕も削ぎ落としてくれる!!…」

分身の方のカストロがヒソカに走つた。

『おつとカストロ選手の片方が猛然と突進——！』

するとヒソカはまた腕を差し出した。今度は残っている左腕だ。

「さあ、だから言つてるだろ？あがるって。」

カストロはヒソカが何を考へてゐるのか分からぬが、「望み通りに

כטבְּרָהַנְּגָן — ००

何を考えているんだこの人は――!?

アナウンスが鳴り響いた後にヒソカを見ると、信じられない出来事が起きていた。

- 1 -

カストロも驚愕している。おかげで分身が消えてしまった。

やはり分身で攻撃してきたか…。もし本体で攻撃してたらカウント一くれてやろうと思つたのに…。

二〇一
二

とヒツカが何故か繋がっている右腕を見せた。

はして、ギリテケノチヤニ頂き

ପାତ୍ର

世宗憲皇帝の御崩ノ
元日崩一書

2

「これも手品です。さて、どんな仕掛けでしよう?」

右腕を上げて見せるヒソカ。でも指が全く動いて無いけどね。

ヒソカガカストロは一步近づくとガストロは一步下かる。まあ、ワケわからんハ怖ハだらうな。

「へっへっへっ!?」こわいのかな?

タネが分からぬから驚く：奇術の基本だ。

キミの分身をつくる力は素晴らしい。
だがもうネタがわかつた。そ

「からどんな攻撃が来るかも大方予想がつく。それに対処する方法もね。

非常に残念だ。キミは才能溢れた使い手になる…。そう思ったからこそ生かしておいたのに。

予知しよつ。キミは踊り狂つて死ぬ。」

後はどうでも良いや。ヒソカの試合を見るのだってバンジーガムとドッキリテクスチャーをコピーしたかつただけだからだし。

原作通りカストロが串刺しにされて死亡。ヒソカの勝利で終了だ。
「んじや、またなキルア。」

と言つて帰る。キルアが何かわめいているけどスルーだ。

確か今日も試合があつたから俺は控え室に向かう。キルアは戦闘準備期間があるけど残念ながら俺は試合相手を選べないので指示通り戦うしか無いのだ。

32 才能って残酷だよね

ヒソカの試合が終わって1週間後、キルアは早くも練の応用である凝を会得した。

ヒソカ戦を録画したビデオでちゃんとヒソカがバンジーガムを何本出したかを当てたからな。俺とズシはまた撃ちひしがれる。俺らの長年の努力を僅か1週間で凌駕されるなんて…。

「ま、まーまー。そんな落ち込むなよ。」

とキルアが○○状態になっている俺とズシを気遣う。

「だつて信じられるか？俺達が何ヶ月もかけた事がお前は1週間で会得しやがった。お前の才能はどんだけだよ。」

俺の嫉妬混じりの目線にキルアは若干たじろぐが、自分がゴンよりも才能があると分かつたからか気分は良そう。このガキ。マジで殺したくなってきた。

「ゴン君、確かにキルア君の才能は驚嘆に値しますが、何も才能だけが全てではありません。」

君はキルア君より遙かに昔に念を知っているではありませんか。その分経験は君が遙かに上なのだから間違いなく君の方が強いですよ。

「ウイングが慰めてくれる。アンタマジで良い人だよ。ズシも気力を取り戻しているけど、キルアは『やっぱまだゴンの方が強いか。』と少しふて腐れている。」

もしもこの時点で負けてたら希望が潰える。まあ、俺はやり方によつては世界最強にもなれるからな。間違えると簡単に死にそうだけだ…。

「いよいよ今日から「発」の修行に入ります。これをマスターすれば念の基礎は全て修めた事になります。

後は基本に磨きをかけ創意工夫をもつて独自の念を構築していくだけです。それでは始めましょう。」「

ワインингの発の説明が始まった。

別に俺がここにいる意味は無いのだが、今日は試合が無いしちなみにヒソカはカストロ戦が終わって後に俺に会いに来た。手は既に縫合したのか両方とも健在だ。無ければ世の中のためになるのに。

「やあ、実はボクはもうここに用が無くなつたから去りうると思つんだ。だからその前にキミに会いたくなつてね。」

とドアを開けたら言われた。まさかヒソカとは思わなかつたから警戒してなかつた。

「…で？ 何か用？」

俺の「だつたら早く失せろよ」という心の叫びを受け入れてくれなかつたらしい。

「うん、キミともいつか戦いたいし、それに…彼のことをアロシクね。」

不気味に笑うヒソカ。キルア、お前完全に狙われたらしいぜ。

「くれぐれも壊さないでね。ボクの獲物だから。」

笑いながら睨み付けて言い放つヒソカ。そして言い終えると「じゃ、またね。」と帰つていった。

どうやら俺の性格を考えてキルアを途中で壊さないように釘を刺しておいたらしい。お前が心配するだけ無断だがな。お前は団長と戦うために必ずヨークシンに来る。その時がお前らの寿命さ。

ヒソカの事を思い出していたらワインингが水見式をやつていた。にしても水が増えるとかスゲエよな。どういう物理現象なんだ？

まあ、特質系の現象の方がスゲェか。俺なんかコップが消えたし。

「むー！」

とズシが水見式をやる。そしてやはり葉っぱが微かに動いているから操作系らしい。

「葉っぱが動いているつす！！」

「「葉が動く」のは操作系の証です。」

ウイングが補足する。良いよな、ああいう師匠がいて、俺はずっと一人だから非効率的だつた。

「よつしゃ、次はオレだ。」

とキルアが水見式をやる。しかし表面上の変化が見られない。

「何も変わんねーぞ。」

キルアが心配そうに言うがウイングは「そうですね。」としか返さない。

「もしかしてオレって才能ねー？」

「いえいえ、水をなめてみて下さい。」

ウイングの忠告通り水をなめる。俺もなめてみたけどほんのり甘い。念の質さえ甘いってお前どんだけ甘い物好きだよ。

「……！？少し甘い…かな？」

とキルアも気付く。

「「水の味が変わる。」のは変化系の証です。さあこれで一人のオーラがどの系統に属するか分かりましたね。」

「そう言えばゴンは何系なんだ？」

キルアが突然聞いてきた。やつぱり聞くか。

「俺はズシと同じ操作系だ。」

と答えた。まあ、主に使う能力は操作系が多いからな。「へーそなんだ。」とキルアは軽く納得していた。

1ヶ月後、キルアの発の変化を見るためにまた集まつた。ちなみにキルアはその間によく試合をした。

あの新人ハンターの三人がそろそろ登録期限が近いからか急かすようになつたから「面倒だから受ける。」とキルアに言つた。そしたらキルアも別にウイングに止められている訳では無かつたのでしょうがないから三人の挑戦を受けた。

第1戦はサダソだつたが、俺の忠告通り最初から凝をしていたから簡単に攻撃を読め、ボコボコにしてノックアウトした。

2戦目はギドが相手だつた。初戦の様子から警戒して初っぱなから竜巻独楽をして攻撃を防ぎながらショットガンブルースをしてキルアに攻撃したが全部叩き落とされ、義足をへし折つて戦闘不能にさせて勝つた。

3戦目のリールベルトは原作通り勝つた。

「楽勝。」とかキルアに言っていた3人は哀れだ。新人を狙うつていうのは悪く無いんだけど、それは念を知らなかつたらの話だ。念を知つていて来ている場合はかなり強いかかなり弱いかのどちらかだ。後者以外の場合は勝ち目が薄い。

アイツらも俺みたいにあえて200階に上がらずに稼げば良かつたのに。ここなら一生分の金だつた簡単に手に入るのに。

「さあ、それでは修行の成果を見せてもらいましょうか。」

ウイングの言葉にキルアがグラスの前で練をした葉っぱは意味が無いから抜かされてるけど。

「いいぜ。」

キルアが自信満々に採点を願う。

グラスの水をなめるとマジでハチミツみたいに甘い。これにはウイニングも驚いている。

「全く……たいしたものです。

キルア君、君は今日で卒業です。」

卒業という言葉にキルアは驚いている。まあ、普通最低でも1年はやるからな。それが僅か半年足らず。

「そうそう、言い忘れていましたがゴン君。裏ハンター試験合格おめでとう！」ぞーします。」「今更かよ…。

「裏ハンター試験？」

とキルアがウイングに聞く。

「念法の会得はハンターになるための最低条件。何故ならプロのハンターには相応の強さを求められるから。

邪な密猟者や略奪を生業とする犯罪者を捕らえることはハンターの基本活動。犯罪抑止力として強さがどうしても必要となる。しかし悪用されれば恐ろしい破壊力となるこの能力、公に試験として条件化するのは危険。それゆえ表の試験に合格した者だけを試す。まあ、君は初めから条件を満たしていたみたいですが。」「…………まあね。」

念能力が無かつたら受ける訳無えーだろ。

「キルア君。是非もう一度試験を受けて下さい。君なら次は必ず受かります。

今の君には十分資格がありますよ。私が保証します。」

ウイングの言葉に「……ま、気が向いたらね。」「

と若干照れながらキルアは囁く。

「ちなみに他にも合格者はいますか?」

俺の質問に

「ええ、ハンゾーとクラピカは別の師範代の下で既に念を会得しました。

イルミとヒソカは初めから条件を満たしていますし、レオリオは医大試験受験後に修行を開始するようです。

ポツクルは練の習得にかなりこづつてるようですね。」

キルアよりも先に会得したってハンゾーとクラピカはどんな才能を持つてんだよ。それともウイングの教え方が遅いだけか？

さてと、とりあえず当初の目標だつたキルアの4大行会得は終わつたし、俺の懐も大分暖まつたからそろそろ実家に帰るか。

予定ではゾルディック家の依頼が終わつたら軽く顔を見せてすぐ旅立とうと思っていたけど、キルアを鍛えるためと別にいらないけど親父が残したあの箱を貰うか。

無くとも良いけどキルアに次にグリードアイランドを狙うための理由にはなるし。

でもヨークシンに早目についても危なえな。

出来るなら幻影旅団が死んだ後に向かいたいけど、距離的に何日か前に行く必要があるし、サザンピースのヨークション会場に入るには1000万ジェニーのカタログを買わなければいけないから9月前には必ず行かなくてはならない。

後はまだ始まつて無いけどいすれは始まるバッテラのグリードアイランドプレイヤー募集に応募する。旅団みたいに奪うかとも思ったが、別にゲームが欲しい訳では無いので普通に応募しよう。

例え恋人が死のうがクリアしたら契約通り500億全額払わせてやる。

天空闘技場からクジラ島に行く最寄りの港へ飛行船で移動している。ちなみにミトさんには帰る事は既に手紙で伝えてある。

「なあ、ゴン。次は何処に行くんだ？」

とキルアが聞いてくる。そういうや何処に行くのか言わなかつたな。

「俺の実家だ。」

そう言つとキルアは驚いたのか

「マジ！？ていうかゴンにも実家があつたんだ！！」

と随分失礼な事を言われた。俺はどんなイメージだよ？

「あるに決まつてんだろ？お前に実家があるように俺にも実家があつたつて不思議は無い。」

そう言つと「ああ、確かに……。」とキルアは苦笑いする。

「そつそつ、先に言つておくが実家に帰つたら俺はキャラがかなり変わる。」

「キャラ？」

「ああ、俺の実家は小さな島だから悪いイメージが出来るとすぐに島中に広まるし中々払拭出来ない。だから島では俺は良い子なイメージを作つている。」

そう言つとキルアが

「良い子なゴン…？？？」

と混乱しやがつた。俺だってやりたくは無いが仕方ない。一応まだ使える故郷だ。

「そうだ、だから口調や態度がかなり変わるが気にするな。

それと大事な事だが、島に着いたら俺の良い子のイメージが崩れるような事は一切言つなよ？もし言つたら両手足を切り落としてコンクリ詰めにした上で海に沈めてやる。」

キルアの目を見ながら宣言する。

俺が宣言したら本気な事を知っているキルアは引きつった顔をして
「わ、分かつてるよ…。」と約束した。

その後、空港に着いたら今度は港に行き、なるべく揺れないような
デカイ船に乗つてクジラ島を目指す。漁港のイメージが強いクジラ
島だが、意外にもデカイ客船が寄港する事もある。中継地點になる
からな。

クジラ島に到着し、下船すると知り合いの漁師達から話しかけられ
る。

「よお、『ゴン！久しぶりだな！』

「うん。おじさん。」

と普段ならあり得ない返答を笑顔でする。それを後ろで見ているキ
ルアは信じられないモノを見る目をしているが。

他にも知り合いに会つたので簡単な会話をして別れた。
家に向かっている途中に

「マジでキャラが全然違ーな。」

とキルアが言つてきたので

「だから言つただろ？一度このキャラを確立したから今更変えるの
は面倒くさいんだ。

まあ、たまーにしか帰らないからそんなに面倒では無いがな。」

当初はただ顔を見せてすぐに島を出るつもりだったが、コイツがい
るからなあ。流石に原作みたいな弱い状態でグリードアイランドに
突入するのは難しいし…。

面倒だがそれまでに俺が多少鍛える必要があるな。

しばらく歩き、ようやく家に着いた。

帰宅するのは伝えておいたから原作のようにバタバタする事は無かつた。ちなみにキルアの事はハンター試験中に出来た友達と書いておいたので別に驚かなかつた。

その後は飯を食いながら家族団欒をしていた。

「…試験、どうだつた？」

ミートさんが聞いて来たので

「やつぱり大変だつたよ。会場にたどり着いたのが405人で合格したのが7人だつたからね。

大変だつたよなあ、キルア？」

突然のフリに驚くが、事前に言っていたように

「あ、ああ そうだつたな。」

と返す。

「そう言えば、キルア君は合格出来たの？」

ミートさんの質問に

「い…いや、俺は落ちちゃつたんだ。」

と焦りながら返す。何せ最終試験で殺人をしたせいで反則負けになつた何て言えないからな。

飯を食い終わり、キルアはベットメイキングのために俺の部屋に向かい、俺は片付けの手伝い。

「ねえミートさん。」

「ん? なあに? ゴン。」

と皿を洗いながら聞き返すミートさん。

「帰つてきて早々なんだけビヤ。実は俺達明日にはこの島を発つんだ。」

その言葉に皿洗いを止めて俺に振り向く。よく皿は割らなかつたな。

「ど、どうして! ? まだ来たばかりじゃない? 」

「うん、本當なら今は他の用があつたんだけど、合格して結構経つのにまだ顔を見せていないのは不味いかと思つたから後回しにして急いで來たんだ。

だから明日には発たないとヤバいから明日こな島を出るよ。」

「……またしばらくは戻らないの？」

ミートさんが聞いてきたから「うん。」と答えた。

俺の言葉にミートさんは黙り、しばらく止まっていた後に動き出し、隣の部屋に行つた。

そして箱を持つて帰つてきた。

「本當は渡す氣は無かつたんだけど、でもこれはゴンが持つているべきだから。」

と鉄の箱を俺に渡した。

「ジンから……。あなたのお父さんから預かっていたものよ。あなたがハンターになつたら渡してくれつて。」

「親父が？」

「ええ、ゴンには話して無かつたけど、あなたの父親、ジン・フリーカスはハンターなの。

それに……もう死んだって教えたけど……あれは嘘なの、ジンは本当は生きてるわ。」

ミトさんが深刻そうに言つ。別に知つていたから良いけどね。

「……そう。生きてるんだ……。」

と空氣を読んで言つとく。

その後は「ジンについて何か聞きたい?」と言わたが、「いや、

いいよ。」と断つた。マジで興味無いしね。

箱を持つて自室に向かい、キルアに箱の事を言つた。

「ふーん、ゴンのオヤジの箱ねえ。」

箱をいじつていたキルアが疑問を持つた。

「これ、どーやって開けるんだ?」

と言つてきたので箱を受け取り、「いつやるんだよ。」と箱を持ちながら練をした。

そしたら光を放ちながら箱が崩れて中からまた箱が出てきた。

鉄片を拾つたキルアが

「ただの鉄つきれだ。全然接着した後も無い。

それに何だ? このデザイン。」

と神字が入つた鉄を見せて聞いてきた。

「それは神字と言つて念を込めると定められた命令に従つように出
てしているんだ。」

そう言つて箱を見ると今度は差し込み口があつたのでハンターライ
センスを差し込んだ。カチッという音が鳴り、鍵が開いた事が分か
る。

「指輪とテープとROMカードか…。」

指輪を見ると

「指輪にも神字が刻まれているな。これは迂闊にはめられない。」
そつ言つて指輪を箱に戻す。キルアも「ああそうだな。」と同意す
る。

「とりあえずテープを聴いてみねーか?」

キルアが言つたので別に聞きたくないが一応ラジカセを用意する。
そしてカセットをセットして再生を押す。

「ダビングしないのか?」とキルアが聞いてきたので「別にいらん。
」と返事した。

『……よお、ハン。やつぱりお前もハンターになつちまつたか。

それで一つ聞きたい事がある。お前オレに会いたいか?会つ氣があ
るならこのまま聞いてくれ…。もしその氣がないなら停止ボタンを
押せばいい。』

そう言わされたので速攻停止ボタンを押す。

しかしキルアは以外だつたのか

「え、聞かねえのか！？」

と驚かれた。

「ああ、別に今更親父の事なんてどうでも良い。親父が生きているつて事は俺を捨てた事には変わらねえからな。」

その言葉を聞いてキルアも引き下がつた。まあ、キルアに選択肢は無いしな。

しんみりとした空氣になつていたら突然カチッとラジカセが勝手に動き出した。

キュルキュルと音を鳴らしながら巻き戻しをする。これがオプション装備なら便利で良いんだけどな。

「止めたテープが勝手に動き出した！？」

とキルアはビックリし、凝で見てみたらテックがオーラを纏つっていた。

「念！念でテープを巻き戻してる！…」

キルアが大声で言う。あんま大声出すなよ。ミトさんが何かと思つて来たら面倒だろ？

巻き戻しが終わつたのかテックは一旦停止し、録音ボタンが勝手に押された。

「まあ、こんな事だらうと思つた。」

俺は気にせずベットに入り寝る体勢になる。

「え！？寝んの？」

とキルアが突つ込んできたので

「ああ、別に止める意味無いし。

それと明日にはこの島を発つからな。」

そう言って本格的に眠る事にした。

キルアの「明日あ！？」という声とジーーという録音の音が部屋に鳴り響いていたのだつた。

翌日、予定通りクジラ島を出た。

ミトさんには「しばらく帰つては来れないけど手紙を出すよ。」と約束して別れを告げた。

そして今は空港のある最寄りの港まで船で移動中だ。
「なあゴン、何でもう出発なんだ?」

キルアが聞いてきたので。

「もう顔を出してまた旅に出る事は伝えたし、あの島にいると好き勝手に動けないから息が詰まる。だから出発した。」

そう伝えると「ふーん、俺はもうしばらく居たかったんだけどな」と文句を言つ。それは無視して
「それに、この中身が気になるしな。」

と箱に入っていたROMカードを見せる。

「あー、確かに。でもどうして家で見なかつたんだ?」

「実家にはジョイステが無いからだ。だから今から確認するぞ。」

と言つてプリッジを後にしてキルアと共に別の場所に向かつた。

この船は豪華客船だからかゲームやパソコンルームがあつた。そこは暇つぶしのための部屋だからか様々なハードがあり、古いジョイスティも勿論あつた。

「さて、何のゲームのデータがあるか。」

とジョイステにROMカードを差し込んで起動させた。

起動した後、カードの中身を見ると一つのマークだけが表示された。
「入ってるゲームは一つだけだな。」

俺の言葉にキルアも反応する。

「ああ、にしてもスゲー容量だな。一つのゲームで30ブロック全部使いきつてる。」

確かに珍しいな。普通なら1~2ブロックだからな。

アイコンをマークに合わせるとグリードアイランドと出た。

「グリードアイランドね…。」

と明らかに知っている二コアシステムで言ったからかキルアが聞いてきた。

「知ってるのか？」

「ああ、伝説のゲームさ。

1987年に正規ルートで発売されたが、販売個数100個というふざけた数しか売らなかつた。」

「100個！？つげーー少ねーな…！」

「ああ、そして何よりもふざけてるのはその販売価格。現金一括払いの58億ジー。」

「58億！！？」

とキルアは驚愕する。販売個数が100個ぐらいなら別にそこまで驚かないが、価格が58億など最早ゲームの値段じゃない。

「そのため手に入れるのはほぼ不可能だ。俺も欲しかつたから探したけど見つからなかつた。」

「…だろうな。ていうかお前58億も持つてんのかよ！？」

「そりやね。お前が天空闘技場で念を覚えている間、ずっと稼いでいたからな。」

「俺がずっと200階に上がらなかつたのを覚えているから」「あー、

あれでか。」と納得した。

「でも今買うとしたら58億では足りないだろうな。多分倍以上は必要だろうし。」

「だろうな、そんなゲームならプレミアがついているだろ？」「人から譲つてもううならあり得るな。」
キルアも同意する。

しかしここで

「いや待てよ、もしかしてタダでプレイ出来るかも。」

俺の咳きに

「マジで！？どうやって！？」

とキルアが聞いてくる。

とりあえずジョイスティックの電源を切つてROMカードを引き抜き、今度はパソコンルームに向かう。

そしてパソコンを起動させてアドレスを入力するとハンター専用のサイト『獵人の酒場』が出てきた。

「ハンター専用サイト？」

覗き込んでいたキルアが聞いてきた。

「文字通りハンターにしか利用出来ないサイトだ。何せライセンスとライセンスナンバーの入力をしないと入れないからな。」

俺はライセンスナンバーを打ち込み、ライセンスをカードリーダーに差し込む。

そして入つたらバーテンの男にカーソルを合わせてクリックする。

「うわ、スゲエ量だな。」

いきなり表示された様々な項目にキルアがビックリする。

俺は無視してゲームの項を開いてグリードアイランドをクリックした。

『グリードアイランドか2000万いたくぜ。』と表示された。

「たかだかゲームに2000万か…。」

「まあ流石にタダじゃ教えてくれね——か。」

とムカつくが支払う。

『OK、それじゃよく聞きな。グリードアイランドは念能力者が作ったゲームだ。』

その説明にキルアは驚く。そして色々と情報を教えてくれたけど別に知っているからスルーする。

粗方説明が終わつた後にまたクリックしてみるとグリードアイラン
ドがヨークシンシティのオークションで競売に出される事が分かつ
た。価格は最低89億ユニー。

「……はちじゅう、きゅうつおく……。

やつぱ上がつてんよ30億も——！」

キルアが絶望したかのように嘆く。周りが見てくるので

「うるさい、静かにしろ。それにこの額は予想の範囲内だ。」

と静かにさせる。

「確かに予想の範囲内だけさ～。89億だぜ？無理だろ。」

キルアは静かにはしたが絶望は変わらない。

「俺が知りたいのはこの次だ。」

とまたクリックする。

そこには大富豪のバッテラ氏がグリードアイランドをプレイするプレイヤーを募集している情報だった。

「プレイヤーの募集……？契約達成の曉には500億ユニー！？」

とまた叫ぶ。流石に一度目はムカついたので殴つて静かにさせる。

「静かにしろと言つただろ？」

バッテラがグリードアイランドを集めてクリアさせようとしている事は分かつていたからな。以前の募集では乗らなかつたけど、今は乗る事にするか。」

募集の要項をよく読んだ後に参加する画面をメールする。

「9月10日ヨークシンシティのサザンピースにて選考会。オークションが終わつてすぐだな。という事はサザンピースに入るためにカタログを買う必要があるな。あれも1200万もするからな。」

次々の出費にため息をつく。

「またとんでもない値段のカタログだな……。」

キルアも呆れている。

「それで、キルアはどうする？お前もこのゲームやる？」

俺の質問に

「当然、そんな珍しいゲームなんて滅多にお目にかかれ無いだろうからな。」

当たり前だと言わんばかりに呟つ。

「という事は一つ問題があるな。」

「何だ？問題つて？」

自分の事なのに何でそんな自信満々なんだよ。

「お前の事だ。グリードアイランドにはプロハンターでさえほとんど帰つて来れない。という事はこのゲームはかなり難易度が高い。何せゲームオーバーになつてもコンティニュー出来ないからな。つまりたかだか4大行を覚えただけのお前では簡単にゲームオーバーになりかねえつづー事だ。」

俺の言葉に若干青筋を立てるキルア。いきなりの役立たず宣告だからな。

「じゃあどうすんだよ？」

キルアが聞いてきたので誠に遺憾だが

「鍛えるしかねーな。ていうかお前まだ発さえ出来てねーだろ？」

俺の質問にキルアは頷く。

「せめて能力ぐらいは手に入れねえと話にならねえ。

まだ期日まで2ヶ月以上あるから今之内に絶対覚える。覚えなきゃお前はお留守番だ。」

俺の宣告に「うげえ！」と嫌がるキルア。そんなに嫌か？

まあでもムカつくがコイツ才能がスゲエから2ヶ月もあれば能力はおろか応用も覚えそうだな。

念のために能力を会得したら応用技や基礎体力も上げとくか。

35 もうでも良い出会い

ヨークシンに着いた俺達は先ずホテルを取り長期滞在に備える。勿論部屋は別々でキルアは全額自腹だが俺はライセンスを使うので無料だ。やっぱりライセンススゲエ。

キルアの部屋で先ずは発の開発だ。

「キルアは変化系だつたからヒソカみたいにオーラを何かに変化させる能力が向いている。

何か変化させたいイメージはあるか？」

俺の質問に

「ああ、少し前から試してみたい物があつたんだ。」

と言つてキルアはスタンガンを出した。

「スタンガン？……つまりオーラを電気に変化させるという事か？」

「ああ、出来るよな？」

キルアが不安そうに聞いてくる。

「勿論、オーラを電気に変化させる事は可能だ。

通常なら拷問に近い強力な電気を何年にも渡つて浴びる修行をしないと電気に変化させる事は出来ないが、お前なら即可能だろう。育つた環境が環境だからな。」

俺の言葉に自信満々にキルアは答える。

「ああ、何せ強力な電気なら生まれた時から浴びていたからな。」

それを自慢のように言つべきなのだろうか…。発狂する自信なら俺にもあるがな。

その後キルアは俺の前でスタンガンを自分の腕に押し当てる電気を流す。という自傷行為を見せてくれた。

あれつて改造してあるから通常の倍以上の電流が流れつてキルア

が言つてたな。それを自分の腕に押し当てる何て信じられない。

しばらく放電した後に電力の切れたスタンガンを捨ててキルアは通電するように両手の人差し指を近付ける。

すると微かにだがバチッと電流が見えた。まさか一発で成功させるとはな。

「ゴン！…今出来たよなっ」

と嬉しそうな目をして俺を見てくるキルア。何か原作よりも子供っぽい反応だな。

「ああ、微かにだが電流に変化出来ていたな。」

俺の言葉にキルアは満面の笑みになる。

「だがまだあの程度では不十分過ぎるな。電圧も精々静電気程度だし。」

今度はふて腐れた顔になつて

「まだ始めたて何だから仕方ねえだろ？」

と使ったスタンガンを充電スタンドに立てて充電してあるスタンガンを取り出した。まさかもう2発目をする気か？

「はあっ」

と気合を入れてまたスタンガンを腕に押し当てる。マジでどんな体してんだよ。

充電が終わつたのかスタンガンを床に置いて今度は手を開いて両手を近付ける。するとさつきと比較にならない量の電流が流れれる。

「う、うぐ！ううううっ」

しかしながら制御が出来ていないので電流は暴れている。そして少しうると電流が消えた。

しかし2回目でこれとは……。」いつ才能あります。

「はあ、はあ。電圧が上がってきたな。」

少し息をつきながら嬉しそうに言つキルア。そりやあ自分が成長している事が分かれば嬉しいだろつ。

その後は俺はキルアの部屋を出た。別に俺いる意味無いし。ヨークシンシティに出て色々見て回る事にした。カタログを買うにはまだ早いからな。

やつて来たのは原作でお馴染みの値札競売市。見事に人気のトレカや人形など流行物からガラクタみたいな物まで一杯ある。

凝をしながら品物を見ていると何品かオーラを纏った商品があつた。残念ながらベンズナイフは無いが。

他に先客がいないから適当に2~300ジョニーって書いて時間を待つ。

そろそろ制限時間になつてきた頃にまた値札を見に行つたら値段が4倍に書き換えられていた。名前はゼパイルと書いてあるのである人だろう。

別にこの人と会つても会わなくとも問題無いがムカつくから更に倍額を書いた。

競売結果は4品中2品とられた。まあ、原作と違つて俺一人だからこんなもんか。

手に入れたのは点と線だけの何が良いか分からぬ絵と荒い木彫りの人形。絵はまだしもこの人形に価値があるとは思えんな。とりあえず鑑定して貰えば分かるだろう。と質屋に行こうとしたら。

「ボウズ、ちょっと良いか?」

と話しかけられた。振り向けばゼパイルがいた。何で?

「お前ゴンだよな?」

と聞かれたので

「さあ？何でそう思ったの？」

とイエスともノーとも取れる返事をした。

「そりやあ俺が目をつけた物を2個も取られたからな。どんな奴かと待つていたらまさかガキだつたとはな。」

待ち伏せしてやがつたか。敵意が無かつたから反応出来なかつた。

「ふーん、で？何の用？」

「ああ、お前さ、その競り落とした奴を売りに行くんだろう？」

「だつたら何？」

「物は相談何だけどさ、この壺とその人形を交換してくれねえか？その人形はタダ以下のガラクタだがこの壺は最低でも10万はするぞ？」

もしかしてこの人形つてお前の贋作か？

「何でわざわざそのガラクタと10万もする壺を交換したがるの？」

俺の質問にゼパイルは恥ずかしそうにして

「ん〜。実はな…その人形は俺が作った物だ。」

やつぱりこの人形は贋作か、通りで作りが荒いと思った。

「…この人形はアンタの作品なのか？」

「いや、俺の創作じやねえ。贋作だよ。所謂パチモンさ。

極貧時代にな、その日の飯代にもことかいてちょくちょく作つてたんだ。目利きを初めて金がそこそこ入るようになつてからはスッパリ手を引いたがな…。

市に出るとたまにそんな昔の恥が売りに出されててな。何をおいても買い戻す事にしてるんだ。」

「ふーん、成る程ね…。

この人形つて本物なら幾らぐらいすんの？」

「本物でも精々2、3万そこそこだよ。それはまだ駆け出しの頃に作つた奴だからな。贋作やりたての若造にそんな高い仕事は回つてこねーさ。」

やつぱりか…。

「んーー。でもまだ信用は出来ないからこれから売りに行くのに着いてきてよ。

俺が持つてゐるこの絵とその壺を売りに行く。そして壺の鑑定額が10万以上なら売れた金と引き替えにこの人形を交換するよ。

と提案した。いきなり信じるのはおかしいからな。

「おう、分かつた。」

とゼパイルも納得。むしろ人形を鑑定に出して恥をかかなくしてやつたんだから万々歳だろう。

近くの質屋に入り鑑定して貰つたら結果は絵は20万、壺は15万だった。

絵を競り落とした額は1万だったから19万の儲けか。

勿論問題無いので換金して35万ジエニーを得た。スゲエ簡単に結構な額を得たな。

質屋を出て

「んじゃ、約束通り15万ジエニーとこの人形の交換な。」

と人形を渡した。

「おう、サンキュー。」

とゼパイルも納得しているようだ。

その後はお互に軽く話して別れた。別に原作みたいに親しくなる必要は無いし。

ホテルに帰つてみるとキルアがまだスタンガンで頑張っていた。よく体が保つな。

「どのくらい進んだ?」

俺の質問に

「ん~。何とか電圧は上がつて来たけどまだ制御がイマイチだな。

と順調だと報告してきた。たかだか半日でもつこんなに進んでんのかよ。

その後は自分の部屋に戻つてルームサービスを取つて寝た。
ゲームプレイまで後2ヶ月か…。

このままキルアを鍛えればビノールトを圧倒せるだけの実力がつくかも。

化け物かアイツは…。

あれから5日が経ち、キルアは発を完成させた。

僅か5日で電撃を操作出来るとかもう同じ人間とは思えない。出来るなら俺にもその才能があつたらなあ。」

まあ、あつたとしても特にやり方は変わらないだろうが。

「これで俺もゲームをプレイ出来るんだよな?」

キルアが自信満々に言う。言っちゃ悪いがたかだか電撃を出せる程度で威張るなよ。それならスタンガンでも持った方が早えーし。

「残念ながら発を会得するのはあくまで最低条件だ。ハツキリ言ってまだお前は戦力にさえもなれていない。

このままじゃプレイして直ぐにゲームオーバーになるのがオチだ。俺の言葉にキルアはピクついている。頑張ってもかけられた言葉がこれじやね。

「何で戦力にもならないんだ? 確かにお前程強くは無いだろうが、そこそこ強いぜ? オレ。」

そりや圧倒的に強い念能力者と戦つた事が無いからだろ?

俺は旅団と会わないからこのままだと経験が足りな過ぎるな。あの頭に刺さつた針を抜けばマシになるのかな?

「そうか、じゃあ実戦テストだ。来いキルア。」

と言つて構える俺、正々堂々なんて俺らしく無いがな。

「え?」

とキルアはいきなりの展開に戸惑つばかり。しかし俺は気にせず練をしてキルアを威嚇する。

その自分よりも圧倒的に多いオーラを見たのかキルアは後ろへ下がるつとする。

しかし俺は一気に近付き凝でオーラを込めた拳で殴ろうとしたらキルアは素早い動きで避け、頬の皮を切る程度で済んだ。

「見ただろう？それがお前の本質だ。お前は常に勝てない相手には逃げようとする。だからと言つてそれが悪いとは言わない、命が最優先だからな。

しかしそれはお前自身の意思では無い。」
俺の言葉にキルアは何を言つてゐるのか分からぬ。という顔をした。

「お前はさつき俺が近付いた時、僅かに構えようとしながら突如それを中止して逃げた。その時お前の脳裏に何か命令が無かつたか？例えば「後ろに下がれ。」とか。」

その言葉を聞いてキルアは目を見開いた。

「…確かに、ゴンが接近した瞬間は電撃をくれてやろうがとしたけど、何故か体は逃げた…。」

呆然としながら自分の体を見て指が意思通り動くか確認するキルア。「最初はお前のその逃げ癖はただたんに環境による要因だと思った。何しろお前の家族はお前の事を溺愛しているからな。お前に「勝てそうにないなら逃げる。」といつ洗脳を施したとしても不思議は無い。

しかし今の反応は洗脳では無かった。何しろ正気の状態で避けたんだからな。だとしたら何か？

答えは決まっている。」

そして俺はキルアを見る。これだけヒントを与えたんだ。分かるだろ？ ていうか解んなきや有無を言わさず頭に指を突っ込んで針を抜く。

「…念による…操作?」

「正解。恐らくイルミの念だらけ。多分アイツは操作系。針を使って対象を操る筈だ。」

それを聞いてキルアは針が刺さってないか探し出す。探して見つかるような場所にあつたらとひっくり返いてるに決まつてんだろ。

「簡単に見つかる方法を教えてやる。」

そう言つてまた練をする。さつきよりもオーラを出す。

それに反応してキルアは逃げ出そうしたが

「動くな、これが簡単な探知方法だ。」

今お前な頭の中には何か命令が流れているだろう。その命令を発している場所を特定して針を抜け。一番命令が五月蠅い場所を探すんだ。

俺の言葉に一応逃げ出すのは止めたが体中が震えている。

「それが出来ないならお前との旅はここで終了だ。一度とお前と会う事も無いだろう。結局お前は変われなかつたという事だからな。」

その言葉にキルアは何とか逃げ出すのを耐えている。

はつきり言つて失敗してこれを口実にコイツと別れたい。だから心の中では「ひとつと逃出せ。」と言つ。

俺はキルアにどんどん近付く。俺が近付く度にキルアは逃げようと体を動かないようにする。

そして遂にはキルアの眼前にまで来た。キルアの震えは目に見えて酷くなり、今では泣き出している。

そこまで俺と別れるのはイヤか?まあ、コイツ俺以外に友達いないしな。

更にトドメを刺すために腕をゆっくり近付ける。

腕にはオーラを集中させて今では硬に近い。憲意を乗せてあるから常人なら心臓マヒを起こしてもおかしくないな。

「腕がお前に触れてもお前とはお別れだ。」

「腕がお前に触れてもお前とはお別れだ。」

との宣言に更に涙を流してキルアは逃げ出すのを耐える。

腕が段々と近付き、これでコイツ供お別れかな?と期待したらキルアが頭に指を突っ込みやがった。

残念…。抜きやがつた。

キルアが突っ込んだ指を抜いて俺に見せる。キルアの手の中には確かに針があった。

それを見てキルアから離れて腕を引いてオーラを纏に戻す。

「どうだ? 気分は。」

キルアに聞くとサッパリとした顔で

「ああ…。」

なんかスゲーーースッ キリした。完全に目が覚めた…いや、解放されたって感じかな。」

涙をぬぐうキルア。エラく満足気だ。俺は対照的に不満だが。

「…よし、これでお前を縛る物は無くなつた。これからは自分の意思で逃げ出せ。」

その言葉に「ああ!」と嬉しそうに頷くキルア。でも逃げる事を嬉しそうに言つべきなのか?

「さてと、ではいよいよ始めるか。」

俺の言葉に「何をだ?」と聞いてくるキルア。

「決まつてゐるだろ。お前の修行だ。」

「え！あれで終わりじゃないのか！？」

「何を言つてゐる。あれば最低条件をクリアしただけで別にお前の身体能力や念能力が強くなつた訳ぢやない。

さつきも言つたが、お前は弱い。特に念による戦闘法については素人だ。だからこれから2ヶ月間みつちりと鍛えて最低限を会得させる。」

キルアは少し怯んだが、自分をわざわざ鍛えてくれるとあのゴンが言つてくれたんだからと内心少し嬉しい。

「おう！…」

と気合を入れる。

先ずはヨークシンシティ郊外の岩山地帯に行き、予め用意していたシャベルとトロツコ、懐中電灯、ロープなどをキルアに渡した。

シャベルを受け取ったキルアは

「なあ…ゴン。これから修行をやるんだよな？」

と聞いてきたので、「勿論。」とだけ答えた。

「なら何でこんなものを用意してんのだ？これから工事でもやんのか？」

？」

「ある意味それに近いな。」

と言つて俺が岩山まで歩く。

そして岩山の前に立つ

「この方角に真っ直ぐ行くとヨークシンシティに着く。大体距離は2~30km程度かな？」

その言葉にキルアは「真っ直ぐ？……まさか。」と気付いた。

「やう、岩山は越えず、真っ直ぐヨークシンシティに行く。つまりこの岩山を掘りながら進め。」

「

俺の言葉に絶望したかのような顔をするキルア。

「更に」 そう言つて人差し指を立てる。
それに「？」とするキルア。

「凝をしてみる。」

そう言わされたのでキルアが凝をして俺の人差し指を見ると数字の1
が念で作られていた。

「数字の1…？」

とキルアが聞いてきたので

「そう正解、これから2ヶ月間。俺が人差し指を立てたら速攻凝を
しろ。反応が遅かつたら罰則として腕立て200回だ。」

その言葉に更に絶望するキルア。

「ちなみにこれをやる理由は凝の動きを早くするためだ。

いいか、戦闘の際は必ず凝をしろ。ていうか逆に凝をしないと相手
の念が見えないから絶対え勝てない。だからこの修行で凝を瞬間的
に出来るようにしろ。」

そう言うとキルアも納得する。

「それじゃ、始める。」

キルアがシャベルを持つて岩山に突き立てる。しかし弾かれた。ま
あ、ここのはがくはゲーム内と違つて硬いからな。

「ゴン～～岩が硬すぎてシャベルが通らないぜ？無理矢理やれば通
せるだろうが、それじゃシャベルがイカれるだろうじ。」

キルアが聞いてきたので

「ならシャベルを強化すれば良い。」

アドバイスしたがキルアは分からない。

「お前、シャベルで掘る時のオーラはどうしてる？」

「オーラ？ビードルもこれも普通だけど？」

「つまりシャベルも体の一部と考えるんだよ。」

その言葉に「ああー！」と分かつたらしく、シャベルにもオーラを纏わせる周をした。

そしてその状態で岩山にシャベルを突き刺すと簡単に掘れた。

「スゲエ！まるで岩がプリンみたいだ！！」

と嬉しそうに言うキルア。

「それが纏の応用技、周だ。」

俺の言葉に「へエ～～。」と納得する。

「でも応用技は基本とはケタ違いに体力と氣力を消費する。調子に乗ると直ぐにバテるぞ。」

俺の言葉に気を引き締めて岩山掘削を再開した。

この後見るのはヒマだからホテルに待機させていた念人と位置を交換させた。

念人はコピーが出来ないから強さは微妙だが、念能力は俺と同じだからキルアよりは遙かに強い。

それにその後の寝てる時のあの特訓を見張らせる事も出来る。

複雑な思考や行動、念能力も使えるから最早人間に近い。

それにアイツは睡眠や食事を取る必要が無いから一晩中見張つて時々ナイフを投げてロープを切る事も出来る。

監視や修行の組み手などは今後アイツに任せよう。

俺は俺で鍛錬をする必要があるんだけどな。ツェズグラみたいにはなりたくないし。

37 コイツが主人公の方が良いんじゃねえか？

原作では70kmぐらい離れた地点から掘らせていたけど、原作と違つてキルアは一人で掘るので、残り時間を考えて約30km地点までを掘らせた。

流石のキルアでも30kmもの岩山地帯（確か原作でも70km全部が岩山じゃ無かつたな。）を掘るには期限ギリギリになるだろつ。と思っていた。

コイツマジで化け物。

念人からの連絡で1週間でキルアがヨークシンシティに着いたと連絡があつた。

念人との位置交換をして実際に見てみたら本当にヨークシンシティの入口にいた。

「よっしゃ――！ヨークシンシティ到着――！」

とキルアは歓喜の声を上げていた。

俺は同じぐらいの距離を進むのに一月以上かかったのに…。

やるせない気分に陥つたがこれが主人公補正と諦めてキルアに声をかける。

「よし、んじゃあまた岩山地帯に戻るぞ。」

と宣言したらキルアは「またあ――？」と驚いた。まあ、苦労して抜け出た所にまた向かうんだからな。

再び岩山地帯に戻り

「本来なら次は敵を観察し、分析して攻略する戦闘考察能力を高める修行をしたいんだが、ここにはそんな都合の良い敵はいないからそ

これはゲーム内でやるとして、これからやるのは防御のための修行だ。

そう言つて俺は右腕に硬をした。

凝を習慣つけていたキルアはそのオーラを見て驚く。

「スゲエオーラだな……。」

「これは纏、絶、練、発、凝を全て複合した応用技。」「硬だ。」

全身のオーラを全部一部に集めて攻撃する。だから通常攻撃を遥かに凌駕する。

今からこの硬を込めた攻撃をするからお前は受け止めろ。そして決して避けるな。」

その言葉にキルアの顔色が変わる。

「お前の思う通り、この硬での攻撃は纏での防御を軽く超える。つまり普通の防護でガードしてもかなりのダメージを負う。」

その場合、どうやって硬を防ぐ？

俺の質問に少し考えて

…全員を碌にする矛盾してゐ「とそんな感した?」

その通り。紅と緑の扇形打撃を便り、全員を通常の二倍速力に多才リラで防御する。

硬での防御よりは落ちるがこれが最もスキがない実践的な防御法だ。

「練習をやつてある。」

俺の指示通りに練をするキルア。

綱の状態をすこ

そして俺はやつらとギルアに拳を近付ける。

キルアは（遅い？）と思つたが、長年の経験からか体の力は抜かず、

聖をしながら構えた

そして俺の拳が当たった瞬間、ドン！…！というテカイ音が鳴り、原作のゴン程では無いが吹っ飛んだ。

「これが硬のみの力だ。この威力に拳本来のスピードと破壊力を上乗せすれば更に威力は数倍～数十倍に跳ね上がる。」

キルアはあまりの威力に驚いて少し呆然としたが、直ぐに立ち上がった。

「最初は今みたいにゆっくり打つが、いつ打つかは言わない。だから堅をずっと維持している。」

そして俺は硬をして構え、キルアは堅をして防衛態勢を取った。俺がしばらく攻撃しないでいるとキルアの堅は乱れてきて、遂には堅が解けて倒れ込んだ。

「ハアツ、ハアツ。」と息切れするキルア。
「約3分か…まあ、それぐらいだろうな。

それなりの実力者と戦うなら最低30分は堅を維持出来ないと勝負にすらならない。ちなみに最終目標タイムは3時間だ。」

その言葉を聞いてキルアは絶望する。30分すら絶望的なのに6倍の3時間なんて…。

「それと…。」

とキルアにシャベルを渡した。キルアは「まさか。」と呟いた。

「その通り、これまで通り周の修行も平行して行う。」

先ずは周で岩山を掘り、筋力や持久力、オーラ総量や操作技術を高めた後に堅の維持や防御力強化をする。

いきなりのハードスケジュールにキルアは冷や汗をかく。

しかし今更「やりたくない。」など言えないし、力関係は完全に決まっているためせつせとやるしかないと理解する。

キルアが岩山の掘削を始めたのでまた念人と位置交換をした。

流石に堅の時間を増やすのはかなり時間がかかる筈だ。これならあと一月の制限時間一杯でようやく終わるだろう。

後の修行はビスケに丸投げすれば良い。

でももしビスケが師事を拒否したらどうしよう?

そうなつたら俺が鍛える羽目になるだろつじ、一坪の海岸線を得るためにイベントをするのも難しい。何せ最低でも15人も必要なイベントだからな。

プレイヤーじゃなくて良いなら念人を使えば簡単だが、プレイヤーでないと無意味らしい。

そんときや無理矢理にでもドッジボール戦にするか?

まあ、最悪一坪の海岸線が無くてもゲンスルーのカードを全部奪えば良いか。

別にコンプリートする必要は無いし。

でももし俺のコピーでもカードが現実世界で使えないならクリアするしかない。

38 行き過ち？

8月中旬に入り、そろそろカタログを買う事にしたのでサザンピースに向かつた。

「いらっしゃいませ！」

受付が応対してくれるが、若干変な田で見てくる。まあ、カギが来たらだからそりやそうか。

「カタログを買いにきました。」

「かしこまりました。お支払い方法はいかがなさいますか？」

「銀行振込でお願いします。」

胡散臭げを見てくるが一応応対してくれた。

そして少しすると受付が箱を持ってきた。
箱を開けると中には分厚い本が入っていた。

「こちらがカタログになります。」

こちらに今年の競売品が全て掲載されております。このカタログにはカードが付いておりまして、これが入場券の代わりとなります。この一枚で5名様までなら9月6日～10日までの開催中何度でもご入場いただけます。ただし競売に参加できるのは個人・団体ともに1名義のみとさせていただいております。」

長々とした説明を終えてようやくカタログをゲットした。

早速グリードアイランドを探してみたら見つけた。

にしてもこのゲームの表紙はスゲエな。血痕みたいなとタイトルが書いてあるだけで明らかに何かヤバそう。

しかし説明書に最低一週間はゲームに集中する必要があるとか書い

てあるけど、一週間でクリア出来るのか？

それともこれはただ単にゲームを止めれるまでの時間か？リープを手に入れるのは難しいだろうが、正規のルートから出るにはそんなに時間はかかるないと思うが？

キルアに堅の修行を課して2週間が経過したある日、予想外の連絡が来た。

「キルアが堅の持続時間を30分まで延ばしたが、この後どうしたら良い？」

と念人から連絡が来たので念人と位置交換をして直接確かめてみたら、本当に堅での持続時間が延びているし、防御力も上がっている。何か原作よりも早くね？確か原作では一ヶ月くらいかかっていたようだ。

もしかしてあの針を抜いたせいか？それとも念人が組み手の相手をしてやつていたからか？

まあ、良いや。

それにも次はどうしよう？

このまま教えているとビスケに習う必要があまり無くなってしまうし…。でもこの世界ではキルアをあまり戦わせる気は無い。だつて下手に死なせるとあの家族がうるさうだし、俺が一人でやつた方が楽に終わる。

だからある程度経験を積ませるためにビスケに頼むのが一番。

まだ戦闘分析とかは教えてないからビスケにはそっち方面や系統別の修行をやらせよう。

「よし、大分硬による攻撃も耐えられるようになつたな、堅の持続時間も延びたし。」

一応褒めとく。ほんと修行は見てないけど。

しかしそれを知らないキルアは嬉しそうな顔をしている。俺はほとんど褒めないからな。それは念人も同じ。

「さて、じゃあそろそろ防御だけではなく、実戦的な修行に移るか。」

「その言葉にキルアは顔を引き締めた。

「堅をしろ。」

そう言われてキルアは素直に堅をする。

「この状況を分かりやすく言うと攻撃力も防御力も半々。つまり攻防力50と言われる状態だ。

ちなみに硬は100か0の状態。硬をしている場所の攻防力は非常に高いがそれ以外は通常以下だ。纏の状態なら全身の攻防力は10程度だ。

つまりもし互いに堅の状態ならいくら戦つても大したダメージは与えられない。

「その場合どうするべきだ?」

「凝を使う。」

原作ゴンみたいに間違えば可愛げあるのに見事正解を言いやがつた。

「正解。」

全身の攻防力50から例えば右手の攻防力70、他の部分の攻防力を30にする。

このように凝を使い状況に応じて攻撃力、防御力を加減する。これが攻防の基礎だ。」

実演しながら分かりやすく説明してやつた。

「よし、ではお前もやってみる。」

と促したのでキルआも再び堅の状態になつた。

「では俺の指示通りにやれ。

右手70、全体30。

おおよそで良い。まだ始めたばかりだからな。

左足80、全体20。」

など30分続ける。

30分後にはキルआはハア、ハア言つてゐる。

「これを30分間、1日3回今までのメニューに加える。」

その言葉にキルआは反応した。

「今までのメニュー……。つまり今までの修行全部プラスこれもあるのか？」

と縋るよつて聞いてきたので

「勿論、何か異論が？」

と聞いてやつたら「い、いや、別に……」と黙る。下手に口答えしたらキツくなるからな。

「それと、組み手の修行にも入る。」

その言葉にキルआは更にガツクリする。コースが追加されたからな。「本来なら実力が拮抗した者同士ですが、そんな都合の良い相手はないないので仕方がないので俺が組み手の相手となる。

」
堅を張つて流を見せる。

「現在は全体の攻防力50。これが戦闘においての基本型。

これに攻撃の瞬間に右拳で殴るなら右拳の攻防力を70、全体30に変える。

攻防力の変化、これを「流」と呼ぶ。

つまりお前はこれから流を限りなく早くやるのが目標だ。上達すれ

ば全力の早さで攻撃出来るようになる。」

ビスケ程では無いだろうが、キルアには見えない早さで流をして見せる。

それをキルアは真剣に見ている。

「よし、先ずはやつてみる。最初はゆっくりで良いから丁寧にスムーズにだ。」

キルアは指示通り先ずは堅をやり、そしてゆっくりと流をやる。右拳にオーラを移動させる氣らしいが、やはり最初なだけあって非常に遅い。流が完成するまで1~2秒も有した。

「よし、今はそれで良い。しかし何れは自分の本気のスピードと同等に早くしろ。

では次は組み手だ。

交互にどこでどこを攻撃しても良い。防護側は相手の攻撃力を見極めて流をすること。」

そして俺達はコツクリと戦い始めた。俺は全力でも流をやれるけど、それをやるとワザと殺した事になるから制裁を食らう可能性が高い。だからキルアに合わせてコツクリとだ。

にしても相手がいるつて良いね。俺はずつと一人が実戦で鍛えていたからこんな風にコツクリなんて出来なかつた。こんな早さで戦えば死ぬのがオチだ。

30分程やり

「よし、終了。勿論これもメニューに加えて毎日行つ。

それじゃ今日は終了。」

と終了宣言をする。

キルアは「やつと終わつた〜。」と喜び、普段通り舌をロープで

結んで手に持ち寝る。

俺は念人と位置交換をして念人にメニューの追加を指示した。

これで後はオークションが終わるのを待つばかり。

その前に幻影旅団殲滅の知らせを心待ちにしているがな。

何しろアイツ等がこの世にいるならそれだけ危険性が上昇する。まだ金は払っていないが、ちゃんとキルアを契約通り鍛えているんだ。契約不履行ならキルアは放り出す。

39 依頼達成（前書き）

戦闘描写が無くてすいません。

待ちに待つた瞬間がようやく訪れた。

8月30日深夜。

一本の電話が来た。

『依頼通り幻影旅団の殲滅が完了したぞ。』
とゼノからの電話が来た。

「では約束通り全旅団の首を落とした画像を送つてくれ。
画像を確認し次第報酬を振り込む。」

『分かった。ところでキルの成長具合はどうじや?』
ゼノが聞いてきた。やはり孫が心配なのか?

「一言で言つと化け物か?だな。少し教えれば簡単に習得するし常
人なら一年かかるような事もアソツは一月で覚えやがる。
才能の塊なんて表現では足りない程の才能だな。」
俺の心からの感想に

『そうか、そうか。元気そうじやな。』

と嬉しそうな声を上げるゼノ。ここだけ聞くならただの孫の成長を
喜ぶ祖父なんだがな。

『じゃあ今から画像を送るからの。』

とゼノが切つた直後に画像ファイルが送信されて來た。

ちゃんと13人分、団長やヒソカなどの首も切断されているので大
丈夫だろ?。流石にゾルティック家を騙すのは無理だろ?しな。
約束通り600億ジェニーを指定口座に振り込んだ。

「ついでに死体は焼いといってくれ、もし死体を操作されたら面倒だ
からな。」
ともメールしといた。

まあ、これは依頼じゃなくてお願ひだからやらなくても良いけど、

やつていてくれるとなあありがたい。

でも少しすると再びメールが来て

「キルを頼むぞ。」

との文章と燃えている死体の画像も送られてきた。

まあ、依頼金プラスキルアを預かっているからしてくれたか。

これで甦るのはほぼ不可能だろう。

流石に肉体が燃えてしまつては操作も出来ないだろうし、特質系での修復も困難な筈だ。

原作ではとんでもなく重要な立ち位置にいた幻影旅団がただのモブみたいに壊滅したというは何とも滑稽だな。

ヒソカも死んだ事からこれで不安もほとんど無くなつた。後はグリードアイランドを楽しむ事にしよう。

後日ママフィアンコ://コニティー主催のオークションは無事成功に終わつた。

特にトラブルも無く。

ちなみにキルアに来年のハンター試験の申し込みもさせた。やつぱりあつた方が何かと楽だからな。

何故か原作ではわざわざドーレ港のキリコ達の元に行つたが、キルアは最終試験まで残つたんだから無条件で本試験会場に招待される筈だ。

ちなみにやはり試験の申し込みをしたら本試験会場への招待状が後

日届いた。

もしかして原作のキルアはこれに気付かずに行ってしまったのか？

だとしたら何たる無駄…。

新聞の一面はほとんどがバツテラのグリードアイランド買収めでたす記事で一杯だな。まあ、2000億以上の金を使ってゲームを買つているんだからな。

さて、明日はいよいよ選考会だ。この日をどれだけ心待ちにしていたか…。

だってキルアがもう流をマスターしたんだもんな。まだ俺に比べれば遅いけど全力での攻撃にもちゃんと流が出来ていて基礎はマスター出来ている。

このままじゃ系統別修行まで突入するか?といつ時によく選考会が来たんだ。これで後はビスケを説得してキルアを任せれば良い。

今は明日の選考のために
「キルア、明日の選考会で多分『練を見せる。』と言われるだろつ
が、本当に練を見せたりするなよ?」

注意を入れとくか。この世界ではバツテラに会わずに選考会に行く
からこの本当の意味を知らない筈だ。

「…何で?練で実力を測るために言つてるんじゃないのか?」
やはりキルアは知らないようだ。

「『練を見せる』とはハンター用語で『鍛錬の成果を見せる』とい
う意味だ。

馬鹿正直に基本中の基本の練を見せられたって仕方ないだろ?」

俺の言葉に

「あ~成る程。確かにそれじゃ失格になるのがオチだな…。」

苦笑いをするキルア。もしも俺が教えてなければ失格になつて半年

ぐらいお留守番だつただろうからな。

「まあ、お前なら心配いらないだろ。お前の発を見せてやれば大抵は合格だ。

何せオーラを電気に変化させる何て普通あり得ないからな。」
そんなことが出来る奴はイカれてる奴か余程特殊な環境で育つた奴以外はあり得ない。普通の奴は覚えるだけで神経がイカれり。
原作でツェズゲラがビビつてたしな。

翌日、バッテラの最後のグリードアイランドを競り落とした後に予定通り選考会が開始された。

ちなみに事前にサザンピースに入場して待っていたの。まあ他にも一杯いたけどね。一応全員念能力みたいだけど大した奴はあんまりいないな。

会場を見回して見るとやはり子供の俺やキルア、ビスケは浮いている。周りからジロジロ見られるが無視だ。

『皆さん、お待たせいたしました。それではこれよりグリードアイランドプレイヤー選考会を始めたいと思います。

今回バツテラ氏が落札した6本のゲームがプレイ対象となります。既に皆さんふるいにかけられた方々…。サザンピースのオーケション入場料の1200万ジェニーという金額をものともしない強者ぞろい。

このゲームに参加するには念能力が不可欠…！…という情報もすでに御承知のはず…！

そこで審査の方法は各自の念を見させていただき、我々が独断で合否を決定するという方法をとらせていただきます！審査を担当いたしますのはプロハンター、ツェズゲラ氏です…！

タモリみたいな格好をした司会者がクソ長い説明を終えた後に受験者達がざわめき出す。シングルスターのツェズグラが出てくるんだからな。そりやあざわづくか。

「では早速…審査に入る。1人ずつステージの上で練を見せてもらう。

ステージはシャッターとカーテンで仕切り、他の者には様子がわからぬよう配慮する。

32名…合格者が出了時点で審査は終了とする。」

ツェズグラの宣告直後にシャッターが降りてカーテンも閉まる。
そして司会者が

「では、審査を受ける方はこちらからどうぞ。」

という言葉と同時に並び出す。最初に並んだのは哀れな爆死する筋肉野郎だ。

そして少し経つと3グループに別れた。
列を作り審査を待つグループとその周りを取り囲み機を伺うグループ、動かないグループ。

勿論俺は最後の動かないグループ。別に早く行く意味無いしね。
しかしそれが分かつていないキルアは隣で焦っている。何で焦るんだろう？

「焦るなキルア。別に今行く必要は無い。」

という俺の忠告に

「何でだよ？中に入った奴らは誰一人出てこないんだぞ？もしかして入った奴ら全員合格したのかも…。」

だつたら32人が合格する前に俺達も…

「んなわきやねえだろ。大体この選考会で32人も合格者は出ねえよ。出ても精々20人程度だろ。」

あのな、よく考える？10年以上クリア者が出てないゲームだそ？
だったら保険としてより有望な挑戦者が現れた時に備えて「空席」
を残すと考えるのが常識。

だったらそのより有望な奴を見つけるために全員審査する筈だ。だからわざわざ今行く必要は無えんだよ。」

俺の答えにキルアが「…確かに、その通りだな。」と納得していると後ろから

「きちんとこの選考会のカラクリを理解してんだなボウズ。」
と話しかけられた。後ろを見ると不精ヒゲを生やした金髪のオッサンがいた。確かブーハットだったな。憐れにも首を爆断されて死んだ。

「ボウズの言う通りや。

今並んでる連中とその周りを取り囲んでる連中はダメや。オレから見ても明らかに不合格と分かる。

見込みがあるのは開始と同時に迷わず席を立つた数人とカラクリを理解して席に残り集中してるオレ達。」

わざわざ知ったかぶつているコイツがウゼH。確かにこりやすぐ死ぬモブキャラだわ。

ブーハットは席を立ち

「オレの名前はブーハット。ま、よろしくな。」

と何故かキメながら行きやがった、

「あーゆーウンチクたれんのに限って受からなかつたりするんだよな。」

というキルアの声が聞こえたのか僅かにブーハットはようける。

ブーハットが行つた後に決意を固めたのかキルアが「先に行くぜ。」と言つた。

俺は「まあ頑張れ。」と送り出す。別に受からなくても良いんだけど

どね。でもそうするともしカードがコピー出来なかつた場合は困るがな。そうなつたらクリアするしかないが、それでは「一坪の海岸線」の入手条件が難しくなる。

だからとりあえず受かつていて欲しい。

キルアが行つた後に俺も並ぶ。

「どうぞ。」とカーテンの中に入り扉を開ける。そこにはツェズグラが腕を組みながら立つていた。

「では、練を見せてもらおうか。」

ツェズグラの言葉に俺は原作通りに硬を行なつた。

それにツェズグラは「ほう。」と言つた後に「それで壁を殴つてみる。」と言つのでリクエスト通りに壁を殴つてやつた。

ドオン！！！というデカイ音が鳴り響き、壁には大穴が空いた。

それを見たツェズグラは「よろしい、合格だ。」と宣言した。それを聞いて俺は隣の合格者の待合室に入った。

中にはキルアを含めて7名といつ少なさ。まあそんぐらいだろうな。

「ゴン！！！」

というキルアのデカイ声が響く。わざわざ叫ぶな。

周りからの視線を無視してキルアの隣に座ると

「さつきの音、お前か？」

と聞いてきたので

「ああ、ツェズグラに「それ」で壁を殴つてみる。と言われたからな。」

「「それ」つてどー考へても必殺技だろ？どんな技だ！？」

とか聞いてきたが

「秘密…。」

としか答えない。キルアも俺がそう言つたら言わない事を分かつてるので「チヒ…。」と言つて黙るしかない。

しばらく経ち、合格者が決まった後に

「さて、とりあえずおめでとうと言つておこう。君達21名にグリードアイランドをプレイする権利を与える。

ゲームをクリアした場合に限りバッテラ氏から500億ジョニーの報酬が出る。詳細は契約書にあるので目を通しておいてくれ。

午後5時にパークシンを出発する。それまでに契約書を読み、サンを済ませプレイの準備を終えてターセトル駅の中央口に集合してくれ。」

ツェズグラの説明が終わったらホテルに戻りサインを済ませてチケッカウトをする。

にしても契約書のゲーム内から持ち帰った物は全てバッテラ氏に所有権がある。つてあるけどどうやつてクリア者に「大天使の息吹」と「魔女の若返り薬」を持つことさせるんだろう?ツェズグラ以外はわざわざバッテラに何が欲しいのか伺いになんて来ないだろうし

…。

まあ、それも無意味か、どうせ恋人を救えなかつたんだから。

ちなみにキルアのハンター試験の本試験会場への招待状はビーフカマフロの貸し金庫に預けた。ゲーム内に持つていつて無くしたら終わりだしな。

集合時間前に行くと既に貸し切りの電車が待っていた。

係員に契約書を渡して俺達も電車に乗る。内装は普通だ。やはり普通の電車をただ貸し切りにしただけらしい。

しばらく走った後に山奥に着いた。

そしてその後は多少歩き、原作通り古城に到着した。

「外観は古城だが、最新式の防犯システムを設置している。指示以外の場所を下手に歩くと命を落とすぞ。」

とのツェズグラのありがとう説明を聞いた後にゲームが置いてある部屋に入った。

中にはズラリとテレビとジョイスティックが並んでる。全部の画面はプレイヤーの顔写真が写っている。しかしこの顔写真は何時撮ったんだろ？

「さて、始める前に少しだけ補足しておこう。
このゲームはソフトがそれぞれ独立している訳ではない。つまりどのハード機からスタートしても行き着く先はみな同じ…。言うなれば電腦ネット上でゲームと似ていて一つの仮想空間に世界中から参加出来るものと考えてもらつていい。」

まあ現実世界が舞台だからな。わざわざ一つ一つ違つ世界を作るなんてしないだろ？」

「それではメモリーカードを配布する。これを差したらすぐにゲームを開始してもらうのだが…。」

勿論俺はメモリーカードを貰つた。何せあのジンのメモリーカードは捨てたからな。

「順番を先ず決めてもらいたい。」

ツェズグラの言葉に「順番？」と誰かが聞く。

「ゲーム内に飛ぶと最初にシステムの説明があるのだが、それを聞けるのは一人ずつなのだ。」

「全員が同時にスタートしても中で待つことになるってことか。」

「一ハンドが補足する。」

「その通り、中で誰が先に行くかモerner」とのないようここで順番を決める。

説明自体は数分で終わるものだが、それでも21人もいると最初と最後で1時間くらいの差が出るからな。」

ツェズゲラの説明の後でどうやって順番を決めるかの議論が始まるうとした時にブーハットが

「全員グーパーツヤンケンで決めようぜ。人数の少ない方が勝ちな。

」

と何故か決めた。他も別に異論は無いようだ。

ジャンケンの結果は原作通り俺が一番。ちなみにこれは完全に運だ。別に相手の手を読んだ訳では無い。

キルアはやはり17番。ジャンケンはあまり強く無いらしい。

「キミが一番か…。準備が済んだらスタートしたまえ。」

メモリーカードを受け取つてジョイステに差した。

「ゴン！説明聞いたらスタート地点で待つとけよ！」

キルアが念押ししやがつたので手を上げて答える。

そしてジョイステの前で手をかざし練をした。その瞬間風景が変わって何か見たこと無い模様の壁に囲まれた部屋に着いた。

入口に入り、廊下？を歩くとまた扉があつたから入ると

「グリードアイランドへようこそ…。」

と変な帽子？機械？よく分からないが何かを被つた女がいた。

原作ならここでジンからのメッセージを聞くんだが、俺はセーブデータが入っていないメモリーカードからやつたから無い。

「それではこれよりゲームの説明をいたします。

ゴン様、ゲームの説明を聞きますか？」

別に知つていいから

「いや、いい。」

と答える。

「そういうばいつの間にか右手の人差し指に指輪があつた。自動入手らしいな。

「ゲームについての説明を聞かなくてよろしいですか？」

「ああ。」

念押しに聞いてきたがまた断る。時間の無駄だしな。

「それでは、健闘をおいのりします。そちらの階段からどうぞ。」

部屋の奥にあつた階段を降りて外に出た。
見渡す限り草原が広がっていた。それだけなら素晴らしい風景なのだが、原作ゴンと違つて気配察知能力は高めておいたから二つの方角からの視線もよく分かる。

それにしてもこんな遠くからなのにこんなにも丸分かりとは……。マジで大したこと無いな。

さてと、キルアが来るまでまだかなり時間がある。今はただ待つだけか……。

4.1 ゲーム開始（前書き）

「都合主義設定になつております。

4.1 ゲーム開始

しばらく他のプレイヤーの行く先を見ながら待つていると「見られているな。」といつキルアの声が聞こえたので立ち上がる。

「ようやくか、遅えよ」

と愚痴を言つと

「しようがねーだろ? オレジヤンケン弱えんだもん。」

と返して来た。確かにコイツは弱い。俺が普通にやつても7割方は俺が勝つ。

「じゃ行くぞ。」

とアントキバの方向、ていうかブーハット達が行った方角に行く。キルアも黙つて着いてくる。別にどっちに進むかはどうでも良いらしいからな。

「なあ、やっぱゴンのバインダーもカラ?」

「ああ、まあそりゃそうだらうな。プレイヤーによっての特典なんか無いだろし。皆等しくゼロからのスタートってことか。」

何せあのクソ親父が作ったゲームだからな。

「にしてもゲームの中って実感は全然無いよなあ?..」

そりや現実だからな。

「確かにそうだな。」

まあここがゲームの世界であれ現実世界であれ、とりあえずは情報を得るために町を見つけないとな。」

どれぐらい歩くんだろう? 確かこの島は北海道程度の広さの筈だ。つまり軽く2、30kmくらい歩いて事になるだらうな。

じぱり歩いてると上から何か来る気配がした。ああ、アイツか。

「どした？」

俺が上を見ていたからキルアが聞いてきた。

「何かが上から来る。」

言つた直後にキィイイインという音が聞こえたのでキルアも上を見るとそこには何か光つてゐるモノが高速で接近してくると分かつた。

そして物体はバシュッというテカイ音を鳴らして着地した。

中から変な髪型をした男が現れた。

男はキヨロキヨロと周りを見ると

「ここは……スタート近くの平原か。

つてことは君達ゲームは初めてかい？ん？」

と聞いてきた。

バインダーを出そうか迷つたが、この後重要なイベントがあるから
とりあえず原作を守つて何もしない。

「さて、どうかな？

バインダーを持つてることはあるんだもプレイヤーだね。
キルアがとぼける。それしか無いからな。

「キシキシ、まあね。」

男は変な笑い方をして何かカードをバインダーから取つた。
スティールだろ？ていうかその笑い方何？この世界では旅団はもう
いないから代わりに俺がコイツを仕留めようかな？

男はカードをバインダーにセットして俺達を確認して

「ふーーん、キルアくんとゴンくんか。」

と言つ。

キルアは何故名前を知られたのか分からないので焦つてゐる。それ
が普通か。俺は別に言うことは無いのでただ黙る。

男は少し悩んだようにした後にバインダーからカードを取り出し

「？追跡？使用！――キルアを攻撃！――」

と宣言した。

良かつた。原作通りキルアか。もしも俺だつたら宣言前にトレースを奪つてた。

男が宣言した直後に何か光がキルアに高速で向かう。

「くつ。」

キルアは言つた後にその光に捕らわれないよう避けたが
「キヤハハハハアーーー！」

バーク、ゲームのスペルからはどうやつたつて逃げらんねーーよ！
！」

と男は笑う。

その嘲り通りにキルアは光に捕らわれた。

「大丈夫か？」

一応聞いとく。別にステイールを食らつたからつて問題無いけどな。
男が満足気に笑つていると突然周りの雰囲気が変わった。

「オレに…何した？」

とキルアが殺氣を向けながら男に聞いた。

キルアの雰囲気に形勢不利を感じたのか男は急いで別のカードを取り出し

「？再来？使用…マサドラヘ…！」

と宣言して凄い勢いで光に包まれてドギュン…と飛んで行つた。

「…チッ。」

とキルアは悔しがる。

「大丈夫か？」

と聞くと

「ああ、特に変わり無い。」

と答える。まあただの搜索系のスペルだからな。

「もう追えないし、とりあえず町を目指すぞ。」

と言つて俺は再び歩き出し、キルアも着いてくる。流石にスペルで逃げられたら仕方ない。

まあ俺は後でゲートで追えるけど。

再びしばらく歩き。何気なく周りに落ちてた石を拾つてみた。するとボン！という音と共に石がカード化した。
ちなみにカードには

H -
石

道端にある何のへんてつもない石。人に向かって投げればそこそこのダメージは与えられる。

というクズカードでしかなかつた。

「おーー。本当に手に取るとカードになるんだな。」
とキルアが関心する。

「ああ、にしても限度枚数がH - かよ。マジでカスだな。
所詮ただの石だからな。

しかし俺は石を何個も拾つてカード化してバインダーのフリー・ポケットに収める。

「何で石なんかをフリー・ポケットに入れるんだ？ ポケットの無駄だろ？」

キルアが聞いてきたので

「そもそもカードを奪う魔法があつた時のために。もしも貴重なカードを手に入れてさつきの奴みたいに何か魔法を食らつてカードを奪われる可能性がある。

その時に相手が好きなカードを奪うという効果なら仕方ないが、ランダムに奪う効果ならこれで貴重なカードを守れる。
何せ今はまだ防御出来るカードを持つていなかからこうやるしか無い。

フルポケットガード法式を説明する。

「成る程、確かにそういうのが必要だな。

にしてもスゲエなゴン。お前本当にこのゲーム初めてなのかな?」

「勿論、ていうかこの程度なら普通にゲームやってら思いつくだろう?」

嘘は言つていない。何せ来たのは本当に初めてだから。知識はあるけど。

しばらく歩いているとようやく町に着いた。

懸賞の街 アントキバへようこそ!と書かれた横断幕を潜りアントキバに入った。

見渡す限りの壁には様々な張り紙が張つてある。

「スゲー数だな…」

たずね犬、見つけてくれた方には「呪われた幸福の女神像」さし上げますか…。」

とキルアが張り紙を読む。どうせそれもクズアイテムだろうがな。辺りを見回すと人だかりを発見した。

「キルア、あれ。」

と人だかりが出来ているデカイ掲示板を指差す。

掲示板の前に行くと

「アントキバ月例大会行事表か。」

とキルアが読み上げる。

「9月はジャンケン大会ねえ。ていうかこのゲームってリアルタイム進行なのか?」

と行つた後に隣にいたキャラに

「スマセン、今日つて何月何日でしたつけ?」

と聞くと「9月11日だよ。」と返つて来た。知つてゐるけどね。

「成る程、やつぱりリアルタイムなんだな。」

と俺が言つと「だな。」とキルアも返す。

「毎月15日開催か…。9月の優勝商品が「真実の剣」」

キルアが読み上げる。

「他のプレイヤーも狙つてゐるらしいな。」

俺が言う。周りを見るとあの筋肉野郎やブーハットなど合格者が何人もいる。

「確かに。考へることは皆同じじつてことだな。」

キルアが返す。

「4日後か…。参加するか?」

キルアに聞くと何故か自信満々の顔で

「当然、ジャンケンなら誰でもチャンスあるからな。」

とキルアが言つ。お前ジャンケン弱いこと分かつてんのか?

「じゃあま、とりあえずまだ時間はあるから情報収集でも行くか。と俺が言つとキルアは「おう。」と言いながら腹を鳴かす。

俺は途中でバックに入っていたカロリーメイトを食つていたので別に腹は減つていない。

腹ごしらえと情報収集、懸賞品の一石三鳥を手に入れるためにある飯屋に入った。

そしたらデカイ山盛りパスタがキルアの前に置かれる。俺は無理だから注文していない。

「30分以内に完食すればお代はタダ!…さらに「ガルガイダー」プレゼント!!

それではスタート!」

という猫みたいな店長が宣言した。俺は水を飲んでるだけ。

キルアが食いながら

「ねエオッチャン。月例大会つてどのくらいの人人が参加するの?」

と聞く。

「ハハハ、しゃべってるヒマがあつたら急いで食べた方が良いアルよ。

まあ、その月によつて違うアル。参加者が10人以下の月もあるアルし、逆に9月は誰でも勝つチャンスがあるから1000人以上集まるアル。ワタシも参加するアル。」

と店長は教えてくれた。

「倍率1000倍以上かーー。

ところで魔法つてどうやつたら使えんの？」

とキルアが聞くと

「魔法？何だそりや？」

店長はRPGならではのセリフを言い放つ。

「どうやらRPG同様、特定の会話以外は出来ないらしいな。」

俺の言葉に「らしいな。」とキルアは言つて本格的に食い始めた。ていうかどうやってそんなに食えるんだ？明らかにお前の胃袋よりも量が多いんだぞ？

「アイヤーやられたアル！！

見事13分で完食！！

商品持つてくるアル。」

あの馬鹿盛りを僅か13分で完食するとは…。コイツの胃袋はどんな構造をしてるんだ？

「お待たせ、商品の「ガルガイダー」アル。」
店長がガルガイダーのカードをキルアに渡した。

「1217・F-185……

「どういう意味だ…？」

と俺達が疑問を言つていると

「オウ、君達カード初めてか、異国の人アルか。

左の数字はアイテムのカードナンバーで右の方は記号がアイテムの

入手難度のことある。難易度ランクは10段階あってFは下から3番田アル。

記号の横の数字はそのアイテムのカード化限度枚数のことアル。」とわざわざ詳しく教えてくれる店長。

「つーことはこのF-185はクズアイテムか…。」

俺の言葉に

「くそーー。名前からみて絶対武器だと思っていたのに。」

と悔しがるキルア。確かにこの名前なら何らかの武器が防具の名前に聞こえるな。

「そいじゃこちやーさま。」

と俺達が帰ろうとしたら

「アイヤ待つアル!!」

と店長が慌てて止める。

「巨大パスタ確かにタダなった。でも他に注文したアイスソーダ有料ね。2杯で680ジョニーアル。」

「あ、そっか。

えーーと、ハイ、10000ジョニーから。」

とキルアは外の通貨の1万ジョニーを出すが

「……何ソレ?」

と店長は答える。

キルアが固まつていると店長はカードを出して

「この島ではお金、この状態でないと使えないアル。それ、この島ではただの紙クズ。」

と宣言された。

「……マジ?」

とキルアは聞くが。

「680ジョニーカードで。」

と店長は答える。勿論カードで金は手に入れていないから払えない。すると店長は電話を取り

「もしもしもしケーサツあるか？」

と警察にかける。

「わーーーっちょっと待つた！！」

とキルアは必死に止める。ゲーム世界でまで警察の厄介にはなりたくないからな。

結局キルアはあの店で食った分働いて返す事になった。

俺は水しか飲んでないので働く必要は無い。だからキルアに

「終わる頃迎いに来てやる。」

と宣言して店を出る。キルアから止める声が聞こえるが無視だ。

そして店を出て路地裏に入り誰もいない事を確認してさつき店長が見せてくれた1万ジエニーをコピーしてみた。

結果は成功。見事に1万ジエニーのカードはコピー出来たし、フリーポケットにもハメられた。

どうやら先ずゲーム内ではカードはコピー可能らしい。今はリープが無いから現実世界でもコピー出来るか確認出来ないが何れすれば良い。

今はとりあえず俺も何か食うか。ゲーム内の飯のレベルが気になるし。気に入つたらコピーしたいしな。

キルアのバイトが終わるまで後2時間はあるし、丁度良いだろ？。

42 ボマーとババアとの出会い

2時間経ち、キルアを迎えて行った。

「バイトが終わつた後にキルアからは

「ゴンも働いてくれればもっと早く終わったのに…。」
と文句を言われたから

「だったら「ガルガイダー」を売れば良かつたのに。」

そう言つたら

「あーーーー！ そうじやん、そっすれば皿洗いなんかする必要無かつたじやねえか…。」

と落ち込む。普通それぐらい考えるだろ？？

いきなり「キヤアアアアアー！」や「ウワアアア！」などといつた悲鳴が聞こえて来た。あの筋肉野郎が爆死したか。

俺とキルアは急いで悲鳴が聞こえる所に向かうとそこには人混みが出来ていた。

人混みの中を抜けるとそこには無惨にも腹が爆発した死体が転がっていた。

周りからは「異国の者だ。」や「むごいのオ…。」という声が聞こえる。よく異国の者だと分かるな。

「ねエ、何があつたの？」

キルアが隣にいた男に聞いた。

「突然体が爆発したんだ。内からボーンとよ…」

と男が答えると筋肉野郎の死体は消え、地面には跡しか残つていない。

「ゲームオーバーか…。」

俺のつぶやきにキルアが真剣な顔をしている。まあ、自分は得体の知らない攻撃を受けたからな。不安にもなるだろ？

「もしかしてこのゲームには人を殺す魔法があるのか？」
「という俺の質問にキルアはただ「…分からぬ。」とだけ答える。
まあお前に答えを期待した訳じゃ無いからな。

「安心しな。このゲームにそんなスペルは存在しない。
あれは念の仕業さ。他のプレイヤーのな……。」

不精ヒゲを生やしたボロボロの服を着た音が答えた。コイツ名前何
だっけ？

「プレイヤー同士で殺し合ひをしてるってこと? 一体何で…?」
キルアの質問に

「プレイヤー狩りさ。

このゲームにはカード化限度枚数つてシステムがあるってことは聞
いただろ? 存在できるカードには数に限りがある。しかも貴重な力
ードほど、その数は少なくなる。
つまりプレイヤーが増えれば増えるほど 限りあるカードが自分に
まわってくる確率が下がるってことさ。」

と答えた。

「逆に言えばプレイヤーが減れば減るほどカードの配分が増えるつ
てことか。」

キルアの確認に

「ああ、それであんな残虐なマネをする過激な連中が出てくる。」
と補足。

まあ確かにプレイヤーが少なければ大天使の息吹とかは手に入れや
すくなるな。代わりに一坪の海岸線の条件が厳しくなるけど。

「オレ達は逆…。数で勝負し決して血は流さない。」

男の言葉にキルアは「?」となる。

「オレ達と組まないか? 確実にゲームクリアできる方法がある……
! ! !」

自信満々そうに男が断言する。でも無理だつたし。

ていうかもしほマーがいなかつたとしてもコイツとあるお仲間じゃあ一坪の海岸線を入手するのは不可能だろ？から結局無理だらうけどな。

「確實にゲームクリアできる……？」

キルアがウサン臭げに聞く。スタート直後に都合良すぎるとしな。

「ああ、興味があるならついてきてくれ。この先にオレの仲間もいる。」

と男が言つ。

「どうするゴン？何か話がオイシ過ぎるんだけど。」

キルアが聞いてくる。基本的に決定権は俺が握つているからな。

「良いんじゃねえ？話を聞くぐらいは。

俺達このゲームについてまだほとんど分かつて無いし。それにもし罷だとしても奪われて困るカードは持つて無いし。」

ていうか行かないとゲンスルーやビスケに会えないから行く以外の選択肢は端から無い。

俺の言葉に「まあ、そうだな。」とキルアも納得して男の案内で広場に行く。

広場に着いてみると何人か見たことのあるメンツがいた。

「他にも誘われた人がいるんだ。」

キルアが自分達だけでは無かつた事に少し驚く。

「これで全部か。あの二人組は？」

不精ヒゲの男が仲間に尋ねると

「アッサリ断られた。話も聞かないそうだ。」

と返す。

「そうか、じゃ始めようか。

今あつちで一人プレイヤーが殺された。君達と時を同じくして着た人物だ。

この二人も見ていた。腹がふつ飛んでたよ。「ボマー」だ。「不精ヒゲが俺達を見ながら言つ。

「筋肉質のガツチリした黒髪のやつ。選考会で一番始めてに受かつた人だよ。」

とキルアが答えた。

広場にいるブーハットなど選考会にいた奴らが「ヤツか…。」と頷いた。

「まず君達が一番心配していることを解決しておこう。彼の死はスペルによるものではない。

このゲームのスペルの中には人を殺傷する類いのものは一つもない。ゆえに君達がかけられたスペルで負傷したりましてや死ぬことなどありうない。」

ゲンスルーが説明している。何せ殺した張本人だからな。説得力がある。

「スペルは全部で40種類！！攻撃型、移動型、防御型など様々だが、君達が受けたスペルは調査型に属するもの…「追跡」か「密着」のいずれか。

一言で言うとスペルをかけられたプレイヤーは情報を奪われる。自分が現在どこにいるのか。自分が現在どんなカードを所有しているか。それが敵につつぬけになる。このゲームでは圧倒的に不利な立場。君達はすでにそのスペルにかかりた。重い枷を負ってしまったんだよ…！」

このスペルを新参プレイヤーにかけるためにスタート地点を見張つてゐる連中がいる。そいつらはもしも君達がこの先何か貴重なカードを手に入れたらすぐに現れ強引にカードを奪つていくだろう。

最悪の場合は命を落とす。」

ゲンスルーが長々とありがとう話をしている。その張本人が警告するつてのが笑えるな。

「さつき殺された奴みたくか？オレはそう簡単に殺られねエ。」
ブーハットは自信満々に宣言する。お前は目の前の奴に簡単に首を爆断されて死んだがな。

「いや…………彼を殺したのはまた別…。」

「プレイヤー狩り」を遂行する最も過激な部類だ。こいつらはライバルを減らすためだけに最初から殺すつもりで行動している。こいつらも恐らく平原を監視している。慎重にターゲットを決め、尾行して他の者に正体を悟られぬ様、殺す。死体の状況やその殺し方からみてオレ達が把握しているだけでも最低4人はこんな奴らが存在する。

君達の知り合いを殺したのもその一人。オレ達が「ボマー」と読んでいる奴の仕業だ。分かつているのはそいつが恐らく放出系か操作系の念能力者だということ。要するに何も分かつていにいということだ。

このゲームが世に出てすでに10年以上…。状況はどんどん悪化している。」

悪化の原因の一つの癖にいけしゃあしゃあと言つね。
多分俺もプレイヤー狩りをする事になるだろうがな。

「…………3つ。

このゲームでアイテムカードをゲットする方法は大きく分けて3つ。
わかるか？」

頭蓋骨の形か髪型なのか頭頂部が異常に発達している男が聞いてきたので原作通りに

「自分で探す。」

と答えた。

「ああ、それが？。」

と男が答える。

「他のプレイヤーと交換する。」

黒人のアベンガネが答える。

「そう、それが？。」

「そして？が他プレイヤーから奪う…か。」

キルアが答えた。

「その通り、なかなか優秀だな。

細かく分ければまだあるが、大きくはこの3つ。しかしその3つの内の3番目…。奪う者が急激に増えている。自力で探すこと、交換することをやめた者達の増殖…。

原因は入手難度とカード化限度枚数というシステム…！

アイテムをゲットしてもカード化限度枚数がいっぱいカード化出来ない。または入手難度が高すぎて自力ではそのアイテムをいつまでも入手できない。そんな閉塞状態がここ数年続き、緊張した糸が切れるかの様に奪う者達が激増し始めた。

暴力で相手から奪う、他プレイヤーを脅し、殴り、バインダーを出させてカードを奪う。いくら痛め付けても屈せず、バインダーを出さない者は殺す…！

殺せば指輪は消滅しカードデータも全て消える。そうすればカードは入手できなくともカード化できるアイテムが増える寸法…。

相手を殺してしまったらカードは奪えない。当初このルールはプレイヤー同士の殺し合い防止が目的だったはず。しかし状況がどんどん煮詰まり、相手を殺してカード化できるアイテムが一つでも増えればよしと考えるヤバイ連中が台頭してきた。

恐らく今は末期…！…

そこで不精ヒゲの男が再び前に出て

「オレ達がその状況にピリオドを打つ！！

同志を募りゲームを攻略する！！協力して欲しい。」
との協力要請。

「方法は？」

「方法は？」
ピーハツトが尋ねる。

「カードを得る方法は大きく分けて3つ。？自力探索、？交換、？奪取。

どれに入るんだ？聞かなくても察しあつくがな…。」

「？だ。」

と不精ヒゲは答える。

「厳密に言えば？？？全部使うがとくに？が重要ってことだわ。」
アベンガネが補足する。

「何だよ、じゃ結局腕づくで奪うのか！？」

ピーハツトの問い合わせに不精ヒゲは

「違う！」

少なくともオレ達は暴力を使わない！！あくまで大別すれば「奪う」
といふ表現の中に入ってしまうというだけだ！！

何か飽きた…。

この寸劇を楽しむつもりは無い。別にゲンスルーとビスケに会った
ために来たんだからな。

周りがカードについてや報酬の分前にについての話し合いを聞いてる
フリをしてスルーしていた。

「君達はどうする？」

唐突に質問された。まあ質問内容は分かるがな。

「うーーん…。

俺はいいや、自力でクリアを目指すわ。」

そう言つて立ち上がる。

そしたらキルアも

「リーダーがそう言うんでね、オレもバス！」

と俺と一緒に広場を去った。

少し歩いた所で

「なあゴン。何で断つたんだ？」

キルアが聞いてきた。

「うん？」

大体こういう難しい状況になつた場合にあいつチームが出来るんだけど、大概は途中で仲間割れや初めから仲間のフリをしていた奴のせいで崩壊するのがオチだ。

チームが10人以下で全員が十年来の親友だったなら上手くいくかも知れないが、50人以上で口クに知りもしない奴らが徒党を組んで成功する訳がない。

多分クリア目前にでもなつたら誰かが裏切つてカードや報酬を独占したがるだろ。」

俺の説明に「成る程」とキルアは納得する。

「それよりも、今は月例大会の方が重要だ。

俺は出る氣無いからキルアには是非でも勝つて貰わなくちゃいけない。」

その言葉にキルアは

「マジ!? ゴン出ねえのか!!

オレのジャンケンの弱さはゴンも知つてゐるだろ? 無理無理。」

と手を横に振る。

「だからジャンケンで9割方勝てる方法を伝授してやる。」

俺の言葉に「そんな方法あるのか!?' とキルア興奮気味。

「いいか、先ずは必ず最初はグーで始める。そうすると相手はグーの状態から振り上げて振り下ろす瞬間には十中八九既に出す手の形

にしている筈だ。

例え相手の手が微妙でもグー以外の手を出そつとする奴は握り方が空き気味になる。だからその時はチョキを出せば負けない。お前の目なら多分出来る筈だ。」

それを聞いてキルアは

「ああ！成る程、だからゴンは何時も俺に勝つてたのか。」と納得していたが。

「いや……。残念ながらキルアとのジャンケンの時は純粋に運だ。だつてお前にこんな方法を使わなくとも勝てるからな。」

その言葉に落ち込むキルア。何せ本当にジャンケンが弱いと宣言されたんだからな。

「とにかく、これでジャンケン大会にはまず負けないから」「真実の剣」はゲット出来るだろ。

まだ大会まで時間があるから金稼ぎとこの街の指定ポケットカードを探すぞ。」

と別に必要無いが原作通りクズアイテムの懸賞を始めた。
何せビスケが監視している筈だからな。迂闊な行動や能力を使えない。

まあ時間潰しぐらいにはなるだろう。最悪キルアだけにやらせて俺は見ているだけで良いし。

43 ババアとの交渉

15日までいろんな懸賞に挑戦したがやはり普通の懸賞で手に入れられるのはクズアイテムばかり。

ガルガイダーが高く売れると分かつたからキルアに食費節約として取らせまくっていた。俺は普通の食事をしていたけど。

そしてついに月例大会の日がやつてきた。

キルアは俺が教えた方法で圧倒的な戦果を上げ、樂々優勝。「おめでとう！！優勝商品の「真実の剣」です！」

現在表彰式。

キルアが真実の剣を受け取るとカード化した。それを見たキルアは「！見るよゴン。」

と俺にカードを見せてくる。別に知つてますけど？

「カードナンバー83!! 指定ポケットカードだ！」
とキルアははしゃぐ。それも直ぐに奪われるんだけどね…。

表彰式を終えて通りを歩きながら

「問題はこのカードをどうやって守るかだな。

スペルカードで相手のカードを奪えるらしいけど俺達は防御カードが無い。更にこれを俺達が持っている事は大勢に知られている。正に良いカモだな。」

「ああ、確かに格好の標的だよな。新たに何人か会場からずつと尾けてきてるしな。」

キルアの言う通り、明らかに俺達を意識している奴らが何人かいいる。マジで丸分かりだ。

「皆があんな風に分かりやすいと良いんだけどな。」

「ああ、まあこの時のためにちゃんと用意は出来てるけどな。」

そう言って俺はフリー・ポケットが一杯なバイインダーを出した。

「恐らく攻撃スペルには指定ポケットかフリー・ポケットのカードをランダムに奪うスペルと好きなのを奪えるスペルがあるだろう。後者なら難しいが前者なら防ぐのは簡単。先ずはキルア、「真実の剣」を貸してくれ。」

「ああ。」

とキルアもバイインダーを出して尾行している奴らに見えないようにして真実の剣を俺に渡す。

「既にお前も分かつているだろうが、指定ポケットに一枚だけこのカードを入れてれば簡単に奪われるが、俺のクズカードで一杯のフリーポケットに入れておけばランダムで奪うにはかなり難しい。それに真実の剣はキルアが持っていると思うから間違えてお前を攻撃する可能性が高い。」

俺の説明に

「確かにそうだな。俺が持っているよりもゴンが持つてれば相手は間違えるだろうし盗られる可能性は低いしな。でもランダムじゃなくて好きなのを奪えるスペルだったらどうすんだ？」

キルアの質問に

「そんときは単純にそいつがスペルを使う前にカードを奪えれば良い。まあ最も、これは相手の身体能力がかなり低かつた場合しか不可能だけど。」

俺のスペルの防ぎ方に

「おーー成る程、それサイコーだな。まあ後ろの奴らの実力はたかが知れてるから有効だろうしな。」

面倒だがこのイベントを通過しないといけないんだよな。そうじやないと一坪の海岸線イベントを体験出来ないし、ゴレイヌにも会えない。

アイツがいないとメンバーを揃えるのが面倒だし、最悪いなくとも何とかなるだろうけどいた方が楽で良い。

そんなことを考えていると

「待て！！その子供2人！！」

と声をかけられた。確かにいつクリアや現実世界に帰るのを諦めてゲーム内で結婚して定職にもついた奴だったよな。

だつたら仕事行けや。

「「真実の剣」を置いていつもりおつ。おとなしく言つことを聞けば乱暴なマネはしない。」

確かモタリケが緊張しながら宣言するが

「やだよバー力。」

とキルアがバカにして去る。

それにムカついたのか若干青筋立てたモタリケは

「待てい！」

と大声を出した後に既に出していたバインダーからカードを取り出す。

それに俺達も「ブック！」とバインダーを出して警戒する。

「フフフ、ハツタリだろ？お前らがこのゲームに来たばかりなのはわかつてんんだ！防御スペルも「真実の剣」以外の指定ポケットカードも持つてるわけないね！

くらえ「竊盗」使用！！キルアを攻撃！！「真実の剣」を奪え！！モタリケが自信満々にシーフを発動する。しかしカードが消滅してしまった。

「？、！？」

とモタリケは自分のバインダーを見た。

「なつ、どういうことだ！？」

モタリケが混乱している所にキルアが

「指定ポケットカードだからって指定ポケットに入れてるとは限らないぜ。」

と告げる。

何せシーフは対象の指定ポケットのカードをランダムに一枚奪う。という効果だからただシーフが消滅しただけに終わった。

勿体無いねえ。せつかくのCランクカードなのに。

モタリケは自分の唯一のリアカードを無駄に使つてしまつたのがシヨツクだつたのか。「状態だ。

「くくく、ご苦労だつたな様子を見たかいがあつたぜ！フリー・ポケットに入れるなら願つたりかなつたりだ。」

またモブが現れた。「お前達がこの数日「真実の剣」の他に15枚のアイテムを手に入れることは調査済み！！

「誰かの色紙」1枚、「アンティーク時計」1枚、「招かず猫」1枚、「ガルガイダー」12枚。

どれが手に入つてもランクFのスペル呪文カードとひきかえなら（多分）大得よ！！

「ピックポケット」使用！キルアを攻撃！！

しかしまたもやカードが消滅する。

「オレが手に入れたカードをオレのバインダーに入れてるとは限らないだろ？？」

キルアが答える。

しかしモブは諦めず。

「うぬうつ、だが「ピックポケット」はあるぜ！！

「ピックポケット」使用！！ゴンを攻撃！！

その宣言をしたら今度はちゃんと成功してオレからカードを一枚奪つた。アレをな。

「くくく攻撃成功！…さあてどのカードが手に…」

！？ただの石」

カードを見て驚愕するモブ。手に入れたのがただの石だからな。

「何だこりやあ…！」

とモブはカードを地面に叩きつける。

「残念、見事なクズが行っちゃったね。」

俺の顔を見てモブは自分が見事にハメられた事が分かつただろ？
おかげで攻撃を止めた。

「打つ手なしか！？ならどいてる… ……」

今度はデブが出てきた。

「お前らの敗因は事前に敵の情報を知ることが出来なかつたこと…
だがオレは「念視」によつてキルアのバインダーには「真実の剣」
が入つていないのは確認済み！…さらに「盗視」によつて「ゴンのフ
リー・ポケットに入つていることも確認…！」

ならばこのカードで100%奪える…！」

デブが自信満々に言つ。

確かにロブは対象の好きなカードを一枚奪えるからそれなら取れる
だろう。攻撃が成功すればな。

「「強奪」使用！…ゴンを…」

攻撃と言つ前に素早く移動してロブを普通に奪つた。

「へー、ランクBか。良いカードじゃん。ありがとねオジサン。」

そう言って自分のバインダーにロブを入れる。残念ながら原作みた
いには返さない。

「じゃ。」

そう言つて立ち去ろうとしたら

「そんなやり方は格下にしか通用しないぜ……お前ら以上のプレイ
ヤーなんかここにはゴマンといふ…！」

そのほとんどがゲームから出ることすら出来ずにくすぶつてんだ！

！」

と見事に負け犬の遠吠えをしてくれた。

「確かに奴の言つ通り実力差がかなりないとさつきみたいなスペルカードを詠唱中に横取りするなんてムリだ。」

キルアの言葉に一応

「どうしたって防御スペルが必要だな。」

と返す。

「ああ…。少なくともプロ級の奴に狙われたらひとたまりもないからな。」

その発言後にキルアはようやく気付いたらしい困まれていることに。「わかつてゐるじゃねーか。そのカードを狙っているのがんな素人だけだと思つたか？逃げてもムダだぜ。」

と何人もが出てきた。コイツらに会つたためにあんな茶番に付き合つてやつたんだからな。

じやなかつたらアイツらにスペル攻撃される前に首をハネて近付けないようにしてやつた。

「さて…スペルを使う優先順位を決めよつか。」

「ボウヤ、ここからが本当の決勝なんだぜ？」

と勝手に話し合つてゐる。

「わざわざ大会に出るなんてマヌケのやることさ。」

と嘲笑う奴らもいる。わざわざお前達と会つただけに取つてやつたというのに酷い言葉だな。

「こりや無理だな。」

キルアに告げると「ああ…。」と諦めた声を出す。

「んじや次の目的地は魔法都市マサドニアで良いにな？」

キルアに聞くと

「異議なし。」

とだけ答えた。

その後、眞実の剣は見事に取られ、何故かロブまで取られた。アイツらマジムカつぐ。

とりあえずトレードショップに行つてクズカードを金と交換して食料や水などを買ってマサドラに向かう事にした。

「いらっしゃい。」

トレードショップに入ると角刈りのNPCが話しかけて来た。

「ガルガイダー4枚と交換して。」

とキルアがガルガイダー4枚をNPCに渡した。

「はいよ120000ジエニーね。」

ランクFのクセに中々高値で売れるんだよな。

「お金は店に貯金すると盗まれる心配がなく便利だぜ。」

NPCがロールを果たすために定形句を言う。

「やだよ、入金した店でしか金おろせないんだろ。」

といちいちキルアも相手をする無視すれば良いのに。

「ウゼーなあいつ。毎回聞いてくんのかよ。」

とキルアが愚痴を溢す。

「これでバインダーにはクズカードしかなくなつちまつたな。」

キルアがバインダーを見ながら言つ。何せバインダーのほとんどを金が占拠しているからな。

「まあ、これで当面の金の心配は無くなつたし、スペルカードを買うための金も貯まつたんだ。食料や地図を買って早いとこマサドラに行こうぜ。」

何せこのままじゃ指定ポケットカードを手に入れてもまた盗られるのがオチだからな。」

「ああ、そうだな。あれはムカついたし。」

キルアが眞実の剣を盗られた時のを思い出したのか顔をしかめる。

「デパートに入り水や食料を買い込み、次は地図だ。

地図売り場に行き、地図のカードを見る。

「どっちにする？」

キルアが分かりきった質問をしてきた。

「出来るならこっちの650000ジューの地図を買いたいけど、俺達には不可能だからこっちの20000ジューの安い方だ。」
「どうか65万ジューって一人で買うのは不可能じゃん。だってフリー・ポケットは一人45個しか無いんだからどうやっても一人では買えない。最低一人分のフリー・ポケットが無いと金を維持出来ない。」

地図を買つたので早速「ゲイン。」と地図のカード化を解除した。
地図にはスタート地点であるシソの木とアントキバしか載つていな
い。にしてもスゲエ形の島だよな。ドラゴンにしか見えねえ。
「これだけじゃマサドリガがどこにあるか分からねえな。」

俺の言葉に

「トレードショップで聞いてみるか。」

キルアが答える。

「マサドリの場所なら3000ジューになります。」

NPCが答える。

「高ーーーよ。少しまけろよ。何度も来てんだからさ。」

キルアが抗議するが

「3000ジューになります。」

としか答えない。まあこいつは決められた言葉しか言えないからな。
キルアは仕方なく言われた通り3000ジューを支払った。

「この街から山を越えて北へ80km程まっすぐに行くと湖がある。その湖沿いに北西へ向かえばマサドラに着く筈だ。

途中一つ小さな村があるからそこで休むといい。」

NPCのアドバイスを無視してキルアが

「80kmなら急げば一日で着くよな？」

といつとんでもない事を言つてきた。確かに着くか着かないかで言えば着くが、そこまで急ぐ必要は無いと思うが？

「ヤ」まで生きてたゞつければな。」

NPCの話は続く。

キルアは「？」という顔をする。

「山は山賊の棲み家があつて旅人は身ぐるみはがされる。運良く山賊に遇わなくとも山を越えれば怪物がワンサカ出るからな。」

その言葉にキルアが反応する。

「山賊！！怪物！！

ヨーーしガゼン RPGっぽくなつてきたぜ！」

とキルアは興奮する。そんなに山賊に会いたいか？俺ならゲームでも会いたく無いがな。

さて、それではマサドラまで行くか。とスタートした直後に

「待つてください！」

と声をかけられた。良かつた。もじこいで声をかけてくれなきゃ俺がキルアを鍛えるハメになつてた。まあそれは今から始まる交渉によるが。

「あ、確かあの時いつしょにいた……。」

とキルアは広場で話を聞いていた事を思い出した。

「はいっ、あの……私も仲間に入れて下さーー。」

ビスケの懇願に

「あーーー！」めん、ムリ。

とキルアは軽く断る。

「……………」

ビスケが尚も食い下がるが

「ジャマだから。

とキルアは切り捨てる。おかげでビスケの顔に青筋が出てきた。
知らないつてある意味スゲエ女郎。

知らぬにてある意味ノクニ

キルアが文句を言つてくれる。

「お前は何してんだよ。」

お前が言つた言葉は圧倒的強者が弱者は対して言ふ事であつて
者が圧倒的強者に言つてはいけない事だ。

と伝えるとキルアは「はあ？」と言つだ。

「うだからな。それが目的だらうが。

これはどうやら失礼を致しました。

「あ、…あなた私を知ってるの？」

「ええ、河せつ一ゴーさんは勇氣のない者だ。

ええ、何せケル・カリさんは有名人ですからね。」

どが多いがどうなのだらう?

卷之三

呼んでちょうだい!

一応は前進か？怪しまれてるけど。

「じゃ、今更何だ？」

とキルアが聞いてくる。

ああ、この人はアロハンタリで、俺達よりもずっと先輩だつま

り俺達よりも遙かに強い。」「

そう言つとキルアは

「えへ～マジ！？ていうか俺達よりも先輩つてこいつだよ？」「

何とも言つてない事を聞いてきた。

「確かに50歳は越えている筈。」「

「50歳！？ババアじやん！？」「

キルアがそう言つとビスケに殴り飛ばされた。

「念を覚えて約40年！？あんた達よりもずい分先行つてゐるから先輩で間違ひ無いだわね。」「

俺を若干睨み付けてくる。マジ恐いんですけど。

「それで、ビスケさんは何故俺達の仲間になろうとしたんですか？」

「ええ、まああんた達の関係をぶち壊してやろうつかと思つてね。」「

いきなりのセリフにキルアは警戒するがビスケは無視して

「でもバレてるなら無駄だわね。」「

と残念そうに言つ。

「ではつまり今は別にこれと云つた予定は無いんですね？」
俺の質問に

「ええ、特にこれと云つて無いわね。」「

これを聞いてようやく交渉を始める事にした。

「ではどうでしょ～？」
この中でいるキルアを鍛えてはくれませんか？」
俺のセリフに

「おい！？何でだよゴン！？」「

とキルアが先ず反応したがそれはスルーする。

「…どうして私がそいつを鍛えなきゃいけないのよ。てっきりアン

タがそいつの師匠だと思っていたんだけど？」「

「確かに俺も一応教えてていますが、何分俺は我流で念を会得したため、教えるのが不得意でして。」「

だから経験豊富で教える事が上手い方がいたらお願ひする事にしているんです。

何せコイツは才能は桁外れでして、私の指導者としてのレベルが追いつかないんですよ。」

そう言つてビスケは興味深そうにキルアを見る。ちょっと興味を持ったか？

「おい、ゴン！ 何勝手に話進めてんだよ！ ！」

どんな奴か分かんない人間にモノ教わるほどせつぱつまつてないし、大体オレにはもう「ゴン」の他にもワイングをんといっちゃんと師匠がいるからいいよ！」

とのキルアの言葉にビスケが反応した。

「ワイングって今言つたけどもしかしてひょつこワイング？」

メガネをかけた寝癖のボウヤでしょ？ 服の着方をいくら注意しても直らないあの。」

とビスケが答えた。

「知つてるのか？」

キルアの質問に

「知つてるも何もあたしの教え子だわよワイングは。」

ビスケが答えた。キルアはあまりの事に固まる。

「あいつが師匠とは驚いたわねエ。月日が経つのは早いこと。あ、てことはあんた達もプロハンターなんだ？」

「いや、俺だけ。」

と俺が答えた。

「ま、ワイングは覚えが悪い分教える方に向いてるかもね。」

「という事で何とかキルアを鍛えてはくれないでしょうか？」
と懇願する。原作と違つてキルアはある程度強いからもしかしてを考えて今交渉する。

しかしビスケは「つづくん…。」と迷っている。

不味いな、このまま断られたら俺が鍛えるハメになるし、キルアにはある程度強くなつて貰つて放り出すつもりだから早く鍛えるにはビスケをあてがうのが一番早い。

「そういうえばビスケは何でこのゲームに参加したんですか？」
「こつなつたら物で釣るか。

「あたし? まあ、もちろん懸賞金のためだけだ。目的は宝石よ。」

「宝石?」

「ここにしかないつて石があるらしいんでさ。指定ポケット Two。」

8-1ブループラネット。」

「成る程…。ではこれでどうしよう?」

キルアに修行をしてくれるなら俺がゲームクリアをした暁にはブループラネットをビスケに上げるところのは。

その言葉にビスケは食いついた。

「…へー確かにそれなら悪く無い条件だわね。」

よしひらついた。

「まあ、修行をしてやるかどうかはまだ保留で良いですよ。これからマサドラに向かうために多分モンスターと戦つたりするでしょうから。それを見て判断してください。」

これでダメだったらどうしよう?

「分かったわや。じゃあとりあえず先ずはどの程度か見極めて、そ

れから返事を返すことにすんな。」

良し! キルアの才能を見ればコイツならOKする筈だ。後はキルアを岩石地帯のモンスター達と戦わせれば良い。いくら基礎や応用を会得しても経験不足だからモンスターには勝てない筈だ。

キルアがまだ文句を言つてゐるが無視だ。

残念ながらお前に決定権など無い。

44 仕方ない譲歩

さてと、交渉のせいでゲームクリアをしなくしゃならなくなつたけど、それは問題無い。

奇運アレキサンダライトと一緒に海岸線を手に入れればゲンスル一組のカードを奪つてクリア出来る。

現在はマサドラを目指して山を越えていく。

「確かに進めば山賊に会うんだよな?」

キルアに聞いた。

「ああ、途中山賊に気をつけろってことだからな。多分会えるだろ。」

「んじゃあ修行の成果を見せて貰おうか。」

「おう、任せとけ。っていうかそれってアイツに見せるつてことか?」

キルアは後ろを向く。少し後ろにはビスケがついて来ている。

「何でアイツに俺の修行を頼んだんだよ?」

キルアが抗議してきた。

「さっきも言つただろ? ウイングさんの時と同じで優れた指導者だからだ。

一応お前のためにお願いしてるんだぜ?」

正確にはひいては俺の自由のためだが。

「それは分かるけど…。」

とキルアは黙る。ウイングの時も結局は自分のためになつたから今回のことも自分のためなんだと理解出来る。

キルアが黙っていたら突然前方に山賊の群れが現れた。ようやくか。

ジリジリ近付いて来て、キルアは戦闘体制に入りつつしていた。

そして山賊達は一斉に接近して来て突然

「助けて下さい！！お願いします！！！」

と全員で土下座してきた。

キルアは突然の事に呆然としている。

とりあえず状況を知るために山賊の案内で村にいった。

そしてデカイから多分村長の家に入り状況説明を求めた。目の前には寝込んでいる子供がいた。

「島の風土病です。微熱から始まって徐々に高熱になつていき、遂には死に至ります。その期間は約1ヶ月。

対処法は薬で熱を抑えるしかありません。しかし薬の効き田は約1週間。それが切れればまた熱が上がるといった具合で。

この薬がとても高く、もう我々の手元には1銭もありません。既に全員が病にかかり満足に山賊業も出来ない始末。

別に出来なくて良いんだけど。所詮山賊だし。ていうか話の最中にゴホゴホうるせえ。

「このままでは2・3田中に死んでしまいます！！！」

「なんとかお金を恵んでいただくことは出来ないでしょうか？」

多分このガキの両親が懇願する。

「これってイベントだよな？」

とキルアが聞いてくる。

「多分な、金を恵めば情報なりアイテムをくれるんだろ。ゲームじやよくある。」

と答えた。

「いくらあれば良いんだ？」

俺の質問に

「村中かき集めたのですが、ビリしてもあと80000ジニーほぞ足りなくて。」

母親が答える。

ほぼ有り金全部だな。ていうか8万も払つたら残るのは小銭ぐらいか？

「分かつた。80000ジニーをやるよ。」

と言つと。

「本当ですか！？」

「うつうありがとうございます。何とお礼を言つていいか。」

と夫婦が感激する。

俺が8万ジニーを渡すと

「本当にありがとうございます。これでこの子も助かります！――」

と父親が金を受け取つたら

「う……。」

と息子が反応した。やつぱり服まで取られるのか。

「――どうした息子よ……。」

と父親が反応する。

「寒い……。寒いよ父さん。」

とか細い声で息子は父に言つ。

「しつかりしろ――親切な旅人の方がお金てくれたぞ――明日には薬が手に入る、頑張れ！！」

父親が息子を勇気づけるが

「寒いよ……。寒いよ……。」

と息子は尚も寒がる。

「ああつ何てことだ――」のまま体が冷えてしまつたらこの子は今夜中に死んでしまう――。

こんな時に子供服があれば――。

見事な3文芝居を見せつけられた俺とキルアは呆れる。

「あのー、俺の服で良かつたら。」

と俺が言つと

「おおっ、本当にいいのですか！？あなた方はまるで天使のようだ！」

「いくら言葉を呑くしてもこの気持は云えません…」

父親が感激する。

「いや、お礼なんていいん」

とキルアが情報かアイテムを貰おうとしたら山賊達はただ黙る。

「なんもなしがい！！」

キルアが憤慨している。何故かあの後キルアの服まで要求されでこれで何か貰えるのかと思ったが、結果はただお礼を言われただけ。そりゃムカつくわ。

「くそ～～なめやがつて。」

「あのトレーディングで言われた通りマジで身ぐるみはがされたな。」

上着が無くなりシャツだけになつた俺とキルアが愚痴る。

「まあまあ、ゲームとは言え人助けになつたから良いんじゃないの？」

何も被害を受けてないビスケは平然と言つ。

「つるせえ！－！－いつか何でアンタだけ被害ゼロなんだよ…！」

キルアが理不充分を訴えるがビスケは「さあ～？」と叫びだけ。

「とりあえず山を降りれば怪物が出るらしいからそこいらをカード

化して換金すれば良い。

その時にキルアの腕前を披露して貰うぞ？」

そうキルアに伝えると

「おう、遂に実戦だな。」

とキルアは喜んでいる。実戦はほとんど無かったからな。

「ちなみに俺は何もしないぞ？これはテストでもあるんだ。」

ビスケにお前の力を見せつけてやれ。」

キルアを奮起する。

「まあ、約束通りアンタの戦い方を見てコーチしてやるか決めてあげるわよ。」

ビスケが言つ。

山を抜けるとそこは一面岩石地帯だった。

「岩石地帯か。」

キルアが岩山を越ながら言つ。

「怪物はまだしも敵プレイヤーの不意打ちに要注意だな。」

俺の言葉に

「おう、行くぜ！」

とキルアが宣言した直後にこん棒を持つた一つ目の巨人の群れが現れた。

「うおおおーーーーー？」

とキルアは避ける。俺も避けたが後方で見ていたビスケの所まで下がる。

「さて、アンタが鍛えたあの子の実力を見させて貰うわね。」

とビスケが俺に言つ。俺は頷いてキルアを見る。

キルアは巨人の攻撃を避けながら攻撃をかますがほとんど効いていない。

キルアは周囲の状況を確認して今度は巨人の目を思いつきり蹴った。そしたら巨人が「グオオオオオーーーー」と目を押さえながら叫び、力一ド化した。

キルアはカードを取り、巨人達の攻撃を避けながらバインダーを出してカードを入れつつまた巨人の目を攻撃する。後はその繰り返し

だつた。

「…ふうん。動きに無駄が多いけど…なかなかだね。」
とビスケが好評価をする。

そして全部の巨人を倒した。

「ふん、見かけ倒しだつたな。」

「その割にはアレかワーディ

その書には何四か力口仕が解説されてるが、
倒れてる巨人を見ながら俺が言う。

「まあそんなにいらないだろ？ からな、ランクGだし。ハインターの空きを作つただけだよ。」

キルアが若干言い訳する。

「でもいけるぜ……！ 怪物にちゃんとした弱点とクセがある。こっちが冷静に理詰めで対処すれば正解にたどりつけるように設定されてる。山賊の時はかなり不安だつたけど。」

キルアは自信満々に言う。

「じゃあこの先も頑張れよ。俺は後ろの方から見てるから。」
そう言って俺はまたビスケの方に下がった。

「おう。」

よーし、いの謡子でママドリア田端すばー！」

キルアが行き込んでいたら突然目の前に背中や顔に様々な斑点模様があるとんでもなくデカイトカゲが現れた。

追いかけてくるトカゲから逃げるキルア。何度か攻撃を加えたがビクともしないのでキルアは隠れてやり過ごしたようだ。

とキルアは言つていたが横でビスケが弱点のホクロを押してカード化した。

「ブブー。はずれ、ランクEでした。

もつともつと注意深く観察しながら戦つていればトカゲが特定部位をかばつてゐる微妙な動きに気付けたはず…。」

とビスケは俺を見る。

「まあキルアには念の基礎やある程度の応用は教えていたけど戦闘考察力についてはまだ教えていなかつたですから。生憎現実世界では手頃な敵がいませんでしたので。」

と返す。

それにビスケは

「ふーん。まあ確かに基礎能力はなかなかだわね。」

と返す。

その後はマリモツチは捕らえらず、バブルホースにはやはり翻弄されて逃げられ、リモコンラットは一応教えた通りに凝を使っていたのでカード化出来た。

「どうですか？

見た通りかなり才能はありますが何分修行や実戦不足でもつたいい状態なんです。

俺じゃあアソツの才能を引き出す事は出来ないんで何とか指導して貰えないでしょうか？」

ビスケに懇願する。

「分かったわ。確かにもつたいな過ぎるわね。」

そう言ってキルアの元にビスケは移動した。俺もついていく。

「キルア。ビスケが指導をOKしてくれた。」

「マジで！？」

キルアが驚く。思ったより早かつたからな。

「それじゃあ約束通りアンタをローチしてやる。その代わりー。」
とビスケは俺を見る。

「ええ、約束通りー。・8-1のブループラネットを俺達のクリア時に渡します。

その代わりに基礎だけではなく応用についても深く教えてやつて下さい。基礎や応用も大まかには既にやつっていますので。」

と言つ。

「ふーん、まあ良いわ。

よし、それじゃあ早速…。」

ビスケが修行を開始しようとしたら後ろから微かに殺氣を感じた。

「座つて。」

とビスケが指示する。俺は直ぐに座るがキルアは不思議がついている。

「キルアも座れ、俺とビスケの背後に敵がいる。気配は探るなよ？

緊張が伝わる。」

そう言つとキルアも座り込んだ。

「へー、アンタも気付いてたんだ？」

ビスケが俺に聞いてくる。

「ええ、僅かだけど殺気が漏れてましたからね。子供3人に見えたから油断したんだろう。かなり場数を踏んでるな。」

俺の言葉にキルアが

「？油断してるなら弱いんじゃないの？」

と聞いてきた。

「子供の念能力者は実はかなりの数がいるが、大体の奴らは戦闘に向く能力を持つて無いし、実力も低いからベテランなら油断しがちになる。」

でもすぐに油断を捨てて気配を消した事からそれなりに手強い事が分かる。」

キルアは成る程と頷く。

「どうすればいい？」

とキルアが聞いてきた。ビスケじゃなく俺にだけ。

「俺が仕留めて来る。キルアとビスケはそのまま待っていてくれ。

俺は別行動を取って敵を誘き寄せて始末したら合流する。」

俺の提案に

「待つて、あたしが敵を誘き寄せる。あたしは南、一人は北。気配はそのまま500mくらい普通に歩いてって。

目安はあの高い岩山。そこに着いたら今度は絶。すばやく戻つてくること。」

とビスケが言つたら

「オーケー、二重尾行だね。」

とキルアが言つ。その瞬間にキルアがビスケの平手打ちを食ひつた。スゲエな油断してたら俺でも食らう可能性がある。

「そんなに言うならいいわよ……もうやつてらんないわバイバイ！」

とビスケがいきなり叫ぶ。

「あーー行き行け、せいせいするよ……じゃーな！！」

とキルアも演技に乗る。ついでにビスケが「バーーカー！」といつてビスケは南に向かつた。

そして俺達も指示通り北へ向かつ。

「すげーなあの女。

オレ警戒してたんだぜ、何があつてもすぐに動けるよう！。でもほつぺたがジンジンするまで何されたかわからなかつた。」

とキルアが言つ。

「確かにあれは俺でも分からなかつたかも。ほとんど見えなかつたし。」

その後モンスターに3回あつたが逃げるか蹴散らして500m程進んだ。

「よし、戻るぞ。」

俺が言うと

「急いだ方が良いな。途中邪魔されたし。」

とキルアが答える。

絶をして急いでビスケの元に向かう。そのさいモンスターは無視だ。

元の場所辺りまで戻った時に岩の隙間から一人が対峙しているのが見えた。

ビノールトがビスケの髪を持ち

「くくくくくくく。切つてやつたぜお前の髪…。

オレはな、切つた人間の髪の毛を食つことで…！

本人さえ知り得ない肉体の情報を知ることができ。肉質・病気の有無、遺伝的資質、強さ。

お前の体を全て把握しその上で存分に可愛がつて……」

ビノールトが髪を食つていちいち自分の能力の説明をしていたら突然目を見開いた。

まあ実年齢が57才とかとんでもなく鍛え抜かれた肉体などが分かつたら驚愕するだろう。オマケに自分に勝ち目が無い事が分かつたんだからな。

ビノールトは愛用のハサミや理容道具を捨てて構える。

「武闘家として手合させ願いたい。」

と言ひ。

「ふ…。ただのクズじゃないようだわね。
いいだろ？。」

とビスケも手袋を外し、構える。

お互に構えて対峙した。

「シイツ」

とビノールトが右手で攻撃をするが見事にかわされ、その右手を掴まれ、そしてヒネリをかけられながら投げられて背中に強烈な一撃

を貰つた。

致死量なんじやないかとも思えるほどの血を吐きながらビーハートはピクピクしてる。

「運が良い、念での戦いならあなたを殺してた。」
ビスケが告げる。「イツマジ強すき。

「さてと、いるんじょあんた達、こらっしゃい！」
と言われたので岩から出でてきた。

「今の勝負どこからハッキリ見えた？」

ビスケに聞かれたので

「俺は全部。」

「オレは敵が宙に浮いて逆さになつた辺りから。」

能力で視神経とかを強化してたから何とか見えた。鍛錬が役に立つたよ。

「ふーむなるほどね。」

もしあいつがゲームキャラならあいつをカード化してゲットできるわけだけど、その時の入手難度はDってことだわね。

恐らくキルアだけで遭つていたらゲームオーバーかもしくは重体だつたわね。ここに来てあたしが知つてただけですでに2回あなたは死にかけてる。この運がいつまで続くかしらね？」

ビスケはキルアに言つ。

キルアは少し黙つた後に「よろしくお願ひします。」と頭を下げた。
キルアが頭を下げるつてスゲエ事だぜ。

「あたしはウイングみたく甘くないわよ。覚悟はある？」
とキルアは聞かれて真剣な顔をして「大丈夫。」と答えた。

「ん、じゃ早速はじめるか。」

そう言つてビスケはうずくまつて苦しんでるビノールトの方に行く。

「起きなさい、カード全部出して。」

そう命令されたビノールトはバインダーを出した。

ビスケは自分のバインダーにカードを移してバインダーを消す。

「チャンスをあげる。

「一週間！－あの子の攻撃をかわすこと。それが出来たら見逃してやる。

もしも決定打を浴びて悶絶したり立ち上がれなくなつたらやつぱりあんたを殺す。」

ビノールトに死刑判決を下す。キルアは気にしないからアイツ完全に死んだな。

「攻撃を……受けなきゃいいんだな？」

「ええ。」

「アイツがどうなろうと……攻撃さえ受けなきゃいいわけだ？」

ビノールトが確認のために聞く。

「その通りだわね。ただしルールが一つだけ、岸壁に囲まれたこの空間。ここから出ないこと。破れば失格、その場合も殺す。」

「オレは？」

とキルアが聞いた。

「あんたもここから出ではだめ。ここから出たり一週間以内にあいつを倒せなければあんたには罰を下される。」

キルアにそう言つ。キルアも納得したのか頷く。

「あんたビノールトだわね？」

立ち上がり武器を拾っているビノールトに聞く。

「……ああ。」

「賞金首ハンター、ビノールト。しかし奴自身も賞金首！
好物は人の肉。特に20才の女の肉がいいんだつけ？」
「22才だ。」

ビノールトが愛用の理容道具を腰に巻いて準備が完了した。

「始め！！」

とビスケが宣言した。

そして

「すいません。では俺はゲームクリアのために行きます」とビスケに声をかけた。

「あら、見ていいかないの？」

ビスケに聞かれたが

「ええ、必ず勝つと信じていますから。」

そう言つと「そう、じゃ行つて来なさい。」と言われた。

俺はとりあえず原作通りアグレッシブに攻めるように

「キルア、もうお前は昔のお前じゃない。今のお前らしく戦え。」
と言つた。

キルアも最初は何か分からなかつたらしいが理解出来たのか

「おう！分かつた！！」

サンキューゴン！！

と答えた後にビノールトに攻めに行つた。やはり基礎修行をキッチリやつていたからか原作みたいにビノールトの早さに負けてはいない。

あれなら一人でも問題なくクリアするだろう。

わ、ようやく自由だ。

とりあえず今は現実世界でもコピーしたカードが使えるか確かめるために先ずはマサドラに向かおつ。確かにそこから国外に出る方法を教えて貰える筈だ。

45 欽喜（前書き）

非常にJR都合主義設定になつております。

とりあえず現実世界に戻るためにマサドラに向かった。
本当は港に直行しても良いんだが、一度マサドラに行つとけばゲー
トで行けるようになるから最初に行つとく。

マサドラまで約70km。途中遊牧民みたいなテント村と無人の村
を通過してようやく到着。

ちなみにかかつた時間は4時間。結構急いだのに原作組よりも遅い
んだよな。アイツらスゲエよな。

「カカブ力何か風船のような街に入り、一応スペルカードの売り場を
確かめるがスペルカードは売り切れだった。やっぱりアイツら「ハ
メ組」の影響か？」

「デパートからトレーデショップに行き国外に出る方法を聞いた。

「国外へ出る方法なら3000ジニーになります。」

「N P Cにコピーした10000ジニーのカードを渡した。

「西へ50kmくらい行くとこの国唯一の港があるんだが、そこ
の所長がとにかく嫌な奴で旅行者が島を出る時には無理難題をふつか
けるそうだ。

まあ、裏金をたっぷり渡せば見逃してくれるそっだから大金を用意
して港に行くことだな。

もう一つ、スペルカードでも島の外に出られるが結構レアで入手に
苦労するかも知れないから注意しな。」

説明を聞いたら指示通りに西へ50km移動する。

途中郡狼に出会ったが鋭い爪を持つていてる奴が長だと分かっている
ので速攻倒して後は逃げた。カード化して取ったとしてもどうせフ

リー ポケットは消えるんだからな。

港について所長の所に行つて通行チケットを取りに行つたらなんか「チケットが欲しかつたらランクAのカードを持つてこい。」といふ無理難題を押し付けられた。通行チケットがランクBのクセにランクAを持つてこいなんて無茶苦茶だろ…。

ムカついたので硬でぶん殴つて無理矢理チケットを奪つた。

そしてチケットを持つて港に入り、係員にチケットを渡すと奥の部屋に案内され、変な模様が書いてある自動扉を潜るとスタート地点みたいな部屋に入った。

「いらっしゃい。」

とスタート地点の女が髪型を変えた以外同じ女がいた。まあ双子だからな。

「島から出るのですね？それでは行き先を決めて下さい。選択できる港は50以上ありますので希望の場所を選んで下さい。別にどこでも良かつたので

「ドーレ港で。」

と言つ。

「かしこまりました。この島を出ますとフリー ポケットのカードデータは消滅しまいますがよろしいですか？」

「ああ。」

「それではまたの御来島をお待ちしております。」

そう言つて女が何かスイッチを押して移動し、ドーレ港に着いた。

やつぱりキルアと同じように何にも変化が無いから実感無いな。

「ブック。」

と唱えたがやはりバインダーは出ない。本当に現実世界に帰つて来

た事を確認して今度は「コピーしたバインダーを出す。

見事成功してバインダーは出た。

次に本番であるカード化を解除出来るかだ。とりあえず石のカードを取つて

「ゲイン。」

と唱えたらカード化は解除されて石になつた。

「良つしゃ！！現実世界でもカードは使える……」

つい大声で喜んでしまつた。俺らしくは無いが、これで指定ポケットカードは勿論スペルカードも使えるからな。スペルはゲーム外に出たら使う用途がほぼ無くなるけど…。

ゲーム外に出たんだから先ずは山賊に取られた服を買いに行つた。
そしてその後は島に直接飛ぶのはヤバイかも知れないからゲートで
古城のグリードアイランドが並んでいる部屋に飛んで正式に入島した。

「グリードアイランドへよつ」JN。

おお、あなたはもしや「ゴン様では？」

分かつてるクセに聞いてきたので「ああ。」と答える。

「ゲームの説明を聞きますか？」

「いや、いらない。」

こうして再びスタート地点に立つた。

先ずはスペルカードの確保だ。

最低でも防御スペルが無いと指定ポケットカードを手に入れるとしても直ぐに奪われるのがオチだ。

でも特に防御スペルはハメ組が独占してるからママサドラで貰うのはほぼ不可能。となれば持つてる奴から奪うしか無い。

ハメ組の奴等を一人一人急襲しても多分分散して持つてるから効率が悪いし面倒だ。それにハメ組には原作通りにカードを集めて貰うから手出しが出来ない。

そこでスペルカードを持つていてハメ組とは関係なく、俺が直ぐに会える奴ということでキルアにステイールをかけたアイツを狙う事にした。

先ずは『完全なる隠匿』を使って存在を消し、ゲートを使って奴の元に移動。そして奴が人気の無い所に来たら『理不尽な支配』を発動させて強制的に絶の状態にして拘束した。

「な、何なんだ！？」「

いきなり絶になつて体が動かなくなつたため驚いている。俺は周囲に誰もいないことを再確認して姿を表した。

「や、久しぶり。元気だつた？」

片手を上げて挨拶してやる。

「お、お前は！？あの時のガキ！？」

どうやら覚えていたらしい。

「うん久しぶり。でさ、お前俺の連れに失礼なことがましてくれたじゃん？」

だから迷惑料を貰いに来たんだよ。」

笑顔で言う。相手は恐怖の顔色を浮かべるが。

「とりあえずさ、バインダー出して？」

そう俺が言うと

「ブック！…え？」

何故自分がバインダーを出したのか分からぬといつ顔をしている。しかしあれは無視してカードを次々自分のバインダーに移す。

なかなか沢山のスペルを持っていたので嬉しい誤算だ。

アカンパニー やマグネットイックフォース、リターンなど移動系スペルは勿論、ディフェンシブウォールやキャッシュルゲートなど防御スペルやブラックアウトカーテンもあった。

それにサイトビジョンもあるから他の奴等のカードデータも見れる。その代わりに指定ポケットカードはほとんど持つて無いな。精々がランクBが数枚か…。

まあ良いや。コイツは期待以上のスペルカードを持っていたから良しとするか。

「ありがとね。結構お前スゲエな。今スペルカードを手に入れるのはかなり難しいのにこんなに持つてるなんて。」

と一応褒める。しかし男は俺をにらむだけ。何せその超貴重なスペルカードは勿論指定ポケットカードまで奪われたんだ。恨むのは当たり前だ。

「じゃあさ、最後のお願い何だけど、心臓と脳の活動を停止してくれ。」

そう言った直後に男は倒れた。一応脈や心音も確認したがどれも停止している。瞳孔も開いているから死んだと分かった。

やっぱり部位に特定すれば効果は倍増するな。これなら返り血とかの心配もいらないから簡単で良い。

その後男は消えた。完全に死んだと安心して次はゲートでマサドラに向かつた。

とりあえずブラックアウトカーテンをコピーして使いスティールやフラスクロッパーを防止して覗き見を防ぐ。後はキャッシュルゲートやディフェンシブウォールがあるから大丈夫だろう。

しばらくはマサドラから動かない。少なくともゲンスルーが正体を表すまでは。

だから今はトレードショップに行きまくつてランクBまでの指定ポケットカード36枚をゲットする。

それ以上は1~2月以降で良いや。焦って動いて他のプレイヤーとやり合うのも面倒だし。

少なくとも後3ヶ月は大々的には動かない。

一月が経ち、ようやくトレードショッピングでランクBのカードを取り出来るようになった。

現在持っているカードは9種15枚だ。

ほとんど必要無いが一応ダブリも買つていい。まあトレードで使えるかも知れないからな。

ちなみにあの後ランクAやS、SSのカード入手条件などを知るために『完全なる隠匿』とゲートを使ってシェズゲラに近付き、頭を触つて記憶を読んだ。

頭を触る程度だからシェズゲラは不思議そうにしていたが周囲に気配は無いし、念のため円でも探つていたけど反応が無かつたからあまり気にしてなかつた。

これで大体のカードの入手条件が分かつた。まだ数種類のカード入手条件は分からなかつたが、それはまた来月や再来月に記憶を読めば分かるだろう。

キルアの進捗状況が知りたかつたからマグネットイックフォースでビスケの所に飛んだ。

着陸した時にはビスケやキルアから警戒されていたが、俺だと分かると警戒を解いた。

「よお、久しぶり。
と手を上げて挨拶。

「一月ぶりだわね。どうしたの?
ビスケが聞いてきた。

「キルアの修行がどの程度進んだか気になつてね。」

俺の質問に

「全く呆れるぐらい優秀だわさ。あんたが基礎をやつしてくれたから大して教える事は無かつたのよ。

だから戦闘考 察力を鍛えるためにこの砕石地帯の全種類モンスター入手をやられてたつた今全種類を集め終えた所だわさ。」

そりやスゲエな。一月前までは手も足も出なかつたモンスター達を全種類集めたんだからな。

「順調なようだなキルア」

俺が褒めると

「おう！今まではどう戦つていいか分からぬモンスターが多くつたけど今じゃあほとんど分かるぜ！」

と嬉しそうに返事をする。

「それで？あんたの方はどうなのさ？」

ビスケが俺に聞いてきた。

俺はバインダーを出して

「今の所まだ指定ポケットはほとんど埋まつて無い。でも代わりにスペルカードをかなり手に入れたからこれで攻撃される心配は薄い。

」
バインダーを一人に見せながら言う。

「おー。確かに指定ポケットはまだスカスカだけどスペルカードはスゲエな。」

キルアが関心したように言つ。

「そう言えばさつきここまで飛んで来たけど何のカードを使つたんだ？」

キルアの質問に

「あれは磁力。プレイヤー単体で任意の場所に飛べるスペルだ。」と答えた。

キルアは「へー」とマグネットイックフォースのカードを見ながら言

う。

「それにしてよくここまでスペルカードを集められたわね。スペルカードはハメ組が独占するために動いている筈なのに。」
ビスケが不思議そうに聞く。

「ああ確かに大変だったよ。マサドラのスペルカード売り場に言つても売り切れだと言われたし。」

そう言うと

「じゃあどうやつてスペルカードを手に入れたんだ?」
キルアが聞いてきた。

「ああ、貰つたよ。覚えてるか?このゲームに来たばかりやの時にお前に盗視をかけた奴。」

そう言うとキルアが思い出したのか

「ああアイツ?」

と顔をしかめた。

「そ、アイツと偶然かち合つてな。だから迷惑料としてスペルを全部貰つた。

そうそう、それとお前にかかつた盗視だけどもう心配する必要は無いよ。」

「別に心配してなかつたけどさ。何で?」

「アイツはゲームオーバーしたから。」

その一言にキルアは

「…もしかして殺つちゃつた?」

と聞いてきた。

「まあな。流石にタダじゃスペルはくれないからな。」

その言葉に「やつぱりゴンだな…。」という微妙な答えを貰つた。
ビスケはあまり良くないような顔を見せるが大した反応はしない。
別に今更殺しひいじゃないなんて考えは持つてないだろうしな。

その後はキルアが系統別修行に移ると聞いて俺はリターンでマサドに戻った。

後は1~2月までコレラBを全部集めて2月ぐらいにコレラAやSを集めよ。多分それぐらいの頃に一坪の海岸線イベントが起きただろ。

原作みたいにあんまりにも早く集めると警戒されて攻撃されるからな。ゆっくりと確実に集めよ。

12月29日になった。

確かに今日、ゲンスルーがカミングアウトしてハメ組を皆殺しにする筈だ。

大量にカードが宙に浮くから貴重なスペルカードが簡単に手に入るようになる。中でもリープやプリズンといった特殊アイテム。リープがあればいざというときに逃げれるし、プリズンがあればカードを奪われる事は無くなる。「ロー」をすれば限度枚数など無視出来る。だからゲンスルーみたいに全ページを守るのも容易い。

そのためにはそれなりの枚数のスペルカードを買わないとプリズンは出てこない。だからビスケとキルアにも協力して貰おう。あいつらをあわせればフリー・ポケットの数は135個。まあ、キルアは途中でハンター試験を受けに行くから使えないとしても、ビスケのバインダーを合わせれば倍になる。

確か原作でも60枚ぐらい買つたらプリズンが一枚手に入つたし。

ちなみに現在指定ポケットにはランクBのカード全種類36種とランクAのカード8種類の計44種、ダブりを含めると60枚。ランキングで見ればまだ23位。

やはりランクが上がったからか俺に盗視や透視を使ってくる奴等が出てきた。まあ暗幕で防いでるけど。

ちなみにその後原作通りにあの真実の剣を奪つた奴からトレードの申し出があった。一坪の海岸線の顔利きのためにいらなかつたがランクB同士のカードでトレードをした。

他の奴ともトレードをしたが、フェイクで化けたカードをつかまさ

れたから現在は聖騎士の首飾りを装備している。ちなみにフェイクをつかませたプレイヤーはカードを奪つた後にゲームオーバーさせた。」いつのおかげでランクAのカードもゲット出来た。

さて、それではキルアとビスケに久々に会いに行くか。

「磁力使用、ビスケ。」

スペルの効果で一気にビスケの元に飛んだ。

「よ、久しぶり。」

休憩なのか二人とも何もしていない。

「久しぶりね、また修行の途中経過を聞きに来たの？」

ビスケが聞いてきた。

「まあ、それもあるんだけど。」

キルア、今日が何月何日か分かるか？

「え？いや、分からない。丁度今ビスケからもうすぐ新年だつて聞かされたけど。」

「ああそうだ。このゲームはリアルタイムだから外の世界と同じ時間だ。

ちなみに今日は12月29日。さて、来年には何があつたでしょう？」

？」

とキルアに聞いたら少し考えた後に

「……あ！ハンター試験！！！」

と思い出した。

「そう、お前すっかり忘れてただろ？」

そう聞くとキルアは「ははは…。」と苦笑い。

「まあ幸い既に登録はゲーム前に済ましたし、試験会場までの招待券もあるから今すぐ外に帰る必要は無いけど、そのまま忘れてスッポカス可能性があつたから忠告しに来た。

…正解だつたようだが。」

また睨むとキルアは

「ははは…。

そうだ…「ゴンはどこまで進んだ?」

と話をすり替えた。別にこれ以上追求しても仕方ないので話に乗る。

「今のところ44種だ。

ランクBのカードは全部ゲットして今はランクAを集めてる。」
バインダーを出して一人に見せる。

「おおーー。結構集まつて来たな。」

と言っていたキルアが真実の剣を見て

「あれ?でも真実の剣とか月例大会のカードはどうやつてゲットしたんだ?だってあれば月一回にしか手に入らないカードだろ?」
と聞いてきた。まあコイツ修行しかしてねえから知らないんだよな。
「ランクBのカードは全部トレードショップで買えるんだよ。
同じトレードショップで50回以上取引すれば向こうから話を持ち
かけて来る。」

「マジ!?じゃあオレ達が注目を浴びながら月例大会に出たのって

…。」

「そう、ただ目立つだけの無駄だつたって事だ。」

それを聞いてキルアはガックシ。せつかくジャンケン必勝法まで覚えたのに無意味だつたと知らされたんだからな。

その後はゲームの裏技やショップの利用法など隠し要素の事を一人にも教えていたら誰かが飛んできた。

「よお、久しぶりだな。」

除念師のアベンガネだ。肩にはタイマーのような機械を装備してい

る。

「あなたは……。

その肩の機械は……？ 一体何があつたのですか？」

ビスケが猫かぶりをしながら聞く。

「「爆弾魔」にやられた。まず、話を聞いてくれ。」

アベンガネがアジトでの突然のクーデター、ゲンスルーの能力などを話していた。

「……………というわけだ。オレ以外のメンバーはアジトで「爆弾魔」の一斉解除を待っている。

おそらくは嘘であろう奴等の条件信じてな……。」

アベンガネが平然と話す。お前、一時とは言え仲間だつた奴等の死刑宣告を簡単に言つね。

「何人かは「一握りの火薬」でやられても全員でかかれれば大半は助かると思うが？」

原作のセリフを言つ。

「…………ムリだな。

犠牲になるのは最初に飛びかかる何人かまたは何十人かなわけだ。心理的に誰がそんな役を望む？

最も戦闘技術に長けていたジスパが目前であつさりやられた……。その時点で勝敗は決していた……。

いや、奴をむざむざゲーム外へ逃したのも致命的だった。目の前の展開に頭がついていかなかつたということもある……が。

それぞれが所持していたカードを全て確認し、整理をし直した後：いわばカードのシャッフル後とでもいうべき状況を狙われた点。手持ちカードと役割の確認をする前の一時のかちどき……その緩みをつかれたのも痛い。

くそ長いセリフが続く。コイツ話し好きなのか？

少し飛ばして

「そしてできるなら… オレ達の仇を討つて欲しい…！」

少なくとも決して奴等にゲームクリアなんてさせないでくれ。話し終えたらアベンガネはバイインダーを出してカードを取る。

「「再来」使用…！ ブンゼンへ…！」

アベンガネはブンゼンへ飛んで行つた。除念をしついくんだりつ。

「さて、どうする？」

ビスケが聞いてくる。

「どうもしないさ。予定通りやるしかない。

彼等のアジトさえも知らないんだ。今更探しても手遅れになるのがオチだ。」

俺の答えに

「そうだな。オレ達はスペルカードをそこそこ持つてるけど時間が足りなすぎる。どっちにしろゲームオーバーになるだけだな。」

キルアが冷静に答える。原作ゴンじゃなくて俺と一緒に行動してたからか原作よりも冷静だと思う。

「とりあえずマサドラに行くか。」

俺がそう言つと

「何で？」

とキルアが聞いてきた。

「前にも言つたけどハメ組がスペルカードを独占してるからスペルカードは売り切れだつて言つただろ？」

でもこれでハメ組が全滅するつてことはその分スペルカードも大量に消滅する。だから貴重なスペルカードも比較的簡単に大量に入手出来る筈だ。」

俺の考えを聞いたキルアは

「成る程！確かにそうだな。頭良いゴン！！」
と賞賛。ゴンに会わない限り別にあんまり他人の命とか気にしなかつたからか性格は変わっていない。いやむしろ悪くなつてるようだ。

現にビスケはあまり良い顔をしてない。

その後爆弾が爆発した頃にマサドラに到着。マサドラに着く前に結構怪物に襲われたが、ほとんどキルアが秒殺。コイツマジ強くなつてやがる。

「お客様運が良いわよ。ずっと品切れだったのだけどついさつき大量に入荷できたの。

呪文カードを買う時のルールだけど袋はお店の中で開けてね。購入したカードは本に入れて持ち帰る決まりなの。入りきらないカードは店を出たとたんに消えちゃうから数を考えて買ってね。」

話し合つた結果3人で買ったスペルカードは90枚。

やはり原作よりも量を買つたからかなりレアなカードもダブつて手に入れた。何せプリズン2枚にトランスマフォーム1枚も手に入れたからな。

店を出て誰がどのカードを持つかの分配を始めた。

「とりあえずこのプリズンは俺が持つてる。俺のカードを奪われたらマズイからな。」

俺の意見に一人とも賛成。俺がゲームクリアを目指してるんだから当たり前だな。

「指定ポケットのダブリはビスケが管理してくれ。」

そう言うと「何でアタシ？」と聞いてきた。

「キルアは1月に入つたらハンター試験を受けるために一度外に出なきゃいけない。外に出ればフリー・ポケットのカードは消滅するし10日以上経てば指定ポケットのカードも消滅する。もしも長期間試験をするハメになつたらマズイからビスケが持つていってくれ。」
その説明を聞いてビスケも納得した。

「ついでに何枚か防御スペルもな。指定ポケットカードを所有するんだから防御スペルも必要だな。」

そう言うと

「ちょっとアタシも使うの！？いやよ、よくわからんないもの！…」
とクレームつけてきた。

「防御スペルは3つぐらいしかないから覚えてくれ。分かんなかつたらキルアに聞いて。」

とキルアに丸投げ。

キルアは

「オレ！？オレもまだよく分かつてないんだけど！？」
と文句を言つてくるがスルーだ。

他にもコンタクトやアカンパーーを渡して「何か聞きたかつたり会いたくなつたら使つてくれ。」と言つて俺はマグネットイックフォースで移動する。

これからは本格的に動いて最低でも指定ポケットカード50種以上を目指す。それが出来ないと一坪の海岸線のイベントが起きないからな。

90枚もスペルカードを買つたけどキルアのバインダーは使えないから30枚くらいは消滅した。
まあ防御スペルとかが欲しかつただけだからな。

プリズンは「コピーして念のためにカード化限度枚数に達しないように慎重に使って全指定ポケットページをガードした。これでカードを奪われる事は無い。

さてと、多分あんまり変化無いだらうけども、一回ツェズグラの記憶を読んどこい。もしかしたら新しくカードの入手方法をゲットしたかも知れないからな。

更に一月経ち、ランクAのカード22種をゲット。これで合計66種を集めた。

ランキングでも急上昇して現在12位。

そろそろ一坪の海岸線を取るためのイベントが発生するだろうから奇運アレキサンドライトを取りに行つた。

聖騎士の首飾りを装備したまま病気の山賊の里に行つた。
里に行つたら息子はまだ病床にいた。あれから3ヶ月くらい経つて
るのにまだ寝込んでるのかよ。さっさと死ねば良いのに。
「俺を信じていただけないでしょうか？」

村人達を集めて一応の説得。

村人達は俺を見つめて

「無償で我々に全てをささげてくれたお方…！信じましょー！」
そう言つた直後に次々と村人がカード化していく。別に全員がカード化しなくても良いのでは？いちいち集めるのも面倒だし。
病気の村人のカードを集め、聖騎士の首飾りで浄化して元気な村人に変える。にしても病気の村人らランクFのクセに元気な村人はランクCなのかよ。たかだか病気が治つただけでエライ違うな。
「おおーー治つたぞー！」

などハイテンションな村人。まあずっと病気の状態だつたからな。
俺が帰つたら再び病気になるんだろうけど。

「ありがとうございますー！ぜひお礼を…！」

と村長が宝石箱を渡してくる。開けて中の宝石を手に取ればカード化して奇運アレキサンドライトになつた。

とりあえず一度一人の所に飛んだ。多分もうすぐ呼ばれるだらう。

「よお、修行は順調か？」

「ええ、非常に順調だわよ。系統別の修行もほとんど終了したし。そりやスゲエ。俺は2年以上かかつたんだけど…。」

「ゴンの方はどうぐらい進んだんだ？」

キルアが聞いてきた。

「ああ俺も順調だ。今のところランクAもほぼコンプリートした。まあ何枚か他のプレイヤーが独占してるカードもあるから無理だけど、他のカードは全部集めて次はランクSにあたる。」

バインダーを見せながら話す。

「おおーー斯ゲエな。このままなら後2、3ヶ月でクリアするんじやねえか？」

キルアが言つ。確かにあと2ヶ月くらいでクリアするよ。ゲンスル一達のカードを奪つてな。

その後は奇運アレキサンドライトの入手経路や他のカードの入手条件などを話していくピントとバインダーがなつた。

『他プレイヤーがあなたに対して「交信」を使いました。』

「うん? 一体誰だ?」

キルアが疑問を発した。

『よオ、こちらはカヅスールだ。』

と真実の剣を奪つた奴からだ。

「トレードか?」

と俺が聞いたら

『いや、一度会わないか? 相談があるんだ。』

「何の?」

知つてるけど。

『もうすぐクリアしそうな奴等がいる。』

3人組でリーダーはゲンスルって奴だ。知つてるか?』

「ああ。』

『他に何組か声をかけていてマサドラの北東2kmの岩場で集まる。情報をトレードするだけでも価値はあると思うぜ。』

そう言つてコンタクトを切つた。

「ふーん。どうするんだ?」ゴン。

キルアが聞いてきた。

「うーん…。とりあえず行つてみるか。何か有益な情報が得られるかも知れないし。」

そう言つた後に一人を見て

「それと二人も一緒に来てくれ。」

「何で? だつてオレ達ゲームは何もしてないし。」

キルアの意見はごもつとも、でもお前達がいないと人数が足りないんだよ。

「交渉ごとなら1人より3人が良いし、それに相手側も組で来るらしいからな。一応俺達同じグループだし。」

適当な理由をつけて一人も同行させてマサドラに飛んだ。

「よく集まつてくれた。礼を言つ。

「交信」で話した通りゲンスルー組があと少しでコンプリートしそうな勢いだ、

さつきランキングを確認したら現在96種。早急に対策を立てる必要がある。

カヅスールが開催者として場を仕切る。

「ちょっといい?」

キルアがカヅスールに声をかける。

「何だ?」

「ランキングってどうやって調べんの?」

キルアが聞く。これはあえて教えてなかつた。

「それは…」

カヅスールが答えようとしたら

「ねエちょっと、そんなことも知らないの…？」

予想通りアスターが絡む。「コイツマジウゼH。

「こんな人達に付き合つてたら夜があけけやつわよ…！」

いいからさつさと本題に入つてよ。」

「まあまあ、そう言つなよ。情報交換も目的の一つではあるんだから。」

カヅスールが諫める。

「もしかしたらアスターの知らない情報を彼らが持つてるかもしだれないと。」

誰だか分からぬがフォローする長髪。

「はは！あるわけないじゃないのそんなこと。交換店さえ活用し切れでない素人よ？この口達。」

何でコイツはそこまで自信があるんだろう？

その後はカヅスールが説明してくれ、話が進む。

「なければ本題だ。ここにいる全員で共同戦線を張りたい。」

カヅスールがこの集会を開いた理由を説明する。しかし待つたがかかる。

「提案には賛成よ。でもメンバーには異論があるわ。」

案の定アスターが俺達を指差しながら言つ。

「ちよつと待てよアスター。あんたが「交信」の時に言つてた条件は守つたぜ？」

カードの所有種50種以上。ここにいる6組はちゃんとクリアして

る。」

カヅスールが反論するが

「それプラス互いに有益な関係を作れる人達つて言つたはず！」

この「達がアタシ達に有益なものを提供してくれるとはとても思えないわ。」

クソアマが喚く。テメエゲンスルーが始末してくれるから何もしねえが、もし何も無かつたら後から地獄見せてやるの。」

「有益な関係を潰してんのはそっちだろ?」

キルアがアスタに囁みつく。

「あーら口だけは達者ねエ。

なら証拠を見せて欲しいわね。何かお徳な…」

「ゲンスルーの能力を知ってる。

それに奴等が持つてないカードのうち一枚も持つている。これでこそ不満が?」

俺が聞く。このアマにそれなりの代償を支払わせてやる。

「いーえ十分よ。早速教えてよ。あいつらの能力。」

何その態度? 俺達がお前に見返り無しで教えるのが当たり前みたいな態度は?

「見返りは? まさかタダで教えて貰おうなんて言わないよな?」

俺の言葉に

「能力の情報とひきかえに一枚ランクAのカードをあげるわ。それなら文句ないでしょ?」

「ふざけてる? ランクAのカードなんて簡単に取れる。ランクSのカード3枚だ。でなきや教えられないね。」

原作よりも一枚多い。別に情報はいらないからな。

「チツ、調子乗つてんじやねーよガキが。

聞いたでしょ! 話にならないわこいつら。アタシ達からランクSのカード全部で15枚もふんだくる気よー?」

アスターが叫ぶ。

「寝ぼけんなよ。3枚はあんたのグループだけだ。」

「はア! ?」

「他の4組にはランクSのカード一枚で教えるよ。

でもアンタ等には3枚。何故だと思つ?」

俺の質問に

「はあ? アンタがへソ曲げただけでしょ?」

アスターがバカにしたように言う。

「残念。答えは俺達をナメたからだ。」

アスターは分からぬという顔をする。

「この他のグループもいるという状況下でお前は俺達をナメた。

こういう同盟などを組む場合、ナメられたままで他の奴等にも侮られる。だからお前にはそのナメた分を課さなくてはならない。お前と同じグループの一人には気の毒だがお前と同じグループだとう事で我慢して貰う。」

俺がそう言うとアスターは尚も何か言って来そうだったが

「アスター、いいよ。3枚くらいくれてやろうぜ。」

「それにその口の言った通りアスターが悪いよ。」

と仲間に言われてアスターは悔しそうが引っ込む。

結局ランクSの身重の石、信念の楯、盜賊の剣を貰った。他の奴等からもランクSのカード一枚か情報を得た。ほとんどが既に知ってる情報だったけどね。

これでランクSのカードは5種集まつた。楽で良いね。

「それでは約束通りに。」

ゲンスルーの能力は「命の音」と「一握りの火薬」。どちらも標的を爆破する能力で…

しばらく説明をして

「…というわけでゲンスルーには絶対に近づかない方がいいよ。俺の説明が終わると

「マジ! ? やられたわ……あの時だ!!」

「オレもだ。交渉の時触られた。」

と何人かは焦りながら言つ。

「何か方法はないの！？解除法は！？」
とアスターが聞いてきた。

「勿論ある。ただし聞くならランクSのカード一枚だ。サービスとして今度は全員同じ条件でもいいよ。」

また取られるのかと悔しそうな顔はするが、自分にかけられた爆弾の方が気になるので取引に応じた。

解除法が聞きたいのか、爆弾を仕掛けられて無いグループも支払い、5枚を得た。これでランクSの合計は10種だ。

「爆弾の解除法はゲンスルーに触りながら『『爆弾魔』捕まえた』と言わなくてはならない。

ちなみに爆弾のタイマーが発動するのはゲンスルーが能力の説明をした後だから金輪際ゲンスルーに近づきさえいなければ問題無い筈だ。」

サービスとして補足情報もあげた。何もせずにランクSを10種も貰つたからな。これぐらいのサービスはやる。

「じゃあいよいよ核心だな。奴等の持つていらない3枚のうちどのカードの独占を狙うかだが。」

カヅスールが目的に戻す。

「俺達の持つてる75「奇運アレキサンドライト」は多分独占は不可能だ。1組1枚しか取れないアイテムだったし、カード化限度枚数20は多すぎる。」

俺がそう言つと

「NO・75を獲つたのか！？」

「すごいなお前ら」

など驚く一同。ゲーム初期ならそんなに難しくない条件だったけどな。

「どうやって獲るんだあのアイテム？」

Sカード3枚でどうだ！？

など交換も持ちかけて来る。

「ちょっと待て！！もう後にしろよ情報交換は。」

とカヅスールが話を元に戻す。

「確かに短期間で「複製」を19枚揃えるのは至難の業だな。」

「いやいやその前に75つて他に誰か持ってるんじゃないかな？」

「あ、そうか。」

などなど話し合いが続く。

結局、その後誰も所有していないN.O.の一坪の海岸線を取るためにソウフラビに行く事になった。

アカンパーーで飛んでソウフラビに無事到着。

来たことあるけどやつぱりデカイ街だな。

「早速入って聞き込みだが、全員の行動を統一する意味で入手までの流れを確認しておこう。」

カヅスールがUランクのカードの入手手順を書いて全員に説明した。

説明が終了したら散会して聞き込み開始。

「けつこう人多いなー。」

キルアが回りを見ながら言う。

「ああ、面倒だが片つ端から聞いてくしかねえな。

もしかして何回も訪れないと重要なことを教えてくれない可能性もあるから何週間も何も進展が無いかも知れないから覚悟しとけよ。」

二人に言つと

「おーーー！」

と返して来た。キルアは年齢的に分かるがビスケが何故乗る？

「おーーい、情報提供者が見つかつたらしいぞ？」

今さつき何週間もかかる覚悟をしたばかりなのにゴレイヌが伝えて来た。

「マジ！？」

とキルアは驚く。確かにこのデカイ街でいきなり当たりつてスゲエと思うからな。

しかしその情報提供者のほとんどは「一坪の海岸線の言葉だけは知つてる。」だけだった。

他にも聞き込みを続けていたら魚屋の女店主が

「あんた達なら…。話してもいいかも知れないわね。」

と当たりつぽいことを言った。

「…ぜひ聞かせてくれ。」

と聞いた奴等も興奮する。

「海賊が仕切つてるのよこの街は。」

この海域のどこかに「海神の棲み家」と呼ばれる海底洞窟があると言ひ伝えられているの…。「一坪の海岸線」はそこへの入口…。様々な財宝が眠つていると言われるその海底洞窟の伝説を聞き付けて数年前、15人の海賊がこの街にやって来た。

レイザーと14人の悪魔…！

街の漁師は全員拷問を受けて殺されたわ。この街で「一坪の海岸線」の場所の手掛かりを知る者は全て。

もしも海賊を追い払つてくれたらあなた達に教えてもいいわよ。兄から聞いた「一坪の海岸線」の場所…！」

一日全員で集まつた

「こわいほどトントン拍子に話が進むな。」

カヅスールが不気味がる。

「ホンシトおかしいな。あの女もオレ達が前に聞いた時は全く話しそらしなかつたんだぜ。」

「レイザーと14人の悪魔か…。」

イベントの発生条件がプレイヤーの人数だったのかも知れないわね。海賊が15人。あたし達も偶然だけど15人。」

「15人以上のパーティを組まないとイベントが発生しないってことか…。」

「しかしゲームキャラはどうやってそれを判断するんだ?」

皆が話し合つてている。

「おそらくは15人以上で「同行」を使ひここに来る。それがイベント発生条件だろう。」

俺が答えると

「成る程…。なかなか情報すら出てこなかつたわけだ。」

「おそらくここまでたどりついたのオレ達が初めてじゃねーか？」

と興奮している。

「えげつねエな…」

しかしゴレイヌは顔をしかめる。コイツも頭良いしな。

「だねえ。全く残酷なイベントだ。」

と俺が答えると

「…ああ。」

とゴレイヌも答えた。

まあカード化限度枚数が3枚しかないカードを分けなきゃいけないからな。普通なら必ず揉める。何せ15人以上が必要だからな。

海賊の居場所である酒場に移動した。

中には4人のピエロみたいな帽子をかぶった男がいた。

「なんだ？ テメエら。今日はオレ達の貸し切りだ。帰んな。」

デカイ力士みたいな体をしたボボボが言つ。

「相談をしに来たんだ。この街を出ていってくれないか？」

カヅスールが平和的に言つ。

「……ガハハハハ！」

と笑い出す海賊？達。

「久しぶりに聞いたセリフだな！！

前にそのセリフを言った奴はそこの海辺で骨になつてゐるぜーー」と笑う。

「今すぐペシャンコにしてやりてえが。」

とボボボがカヅスールに近付く。

「全ての決定権は船長にある。

相談なんて言わずに腕づくでやつてみろよ。」

そう言つたボボボは持つていた酒を円状にまき、ライターで火を点けた。酒は燃え上がり円状のリングをつくる。

「オレをこの土俵から外に出せたら船長に合わせてやるぜ？」

ボボボは自信満々に言い放つ。

「炎の俵を越えて内に入つたら勝負開始だ。一度に何人かかつてきてもいいぜ。オレの体をこの俵の外へ出せばオレ達のボスに直接会わせてやるよ。」

そうボボボがルールを告げた直後に

「土俵の外へ出せば良いんだな。」

とスキンヘッドが出てきた。

「ゼホ。」とカヅスールが言つ。そう言えばお前のチームだつたな。

「力勝負なら強化系のオレに任せとけ。」

アホかお前、なんで律義に自分の系統をバラす？こん大勢の前で。

「ふうう～～～。

はあああ！！

とかいちいち声に出してゆつくりて練をするゼホ。コイツマジで雑魚だ。

練を終えたらしいゼホが土俵に入り

「はつ！！」

と気合いを入れてボボボに突撃する。しかしボボボは小揺るぎもない。

「ぐつ、ぐつ。」

とゼホは頑張るが

「お？

けつこう力あるじゃねーか。」

と言つたボボボはゼホを持ち上げて吊りをかける。

「ぐつ、はな…」

ゼホが抵抗するが拘束は弱まらない。

そしてボボボは薄笑いを浮かべながら炎の土俵にゼホを近付け、ゼホの足を炎で炙る。

「ぐつ、やめり！放してくれ、負けだ！！オレの負けだアアあああ！！」

とゼホは悲鳴をあげる。

原作ならゴンが止めるために動くが、俺はそんな気は無いのでただ見てるだけ。

しばらくゼホの足が焼かれ、靴が燃えて皮膚が焼かれた辺りでボボボが飽きたのかゼホの体を投げて土俵から出す。

「ゼホッ。」

とカツスール達がゼホに駆け寄る。足の火傷はそこまで酷く無いから切断は免れるだろう。

治すには大天使の息吹か外に出て救急車を呼ぶ必要があるがな。

「さあ、どうした！？ゼーッちまつたんならさつあと出でいきな！」

ボボボが言つ。

他の奴等はさつきのを見たせいに行きたがらない。

「オッサン、俺けつこう強いけどどうする？」

と俺が言つ。

「どこからでも来いよボウズ。オレを一步でも動かせたらお前の勝ちにしてやる。」

とボボボは余裕気に言つ。

それを待つてた。

「アンタが一步でも動いたら負けで良いんだな？」

とボボボに確認する。

「ああ、出来るならな。」

とボボボが肯定する。

「本当に良いんだよな？」

と周りの奴等にも確認する。

「ああ、ボボボがそう決めたんだからな。」

他の海賊達も肯定する。

「んじやあやろうか。」

そう言つて土俵の中に入る。ボボボは宣言通りが動かず俺を待つている。

「さあ来なガキ。」

とボボボが挑発する。それに乗つたフリをして一気にボボボに突っ込む。

「おお、なかなか強えじゃねえか。」

とボボボは余裕を見せる。まあ普通に突っ込んだだけだからな。

そして能力を使い足の筋力を上げて一気に足払いをボボボにかける。

「うおあ！！」

という声を上げてボボボは見事にコケた。

「動いたぞ。俺の勝ちだよな？」

そう言つて周りの奴等に聞く。

「ああ、それがボボボが決めたルールだからな。」

それを聞いて俺は土俵から出た。

「チツ！！」

とボボボはムカついてるようだが自分が決めたルールだし、周囲もそれを認めてるから原作と違つて大人しく下がる。やっぱり顔を焼かなかつたからか幾分冷静だな。

「ついて来な、ボスに会わせてやる。」

海賊の案内で酒屋を出た。

しばらく歩き、要塞に到着した。

「灯台を改造した要塞。ここで密航船をチェックしてるんだ。」

海賊の一人が説明しながら門を開ける。

そしてまたしばらく歩き、体育館みたいな広い部屋に入った。中ではバレー「コートや跳び箱、バスケット「ゴールなど様々な競技の道具がある。

そして海賊達はダンベルを持ち上げ、鍛えている細田の男に近付く。

「誰だ？ そいつら。」

細田のレイザーが聞く。

「密だ。オレ達を追い出したいそうだぜ。」

と説明する。

「ホウ、じゃあ早速本題に入るか。勝負しよう。

互いに15人ずつ代表を出して戦う。1人1勝。先に8勝した方の勝ちだ。

勝負のやり方はオレ達が決める。それでお前達が勝てばこの島を出ていこひ。どうだ？」

レイザーが聞く。大変だねえ。わざわざゲームキャラみたいなセリフを言うのは。

「質問がある。」

ゴレイヌが聞く。

「どうぞ。」

「もしオレ達が負けたらどうなる。」

「特に何も、ここからお帰りいただくだけだ。」

とレイザーが答えた

「よし…やろひ。」

とカヅスールは答えた。

「よからひ。勝負のテーマはスポーツ——ここにいるメンバーがそれぞれ得意なスポーツでお前達に勝負を挑む。」

レイザーが言つた後に拳にバンテージを結んだ男が現れる。

「オレが一番手だ。オレのテーマはボクシング。」

そう告げた後、男はボクシングのリングに上がった。

「さあ、誰がやるんだ?」

と聞く。

「わかつてるとと思うが闘れるのは1人1試合だ。1人で何勝もすることはできないぜ。」

とレイザーが補足する。

「1つ確認しておくが念は使つてもいいんだろうな?」

カヅスールが聞く。

「もちろんさ。オレ達はバリバリ使うぜ。」

とグローブをはめて男は答える。

「よし……オレが行こう!」と男が出る。名前わかんねえから区別しにくいな。

その後は原作通り。

ボクシングではカウンターアッパー食らつてKOだし、キルアとビスケにワザと負けるぞって告げたから俺達も負けて後は普通に負けた。

「これで8勝。オレ達の勝ちだな。

出直して来な、まだしばらくオレ達はこの街で好きにさせてもひらつぜ。」

そう言われて俺達は要塞を出た。ちなみにボボボは別に騒がなかつた。そこまで俺に恨みは無いだろうからな。

「一度バトルに負けてしまつたパーティでは二度と挑戦できない……

…か。」

カヅスールが改めて言う。

「そのくらいのリスクは当然だろうな。ま、15人のうち一人でも

メンバーが変わればいいんだからそれほどムチャなリスクじゃないな。」

と話し合っていたら

「あ、でもアタシ達はもう抜けるから。」
とアスターが告げる。

「えつ。」

とカヅスール達が驚く。

「「爆弾魔」組のコンプリート阻止という当初の目的は達成できたわ。だってあいつらには「15人の仲間を集める」っていう条件はまず不可能だから。

むしろあんた達もしばらくはこのイベントは放つといったら、下手に入手に成功したらそのカードを狙われて危険だわ。その方が奴等には都合がいい。」

とアスターが説明する。確かにそうも言えるがそれは先送りにしかならないが？

「たしかに……そうだな。」

と周囲も納得し始める。

そして他の奴等も結局はアスターの意見を賛成して散り散りになる。
残つたのは俺達とゴレイヌだけ。

「あんたはどうすんの？」

キルアがゴレイヌに聞いた。

「お前らと同じさ。もっと強い仲間を探す。続ける気だろ？このイベント。でなきやあの作戦変更は意味無いからな。

あの連中は勘違いをしている。オレ達にとつてもこのカードはなるべく早く入手した方がいいんだ。」

「少しでも仲間割れの危険を回避するため…。」

「俺が言うと

「その通り。」

ゴレイヌが答える。

キルアも分かつてたらしいがビスケは分からないようだ。

「仲間は最低15人必要。でも「一坪の海岸線」のカード化限度枚数はたつた3枚。このイベントははじめから仲間同士の争いの火種をかかえているという事だ。」

と俺が言うとビスケは「あ……」と分かつたようだ。

「さて、俺達全員が勝つことを前提にしてもあと最低4人の手練れが必要。」

俺が言うと。

「理想はそいつらが111人組のパーティーだな。」

とゴレイヌが答える。

「そんな都合の良いパーティーがいると良いがな。」

そんな大人数で動く奴等がいたらこのイベントはとっくにクリアされてるだろうしな。

とうあえず話し合いとして飯屋に移つた。

「勧誘するプレイヤーに心当たりはあるか？

オレのを入れても「磁力」と「同行」は合わせて7枚しかないから引き入れに失敗は許されないぜ。」

ゴレイヌが言う。

「あんたの方はどうなんだよ？」

キルアがゴレイヌに尋ねるが

「いたら1人でプレイしてないさ。」

と首を振る。

「うーん…。だったらツェズゲラはどうだ？ 実力は申し分無いと思うが？」

俺が聞いたら

「うむ、まあ…確かに実力的には申し分無いだろうが、出来ることなら仲間にはしたくないな。」

とゴレイヌは否定的。

「何故？」

「奴等も「爆弾魔」組と同程度のカードを集めているはずだ。協力だけはしてもらつてカードは渡さないって作戦をとるなら話は別だが。」

とゴレイヌは言う。でもアイツら意外とカード持つてないからそんなに警戒する必要も無いけどね。

「んー…。でも他に知つてる奴はない。ツェズゲラなら仲間もいるだろうし何より目的が分かつてるから交渉もしやすい。」

条件としては先にクリアしたなら報酬の10%の50億を支払う事

を条件とすれば損は無いと思うが？」

「ゴレイヌに再度尋ねる。するとゴレイヌも考える。

「……確かに奴以外に心当たりも無い。単独で動いてはいないだろうからメンバーも手つ取り早く集まる。

情報の見返りとして50億は法外だがこの状況下なら可能だろ。よし、じゃあシェズゲラを勧誘しよう。」

とゴレイヌも賛同してくれた。これで8人集まつた。原作ではここにヒソカがいるけどもう死んだから無意味。

能力はコピーしたけどキルアがいる前で言えば100%バレる。だから使えない。その分俺が頑張る必要があるがな。

「ところでシェズゲラと遭つた事はあるのか？俺は無いけど。」

ゴレイヌが聞いてきた。

「そういえば俺も無いな。ビスケは？」

キルアがビスケに聞く。

「いいえ、あたしも遭つてないわ。」

お前らは基本的に岩石地帯かその周辺にいたからな。

「大丈夫だ。俺のバインダーには入っている。」

バインダーを出してスティールのカードを差し込みリストを見せる。

「おーー本当だ。いつの間に遭つたんだゴン？」

キルアが聞いてきた。

「さあ、知らないけどいつの間に遭つたらしい。カードを取つてると時がマサドラにいた時か、何時かは分からないがな。」

本当は記憶を読むために遭つたんだけどな。

その後アカンパニーでシェズゲラの所に飛んだ。

「とにかく条件はクリア報酬500億の10%、50億！！

それがのめなきや「一坪の海岸線」の情報は教えられない。

ゴレイヌが原作通りの交渉をしている。

「…法外だな。」

ツェズゲラが答える。確かに情報で50億も取るのは普通あり得ないからな。

「状況が状況だからな。それにこのカード、おそらくあんた達が自力で発見するのは絶対困難だぜ。内容を聞けば納得してもらえるはずだ。」

ツェズゲラは考へているな。確かに「一坪の密林」みたいにロトリーでたまたま当てるなんて確率低すぎるし。

「カード入手してないといつのは本当だろ？」「

ツェズゲラが確認として聞く。

「ああ、現状のオレ達では入手不可能だ。それが出来ていればこんな金額はふっかけてないさ。」

とゴレイヌはお手上げをする。

ツェズゲラは隣にいる仲間に田配せすると仲間は頷いた。

「……よし！ 条件は呑み。話を聞こい。」

ゴレイヌが説明をした。

「くつくつ、なるほど、だから直接会って話がしたいと言ったわけか。以前痛い目に遭つて警戒したんだが来てよかつたよ。

オレ達と組んでカード入手を目指そうというわけだな。」

確かにゲンスルー組にレビューで酷い田にあつたからな。だから万が一のために仲間を森に隠してゐるのか。

「さすが察しが早いな。悪い話じゃないと思つがね。」

ゴレイヌが言うと

「そつちは全部で4人か？」

とツェズゲラが聞いてきた。自分達のように仲間を隠しての可能性があるからな。

「？ああ、見ての通りだ。」

「ゴレイヌは分からなかつたようだが。

「こつちはあと2人仲間がいる。それでも8人にしかならないが、残りはどうする気だ？」

ツェズゲラが指を鳴らして仲間を呼ぶ。すると森からツェズゲラと同じ作業服を着たような一人が出てきた。

「残り7人は数合わせだ。現実世界へ帰りたくても帰れないでいるプレイヤーを誘う。戦力としては全く計算できないわけだが」

「カード分配の心配がなくて楽だな。」

ゴレイヌの言葉にツェズゲラが繋げる。

「つまりは8人で8勝しなければならないわけか…。一戦も負けられないが勝算はあるのか？」

ツェズゲラがゴレイヌに聞いた。

「100%じゃないが見た限りではボス以外の力量はオレ達より下だ。それに万が一8勝できなくてもメンバーを替えて再挑戦できる。」

「ゴレイヌが答えた後に

「つてわけで勝算があるかどうかはそつち次第。

あんた達の練を見せてよ。仲間にするかどうかはその後だね。」

とキルアは意趣返しのつもりかツェズゲラに告げる。

「おやおや立場が逆になつたな。ま、いいだろつ。」

そう言つた後にツェズゲラは両足を揃えながら屈み、ググ…。とう音が鳴るほど力を込め、「はーーーー」とテカイ声を上げてジャンプした。その高さは10m以上という高さ。

「くくくくく。全力を出せばもっと高く跳べるぞ。私の垂直飛びベス

トは16m80cm!!

自信満々に言つツヒズゲラ。確かに凄いけど直ぐに抜かれるんだよな。

「たぶんジャンプの瞬間、足にオーラを集中させたんだろう。俺が言つと

「じゃあオレもやってみよ!」

と言つてキルアがツェズゲラのようになつて「や……」とジャンプした。その高さは20mは軽く越えている。

ツェズゲラは自分のベストがあつさり抜かれた事で唖然。

まあ、たかだか4、5ヶ月でこんなに急成長するなんて考えられないからな。

「ふ…ふふ。なかなかやるな。まあ、オレの全力には少し及ばないが…。」

と強がるツェズゲラ。間違いなく17m以上は跳んでたけど?と思ふが敢えて聞かない。プライドが傷つくからな。

「あんた達の力は信用してるよ。ただ今回の勝負はスポーツだから。誰がどのスポーツを担当するかがカギになる。」

とゴレイヌが氣使つてか、さつきの事には触れずに言つ。

「スポーツの種類は全て把握しているのか?」「
気を取り直したツェズゲラが聞く。

ゴレイヌが前回戦つた種目などを書いた紙を広げながら

「オレ達が確認した勝負はこの8つだが。勝敗次第では奴等が更に得意なスポーツに変えてくることも考えられる。」

「なるほど…オレはビーチバレーにしておくか。」
ツェズゲラが得意なのかビーチバレーを選択する。

「オレはレスリング希望だ。」

ゴレイヌ

「ボクシングならオレに任せてくれ。相手の念への対応策もある。」

「ボウリングはオレが最適だろ？。念を使えばパーフェクトもたやすいし。逆に相手がしてきそうなことも想像がつく。」

と各々自分の得意なスポーツや能力を考えて希望を出す。

「なら俺はリフティングが良いな。能力を使えば勝てる。」

『理不尽な拘束』で自分のボールを保持しつつ相手のボールを操作すれば秒殺だ。

「私は卓球がやりたいです。」

「フリースローはオレがやる。」

など各自担当が決まつていぐが、キルアがまだ決まってない。まあ別に相撲にこだわる必要が無いからな。

「結局オレのパートナーは君か…。まあさつきのジャンプ力ならアタックも問題ないだろうが…。」

ちなみにビーチバレーの経験はあるのか？

ツエズゲラに聞かれてキルアは

「いやあ、実は無い…。」

アハハ。と苦笑い。

「経験なしでは話にならん、すぐ特訓だ！！！」

ツエズゲラの宣言に「ひへー！」と悲鳴を上げるキルア。まあんな家についてビーチバレーをやる機会なんて無かつただろうしな。

「じゃあオレ達は残りのメンバー集めを開始するか。」

とツエズゲラの仲間が話し合つていたら

「オイ！やばいぜ…！…！」

ともう一人の仲間がバイインダーを見ながら言つてきた。

「どうした？」

「ゲンスルー組が97枚になつてる…！…！」

という知らせ。アイツ等どうやって手に入れてるんだろ？・スペル

?それとも実力行使か？

1週間経ち、メンバーとして寄せ集めを7人集めて15人グループを編成した。

「この1週間あらゆるシミュレーションをし、練習を重ねた。ゲンスルー組のことも考えると絶対負けるわけにはいかないな。ツェズゲラが奮起させる。」

その後原作通りにツェズゲラの仲間が3勝を上げた。

そしたらレイザーが適当に負けて良いという命図を出した。原作ではボボボガキルアへの恨みでレイザーに逆らうが、この世界ではキルアと戦つて無いし、俺にはコカされただけだから不満そうだが逆らつまではしない。

ここに主力メンバーを減らすと本番のドッジボール戦でヤバイからクズを出すことにした。

「よし作戦変更、次お前行け。」

とビクビクしてメガネに声をかける。

「ええ！…何でだよ！？オレ達はやらない約束だろ…？」
と言つてきた。

「だから作戦変更と言つただろ？なんかアイツ等適当に負けるみたいだからお前でも可能性は十分ある。勝てそうに無かつたらギブアツプしても良い。」

そう言つが寄せ集め組は抗議を止めない。

「どういう事だゴン。」

ツェズゲラも来た。

「何かあっちのボスが部下達に適当に負けさせるらしい。多分ボスが何らかの方法で帳尻合わせをするんだろう。だから今は戦力の温存としてコイツを出す。別に問題無いだろう？」

俺達が8勝すれば良いだけの話だ。」

「

「その話は確かにのか？」シェズゲラが聞いてきた。

「ああ、何かボスが合図したら部下達は頷いたし、あっちのデブは明らかに不満そうな顔をした。ワザと負けるのがムカつくんだろう。」

それを聞いてシェズゲラは悩む。

確かにゴンの言う通りもし雑魚に勝つたとしてもボスが何らかの方法で最終的に帳尻を合わせて来たら戦力は多い方が良い。最悪コイツが負けても1敗するだけだから別にそこまで勝敗には関係しない。しかし…。

「コイツ等が戦ってくれるとは思えないが？」

と今でも騒いでるクズ達を見る。

「それについては任せてくれ。必ず参加させる。」

とゴンが言うのでとりあえずシェズゲラはゴンに任せることにした。

「さて、何か反論が？」

俺が聞いたら出来るわ文句の数。確かに約束では俺達が負けたら戦わずにリタイアしても良いと言つたが、俺が約束した訳では無い。

「まあまあ、大丈夫だつて、アイツ等適当に負ける筈だから。普通にやつてれば勝てる。それにマジでヤバかつたらリタイアしてもいいから。」

それでも反論は止まない。挙げ句の果てに帰ろうとする始末。

そこで俺は一人の肩を掴みながら

「逃げると思つてる？既にバインダーにはお前達の名前は載つてゐる。追おうと思えば簡単に追える。

そしてもし逃げたりしたらどうなるか……分かるよね？」

クズ達を見ながら言う。震え出すクズ達。

「それにちゃんと最後までいてくれれば「離脱」を渡してあげるし、負けそうになつたらリタイアしても良いと言つてるんだからさ。」

分かつてくれるよね？」

最後の警告として宣告するとクズ達も逃げるのを止めて戻つて来た。
死刑宣告を受けた囚人みたいな顔色だが問題無い。

周りは引いてるが。

本当の囚人である相手側も同情の眼差しでクズ達を見る。これなら
ワザと負けてくれるだろう。

これで問題解決だ。

5.1 呆氣ない決着

あの後メガネがリフティングで戦つた。囚人の方がワザと負けてくれたおかげで無事勝利。これで4勝0敗。

「よし、次はオレがやろう。」

遂にレイザーが出てきた。

「オレのテーマは8人ずつで戦う…ドッジボールだ！！」

そう宣言した直後にレイザーの周りに7体の念人形が現れた。

「8人…！…メンバーを選んでくれ。こつちはもう決まっているからな。」

「ちょっと待てよ…！勝敗はどう決めるんだ？」

「1人1勝なんだろ！？」

ゴレイヌとツェズグラの仲間がレイザーに聞く。

「ああ1人1勝だ。だから勝負に勝った方に8勝入る。簡単だろ？」
レイザーが言う。明らかに自分が勝てば勝利だと言っている。ひで
えボスイベントだな。

「そういうことか。」

とツェズグラも理解する。今までの勝敗が無意味な事に。

「オ、オレはいやだせ…！…現実に戻れなくともいい。」

などクズ達が騒ぎ出した。

ボボボが殺されるシーンは無いがやはり力量の違いを理解したのか。
仕方ないから俺がもう一度説得に出る。

「さつきも言つたけど…。逃げられると思つてんのか？

ツェズグラ達は何もしないだろうが、俺は裏切り者は決して許さね
え。」

そう宣言するとクズ達は黙る。何せ今逃げれてもグリードアイラン
ド内にいる限り逃げ場など無い。

「とは言つものの、アイツ等に戦力の期待をするのは酷。誰かレイザーみたいに念の人形を出せる奴はないか?」

俺が聞くと

「ならばオレが3人分になろう。」

とゴレイヌが念獸を2体出した。

「よし、これでクズは1人で良い。」

と俺は残つてゐるクズ達を見る。クズ達は自分が選ばれないよう祈つてた。

「よし、お前だ。」

と一番チビなスキンヘッドを選ぶ。

スキンヘッドは絶望するように顔を伏せる。他の奴等は「キャッホーー」と喜んでいるが。

「ルールを説明する!!!ゲームは1アウト7イン（内野七名、外野一名）でスタートする!!!内野が0になつたチームの負け!!!コート内の選手は敵の投げたボールに当たればアウト!!!外野に出る!!!ただし!!!スタート時外野にいた選手を含めたつた1人!!!一度だけ内野に復活することが出来る!!!

これは「バツク」と宣言すればいつでも戻れる!!!極端な例としてスタートと同時に「バツク」を宣言すれば8人が内野でプレーできるというわけだ!!!ただし選手が一人もいない外野にボールが転がつた場合は相手側の内野ボールとなるので注意されたし!!!」

などなどルール説明が終わつた後に試合が始まつた。

外野に出たのはあのスキンヘッドだ。ボールが当たる事の無い外野ということで喜んでいたが、

「取れないボールだつたら構わないが、取れるボールを取らずに相

手側に渡つたらどうなるかわかるよな?」

という俺の脅しが効いたのか再び絶望した様子で外野に回つた。

『スローインと同時に試合開始です!!』

レディー——ゴー——!

とN.O.がスローインした。

スローインしたボールを自陣に入れるためにキルアはジャンプしたが、敵側はジャンプせずに自陣に戻り、横一列になつてフォーメーションを組んでる。

「先手はくれてやるよ。」

レイザーが自信満々に言い放つ。

「余裕こきやがって。」

とボールを受け取つたゴレイヌは投げようとしたが。

「待て、ゴレイヌ。俺にボールをくれ。」

と声をかける。

ゴレイヌは投げるのを止めて

「ボール投げに自信があるのか?」

と聞いてきた。

「ああ、やつてみたい作戦があるんだ。頼むよ。」

そう言つとゴレイヌは俺にボールを渡してくれた。

ぶつけやけドッジボールなんてネギま時代にやつた以来だが、この世界なら勝算がある。一回しか使えないがな。

「先ずはお前だ!!!」

と右端のN.O.を狙う。

練と周で通常の倍のオーラを込めたボールを投げた。その威力は凄まじく早い。

「ギシヒ——!」

とこう声をあげながらボールが当たつた瞬間N.O.は吹つ飛びふ。

「おおつやつた!!!」

とキルアが歓声を上げる。

「よーーし先ずは一匹。」

と俺が宣言した直後にボールは戻ってきて隣のN。・6の背中にも命中。

「ギシヤ！！」

突然の奇襲に驚いたのか前に吹き飛んだ。

その後、レイザーを避けるようにボールは飛び、N。・5、3、4、2にも当て、ボールは俺の元に戻って来た。

「おやおや、いつの間にお前1人になっちゃったな？」

嘲笑いながらレイザーを見る。

「…やるな。」

とレイザーも少し驚いているようだ。

「スゲエなゴン！！あれがお前の能力なのか…？」

キルアが聞いてきた。

「まあ、詳細は秘密だけど。物体を操作する能力だ。」

そう言って誤魔化す。基本的に何でも操作出来るけどな。

「審判質問。最後に内野に残つてた奴がボールに当たつた瞬間「バック」を使うのはアリか？」

念のため聞いてく。もしもアリなら面倒になる。

『ナシです。最後の1人がボールに当たつたら一瞬とはいえ内野が0になりますからその時点で負けです。

ただし最後の1人がボールに当たるとほぼ同時に外野の誰かが「バック」を宣言して復活するのはアリです。

「バック」は宣言した者に権利があります。宣言者でない他のプレイヤーに権利を譲ることはできませんので御注意下さい。』

N。・0が細かく教えてくれた。

「だとよ。見る限りコイツ以外は喋る能力は無せそうだからお前がアウトになればゲーム終了だな。」

レイザーに言い放つ。

「…オレがアウトになればな。」

とあくまで自信ありげに言つ。まあレイザーならさつきの威力でも受け止める事は可能だろうしな。

残念ながら原作ゴンのジャジャーンケン程の威力は無い。だったら「ツェズゲラ、ちょっと来てくれ。」

とツェズゲラを呼んだ。

「何だ？」

「ああ、流石にレイザーが相手じゃ、さっきのボールも取られるだろつ。」

俺がそう言つとツェズゲラも頷く。

「確かに…。お前のボールの威力は凄いがレイザーには取られる可能性がある。もし取られれば一氣にお前を潰しにかかるだろつ。」

というありがたく無いが予想通りの事を言つてくれた。

「だからレイザーをアウトにするために俺は全力でボールを打ち出す。ツェズゲラにはサポートを頼む。」

「サポート？」

「ああ、先ずはお前はそこに立ってくれ。」

センターラインギリギリを指示した。

ツェズゲラは指示通りに立つた。

「それで腰を落としてしつかりボールを持つてくれ。」

そう言われて俺からボールを受け取り俺に指示された通りにボールを持つ。

「ツェズゲラ、お前オーラの高速移動は出来るよな？」「

「ああ、オーラの移動速度にはいさか自信はあるが？」

ツェズゲラはまだ分かっていない。

「俺はこれからオーラを全て拳に集中させて全力でボールを殴る。」

それならさつき投げたボールの威力、早と共に倍以上になる。それならまず取れないし避けれない。

お前にはそのための砲台の役割をしてもらひつ。「

そう言うとツェズゲラも理解したのか

「成る程、確かにそのためにはお前がボールを撃ち出す瞬間に手をオーラでガードする超高速のオーラの攻防力移動が出来るオレが必要だな。」

と理解した。

キルアではまだ未熟で出来ないし、ビスケも出来るか分からぬ。（多分出来るだらうがしてくれるか不明）

それにもしもレイザーが避けても操作して追尾出来る。

だから避けられない。まあ『理不尽な支配』や『理不尽な拘束』でレイザーを動けなくすればこんな苦労はいらないが、すれば人間も操作可能とバレてしまう。

それにはえてしなければ「人間は操作不可能なんだろ。」とコイツらは勝手に思い込む筈だ。何せそれをやれば簡単に決着が着くからな。

「じゃあ行くぜ？」

ツェズゲラに目配せするとツェズゲラは頷いて返す。

練をしてオーラを出す。コペーもして更に倍にしてるからとんでもない量だ。そして別に必要無いけど制約っぽくするために構えて「最初はグー！ ジャン！！ ケン！！！ グー！！！」

と硬で右拳にオーラを集中させて思いつきりボールを殴る。

ツェズゲラは上手くオーラを高速移動させて自分の手を守りながら威力を削がないようにボールを撃ち出す。

ボールは超高速でレイザーに迫る。

レイザーはレシーブの構えを取った。まさか撃ち返す気が？ だった

ら避けるけど。

ドゴー!!!!!! といづテカイ音が鳴り、レイザーに見事命中したが、レイザーは体ごと腕を引き、ボールの威力を見事に殺した。何で威力を殺す？俺の能力を見たばかりの癖に意味分かんない。

「逃げると捕るだけじゃ ないってことさ。

それにそいつは今の攻撃でオーラはほぼ使いきったはず。今更操作能力を使用するのは不可能だ。」

確かにそういう見方も出来るな。あれほどのオーラを使つたら普通は立つてる事でさえ精一杯。気絶するのが普通だ。

俺じゃなきやね。

「残念。もし威力が残つたままだつたら流石に操作不可能だつたが、威力が完全に無くなりただ浮いてるだけのボールならギリつギリ何とかなるんだよ。」

そう言つて俺は操作してボールを手元に移動させて掴んだ。
『クツーション制によりレイザー選手アウト！！』

よつてこの試合、ツエズゲラチームの勝利です！！『原作と違つてツエズゲラがリーダーとして登録したからな。

「うおおおお、スゲーゼお前！！」

とツエズゲラの仲間達から祝福を受ける。

脇ではクズ達が生き残つた奴に祝福してる。仲間意識が芽生えたようだ。

「ほんどうていうか全部ゴンが決めたな。」
とキルアが声をかけてきた。

「まあな、もしあれで決まらなかつたら俺はもう無理だつたけどな。

と少し笑い合つ。まるでジャンプみたいなシーンだな。戦闘シーンは1週間分で終わつたけど。何て盛り上がるがないマンガだ…。

「負けたよ。約束通りオレ達は街を出していく。」

レイザーがゲームキャラのセリフを伝えてきた。

「その前に、お前ジンの息子だよな？」

とレイザーが聞いてきた。

「へーー、よく分かつたね？あんまり似てないと思つんだけど。」
ジンについて全く聞かなかつたから気付かないと思ってたのに。
「確かに性格は全く似てないがその顔やさつきのオーラとかを見て
何となく分かつたんだよ。」

そんなに似てるかな？確かに原作ゴンとは違つて丸い目じゃなくて
微妙に鋭い目をしてる。性格のせいか微妙に原作ゴンと顔が違う。
「お前が来たら手加減するな……て言われてな。まあ、全力を出す機
会すら貰えなかつたけど。」

「…ふーん。」

と興味無いので軽く流す。

「なあ、ゴン。お前の親父のことって何だ？」

キルアにはほとんど話してないから分からなかつたようだ。別に知
らせる必要無いしな。

「俺の親父はこのゲームを作つた製作者の一人らしいよ。」

そう言つと「へー、そなんだ。」とキルアは普通のリアクション。
ジンの事はあのメッセージ以外では知らないからな。

その後レイザーから「ジンについて話そつか？」と聞かれたが「興
味無い。」と断つた。

「灯台もと暗し、入り口はあいつらのすぐ近く……」の灯台にあつた
つてわけ。

「ここがそつよ。」

現在魚屋の女主人に案内されて「一坪の海岸線」イベントのエンテ
イングを見る。

案内されたのは海岸線全体が見える窓がある場所。

「窓…？確かにここからは海岸線が見えるが…。」

「（）からどうやって「海神の棲み家」に行くんだよ？」

ツェズゲラとゴレイヌが聞く。

女主人が窓から身を乗りだして何かを操作する。

そして一筋の光が出て海をさした。

「この光が指示する海面の真下…そこに海底洞窟があるわ。でも本当は財宝なんてないのよ。ダマすようなマネをしてごめんなさい。」「そうなのか？」「

「神聖な洞窟だから」く少數の漁師しかその場所を教えてもらえない。そこから1人歩きした勝手な噂だもの。財宝伝説なんて。もちろんそう言つてもレイザー達は信じなかつた。場所を教えてたら… そうは思うけどそれでもあいつらは別の場所を教えたと考えるかも知れないわね。」

本来ならここでゴンが質問するが俺はしないので話は続く。

「ようやく、又ここから海を見る事ができるのね。

昇る朝日…漁から戻つてくる舟…七色に変わる水面…私にとつてはこの景色が何よりの宝…。」

そう言い終わると景色毎カード化するというスゲエ事が起きた。

「よし、ようやく」一坪の海岸線「ゲットだ。」

「早速「複製」で3枚にしようぜ。」

キルアの言つ通りクローンで2枚増やした。

「オレ達は「ピー」で十分だ。」

「つむ、オリジナルを有する資格は君にある。」

と順当に俺がオリジナルを貰つた。まあほほ俺一人でやつたからな。

その後、約束通りクズ達を現実世界に返すために「挫折の弓」で全

員現実世界に戻してやつた。

「ゴン、相談があるんだが。」

「ツェズゲラが呼んで来た。同盟の申し出か。

「オレ達は手を組むことにした。」

「お前達もオレ達と組まないか？」

オレの予想ではこの先ゲンスルー組との一騎討ちとなる。だが戦闘力では圧倒的にこちらが不利だ。オレの修行不足を抜きにしてめ奴の足元にさえ及ばない。それがお前からゲンスルーの能力を聞いて得た印象だ。

奴はあきらかにはじめから人を殺傷する目的で念を修めている。戦闘における心構えが根本的に我々と違うんだ。

ツェズゲラが熱弁する。俺も基本的に敵を殺傷したりする目的で能力を作ったんだけど……。

『他プレイヤーがあなたに対して「交信」を使用しました。』
バインダーが突然出てきた。

『……久しぶりだな……。誰だかわかるか？』

『何の用だ？ ゲンスルー』

『嬉しいね覚えてくれたのか。まずはおめでとうと言つておこうか。』

『……何のことだ？』

『くくく、とぼけてもムダだぜ。『一坪の海岸線』手に入れたんだろ？ たつた今「名簿」で確認した。

そこで取引だ。お前達の生命の安全は保証する。かわりに「一坪の海岸線」をよこせ。』

『……ふざけるなっ。』

『くくく、ガチンコの戦闘でオレ達に勝てるかどうか試してみるのも面白いかもな。』

取引に応じるなら一時間後にマサドラの入り口までツェズゲラ一人で來い。現れなければ宣戦布告とみなしがちでカードをいただく。

『……逃げてもムダだぜ……。『同行』は山ほど持っているからな……』

まさしく悪役だな。にしてもわざわざ迷惑するなんて我慢強いんだな。俺なら始めから奪うけどな。

『アスター、アマナ、マンヘイム、ニックーキュー、カヅスール……お前達の「15人の仲間」だった連中……そ娘娘？ バインダーで確認してみな。もうここにはいない……この世に世の中な』

『一応バインダーを出して確認した。確かに全員のマークが黒くなっている。』

別に良いけど。ていうかむしろ感謝だ。アスターを殺つてくれてマジ感謝。

『…………それと、『ン、だつたな。『奇運アレキサンダライト』を持つてるそうだな。シズゲラの次はお前らだ。』

…………あれ？ 原作と違くね？

別に声出して無いし、もしかしてついでに言つただけ？ 監視してれば俺達も見えてるだろ？』。

確かに自分達が狙つてるカードを持つてんだから声をかけともおかしく無いのか？

「ゲンスルーは君達の実力を知らない。ゆえに」一坪の海岸線」のオリジナルを持つてるのはオレ達の方だと思っている。

首飾りをしている君なら経験があるだろ？ カード交換の際に「聖騎士の首飾り」は「贋作」を見破ってくれるが、「複製」や「擬態」で変身した有効なカードも解呪してしまうところ欠点がある。

奴等はオリジナルを狙つているんだ。オレ達のな。オレ達が出来る限り時間を稼ぐ。その間に体を回復させる。』

少し原作と違うな。まあ怪我は一切していないし、せいぜいが俺の才一ラ切れくらいか。

「「同行」しだいだが、奴等の「同行」から逃げ切れれば相当の時間稼げるだろう。だが逆に時間が経ち過ぎれば奴等が目標をそつちに変えることも考えられる。おそらく1週間…！それ以上はムリだ。」

別にキルアとかはそこまで焦っていない。別に怪我は無いしな。でも勝てる根拠も無いからちょっと焦っている。

その後は原作通り取引として3週間逃げ切った奇運アレキサンドライトを譲渡するとした。

別に取引なんて必要無いけどここで時間を稼いでくれないとバッテラの恋人が死ぬ前にクリアしてしまう。

それではアイテムに大天使の息吹と魔女の若返り薬、ブループラネットでクリアした後のバインダーが埋まってしまう。

まあ別に良いんだけどさ、コピーすれば済むし。でもツェズグラがゲーム放棄前にゲンスルー達からカードを奪うと今度はツェズグラと戦うハメになるだろうから面倒だ。

勝手に殺し合つて下さい。

「3週間ね。」

俺が言うと

「まあそこそこ時間はあるわね。」

ビスケが答える。作戦を考えるだけなら確かにそこそこある。

「それでどうするんだ? ゴン?」

キルアが聞いてきた。基本的に方針は何時も俺が決めてたからな。

「ゲンスルー達は奇運アレキサンドライトを持つてる俺を狙うだろうから今まで通り俺は別行動を取る。」

「でも1人で大丈夫なの?」

ビスケが聞いてきた。流石にゲンスルー組は結構強いからな。

「ああ、むしろ1人が良い。その方が気兼ね無く殺れるからな。」

そう言って返す。短い時間だが多少にらみ合い

「…………ふう。分かったわさ。あんたに任せるわ。」

とビスケは折れた。

「それじゃ、お前達は修行の続きを頼むわ。もしかしたら3週間後には俺達がクリアしてるかも知れないからな。」

そう言ってマグネットイックフォースで飛んだ。

後はひたすら待ちだ。念のためマサドラには近付かず、バインダーでツェズゲラの動向を逐一チェックしてれば良い。

順調に原作通りに進んでいる。

マサドラに行くとボマーに殺されるという噂が飛び交っているから誰もマサドラには近寄らない。

ちなみに現在はゲンスルー組とツェズゲラ組の追いかけっこ真つ最中らしい。スゲエ勢いでツェズゲラやゲンスルーのバインダーからアカンパーーやリターンが無くなつていつてる。

何という無駄…。

しばらく追いかけっこが続き、遂にツェズゲラ組がリープを使ってゲームから出た。同時にゲンスルー組もリープで追いかけたけど…。にしてもツェズゲラも悲惨だよな。微かな希望をかけて戻つたら警備兵はいないし、依頼人から「もういいんだ。」発言なんて同情するよ。

ツェズゲラ達がゲームから出て10日目。

そろそろかな?と思つていたら予定通りバインダーが現れてコンタクトを使用したことを知らせて来た。

『ゴレイヌだ待たせたな。』

「どうなつた?」

『もうすぐツェズゲラ達が出て240時間経つのは知つてゐるな?』

「ああ。」

『先に言つておくがツェズゲラ達は戻らない。』

「何故だ?」

『ゲンスルー達がシソの木の前で張つてるんだ。ツェズゲラ達はその事実を知らないが事前の打ち合わせで決まつていてな。あいつらはゲームの外に出た後はオレからの使者が潜伏場所に行か

ない限りゲーム内には戻らない。「安全だ。戻つても大丈夫」という伝言を伝えない限りはな。』

後は原作通りツェズゲラ達が持っていたカードはほとんどがフェイクと交換していく。ゴレイヌが持つてゐる事を教えて貰つて終了だ。
現在ゲンスルー組はマサドラにいる。どうやらアカンパニーを補充して俺達が逃げても大丈夫なようにしたいらしい。

残念ながら標的の俺は『完全なる隠匿』を使ってお前達のすぐ側にいるのに。

ゲンスルー組はカードを買つた後に森に入り

「奴等の『同行』は3人合わせて5枚。『再来』は1人1枚ずつ。
つまり全部で『同行』6回分。

こつちは7枚あるし行くか?」

ゲンスルーが仲間と話し合つてゐる。

最初はゲンスルー組がアカンパニーで飛んできた瞬間を拘束しようかとも思ったが、不意をつくためにこちらから仕掛ける。
まさか追う対象から勝負を仕掛けられるとは思つても無いから油断しきつている。今がチャンス。

ゲンスルー達がターゲットを振り分けでいたその時に『理不尽な支配』を発動して3人共強制的に絶の状態にして拘束した。

「な、何だこれは！？？」

ゲンスルーが驚く。サブとバラももがくがどうにもならない。何せ念のために幾重にも拘束してゐるからな。これが決まつたらまず抜け出すのは不可能。

俺は『完全なる隠匿』を解いて姿を現す。

「よお、何か俺に用があるらしいからこつちから來たぜ?」

と軽く声をかける。

ゲンスルー達は急に現れた俺にビックリしたが、自分達の状態の原因が分かつたからか冷静になつてきたりしい。

「おいガキ。これは何だ？今すぐ解け。」
と命令してきた。

このまま話し合いをする必要も無いので「黙れ。」と命令した。
俺はわざわざ自分の能力を自慢気にペラペラ喋る二流小悪党とは違つて例え死に行く奴等でも自分の能力は喋らない。もしかして蘇つたり死者から聞き出す能力者がいるかも知れないからな。この世界ならあり得る。

「ム、グググ！！」

など喋ろうと頑張ってるらしいが黙れといふ命令のせいで何も喋れない。

「さて、じゃあ先ずゲンスルー、バインダーを出せ。」
と命令した。

「……ブツク！」

とゲンスルーは言つてしまつた。ゲンスルーは何故自分がそんな事を言つたのか分からないが、バインダーを出した以降はまたしゃべれなくなつた。

俺はゲンスルーのバインダーから自分が持つていないカードを奪う。この場でコンプリートしても仕方ないから最後のメイドパンダをフリーポケットに入れる。これでコンプリートイベントは起きない。

「さて、じゃあお前達にはもう用は無いな。」

と言い放つ。

その言葉に3人は動搖する。今まで自分達がしてきたように始末されるのは？と分かるのだろう。

「お前達多分親友同士なんだろう？」

そう聞くと拘束されてる状態だから俺の質問を無視出来ない。3人共頷いた。

「そうか、そうか。親友とは良いものだ。ずっと一緒にいたいだろ？」

また3人は頷く。

「そうだよな。だから3人一緒に逝け。

3人共脳と心臓の活動を停止しろ。」

そう命じたら3人一緒に倒れて動かなくなつた。そして少し経つと消えてゲームオーバーとなつた。

グリードアイランド編のラスボスも逝くときやアツサリ逝つたな。

53 ゲームクリア

それじゃ、ラストイベントのクイズ大会と行くか。
このまま突入しても良いけど一応原作通りにアイツ等にも知らせる
か。

「「同行」使用。キルア。」

「ゴン！！無事だったか！！」

とキルアは喜んでいる。

「ほんっと、よく勝てたわね。」

とビスケは驚いている。実力から見ればゲンスルー組の方が圧倒的
有利だからな。

「ああ、賭けに勝ったのさ。」

とだけ言う。確かに賭けではあったな。あのタイミングを窺かなき
やもしかしたら死んでた可能性すらあった。

「それでゴン。ゲンスルーからカードは奪つたのか？」

キルアが聞いてきた。そっちの方が気になるらしい。

「ああ、バツチリだ。」

そう言ってバインダーを出した。

「とりあえず全種類集まつたけど最後の1枚はまだ指定ポケットに
は入れてねえ。」

「何で？」

キルアが聞いてきた。

「一応お前達と一緒にラストイベントを迎えたくてな。仲間だし。
思つても無い事を言う。後々説明すんのが面倒だつたからが本当の
理由。」

それを知らないキルアは嬉しそうに、ビスケは意外そうに俺を見る。

「じゃ、やりますか。」

とフリー ポケットに入れたメイドパンダを指定 ポケットにセットした。

『プレイヤーの方々にお知らせです。たつた今あるプレイヤーが9種の指定 ポケットカードをそろえました。それを記念しまして今からグリード アイルランド内にいるプレイヤー全員参加のクイズ大会を開催いたします。

問題は全部で100問！ 指定 ポケットカードに関する問題が出題されます。正解率が最も高かつたプレイヤーに賞品としましてN.O. 000 「支配者の祝福」が贈呈されます。みなさまバインダーを開いたままでお待ちください。』

「指定 ポケットカードに関する問題か…。」

「なるほどな、おそらくカードを奪つただけのプレイヤーじゃ答えられない様なクイズになつてゐるはずだぜ。クリア条件とか関連キャラのセリフとかな」

「だとすると私とキルアは無理だわね。カード集めてないから。」

「だな。ゴンは自信あるか？」

キルアが聞いてきた。何せ 指定 ポケットカードは全部俺が集めたんだからな。

「ああ、8～9割は答えるから多分大丈夫だ。自力獲得枚数トップのツェズゲラはもうここにはいないからな。」

それを聞いて二人は安心する。何せ俺にかかっているからな。

その時キイイインという移動スペルを使用した時に鳴る音が聞こえた。

「誰か来る！」

とキルアが警戒してそっちを見たら

「ちょっとこっちからもよ！？」

とビスケは別方向から来る奴等を見ている。

「どうなつてんだ!? 次々来るぜ!!!」

とキルアもまた別方向から来るのを見ている。

そしてザシユツ、ザシユツと次々着地した。気付けば10人以上に囲まれていた。

「安心しろよ。邪魔しにきたわけじゃないんだ。むしろ協力といつていいだろ。」

1人が話しかけてきた。

「もしもボク達がクイズでトップになつてカードを手に入れたらそれを25億で買つてもらいたい。

君らにしてみれば成功報酬の5%だし、法外つて程の額じゃないだろ?」

と言つてきた。コイツらバッテラがもう諦めた事を知らないからな。まああの状態のバッテラなら払つてくれそうだが。

「ああ分かつた。あんた等がトップになつたらな。
そつちのアンタもか?」

と顔に絆創膏を貼つてる奴に聞いた。

「え? あ、いや…まあそんなとこだ。」

と明らかに拳動不審。ベラム兄弟に脅されてるからな。悲惨な事だ。「おめでとう! おれ達はまあ、野次馬みたいなもんだ。できればカードがそろつたバインダーをちょっとだけ見せてくれないか?」
と言つて来た奴等もいたからキルアに監視させつつ見せてやる。
見せてやつたら「おお、スゲー!」とか興奮しながら見てた。どうやらカードを記憶してるらしい。入手条件やヒントが書いてあるカードがあるからな。

「他の連中も最後のカードでの取引が目的か。」

「ゲームも大詰めにきて少しでも報酬のおこぼれにあづからつてわけだわね。」

キルアとビスケが話してる。俺は無視してバインダーを見ながらクイズを待つ。

『それではこれよりクイズの出題を始めます！！』

というアナウンスが聞こえたので周りも自分達のバインダーを見る。ちなみにキルアとビスケは何もしない。何せ一坪の海岸線以外は何も知らないからな。

クイズは大体は分かった。何せツェズグラの記憶を読んだからな。それでも何問かは分からなかつたから勘で答えたが。

『終了――――！』

それではこれより最高得点者を発表いたします！！

最高得点は100点満点中97点！！

プレイヤー名、ゴン選手です！！

と流れた。あと3点か…。まあ一坪の密林とかが分からなかつたらな。

「やつたな…！悔しいが完敗だ。おめでとう。」

とさつき話しかけて来た奴等が祝福してくれる。

ギエーーーという聞いたことの無い声を響かせながらフクロウなどが分からぬ鳥がやってきて手紙を落としていった。

その手紙を受け取るとカード化して支配者からの招待になつた。

「ふーん、一人で行くらしいな。」

俺がカードを見ながら言つと

「じゃあ城の近くで待つてるよ。」

「んふふふ。これで約束通りブループラネットはいただきよ。」

とキルアとビスケが言つ。やだけど契約だからな。3つのポケットの内一つは決まっている。

キイインとまた誰かが来た。まあ誰か分かるが。

「ぐへへへへ。」

「おー持つてる持つてるーーあのガキマジで全部そろつてるぜ。」

「ベラム兄弟が来た。明らかにモブキャラの癖に。」

「おいお前、もう用済みだ。消えていいぜ。」

と絆創膏を貼つてゐる男に言ひ。

「は、はいっ。」

と言つた後に男は走つて行つた。

「よオ…。カード全部かけて勝負しそうぜ。2対3でいいからよ。」

「悪いがこれは強制だ。けけけ。」

と自信満々に言つてくる。何でそこまで自信があるのだろう? 面倒だから一人とも首をハネてやつた。別にアカンパーーは持つてるしリー・メイロにも行つたことがあるし。

招待状をカード化解除して読む。

「えーと、城下町リー・メイロね。行つたことあるから合同で行くぜ。」

「そう言つて3人で周りから離れて

「同行使用。リー・メイロ。」

でリー・メイロに飛んだ。

「じゃ、行つてくるわ。」

と行つて二人と分かれて城に入った。

「ようこそ、グリードアイランド城へ。」

と金髪でソバカスを浮かべた青年が現れた。

青年の案内で一室に入つたら中は重度の引きこもりの部屋みたいにゴミや物に溢れていた。もちろんゴリの発酵したクセエ匂いもする。「んーー? おーー入れ入れ。」

と髪がボサボサでくわえたバコでゲームをやつている中年が声をかけてきた。

「こちら最高得点者のパン君。」

と青年が俺を紹介する。

「おーー待つてた待つてたぞ！！

ジンの息子だつてなお前…」こっち来て座れ座れ…！」

と言いやがつた。本当ならこんな『マミ』畳敷に足を踏み入れるのは嫌だがあのバインダーを手に入れるために入る。

「すみませんが、どこに座れば？」

と聞く。何せ床一面『マミ』だらけだ。中年が座つている所以外は全部埋まつていてる。

「ん？ 空いてるところねーか？ ジャ作れ作れ…」いやつてよー…」

と言つて中年は『マミ』を蹴り飛ばしてスペースを作る。

俺はそこに座る。

「えーとバインダーは…。

あれ？ どこやつた？」

と『マミ』を漁つてる。せめてバインダーは『マミ』に埋めるなよ。

「…お、あつたあつた。

ほらよ。」

ようやくバインダーを発掘して開き、中からカードを取り出して俺に渡してきた。

「「支配者の祝福」最高得点者への褒美だ。」

と渡されたカードは確かに凄い褒美だ。何せ城と人口1万人の城下町を得るんだ。まあ超弱小国にしかならないがな。

「ふつふつふ。先に言つておくけどよ。その城や町にはジンに関する手掛かりは何もないぜ。」

と中年は言つてきた。

「だらうね。まあ別に興味無いから良いけど。

ぶつちやけオヤジが生きてようが死んでもようがどうでも良い。俺にとつちや俺を捨てた奴なんだからな。」

その言葉に今まであつた和やかな雰囲気は消えて沈鬱な空氣になる。

「……まあ、確かにお前にとつてはそつだからな。」

と中年は嘗つ。

「…ドゥーンさん本題の続きを…。」

と青年に言われたので氣を取り直して

「おっといけねえ。

お前さんこれで100種そろつたわけだな。よつてもう一つ…イベ

ントが発生する。」

そう言つてまた「ゴミを漁りだした。

「えーーと、アレはどう置いたつけか……あーー、あつたあつた！」

と今度は箱を発掘した。そしてその箱を俺に渡した。

「開けてみな。」

と言われたので開けたら3つのカードポケットがあつた。

「そのバインダーには指定ポケットカード3枚を入れることができ。そのバインダーに入れたカードは現実世界へ持ち帰つて使用することができる。

ただし！同じ番号のカードを複数入れることは出来ない。あくまでもお前のバインダーの指定ポケットに入つてる100枚の中から3枚選ぶこと！」

と注意事項を説明された。

「さて、これで晴れてエンディングなわけだが。一般用とお前専用どっちのエンディングがいい？」

と聞かれたので

「一般用で。」

と即答した。

「何でだ？お前専用エンディングを見たくないのか？」

「別に興味無いし。ていうか俺専用なんて本当にあるのかよ？」

と疑わしい目で見る。

「うーん、まあお前専用何か嘘なんだけどよ。

ただ……お前がクリアした後なら教えてもいいと言われてることだがあるんだが……聞くか？」

と聞いてきた。原作と若干違うがまあ良いか。

「別にいい。想像はつく。多分このゲームについてなんだろう。さつきも言ったが別に興味無いからこのままロンティングに行こうぜ。」

俺がいったからか青年の方が

「……ではこれからクリアを祝してパレードとパーティーが行われます。」

その後港へ向かってください。ここでクリア報酬となる3枚のカードを選択しゲームは終了です。」

その言葉を聞いて俺は城から出た。ジンの話なんか興味無いからな。

その後はオープンカーに乗せられてパレードに行つた。そしてパーティで飯を食い、今は3人でホテルの部屋にいる。

「この中に入れる3枚を決めたら港へ向かってくださいってさ。」
おれがスペシャル？バインダーを出して言つ。

「おーー。」

とキルアは関心しながら見る。

「とりあえず1枚は契約通り「ブループラネット」「だよな?」
とビスケに聞く。

「ええもちろん!若返り薬も捨てがたいけどやっぱりコレだわやー。
あー早く現物を拝みたいもんだわやー!」

と興奮しながらブループラネットを見る。

「俺はどうしようかなあ。」

とキルアが悩んでいたが。

「は?お前は無しだ。」

と言つてやつた。

「ええ!何でだよ!」

とか文句言われた。

「当たり前だろ？」というかお前ゲームクリアのために何かしたか？」
と俺が言つたらキルアは少し考えていたが何も出ない。

何せここに来てすぐに修行三昧だつたし、一坪の海岸線でも特に何もしてない。

「確かにオレ何もしてねえな。」

とキルアはガツクリした。

「つーか実質俺が全部集めたんだから残り2つは俺が使うぞ？」
と聞いたら一人も納得。本当に全部俺がやつたからな。

そして俺は残りのポケットに闇のヒスイと死者への往復葉書を入れた。

「ん？」「闇のヒスイ」は分かるけど何で「死者への往復葉書」何だ？

とキルアが聞いてきた。

「まあ、後々役に立つんだよ。」

とだけ答えた。本当に後々どんなにもない価値に跳ね上がる可能性がある。

その後、港に向かった。

「ゲームクリアおめでとうござります。

それではあなたのバインダーの中から3枚カードを選んで下さい。」

そう言われたので3枚を渡し、指輪も渡した。

「選んだのは31「死者への往復葉書」、73「闇のヒスイ」、8
1「ブループラネット」。

以上の3枚で本当によろしいですか？」

「ああ。」

その後は受付が操作して

「では指輪をお返しします。お疲れさまでした。」

指輪を受け取る

「 もうなら、またの日来島をお待ちしています。」

そこへ言われて現実世界に帰った

— おかげり! 「

とビスケが出迎えてくれた

「へえ!! バイクで走ります!!」

ヒズケかねたる

一五八

と聞えたから、おのノイントーではなく、スベシヤノノイントーが出来た。

「おーー出た!

と興奮したビスケ

と唱えたらブループラネットが出た。

夢にまで見たブルーブラネット!!」

ビスケが狂喜乱舞している。そんなに欲しかったのがよ

モードの変遷

とヨリアが聞いてきたが、房は隠す必要は無いから闇のビバの力

一を風に出て、空へ飛んでゐた。

ノフダ開のニベ、ニ思ひテ

卷之二

「これで俺に危機が降り注げば誰か別の奴にその危機は移る。」

そういうとキルアは

「それでもしかして…オレ?」

と置しておいたので筆彌で

「そうならないように俺に危機が降り注がない事を祈れ。」
と言う。ギルアは必死に何かに祈つていた。

その後はビスケとは別れて俺とキルアはホテルに泊まった。
そしてその夜、俺はゲートでバッテラの所に行つた。

「やあバッテラさん。」

恋人の映像を見ながら泣いていたバッテラに声をかける。

「……なんだ？ 1人にしてくれ。」

侵入したことに一切触れずにただ言つ。重症だな。

「いやあね。契約通りクリアしたから500億ジョニーを受け取りに来たんですよ。」

「……なら弁護士に話してくれ。金は弁護士を通じて払わせる。頼むからもう帰ってくれ。」

どうやら金は問題無く入つて来そうだな。これで第一目的クリア。

「ところで聞きましたよバッテラさん。貴方がグリードアイランドをクリアしたがっていた理由を。お気の毒です。何千億ジョニーもかけてここまでしたのに間に合わずに。」

と如何にも氣の毒そうに告げる。バッテラは何も言わないが。

「そこでどうでしようバッテラさん。このアイテムを買いませんか？」

とバインダーを出して死者への往復葉書を見せる。バッテラはまだ反応しない。

「このアイテムは貴方が求めていた大天使の息吹には劣りますが、なかなかのレアなんですよ。何せ……死者との手紙のやり取りが出来るんですから。」

その言葉に初めてバッテラが画面から目を離してこっちを見た。

「……死者と手紙のやり取りが出来る？」

「はいそうです。この葉書に亡くなつた人の名前を書き、手紙をし

たためおくと次の日には返信葉書に返事が来るんですよ。」

そう言って葉書を一枚渡した。バツテラは震えながら葉書を持つ。「どうです？貴方の恋人は何年も昏睡状態で何を言つても反応すらしてくれなかつたでしょうけど、この葉書なら彼女と手紙ですがやり取りが出来ます。

彼女が応えてくれるんですよ？貴方に。欲しくありませんか？」

そう言うとバツテラは俺にすがりつき

「売つてくれ！！幾らでも出す！！」

と言つてきた。ここでコイツが破産する金額を言つても良いが、それではあまり収益にならないから

「ではこの葉書を500枚セットで500億ジーー。

また欲しくなつたご連絡下さい。」

と葉書500枚の代わりに500億ジーーの小切手を貰つた。バツテラは急いで彼女の名前を書き、手紙を書いている。

これでバツテラが生きてる限り金をムシリ取れる。葉書を買つために仕事も精を出すだろから取引は長続きするだろ。

500日、つまり1年半あればバツテラの会社なら500億ぐらいは軽く稼げる。

これでバツテラが生きてる限り金は手に入る。

もしも病気になつたら大天使の息吹で治してやるよ。

それに魔女の若返り薬も飲ませればかなり長生きもさせられる。

彼女の代わりに長生きしてくれよ？

俺のために。

それでは最終段階と行くか。

ヨルビアン大陸、バルサ諸島の南端にゲートで移動した。そして円を1キロぐらい広げてくまなく探す。

しばらく搜索していたらヒットした。しかしヒットしたのは女王ではなく魚だかコウモリだか分からぬが何かが混ざりあつたような兵隊蟻だった。

丁度人間の兄弟を襲っていたが何もせず、巣を突き止めるために尾行した。

人間の兄弟を殺した兵隊蟻はその死体を持って移動し、大きな洞窟に入った。円で洞窟内を搜索したら内部には大量の卵や女王らしき生物がいたので洞窟に侵攻。

まだ組織体系は成つて無いのか兵隊蟻が散発的に防衛のために攻撃をしてきたがまだ念も知らない生物でしかないので皆殺しにした。

ついでに天井にぶら下がっている卵群も破壊した。

そして残るは最深部にした女王だけになつた。女王は何かわめいていたが分からぬので無視して首をハネた。

念のためその後体を切り分けてガソリンをかけて焼いた。骨すら残らず焼いたので多分大丈夫だろう。

ちなみに狩りに出掛けていた兵隊蟻も殺した。女王をわざわざ即死させずになぶりながら殺したから助けを呼んだのだろう、結構な数の兵隊蟻がやつて来たので皆殺しにした。

それでも女王をなぶり、1日待つても何も来なくなつてから女王も殺した。

これでキメラアント編も無くなつただろう。

そして長らくお荷物だつたキルアとの関係にもピリオドを打つ。ゾルディック家には念のために念をキッチリ教えたし、多少は経験も積ませたとして契約終了を電話で宣言した。

シルバからは

『分かつた。ご苦労だつた。』

との了解を得たので行動を移す。

翌日、

「キルア、写真撮ろうぜ。」

と声をかけた。

「写真？ 何で？」

キルアは不思議そうに聞き返す。まあいきなりだもんな。

「まあ 良いじゃねえか。

グリードアイランドも無事クリア出来たし、お前の念の修行も粗方終了した。それを記念してだよ。』

と言つて誤魔化した。

その後写真館にいつて正式な写真のように写真を撮つた。キルアはこんなの初めてらしく緊張していたが、何枚か試し撮りして慣れたのか最後は俺とのツーショットで笑顔で写っていた。

そして俺は縁切り鋏のカードをコピーして実体化させてその写真を切つた。

縁切り鋏の効果は会いたくない人の写真を切るとその人と2度と会わずに済むようになる。

しかしその写真に写っている人全てに有効（本人は除く）。だからわざわざ正式に写真館にいつて万が一にもキルア以外が写ら

ないようにした。

これでキルアともオサラバだ。

一度と会つ事は無い筈だ。よつやく自由だ。

翌日、キルアはホテルをチェックアウトしていた。どうやら深夜に出ていったらしい。

これから実家に帰るのかハンターとして動くのは分からぬが、これで俺との縁は完全に無くなつたから問題無い。

ちゃんとゾルディック家から許可も得たんだから狙われる可能性は低い。誰かが俺の暗殺依頼をしない限りは。

よし、これで俺に関係するフラグやイベントは全クリした。後は有り余る資産を使い隠居生活だ。

出来るならこの世界でも北郷商社でも創設したいがこの世界でトップを取ると面倒だからな。

まあ、いざというときはバツテラの死後に代理人を立てて会社を操るのも良いな。それなら俺が狙われる可能性は低いし。まだまだ可能性は無限だ。

何せ俺はまだ12歳。

小6の年齢だからな。

54 もりは原作より自由（終）（後書き）

この小説を最後まで見ていただきありがとうございました。

次回作では北郷が今度はNARUTOの世界に転生します。

タイトルは『リアル忍者 北郷』です。

あんまり見せ場や北郷のセリフがありませんが北郷らしく動きます。
近日中に公開する予定ですのでよろしければこちらもお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7542s/>

狡猾なゴン

2011年8月8日07時30分発行